

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

— No. 7 遺 跡 —

1984

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

新東京国際空港

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

—No. 7 遺跡—

1984

新東京国際空港公団
財団法人 千葉県文化財センター

序

新東京国際空港予定地内に所在する遺跡につきましては、千葉県教育委員会の指導のもとに発掘調査を昭和51年以来鋭意実施してきたところであり、その成果として、昭和56年に『木の根』、昭和58年に『No. 14遺跡』として発表したところであります。

このたび、昭和53年4月から翌54年3月にかけて実施したNo. 7遺跡の調査成果がまとまり、報告書として刊行の運びとなりました。

今回の発掘調査では先土器時代から古墳時代にかけての遺物、遺構が数多く出土しました。

これらを収載した本報告書は、空港関連の第一次調査の成果である『三里塚』を含め、新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第4集に当たり、当三里塚地域の歴史を解明するうえで欠くことのできない資料と言えましょう。

このような本報告書が学術的資料として利用されるばかりでなく、教育資料及び郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用されることを望んで止みません。

最後に、新東京国際空港公団をはじめ、関係諸機関の協力・御指導と酷暑猛暑について発掘調査及び整理作業を行なっていただいた多くの調査補助員の方々に対して心から謝意を表します。

昭和59年2月29日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 今井 正

例 言

1. 本書は、新東京国際空港予定地内の山武郡芝山町香山新田字中横堀101-2他に所在したNo. 7遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、新東京国際空港公団の委託を受け、千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和53年4月20日から翌54年3月31日まで実施した。調査面積は45,000㎡である。なお、調査に先立ち昭和52年度に143,000㎡を対象とした試掘調査を実施した。
4. 本遺跡の遺跡コードは、211-005である。
5. 本書は、昭和46年刊の『三里塚』（財団法人千葉県北総公社発行）、昭和56年刊の『木の根』（新東京国際空港公団・財団法人千葉県文化財センター発行）、昭和58年刊の『新東京国際空港No. 14遺跡』（新東京国際空港公団・財団法人千葉県文化財センター発行）に続く新東京国際空港関連の発掘調査報告書の第4集にあたるものである。
6. 発掘調査及び報告書作成作業の担当職員は次のとおりである。なお、太字は直接担当職員である。
 - (1) 発掘調査（昭和53年度）
調査部長 西野 元 班長 杉山晋作 調査研究員 宮 重行 三浦和信 石倉亮治
加藤正信 藤崎芳樹 荻野谷悟 西川博孝 野口行雄 山口直樹
 - (2) 報告書作成作業（昭和57年度）
調査部長 白石竹雄 部長補佐 天野 努 班長 西山太郎 調査研究員 西川博孝 西口 徹 雨宮龍太郎 川島利道 麻生正信
 - (3) 報告書刊行作業（昭和58年度）
調査部長 白石竹雄 部長補佐 根本 弘 班長 西山太郎 調査研究員 田坂 浩
（～7. 31. 2. 1～） 雨宮龍太郎（～11. 30） 川島利道 岸本雅人（～7. 31. 2. 1～） 小畑 巖（～7. 31. 3. 1～）
7. 本書は、第1章第1節、まとめを西山太郎、第2章第2節・第3節、第3章第1節、第4章第1節、第5章第1節を西口徹、第4章第4節の一部を加藤正信、麻生正信、他を西川博孝が執筆し、白石竹雄、根本弘の助言のもとに西山太郎が加筆・補正した。
8. 本書の編集は、白石竹雄・根本弘の助言のもとに、西山太郎が西川博孝と協議のうえ行った。
9. 鉱物分析については、バリノ・サーヴェイ株式会社、炭化材の樹種同定については東京都埋蔵文化財センター千野裕道氏に委託した。
10. 発掘調査から本書の刊行にいたるまで、千葉県教育庁文化課、新東京国際空港公団の関係者をはじめ、多くの方々から御指導、御助言をいただいた。深く謝意を表する。
戸田哲也、土肥 孝、関野哲夫、織笠 昭

目 次

| | |
|------------------|-----|
| 序 文 | |
| 例 言 | |
| 第1章 調査の概要 | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査の経過と方法 | 1 |
| 第2章 遺跡の位置と環境 | 13 |
| 第1節 遺跡の位置 | 13 |
| 第2節 基準層序 | 14 |
| 第3節 鉱物分析 | 16 |
| 第3章 A地点の調査 | 19 |
| 第1節 先土器時代の遺構と遺物 | 19 |
| 第2節 縄文時代の遺構 | 54 |
| 第3節 縄文時代の遺物 | 73 |
| 第4章 B地点の調査 | 143 |
| 第1節 先土器時代の遺構と遺物 | 143 |
| 第2節 縄文時代の遺構 | 153 |
| 第3節 縄文時代の遺物 | 171 |
| 第4節 弥生時代以降の遺構と遺物 | 212 |
| 第5章 考 察 | 221 |
| 第1節 先土器時代 | 221 |
| 第2節 縄文時代 | 223 |
| まとめ | 241 |

挿 図 目 次

| | | |
|--------|---------------------------|----|
| 第 1 図 | 遺跡の位置と周辺主要遺跡 | 3 |
| 第 2 図 | No. 7 遺跡周辺地形及びグリッド配置図 | 4 |
| 第 3 図 | A地点遺構配置及び縄文時代調査範囲図 | 5 |
| 第 4 図 | A地点先土器時代発掘区 | 7 |
| 第 5 図 | B地点遺構分布及び縄文時代調査範囲図 | 9 |
| 第 6 図 | B地点先土器時代発掘区 | 11 |
| 第 7 図 | 標準層序 | 14 |
| 第 8 図 | 遺跡土層断面図 | 15 |
| 第 9 図 | 重鉱物組成図 | 17 |
| 第 10 図 | A地点第 1 石器群 | 19 |
| 第 11 図 | A地点第 1、第 2 石器群遺物実測図 | 20 |
| 第 12 図 | A地点第 2 石器群遺物分布図 | 21 |
| 第 13 図 | A地点第 3、第 4 石器群遺物実測図 (1) | 24 |
| 第 14 図 | A地点第 4 石器群遺物実測図 (2) | 25 |
| 第 15 図 | A地点第 3 石器群遺物分布図 | 26 |
| 第 16 図 | A地点第 4 石器群遺物分布図 | 27 |
| 第 17 図 | A地点第 5 石器群遺物実測図 (1) | 28 |
| 第 18 図 | A地点第 5 石器群遺物実測図 (2) | 29 |
| 第 19 図 | A地点第 5 石器群及びブロック外出土遺物 | 30 |
| 第 20 図 | A地点第 5 石器群遺物分布図 | 31 |
| 第 21 図 | A地点第 5 石器群小剥片、砕片分布図 | 32 |
| 第 22 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (1) | 33 |
| 第 23 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (2) | 34 |
| 第 24 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (3) | 35 |
| 第 25 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (4) | 36 |
| 第 26 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (5) | 37 |
| 第 27 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (6) | 38 |
| 第 28 図 | A地点第 6 石器群遺物実測図 (7) | 39 |
| 第 29 図 | A地点第 6 石器群遺物分布図 | 41 |
| 第 30 図 | A地点第 7 石器群遺物実測図 | 44 |
| 第 31 図 | A地点第 7 石器群遺物及び炭化物分布図 | 45 |

| | | |
|--------|----------------------|-----|
| 第 32 図 | A 地点ブロック外出土の石器 | 47 |
| 第 33 図 | A 地点が穴実測図 (1) | 55 |
| 第 34 図 | A 地点が穴実測図 (2) | 56 |
| 第 35 図 | A 地点が穴実測図 (3) | 59 |
| 第 36 図 | A 地点陥し穴実測図 (1) | 62 |
| 第 37 図 | A 地点陥し穴実測図 (2) | 63 |
| 第 38 図 | A 地点陥し穴実測図 (3) | 65 |
| 第 39 図 | A 地点陥し穴実測図 (4) | 66 |
| 第 40 図 | A 地点陥し穴実測図 (5) | 68 |
| 第 41 図 | A 地点土壌実測図 (1) | 71 |
| 第 42 図 | A 地点土壌実測図 (2) | 72 |
| 第 43 図 | A 地点草創期後半土器実測図 (1) | 74 |
| 第 44 図 | A 地点草創期後半土器実測図 (2) | 75 |
| 第 45 図 | A 地点草創期後半土器拓影図 (1) | 77 |
| 第 46 図 | A 地点草創期後半土器拓影図 (2) | 78 |
| 第 47 図 | A 地点早期前半土器実測図 (1) | 81 |
| 第 48 図 | A 地点早期前半土器拓影図 (1) | 82 |
| 第 49 図 | A 地点早期前半土器拓影図 (2) | 83 |
| 第 50 図 | A 地点早期前半土器実測図 (2) | 86 |
| 第 51 図 | A 地点早期前半土器実測図 (3) | 87 |
| 第 52 図 | A 地点早期前半土器実測図 (4) | 89 |
| 第 53 図 | A 地点早期前半土器実測図 (5) | 90 |
| 第 54 図 | A 地点早期前半土器拓影図 (3) | 91 |
| 第 55 図 | A 地点早期前半土器拓影図 (4) | 94 |
| 第 56 図 | A 地点早期前半土器拓影図 (5) | 95 |
| 第 57 図 | A 地点早期後半土器実測図 (1) | 98 |
| 第 58 図 | A 地点早期後半土器実測図 (2) | 99 |
| 第 59 図 | A 地点早期後半土器実測図 (3) | 100 |
| 第 60 図 | A 地点早期後半土器実測図 (4) | 104 |
| 第 61 図 | A 地点早期後半土器実測図 (5) | 105 |
| 第 62 図 | A 地点早期後半土器拓影図 (1) | 106 |
| 第 63 図 | A 地点早期後半土器拓影図 (2) | 107 |
| 第 64 図 | A 地点早期後半土器拓影図 (3) | 108 |

| | | |
|--------|-------------------------|-----|
| 第 65 图 | A 地点早期後半土器拓影图 (4) | 109 |
| 第 66 图 | A 地点早期後半土器拓影图 (5) | 110 |
| 第 67 图 | A 地点早期後半土器拓影图 (6) | 111 |
| 第 68 图 | A 地点早期後半土器拓影图 (7) | 112 |
| 第 69 图 | A 地点早期後半土器拓影图 (8) | 113 |
| 第 70 图 | A 地点前期土器拓影图 (1) | 115 |
| 第 71 图 | A 地点前期土器拓影图 (2) | 116 |
| 第 72 图 | A 地点前期末—中期初頭土器拓影图 (1) | 119 |
| 第 73 图 | A 地点前期末—中期初頭土器拓影图 (2) | 120 |
| 第 74 图 | A 地点前期末—中期初頭土器拓影图 (3) | 121 |
| 第 75 图 | A 地点前期末—中期初頭土器拓影图 (4) | 122 |
| 第 76 图 | A 地点前期末—中期土器実測图 | 123 |
| 第 77 图 | A 地点中期—後期初頭土器拓影图 (1) | 126 |
| 第 78 图 | A 地点中期—後期初頭土器拓影图 (2) | 127 |
| 第 79 图 | A 地点中期—後期初頭土器拓影图 (3) | 128 |
| 第 80 图 | A 地点後期—晩期土器拓影图 | 129 |
| 第 81 图 | A 地点前期後半以降底部実測图 | 130 |
| 第 82 图 | A 地点土製品実測图 | 131 |
| 第 83 图 | A 地点石器実測图 (1) | 136 |
| 第 84 图 | A 地点石器実測图 (2) | 137 |
| 第 85 图 | A 地点石器実測图 (3) | 138 |
| 第 86 图 | A 地点石器実測图 (4) | 139 |
| 第 87 图 | B 地点第 1 炭化物集中箇所 (1) | 145 |
| 第 88 图 | B 地点第 1 炭化物集中箇所 (2) | 147 |
| 第 89 图 | B 地点第 2 炭化物集中箇所 | 148 |
| 第 90 图 | B 地点第 3 炭化物集中箇所 | 149 |
| 第 91 图 | B 地点第 4 炭化物集中箇所 | 150 |
| 第 92 图 | B 地点第 5 炭化物集中箇所 | 151 |
| 第 93 图 | B 地点出土石器実測图 | 152 |
| 第 94 图 | B 地点 J - 1 号住居跡実測图 | 154 |
| 第 95 图 | B 地点 J - 2 号住居跡実測图 | 156 |
| 第 96 图 | B 地点炉穴実測图 | 158 |
| 第 97 图 | B 地点胎し穴実測图 (1) | 162 |

| | | |
|-------|-------------------|-----|
| 第98图 | B地点陥し穴実測図(2) | 163 |
| 第99图 | B地点陥し穴実測図(3) | 166 |
| 第100图 | B地点陥し穴実測図(4) | 167 |
| 第101图 | B地点土坑実測図 | 170 |
| 第102图 | B地点草創期後半土器実測図(1) | 173 |
| 第103图 | B地点草創期後半土器拓影図(1) | 174 |
| 第104图 | B地点草創期後半土器拓影図(2) | 175 |
| 第105图 | B地点草創期後半土器拓影図(3) | 176 |
| 第106图 | B地点草創期後半土器拓影図(4) | 177 |
| 第107图 | B地点草創期後半土器実測図(2) | 181 |
| 第108图 | B地点草創期後半土器実測図(3) | 182 |
| 第109图 | B地点草創期後半土器拓影図(5) | 183 |
| 第110图 | B地点草創期後半土器拓影図(6) | 184 |
| 第111图 | B地点草創期後半土器拓影図(7) | 185 |
| 第112图 | B地点草創期後半土器拓影図(8) | 186 |
| 第113图 | B地点草創期後半土器実測図(4) | 187 |
| 第114图 | B地点草創期後半土器実測図(5) | 189 |
| 第115图 | B地点草創期後半土器拓影図(9) | 190 |
| 第116图 | B地点草創期後半土器拓影図(10) | 191 |
| 第117图 | B地点草創期後半土器拓影図(11) | 192 |
| 第118图 | B地点草創期後半土器拓影図(12) | 193 |
| 第119图 | B地点草創期後半土器拓影図(13) | 195 |
| 第120图 | B地点草創期後半底部実測図 | 196 |
| 第121图 | B地点早期土器拓影図(1) | 198 |
| 第122图 | B地点早期土器拓影図(2) | 199 |
| 第123图 | B地点早期土器拓影図(3) | 200 |
| 第124图 | B地点前、中期土器拓影図(1) | 202 |
| 第125图 | B地点前、中期土器拓影図(2) | 203 |
| 第126图 | B地点前、中期土器拓影図(3) | 204 |
| 第127图 | B地点前、中期土器・底部実測図 | 205 |
| 第128图 | B地点土製品実測図 | 206 |
| 第129图 | B地点石器実測図(1) | 209 |
| 第130图 | B地点石器実測図(2) | 210 |

| | | |
|-------|----------------------|-----|
| 第131図 | B地点弥生式土器拓影図 | 212 |
| 第132図 | B地点H-1号住居跡実測図 | 213 |
| 第133図 | B地点H-1号住居跡カマド実測図 | 214 |
| 第134図 | B地点H-1号住居跡出土土器実測図(1) | 215 |
| 第135図 | B地点H-1号住居跡出土土器実測図(2) | 216 |
| 第136図 | 田戸上層式文様模式図 | 230 |

図 版 目 次

1. A地点全景（航空写真）南から、A・B地点全景（航空写真）南西から
2. A地点遠景（北東から）、B地点遠景（北東から）
3. 11B00土層セクション（B地点）、第1炭化物集中地点（A地点）
4. A地点、(1)1号炉穴、(2)2号炉穴、(3)3号炉穴、(4)5号炉穴、(5)6号炉穴、(6)7号炉穴、(7)8号炉穴、(8)9号炉穴
5. A地点、(1)10号炉穴、(2)11号炉穴、(3)2号陥し穴、(4)3号陥し穴、(5)4号陥し穴、(6)5号陥し穴、(7)6号陥し穴、(8)7号陥し穴
6. A地点、(1)8号陥し穴、(2)9号陥し穴、(3)10号陥し穴、(4)11号陥し穴、(5)12号陥し穴、(6)13号陥し穴、(7)14号陥し穴、(8)15号陥し穴
7. A地点、(1)16号陥し穴、(2)1号土壌、(3)2号土壌、(4)3号土壌、(5)8号土壌、(6)9号土壌、(7)10号土壌、(8)11号土壌
8. B地点、J-1号住居跡全景（北西から）、J-1号住居跡出土遺物
9. B地点、J-2号住居跡全景（南東から）、J-2号住居跡セクション、J-2号住居跡出土遺物
10. B地点、(1)1、2号炉穴、(2)3号炉穴、(3)4号炉穴、(4)5号炉穴、(5)1号陥し穴、(6)2号陥し穴、(7,8)3号陥し穴
11. B地点、(1)4号陥し穴、(2)5号陥し穴、(3)6号陥し穴、(4)7号陥し穴、(5)8号陥し穴、(6)9号陥し穴、(7)10号陥し穴、(8)11号陥し穴
12. B地点、(1)12号陥し穴、(2)13号陥し穴、(3)1号土壌、(4)2号土壌、(5)3号土壌、(6)4号土壌、(7)5号土壌、(8)6号土壌
13. B地点、H-1号住居跡全景（南東から）、H-1号住居跡カマド
14. A地点出土先土器時代石器（第11、13、14図）
15. A地点出土先土器時代石器（第11、19、25、26図）
16. A地点出土先土器時代石器（第22～24図）
17. A地点出土先土器時代石器（第27、28図）
18. A地点出土先土器時代石器（第30図）、B地点出土先土器時代石器（第93図）
19. A地点出土土器（第43図）
20. A地点出土土器（第44図）
21. A地点出土土器（第45図）
22. A地点出土土器（第46図）
23. A地点出土土器（第47、57、58、60図）

24. A地点出土石器 (第48图)
25. A地点出土石器 (第49图)
26. A地点出土石器 (第50、51图)
27. A地点出土石器 (第51、52图)
28. A地点出土石器 (第54图)
29. A地点出土石器 (第55图)
30. A地点出土石器 (第57图、59图)
31. A地点出土石器 (第64图)
32. A地点出土石器 (第65图)
33. A地点出土石器 (第70图)
34. A地点出土石器 (第71图)
35. A地点出土石器 (第77图)
36. A地点出土石器 (第78图)
37. A地点出土石器 (第79图)
38. A地点出土石器 (第83图)
39. A地点出土石器 (第84、85图)
40. A地点出土石器 (第86图)、土製品 (第82图)
41. B地点出土石器 (第102图)
42. B地点出土石器 (第103图)
43. B地点出土石器 (第104图)
44. B地点出土石器 (第105图)
45. B地点出土石器 (第106图)
46. B地点出土石器 (第107图)
47. B地点出土石器 (第108图)
48. B地点出土石器 (第109图)
49. B地点出土石器 (第110图)
50. B地点出土石器 (第111图)
51. B地点出土石器 (第112图)
52. B地点出土石器 (第113图)
53. B地点出土石器 (第114图)
54. B地点出土石器 (第115图)
55. B地点出土石器 (第116·119图)
56. B地点出土石器 (第117图)

57. B地点出土石器 (第121图)
 58. B地点出土石器 (第124图)
 59. B地点出土石器 (第125图)
 60. B地点出土石器 (第126图)
 61. B地点出土石器 (第129图)
 62. B地点出土石器 (第130图)、土製品 (第128图)
 63. H-1号住居跡出土遺物 (第134图)
 64. H-1号住居跡出土遺物 (第135图)、A·B地点出土鉄滓

表 目 次

| | |
|----------------------|-----|
| 第1表 A地点先土器時代石器計測表 | 48 |
| 第2表 A地点縄文時代石器計測表 | 140 |
| 第3表 B地点先土器時代石器計測表 | 152 |
| 第4表 B地点縄文時代石器計測表 | 211 |
| 第5表 H-1号住居跡出土遺物 | 218 |
| 第6表 B地点井草I、II式文様別集計表 | 225 |

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

当、財団法人千葉県文化財センターでは、新東京国際空港予定地内に所在する遺跡について、千葉県教育委員会の指導のもとに、新東京国際空港公団と発掘調査の委託契約を締結し、昭和51年以来計画的・継続的に発掘調査を実施している。本書に収載したNo. 7遺跡は、昭和52年に試掘調査、昭和53年に本調査を実施した。

言うまでもないが、千葉県教育委員会（文化課）ではNo. 7遺跡の取扱いについて新東京国際空港公団と協議を重ね、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとし、千葉県文化財センターを調査機関として指定したものである。これにより当文化財センターは新東京国際空港公団と発掘調査についての詳細な調整を行い、昭和53年4月20日から翌54年3月31日までの約1か年を要して本調査を実施した。

その成果について、昭和57年4月1日から1年間整理を行ない、ここに報告書として公表する運びとなった。

第2節 調査の経過と方法

No. 7遺跡の本調査は、昭和52年度に143,000㎡を対象面積とした試掘調査の結果に基づき実施した。調査面積は約45,000㎡である。試掘調査は、公共座標に基づいた50m方眼に対して、2×4mのトレンチを各1個ずつ入れたもので、その試掘結果から、遺物及び遺構の分布が主に全対象地域の西側にあることが予想された。これを受けて、翌昭和53年度より本調査が開始されることとなった。

昭和53年4月20日、本調査に先立ち、10m方眼の杭打ち及び草刈りを開始し、5月12日より、A地点北端2C、2Dグリッドの縄文時代包含層の発掘から調査が始まった。以後調査は3C、3Dグリッド、4C、4Dグリッドと次第に南へ包含層の発掘が進められていったが、遺跡がどれだけ東へ延びるかが問題となり、5C、5Dグリッド以南では10m方眼に各1個の2×4mの試掘トレンチを入れ、その結果をもって、本調査に順次移行するよう方針を変更した。

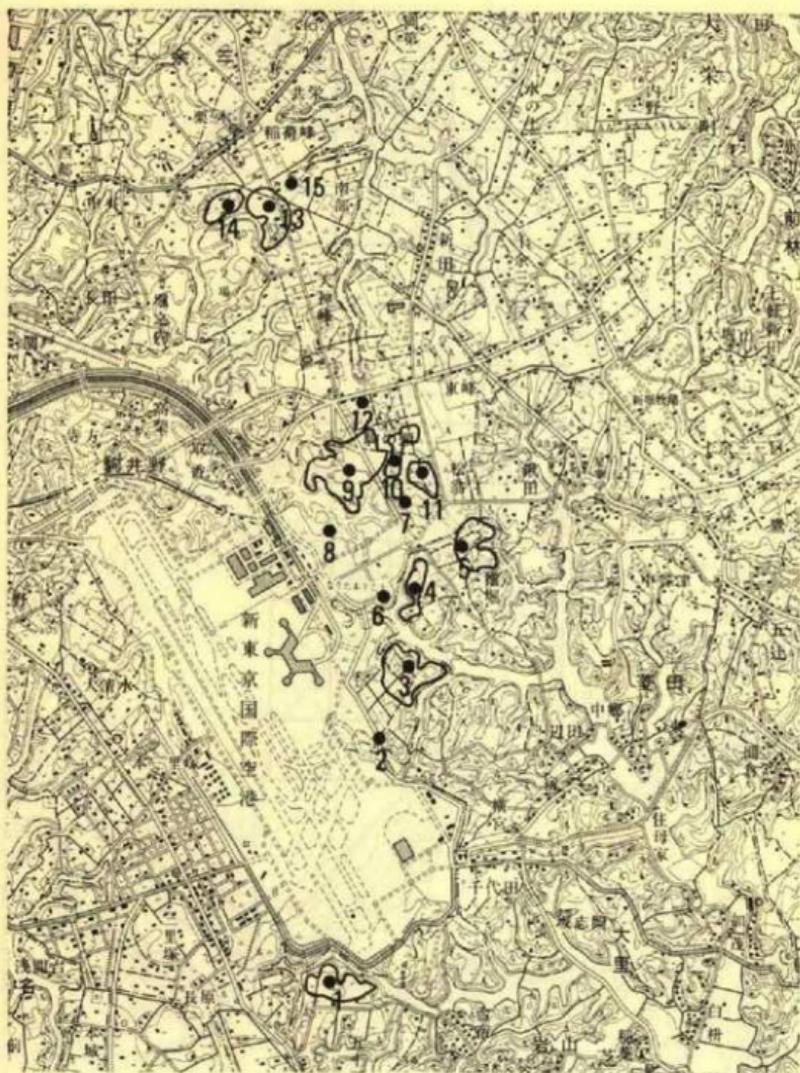
この結果、縄文時代の本調査面積は30,198㎡（A地点17,247㎡、B地点12,951㎡）となった。

先土器時代の調査は、縄文時代の調査がかなりすすんで、昭和54年1月31日より開始された。まず、10m方眼に2×2mの試掘坑を立川ローム層下部まで、縄文時代調査区内の全地域に入れる方針をとり、調査区の北端2C、2Dグリッドより次第に南へ進めていった。この作業のもと

づき2月27日より、本格的な先土器時代の調査を開始した。先土器時代の本調査面積は3,030㎡(A地点2,280㎡、B地点750㎡)。石器・剥片類の集中個所が7カ所、炭化粒の集中個所が6カ所検出された。なお、土層観察用として3 D00、6 D00、11 C00グリッドの3カ所(各5×5 m)を下末吉ローム層相当の白色粘土層まで掘り下げて記録を行ない、6 D00グリッドにおいて鉱物分析用の試料採集を行なった。すべての調査は昭和54年3月31日をもって終了した。

なお、前後したが、グリッドの設定方法及び調査方法については報告書Ⅲ—No. 14遺跡一とほとんど変わる所はない。ただし、縄文時代の遺物のとりあげに関しては、A地点の全域及びB地点10A、11AグリッドではⅡ層出土のものについてすべて、ドットマップを作成したが、9—12 Bグリッド出土のものについては、調査及び記録のおくれとともに調査員間の話し合いによって5 mグリッドによる一括取りあげとした。したがって、昭和54年以降の空港内遺跡の調査では、縄文時代の包含層出土遺物のドットマップ作成は行っていない。

このような、先土器時代、縄文時代の調査の他、対象調査面積45,000㎡の表土除去後検出された古墳時代の住居跡の調査も行なった。



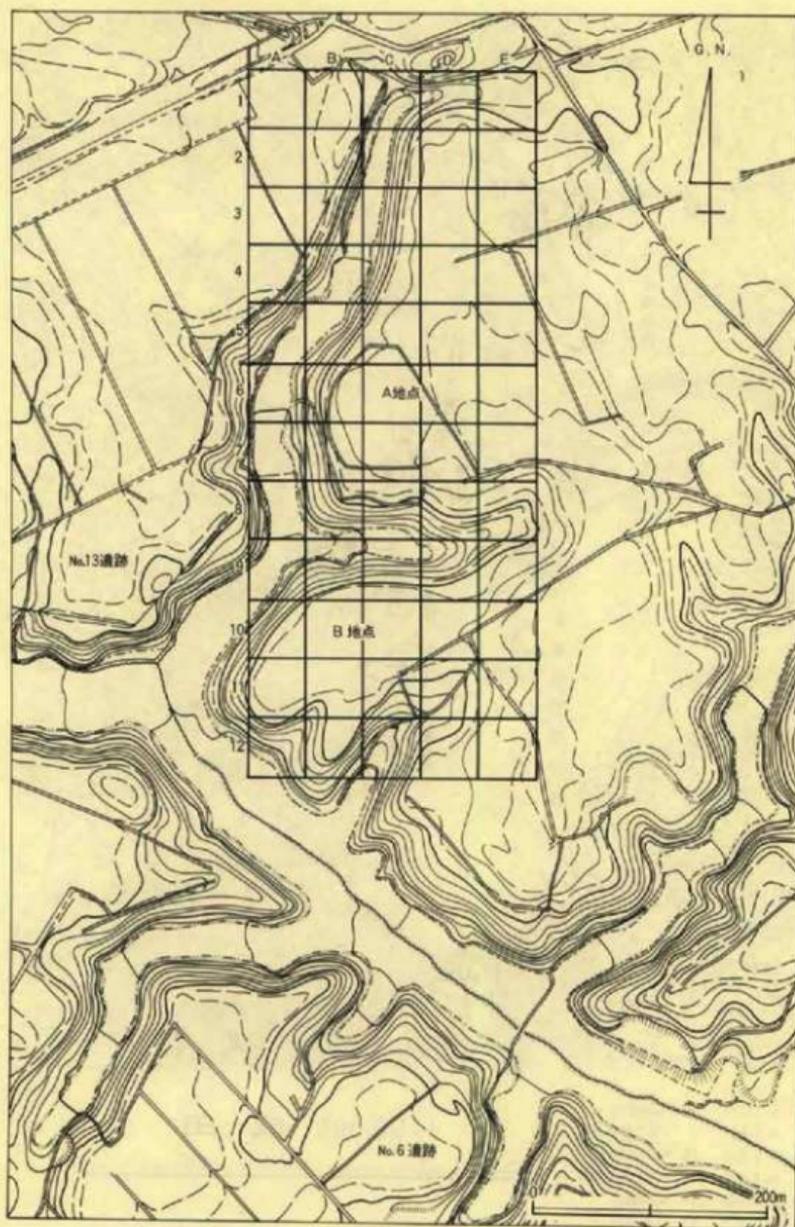
- | | |
|------------|-------------|
| 1. No.2遺跡 | 9. No.60遺跡 |
| 2. No.5遺跡 | (取巻製鉄跡) |
| 3. No.6遺跡 | 10. No.61遺跡 |
| 4. No.7遺跡 | (御幸畑製鉄跡) |
| 5. No.10遺跡 | 11. No.62遺跡 |
| 6. No.13遺跡 | 12. No.63遺跡 |
| 7. No.14遺跡 | 13. No.67遺跡 |
| 8. No.22遺跡 | 14. No.68遺跡 |
| | 15. No.66遺跡 |

1:50,000 成田

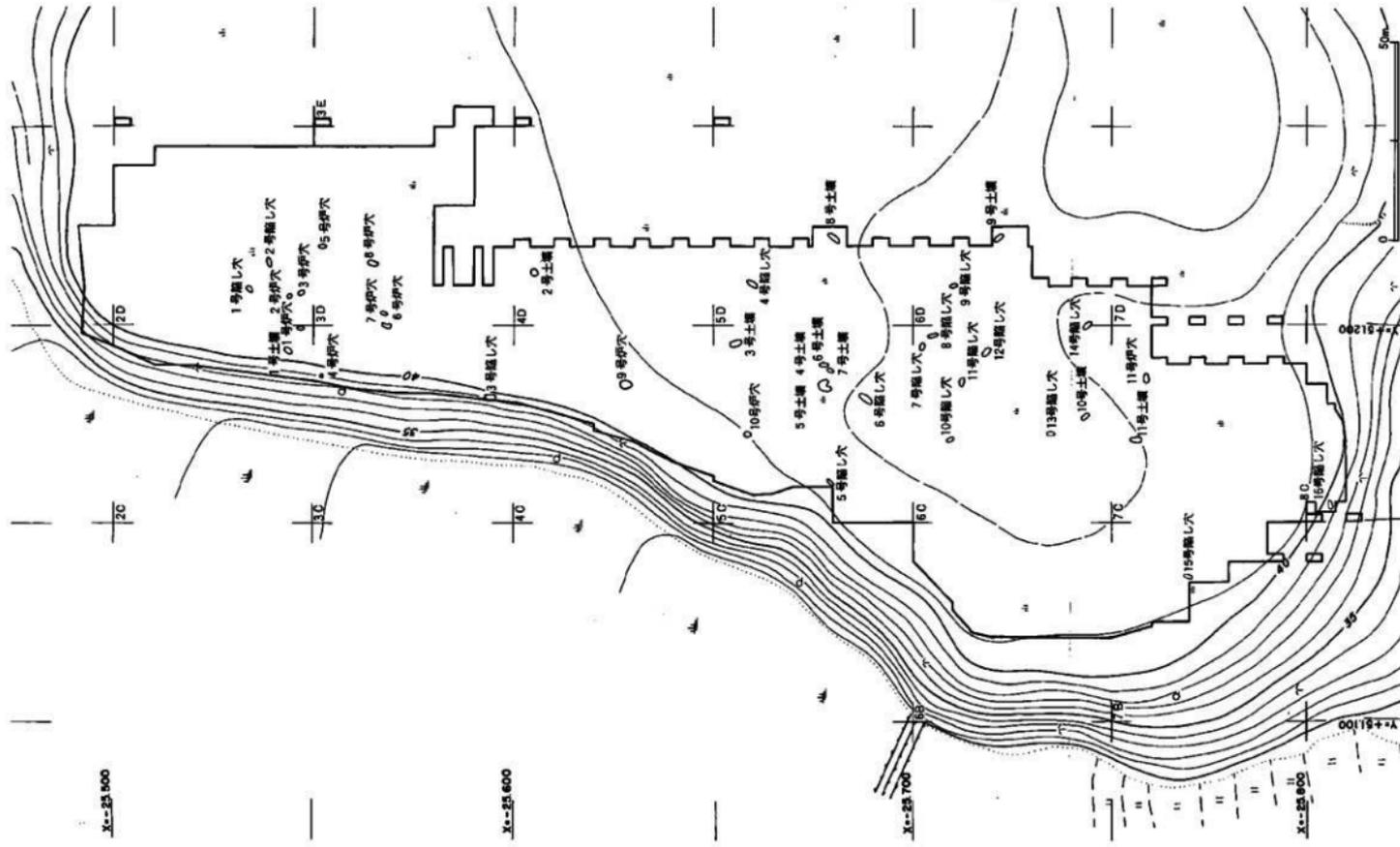


第1図 遺跡の位置と周辺主要遺跡

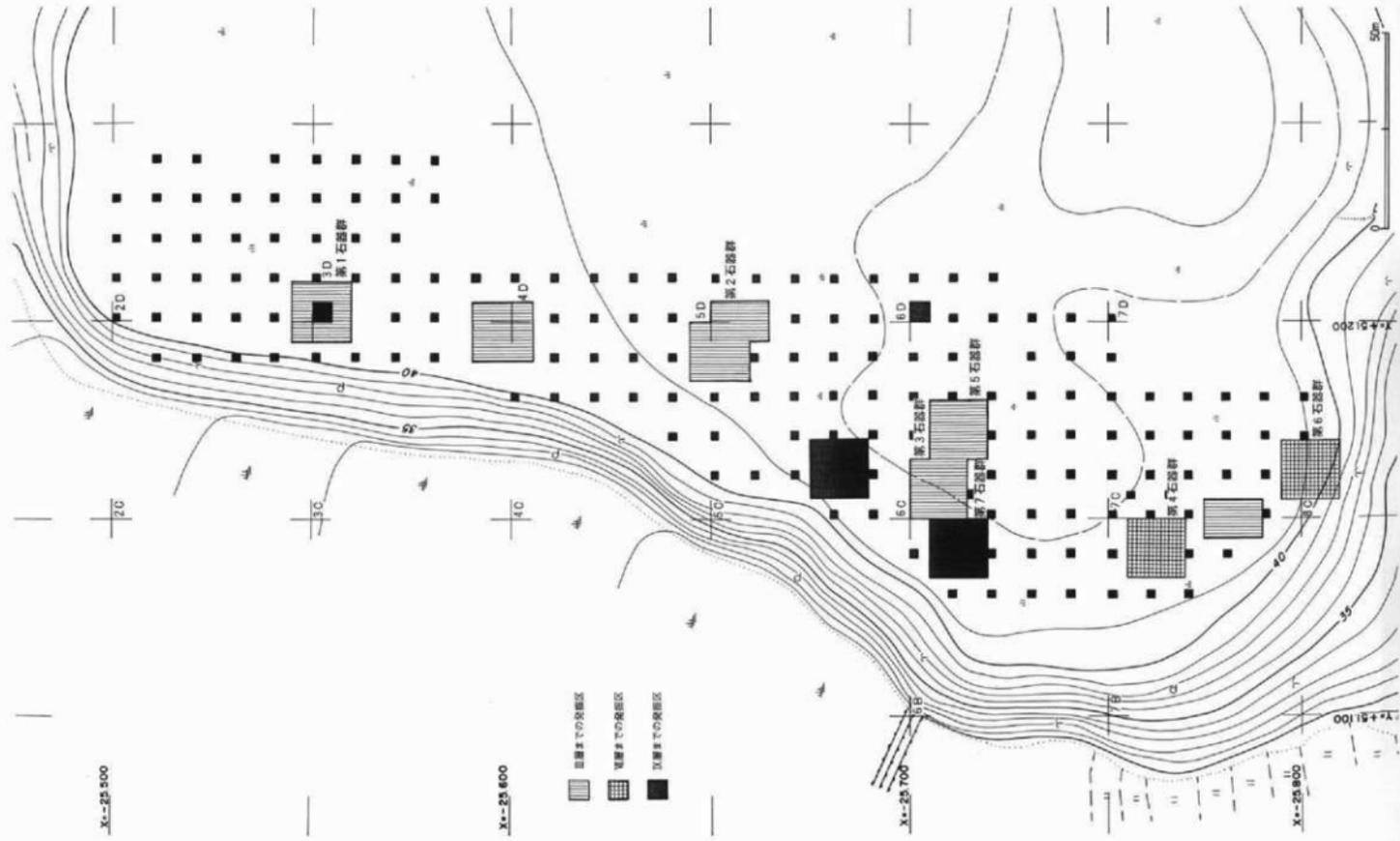
— この地区は国土地理院発行の5万分の1地形図(成田)を使用したものである —



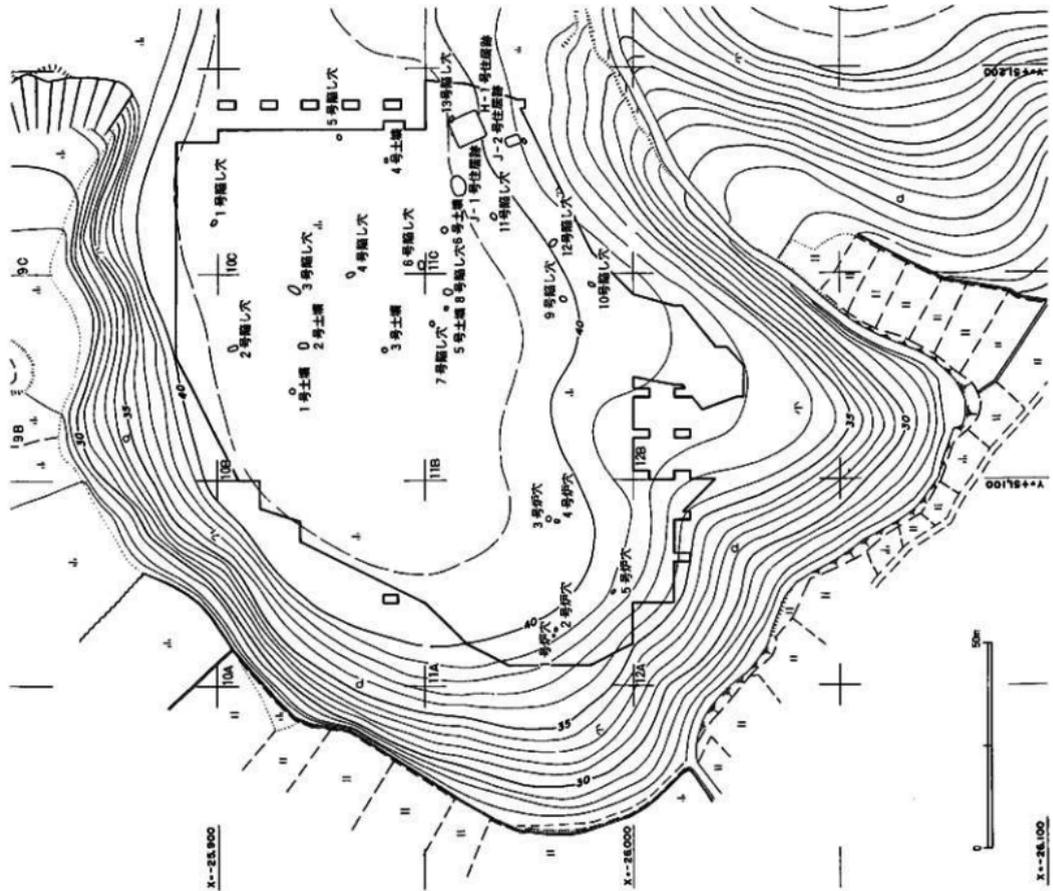
第2図 No. 7遺跡周辺地形及びグリッド配置図



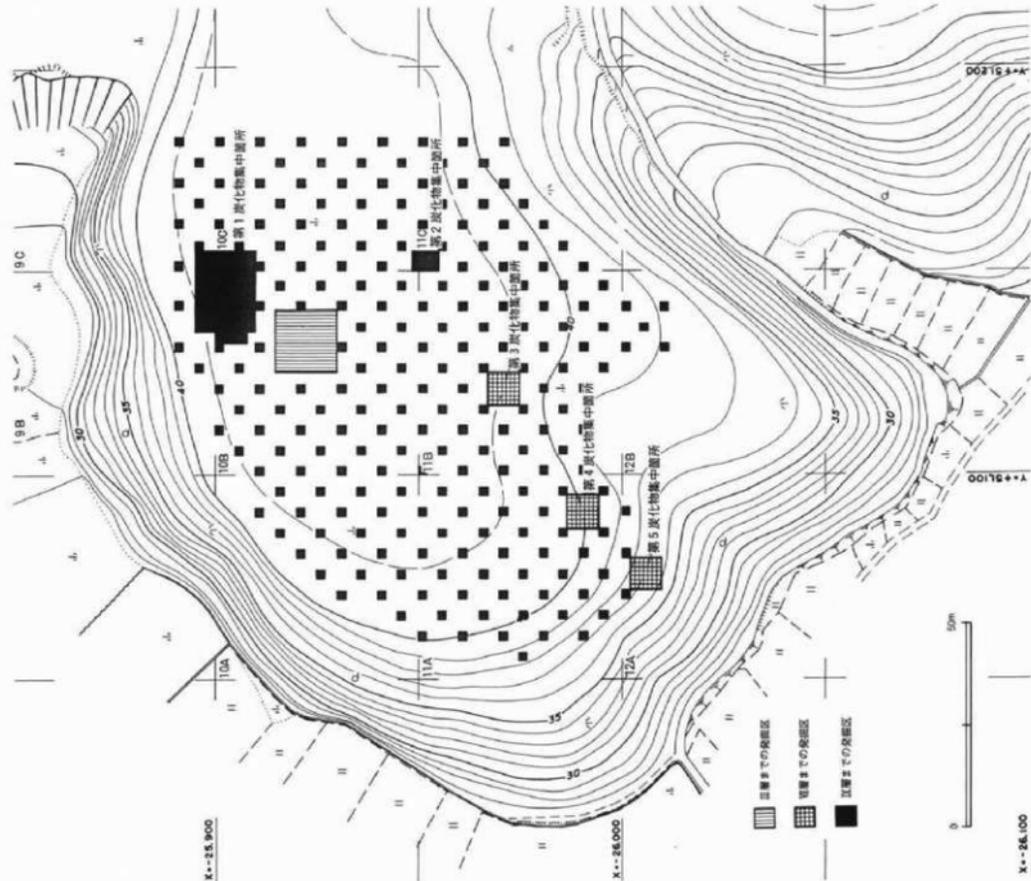
第3図 A地点遺構記置及び縄文時代調査範囲図



第4図 A地点先土器時代発掘区



第5図 日地遺構分布及び縄文時代調査範囲図



第6図 B地点先土器時代発掘区

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

No. 7遺跡は既報のNo. 6遺跡（「木ノ根」）と同一の栗山川水系に属し、それとは谷を挟んで北側の対岸に位置する。また、本遺跡は既報のNo. 14遺跡と水系が異なるものの、北方向へ直線距離で約500mをへだてているにすぎない。

本遺跡は北側のA地点と南側のB地点とに分けられる。A地点は、その北をNo. 6遺跡方向からさかのぼってきた谷の末端によって拓かれ、南をB地点との間の小谷で区切られている。したがって、A地点は東に開けた南北に長い形状を呈している。B地点は、北ではA地点に画される小谷と、南では南西方向に開口する小谷とによって形成されていて、比較的狭い南西に向く典型的な舌状を呈している。A地点、B地点とも谷との比高差は10-15mを測り、谷の傾斜は急である。A地点では最も高い標高が6C、6Dグリッド付近にあって、41.5mの等高線が走り、ゆるやかに北に向って傾斜している。これは肉眼的にはほとんど気がつかない程度である。B地点の標高はA地点に比べて、わずかに低く、40.5mの等高線がめぐっている。なお、B地点12Bグリッドの南東側斜面には、調査後発見された「横船たたら」遺跡が所在する。

第2節 基本層序

No. 7遺跡は下総台地上にあり、新東京国際空港関連のNo. 5、6、14遺跡等の基本層序と大きく異ならない。

以下、No. 7遺跡の基本層序を示しておく。

土層図（第7図）

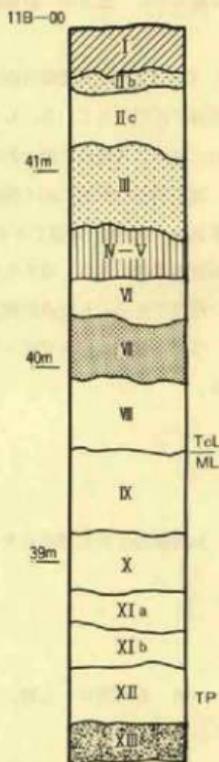
No. 7遺跡は、下総台地の上位面に位置し、成田層上に下末吉ローム層、武蔵野ローム層、立川ローム層が堆積している。

第I層 表土（耕作土） 炭化粒を多量に含み、部分的にソフトローム、ハードローム粒を含み、粘性しまりは弱い。

第IIa層 黒褐色土 削平されているために当遺跡では確認されなかった。

第IIb層 褐色土 いわゆる「新期テフラ」と呼ばれている層である。遺存状態は良好とは言えず、かろうじて残っているところが多い。

第IIc層 暗褐色土 調査区全域で認められる。20-30cmと比較的厚く堆積する。本層中からは早期の土器が多量に出土している。



第7図 標準層序

第Ⅱ層 黄褐色ローム層 立川ローム軟質部で「ソフトローム」と呼ばれている部分である。

第Ⅳ-Ⅴ層 暗黄褐色ローム層 立川ローム硬質部でクラックが著しく、Ⅳ-Ⅴ層そのものの色別は困難である。第Ⅰ黒色帯相当の層も含まれる。

第Ⅵ層 黄褐色ローム層 立川ローム硬質部で始良丹沢バミス層にあたると思われる。場所によってはブロック状に堆積が認められる。

第Ⅶ層 暗褐色ローム層 立川ローム硬質部で第2黒色帯に相当する。粘性は非常に強い。部分的に炭化物を微量に含む。

第Ⅷ層 暗黄褐色ローム層 立川ローム最下部である。乾燥するとクラック状態が激しい。

第Ⅸ層 褐色ローム層 スコリア粒を少量含む武蔵野ローム層。

第Ⅹ層 淡褐色ローム層 粘性しまりは強い。スコリアを含む。

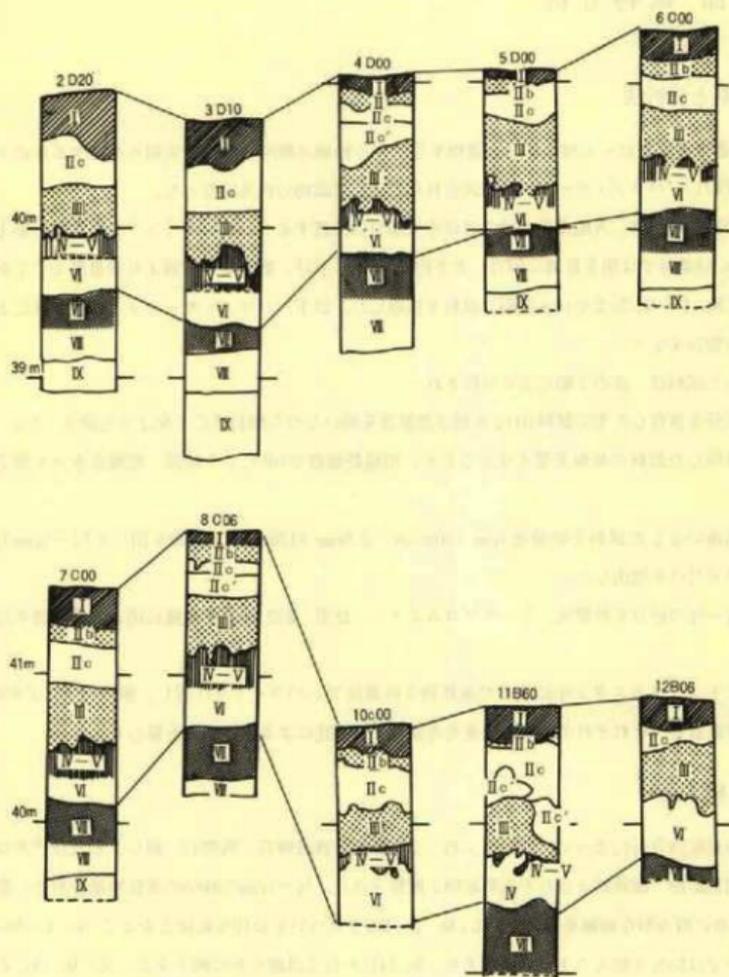
第ⅩⅠa層 暗褐色ローム層 粘性しまりが非常に強い。赤褐色のスコリアを含む。

第ⅩⅠb層 暗褐色ローム層 粘性しまりは非常に強い。赤褐色のスコリアを微量に含む。

第ⅩⅡ層 黄褐色軽石層 (東京バミス) 軽石がブロック状に認められる。

第ⅩⅢ層 黄褐色ローム層 ⅩⅡ層とⅩⅣ層が混じりあった層。非常に粘性しまりがある。

第ⅩⅣ層 白色粘土層 非常にしまりのある白色の粘土層である。



第8図 遺跡土層断面図

第3節 鉱物分析

1. 試料と分析法

No. 7 遺跡の関東ローム層の層序と遺物を包含する地層の層位学的性質を明らかにする目的で試料を採取し、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託して鉱物分析を行なった。

試料の採取地点は、A地点の台地のほぼ中央部分に位置する6D-00グリッドを地表から第XIV層（No. 14遺跡では第XIII層に相当）まで約3.5m掘り下げ、第XIII層上面より第III層まで下から数えてNo. 1～No. 30まで10cm間隔で試料を採取した。以下、バリノ・サーヴェイ株式会社による報告の要点を記す。

採取した試料は、次の手順により分析された。

- (1) 水分を含有した生の試料100gを超音波装置を用いながら傾斜法にて粘土分を除去した。
- (2) 使用した試料の乾燥重量を求めめるため、恒温乾燥器で105℃で5時間、乾燥後水分を測定した。
- (3) 水洗いをした試料を乾燥後 $\frac{1}{2}$ mm (60mesh) と $\frac{1}{4}$ mm (120mesh) の篩を用いて $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ mmの粒土の砂分だけを抽出した。
- (4) $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ の砂分を秤量後、テトラブromエタン（比重 約2.96）を重液に用いて重鉱物を分離した。
- (5) テトラブromエタン中に沈んだ重鉱物を秤量後プレバカートを作製し、顕微鏡下にて300個体程度観察し、それぞれの鉱物の比重を考慮して重量比による鉱物組成を算した。

2. 分析結果

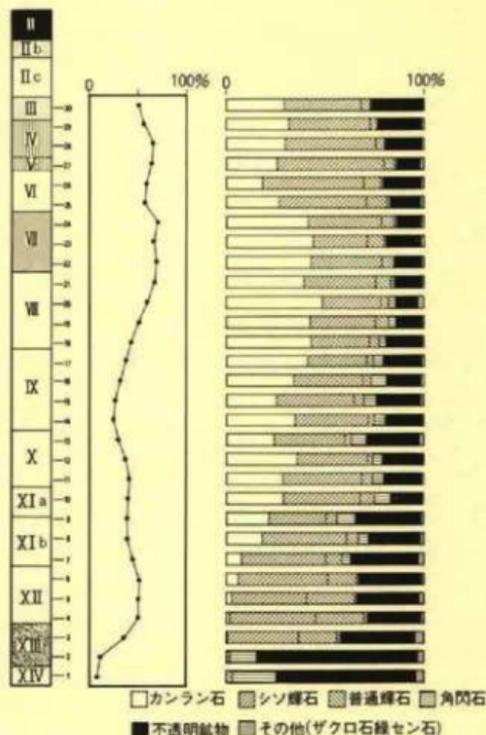
今回の重鉱物分析によって、カンラン石、シソ輝石、普通輝石、角閃石、緑レン石及びザクロ石の透明重鉱物、磁鉄鉱を含む不透明鉱物が観察された。 $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ mmの砂中の重鉱物量の割合の変化は、非常に滑らかな曲線を描いている。No. 1～No. 2については10%前後と少なく、No. 4～No. 6においては50%を超える1つの山があり、No. 14にかけては緩やかに減少する。又、No. 24においては70.5%と最大値に達する。No. 25から非常に緩やかに増加しNo. 28の65%をピークにNo. 29、No. 30は減少している（第7図）。

このような重鉱物組成のあり方は、南関東における下末吉ローム層、武蔵野ローム層、及び立川ローム層に対比できる。

3. 他地域との対比

重鉱物分析の結果、No. 7 遺跡における関東ローム層が、武蔵野台地、相模野台地のものと対応されるという結果を得た。No. 14 遺跡と同様に立川・武蔵野ローム層の層位を判定するのにカンラン石とシソ輝石、普通輝石の量比に注目した。

No. 7 遺跡において、カンラン石は極大を示すわけではないが、No. 30 (第Ⅲ層)とNo. 24 (第Ⅵ層上部)でNo. 14 遺跡と同様な上下変化がみられる。これらは武蔵野台地の立川ローム層軟質部 (第Ⅲ層)の中位と第2 黒色帯 (第Ⅵ層)上部と対応する。また両輝石の極大はNo. 27 である。これは武蔵野ロームの第1 黒色帯 (第Ⅴ層)と対応する。



第9図 重鉱物組成図

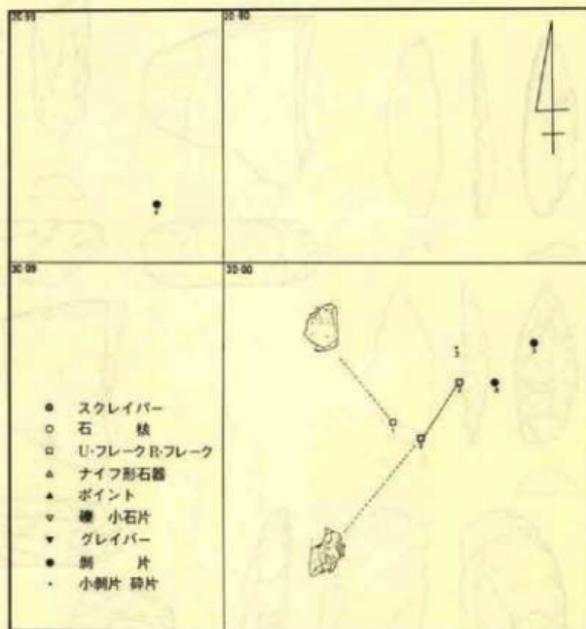
第3章 A地点の調査

第1節 先土器時代の遺構と遺物

先土器時代の遺跡においては住居跡等の検出がまれであり、石器・剥片類が集中して出土する状況が一般的である。他に礫群、あるいは炭化物が集中する場所、焼土等が単独あるいは伴って検出されることもある。

本遺跡はA地点とB地点に分けられ調査が行なわれた。A地点(第4図)では7か所の石器群

が検出された。そのうち小礫群と炭化物を伴うものが各1か所検出された。B地点では炭化物の集中のみ5か所検出された。なお縄文包含層中より若干の先土器時代に属すると思われる石器の出土をみた。以下A地点の石器群について説明していく。

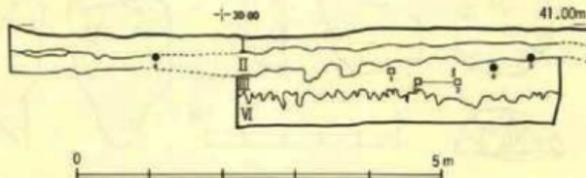


A地点第1石器群

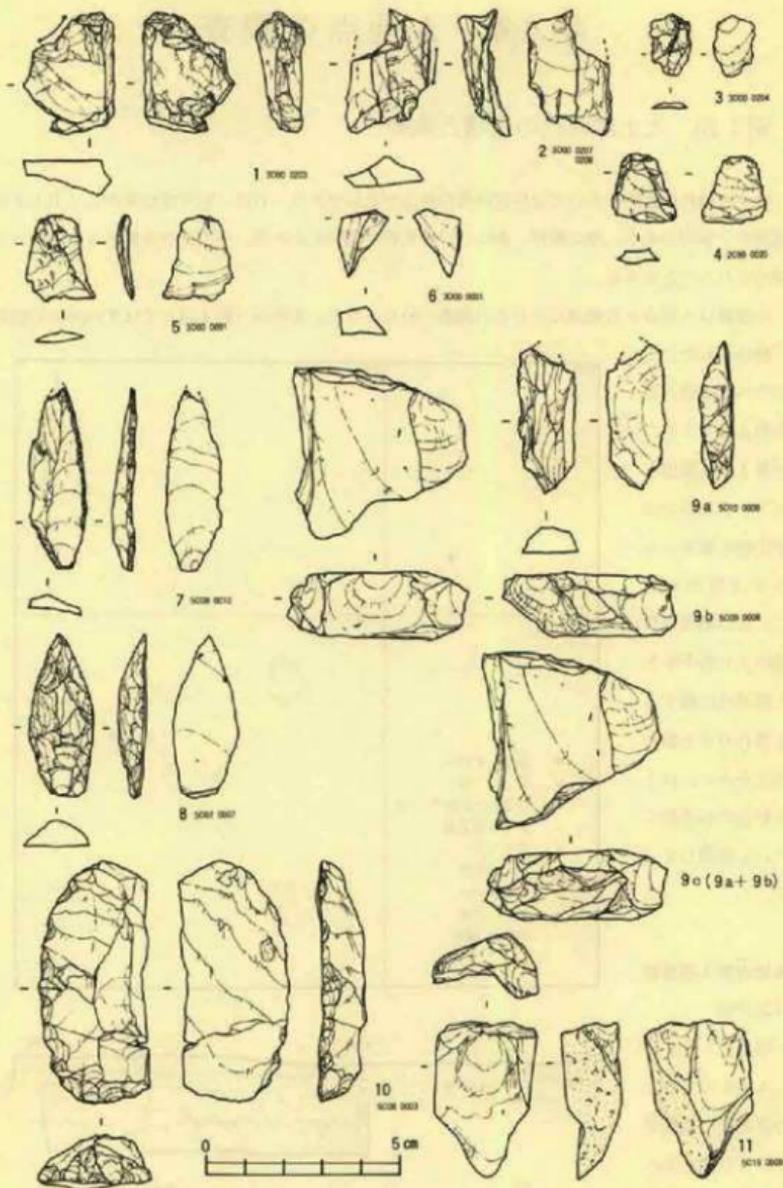
(第10図、

第11図1～6)

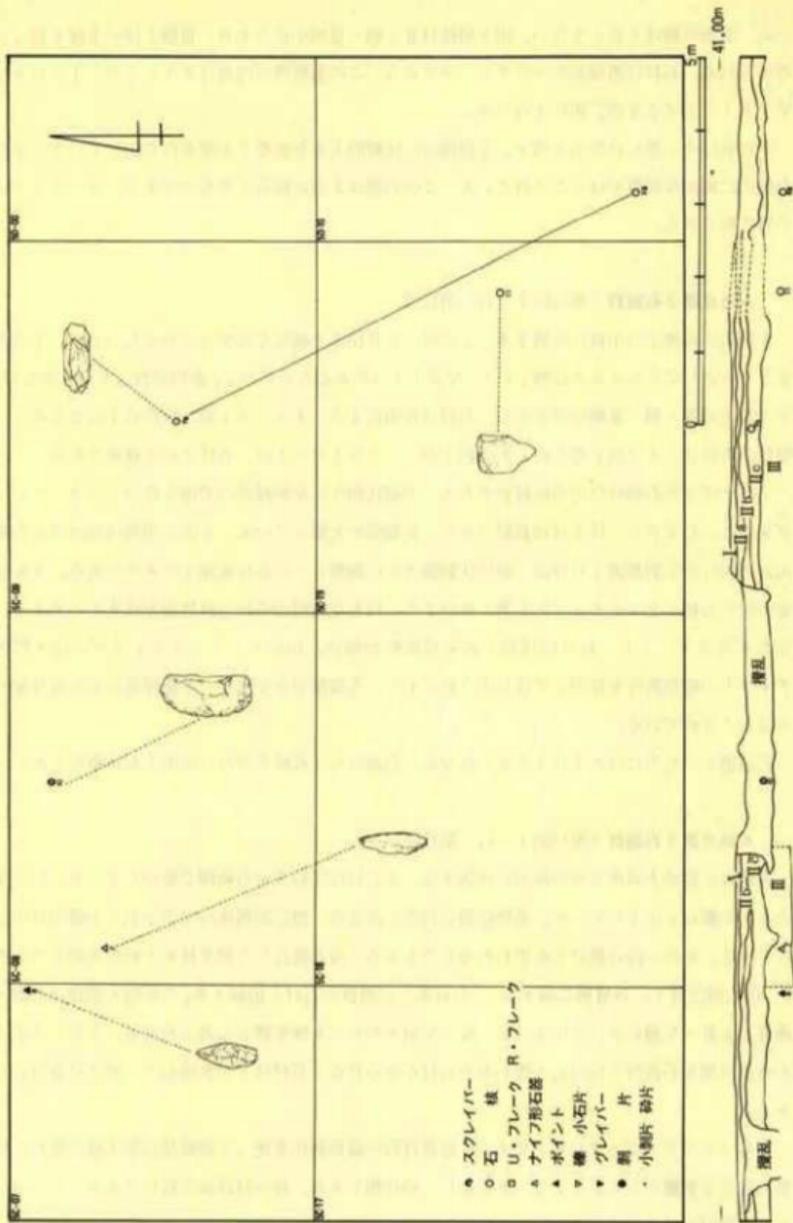
A地点の台地上の北側奥に位置する。3 D00を中心として分布し、4はやや離れて出土して



第10図 A地点第1石器群



第11図 A地点第1、第2石器群遺物実測図



第12図 A地点第2石器群遺物分布図

いる。遺物総数は6点と少ない。出土層位はⅡc層～Ⅲ層中位であり、Ⅲ層上位に主体を置くと考えられる。石材は青緑がかったチャートである。この石器群の内容はスクレイパー1点リタッチ・ド・フレイク1点、剥片4点である。

1は剥片の一部に自然面を残す。左肩部分に比較的大きな剝離で刃部を作り出している。2は右側面に細かな剝離がほどこされている。2の石器は2点が接合したものである。3～6までは小剥片類である。

A地点第2石器群(第11図7～11、第12図)

A地点の台地上の中程に位置する。5C07～5D10まで細長く広がって分布しており、1つのまとまりとしてとらえるのは難しいが、便宜上1つのものとしておく。遺物総数は6点と少ない。出土層位はⅡc層～Ⅲ層中位である。石材は安山岩4点、チャート1点、流紋岩1点である。石器群の内容はナイフ形石器2点、尖頭器1点、スクレイパー1点、石核2点で構成される。

7のナイフ形石器は白色の流紋岩である。刃器状剥片に左側縁部の刃部を除いてブランティングをほどこしており、仕上げは良好である。先端部が欠損している。8の尖頭器は厚みのある安山岩の剥片の主剝離面より背面へ階段状剝離ぎみに調整している片面加工のものである。9bは安山岩の石核で9aのナイフ形石器と接合する。11も安山岩の石核で自然面を残すものである。なお8と9a・9b・11は同母岩である可能性が高い。10のエンド・スクレイパーは大形のチャートの縦長剥片を使用して作り出されており、先端部のみならず、左側縁部にもかなり加工がほどこされている。

石器群そのものにはあまりまとまりはない。石器のみ(石核を含む)の出土が特徴的である。

A地点第3石器群(第13図1～11、第15図)

A地点の台地上の南よりの縁辺に位置する。8C11に径約3mの範囲で集中している。ただ1のみやや離れて出土している。遺物総数は11点であるが、他に20個体以上の小石～小礫の集中がみられる。その一部は焼けたと思われるものもある。復元接合した例を見ると親指大のものが多し。出土層位はⅠのみⅣ層に属する。これは第6石器群の石材と相似する。その他の遺物は石器・礫群ともⅢ～Ⅴ層にかけて出土した。Ⅳ～Ⅴ層あたりに主体を置くと考えられる。またこの第3石器群は第5石器群と同母岩と思われる石材がみられる。石材は3が黒曜石で、他は硅質頁岩である。

1はリタッチ・ド・フレイクである。硅質頁岩の縦長剥片を使って側縁部に加工痕と思われる規則的な小剝離がみられる。2～9は剥片・砕片類である。10～11は接合資料である。10～11ともに自然面を残す剥片である。

第5石器群とは近接しており、石材も同母岩と思われるものがあり、密接な関係がある様に思

われる。

A地点第4石器群（第13図12-15、第14図、第16図）

A地点の台地上の南西縁辺に位置する。7 B59-7 C70にかけて広く分布している。遺物総数は13点と少ない。層位はⅡc層-Ⅲ層上位にかかる。7 B59・69・79の遺物は谷に近い正確に断面投影されていない。石材は安山岩5点、チャート3点、珪質頁岩2点、硬質砂岩1点、黒曜石1点、玄武岩1点と遺物量が少ない割りにバラエティーに富んでいる。石器の内容は、スクレイパー4点、使用痕のある剥片1点、石核1点、剥片7点である。

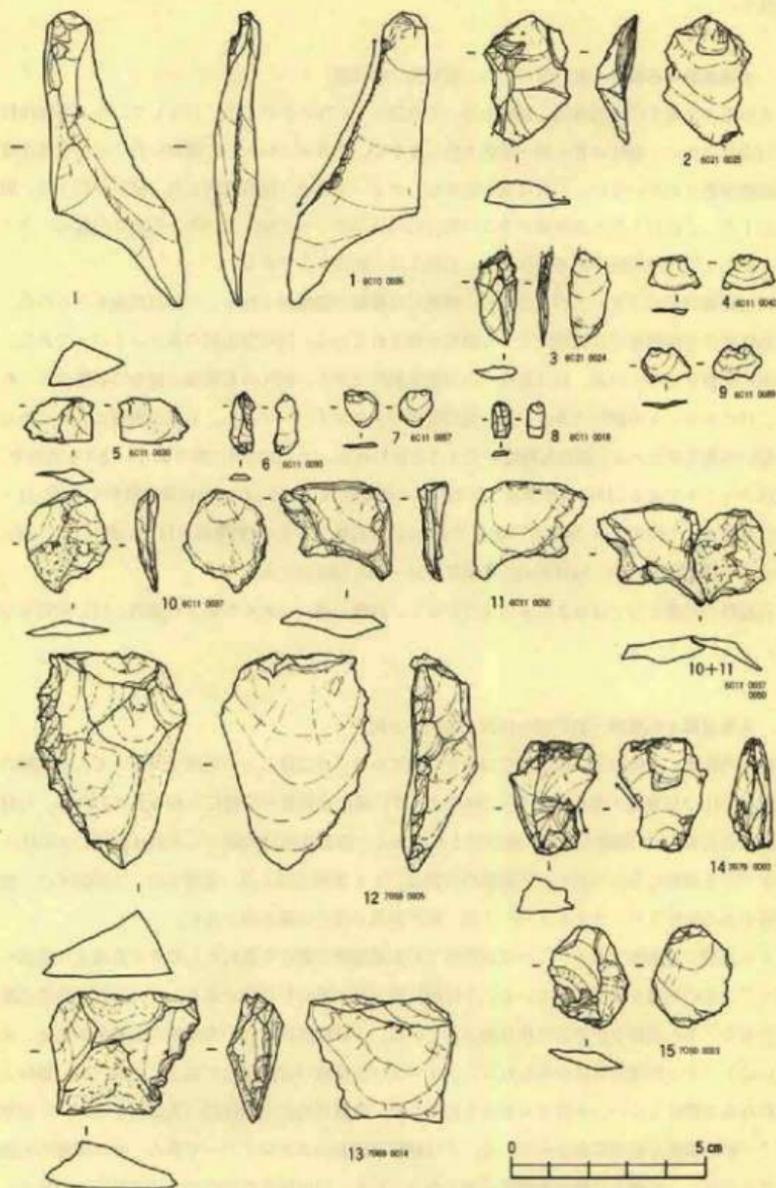
12は硬質砂岩のスクレイパーである。背面には複数の剥離面を残し、一部自然面もみられる。大形剥片の左側縁部には比較的大きな調整が施されている。13は安山岩のスクレイパーである。背面に調整を加えている。14は黒曜石の刃器状剥片である。剥片の右側縁に細かい剥離がみられる。15はチャートの剥片である。16は珪質頁岩のスクレイパーである。刃部の剥離は大きくかなり荒い印象をあたえる。裸の写程度の大きさと思われる。17-20は剥片類である。18は玄武岩で、他はチャートである。19には使用痕と思われる小剥離がみられる。21-23は接合資料である。21・22は剥離された時点では、横割ぎの剥片である。23は石核である。旧剥離面を打面に転移している。安山岩の自然面を残す。24は安山岩の剥片で21-23と同母岩であろう。

石器群の特徴としてはあまりまとまりがなく、器種の違いはあるが第2石器群と同じ様相を示す。

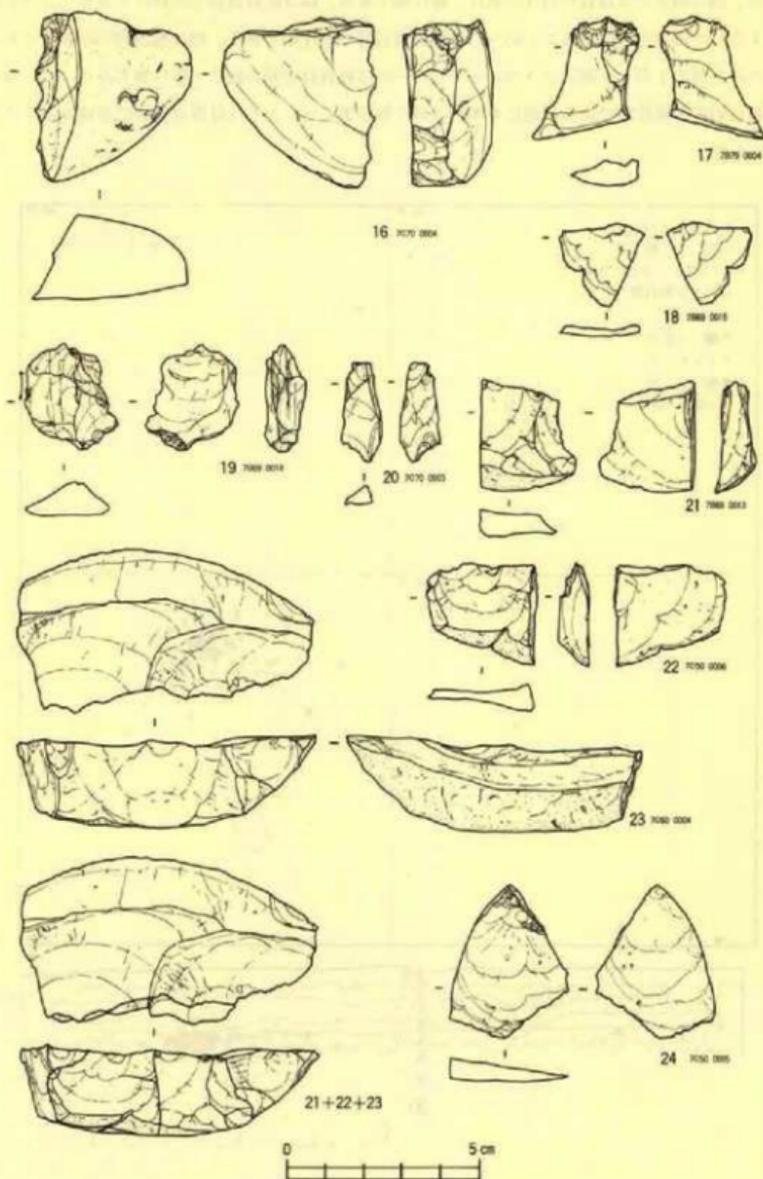
A地点第5石器群（第17図-19図、第20-21図）

第3石器群に近接している。6 C14-6 C24にかけてほぼ径3mの範囲で分布する。本遺跡の石器群の中では遺物の量は最も多く298点である。層位は第Ⅲ-V層にかかると思われる。石材は珪質頁岩256点、黒曜石41点、流紋岩1点である。珪質頁岩は肉眼による個体識別により㉔-㉚までの5種類に分けられた。石器群の内容は、ナイフ形石器1点、彫器2点、尖頭器4点、使用痕のある剥片1点、スクレイパー1点、剥片33点で残りは砕片類である。

1は黒曜石の彫器である。これは両面加工の尖頭器状の剥片を素材としてその先端より基部へ向って2条の剥離をほどこしている。5は削片の一部が接合した図である。2は珪質頁岩㉔の彫器である。1と同様な作り方で作り出されている。3は珪質頁岩㉔の尖頭器の欠損品である。あるいは1・2と同様のものかもしれない。4・8は黒曜石の尖頭器の欠損品である。同一個体と思われるが接合しない。6はⅡc層から出土した。珪質頁岩㉔と同母岩の尖頭器である。片面加工で一部分調整が裏面におよんでいる。7は珪質頁岩㉔のスクレイパーである。9は黒曜石の剥片であるが、左頭部より槌状剥離状の加工がみられる。10は珪質頁岩㉔のナイフ形石器である。11は珪質頁岩㉔のナイフ形石器である。欠損品である。13-28までは黒曜石の剥片・砕片類であ



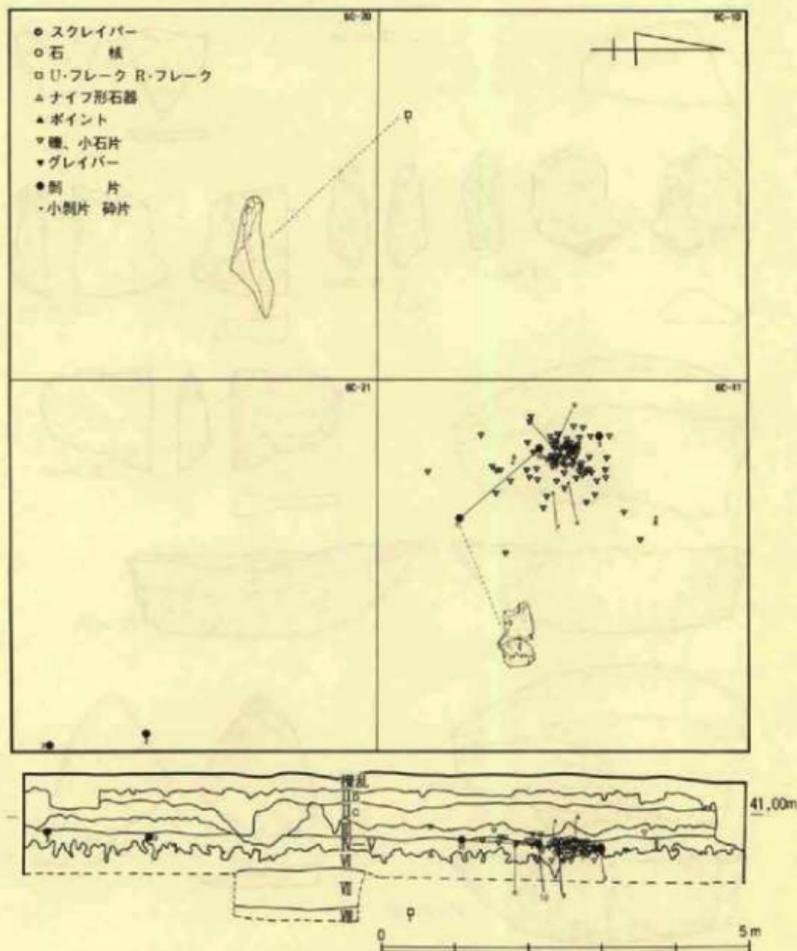
第13図 A地点第3、第4石器群遺物実測図1



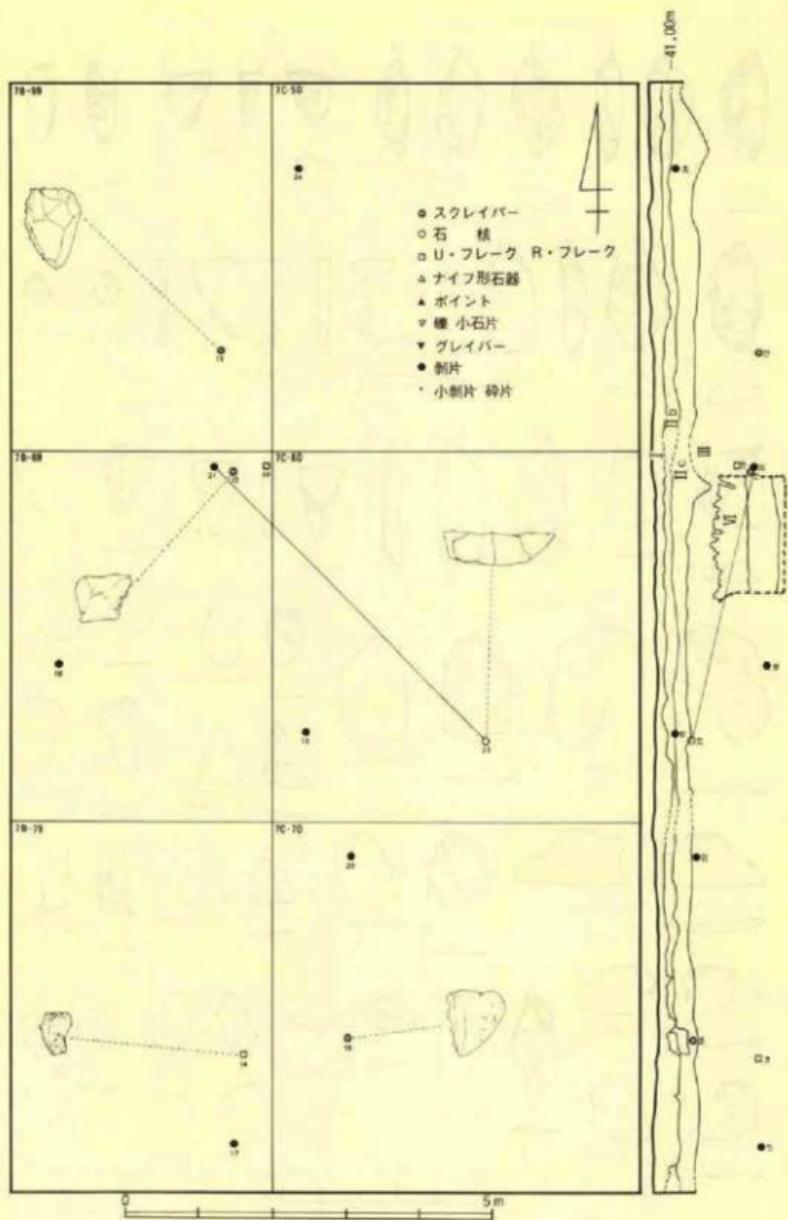
第14図 A地点第4石器群遺物実測図2

第3章 A地点の調査

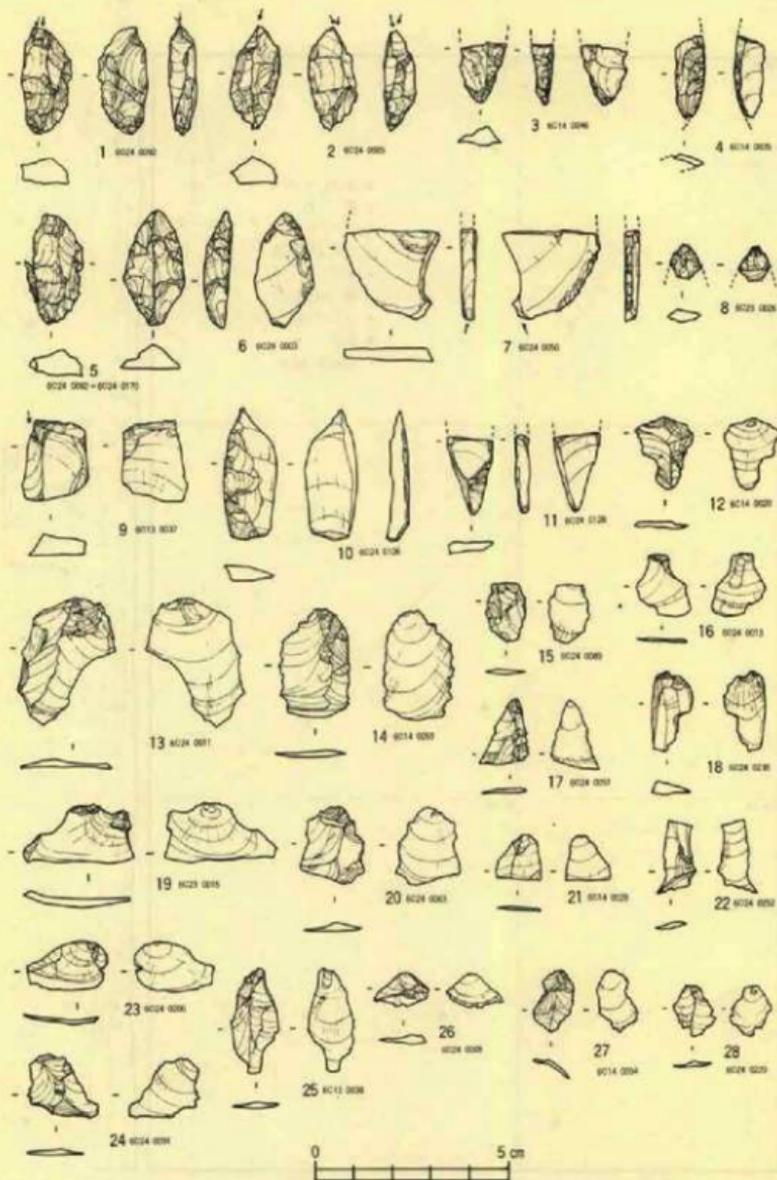
る。29-63までは硅質頁岩④の剥片・碎片類である。64は硅質頁岩⑤の碎片である。この石材は1点しか確認できなかった。65-71は硅質頁岩⑥の碎片類である。72は流紋岩の小剥片である。この石材も1点しか確認できなかった。73-81は硅質頁岩⑦の剥片・碎片類である。82-96は硅質頁岩⑧の碎片類である。他にも多数の碎片類があるが、大半は硅質頁岩④に属するものと思われる。



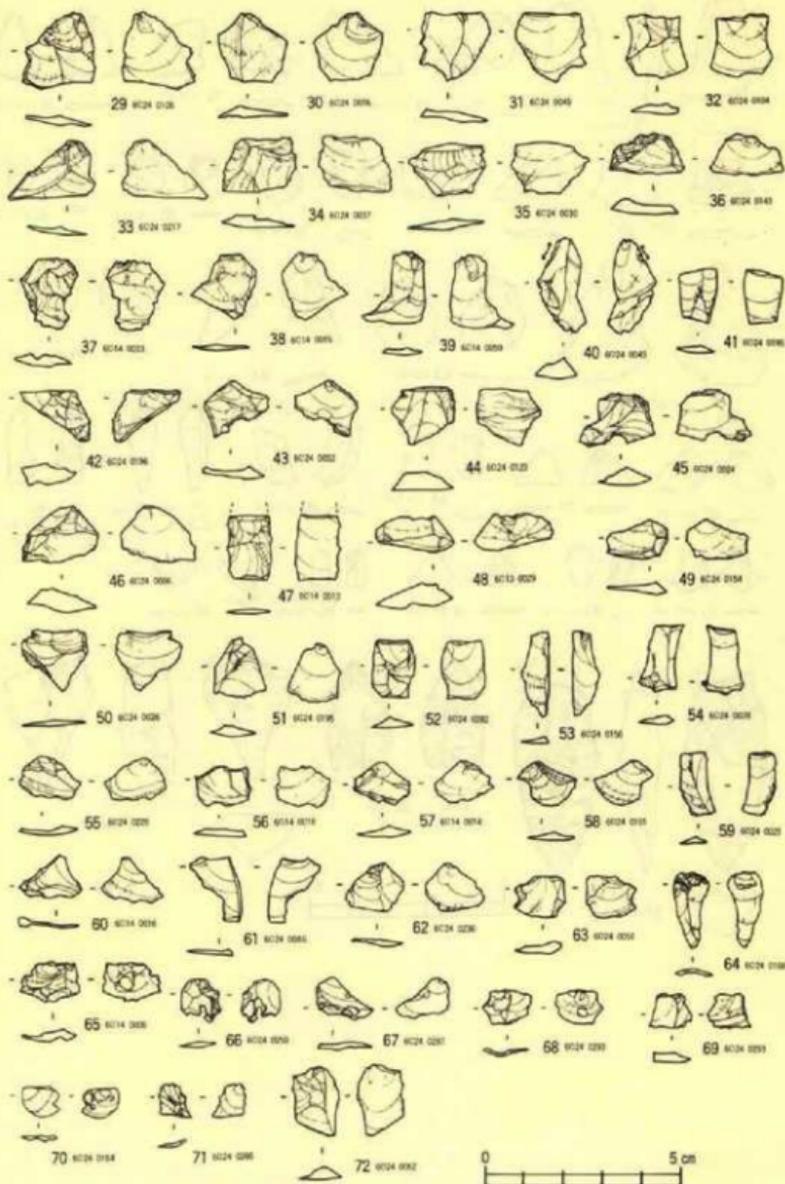
第15図 A地点第3石器群遺物分布図



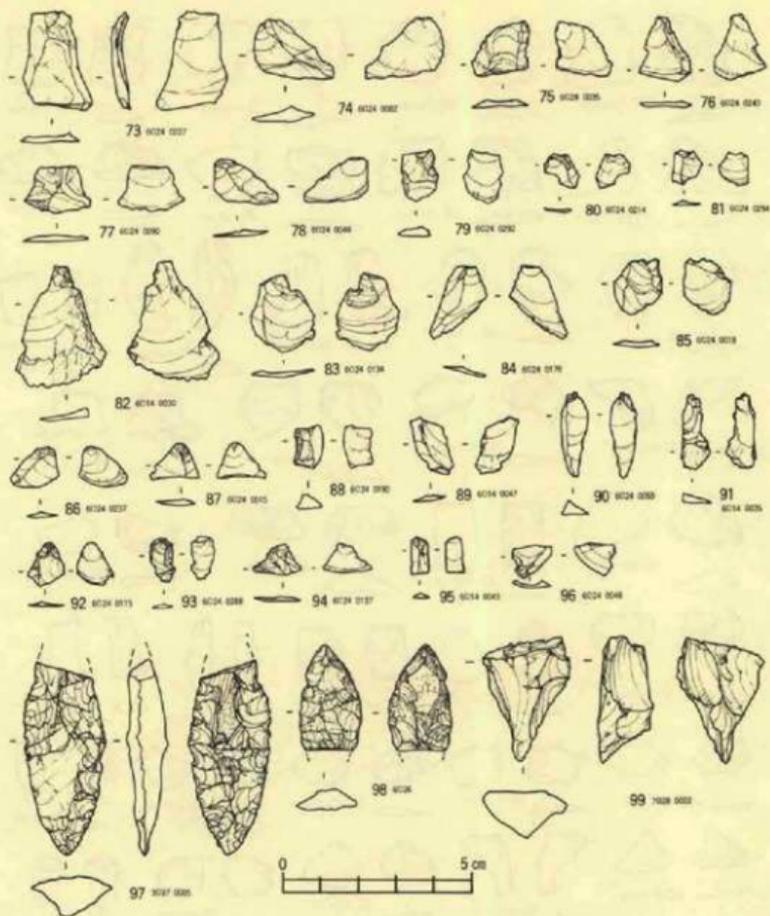
第16図 A地点第4石器群遺物分布図



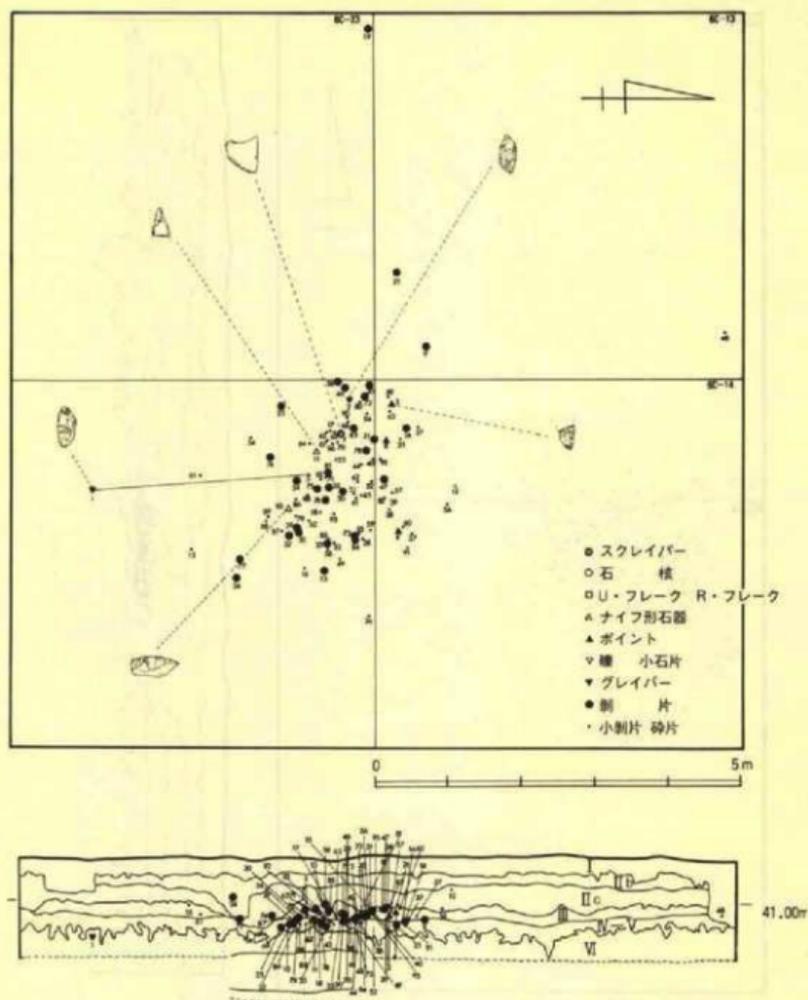
第17図 A地点第5石器群遺物実測図1



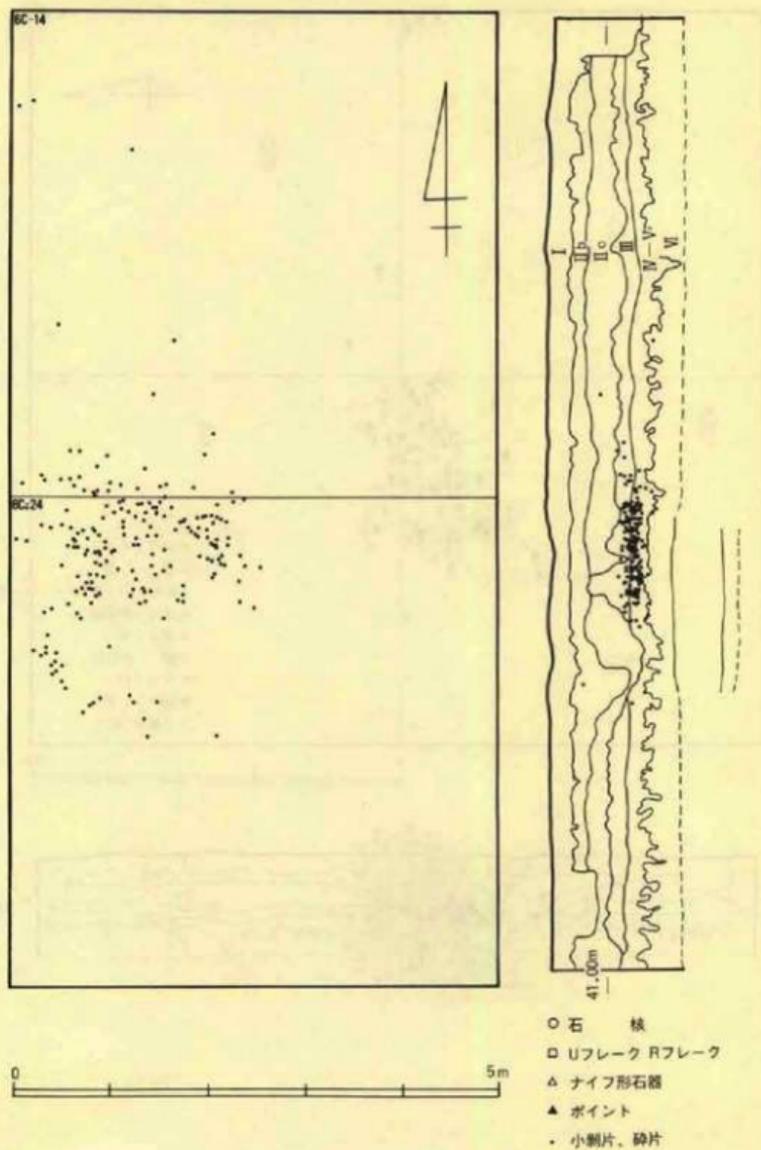
第18図 A地点第5石器群遺物実測図2



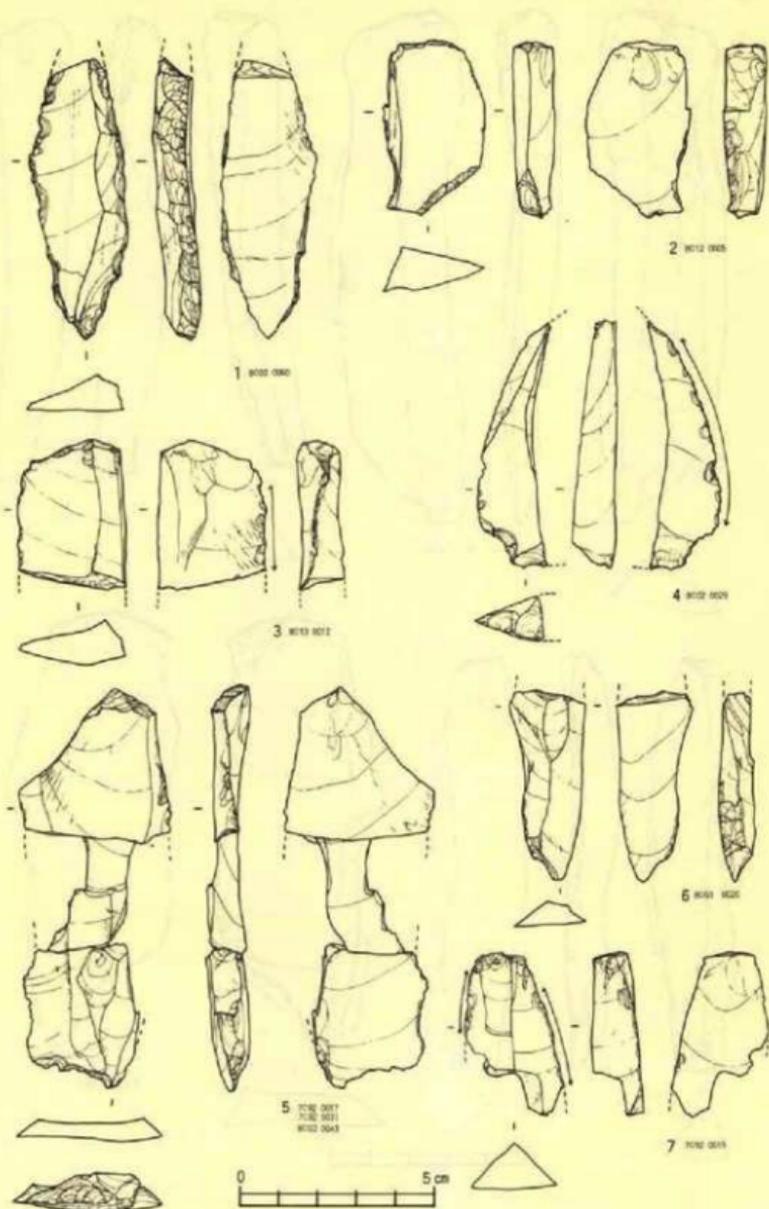
第19図 A地点第5石器群及びブロック外出土遺物



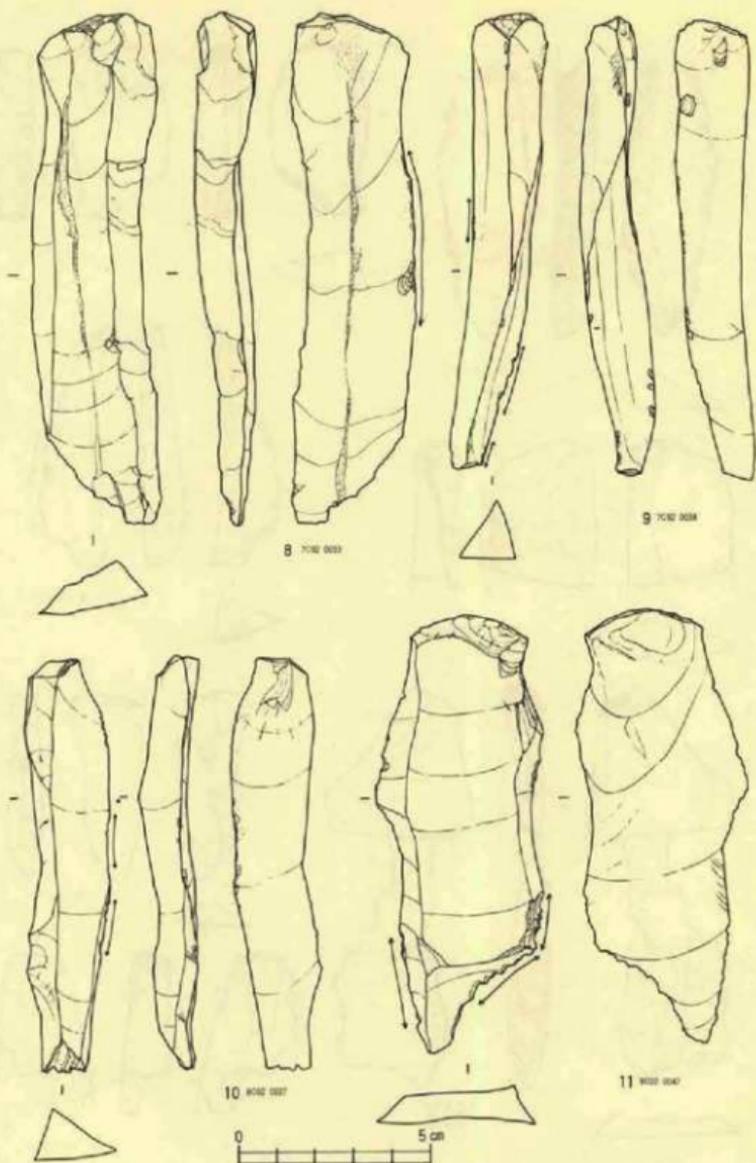
第20図 A地点第5石器群遺物分布図



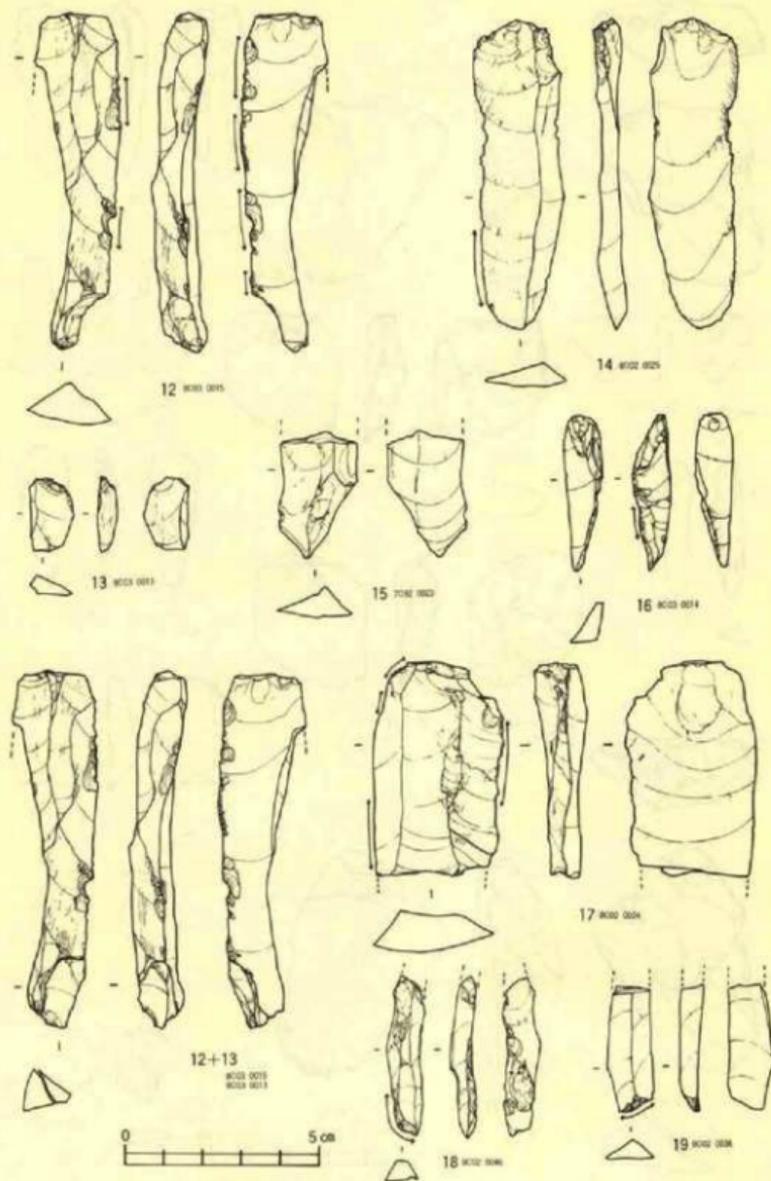
第21図 A地点第5石器群小剥片・破片分布図



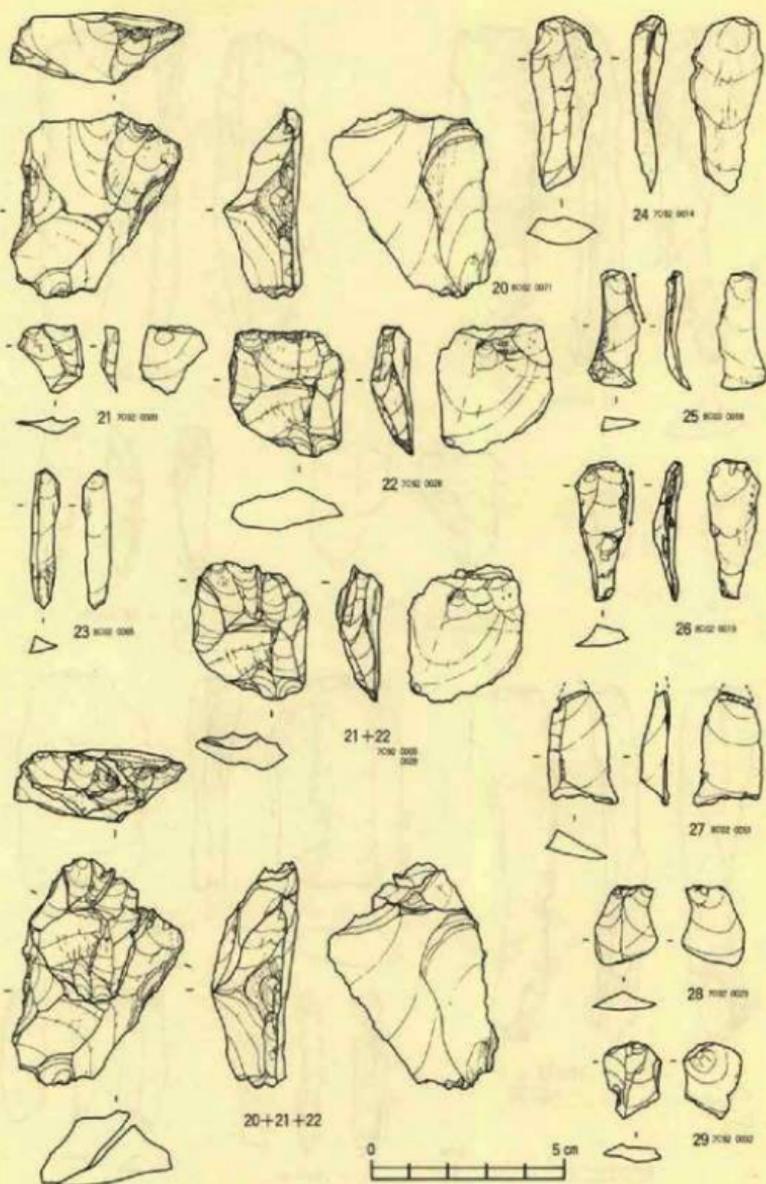
第22図 A地点第6石器群遺物実測図1



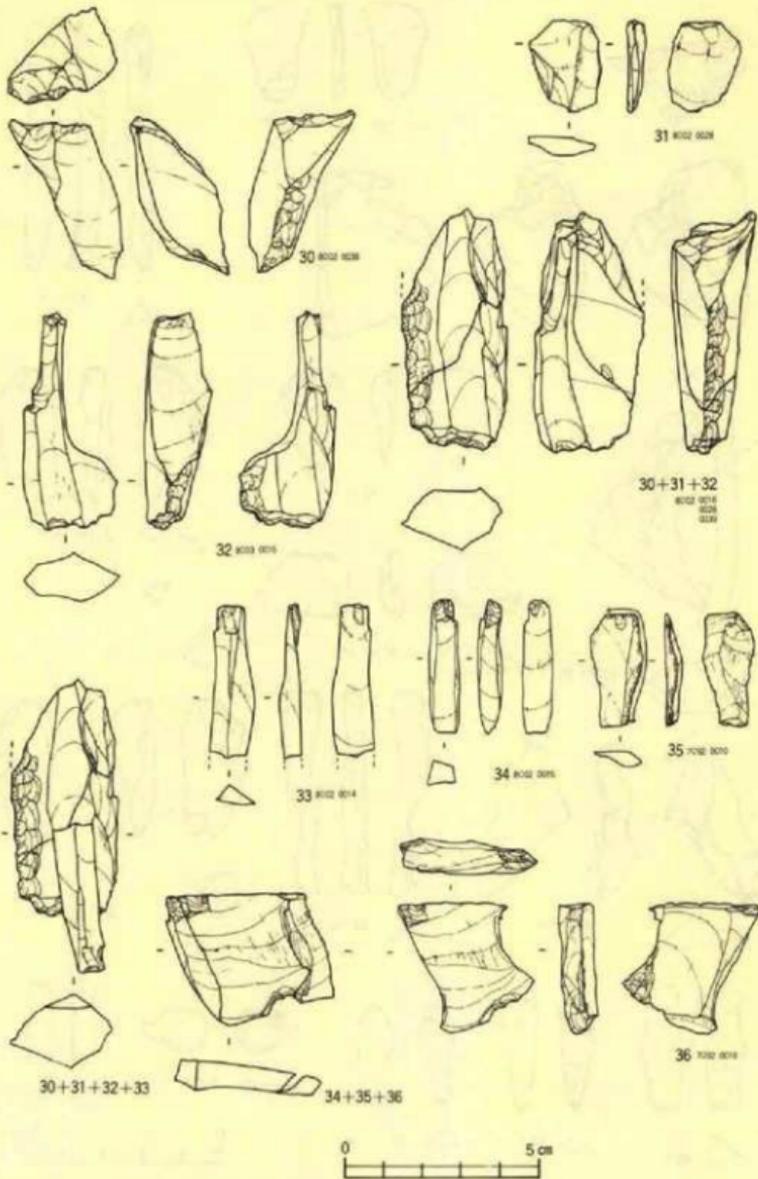
第23図 A地点第6石器群遺物実測図2



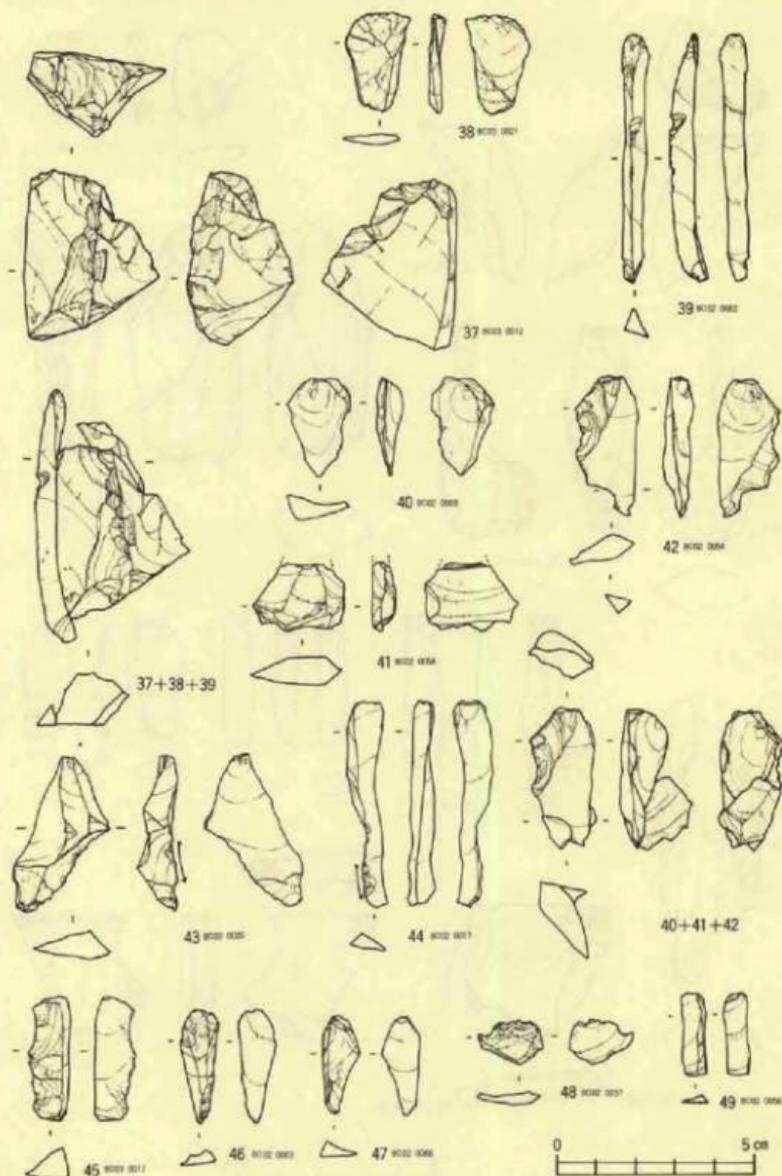
第24図 A地点第6石器群遺物実測図3



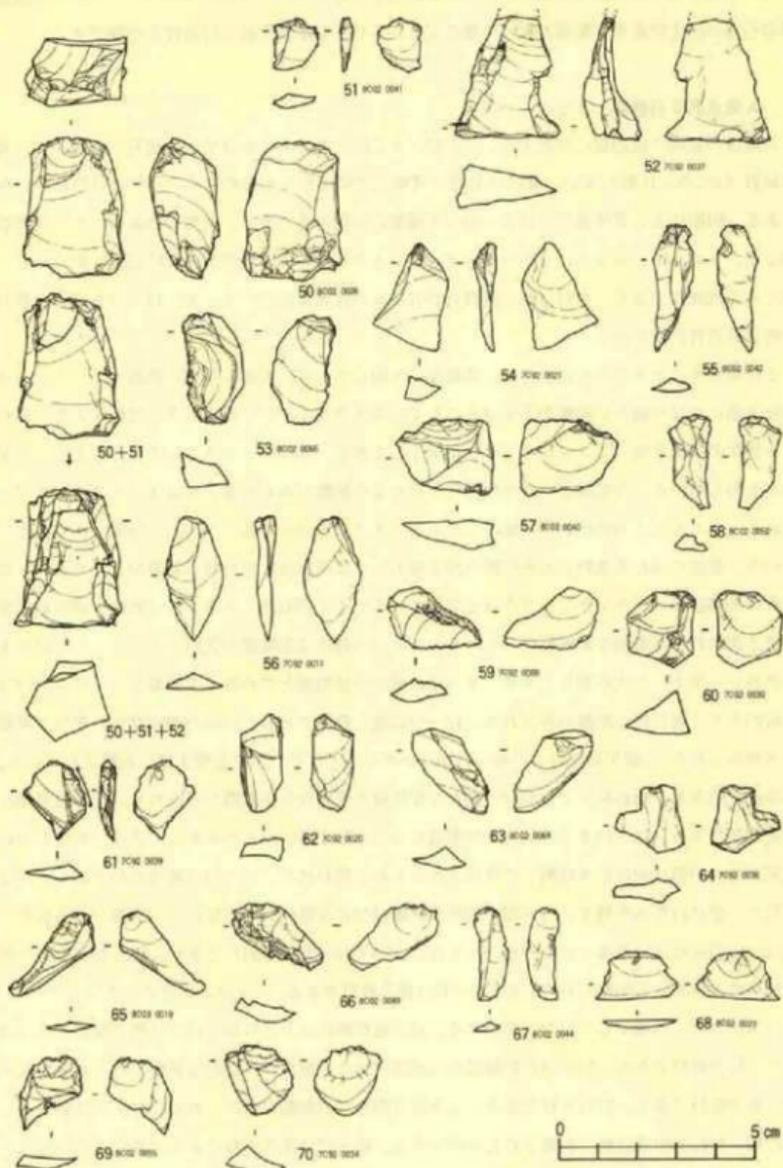
第25図 A地点第6石器群遺物実測図4



第26図 A地点第6石器群遺物実測図5



第27図 A地点第6石器群遺物実測図6



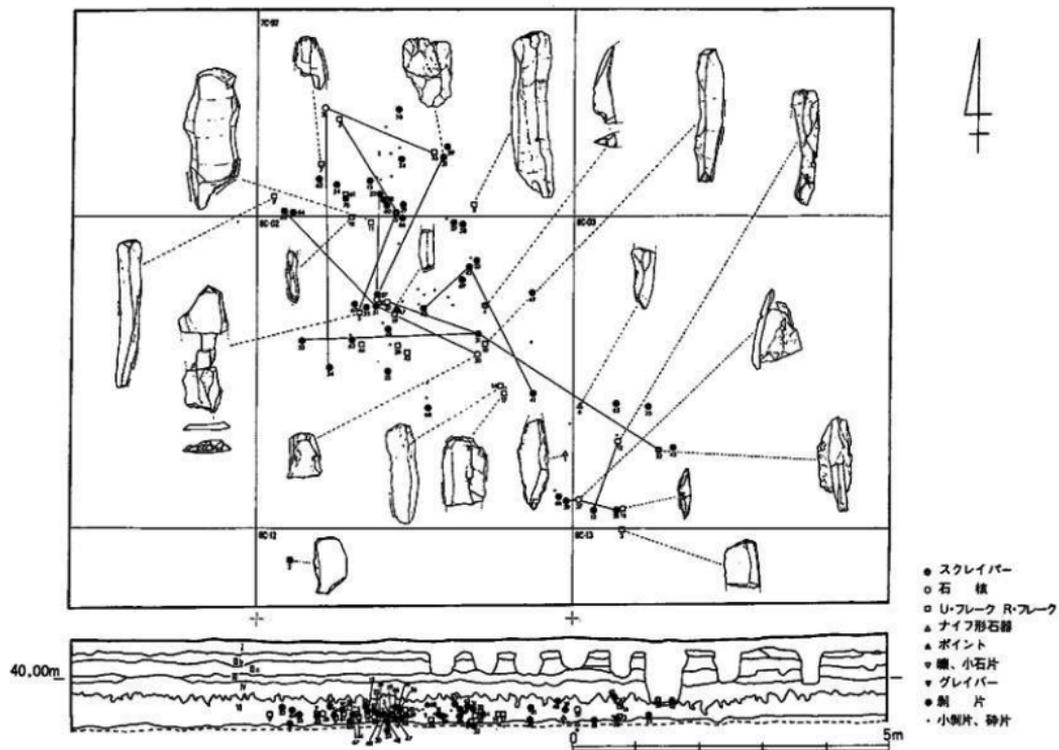
第28図 A地点第6石器群遺物実測図7

この石器群の特徴は非常に細かい砕片が多数出土したことで、残核がないこと、それに尖頭器等の石器の出土にある。彫器と削片の接合などもあり、石器製作跡の可能性が指摘できる。

A地点第6石器群(第22図～29図)

A地点の最南の縁辺部に位置する。7 C 92、8 C 02、8 C 03にかけて広く細長く分布する。遺物総数は102点と比較的多い。層位はⅤ層～Ⅵ層上位にかかるとと思われる。石材は硅質頁岩のみである。肉眼による個体識別では㉔～㉑の4種類に分別可能である。石器の内容は、ナイフ形石器2点、スクレイパー3点、リタッチ・ド・フレイク7点、使用痕のある削片12点、削片38点、砕片その他36点である。石材は26が硅質頁岩㉔、6が硅質頁岩㉑、5・8・11～14が硅質頁岩㉑で他は硅質頁岩㉔である。

1は柳葉形のナイフ形石器である。先端部は欠損しており、刃部も著しく破損している。2は削片下部にかなり細かい剝離加工をほどこしているスクレイパーである。3は比較的大形と思われる削片の頭部を使ってスクレイパー状に加工してある。4はエンドスクレイパーである。右半分が欠損している。左側縁部には使用痕と思われる小剝離がみられる。5はエンドスクレイパーである。もともとは刃器状削片を加工したエンドスクレイパーであったが、三分割されて出土している。頭部にあたる遺物にもその際の加工痕もしくは使用痕と思われる剝離がみられる。6は削片の先端部のみプランティングをほどこしているナイフ形石器である。7は削片の両側縁に使用痕と思われる不規則な剝離痕がみられる。なおこの削片は先端部が欠損している。8～11は本石器群から出土した大形削片である。8～10は細かい使用痕と思われる小剝離がみられる。11は比較的大きく規則的な剝離がみられる。12～13は接合資料である。12は右側縁部に不規則な剝離が多数みられる。左側欠損部はこの残った削片がポジティブなバルブを残す様に剝離されている。14は比較的大形の縦長削片で左側縁に細かな使用痕と思われる小剝離がみられる。15は縦長削片の先端部である。16～19までの削片は使用痕もしくは加工痕のみみられる削片である。17のものは大形削片(刃器状削片)を切断して使用されたものと思われる。20～22は接合資料である。20は石核で一部に自然面を残す。21～22の削片の剝離以前に左横位、下方位からの剝離がみられる。24は20の石核に近い個体であるが接合はしない。23・25～29は小削片である。25・26はその一部に使用痕と思われる剝離がみられる。30～33は接合資料である。30～32の状態ですクレイパー(上半分欠損)として機能していたと思われる。33の縦長削片は下に打面を持つ状態で接合する。34～36は接合資料である。35には右側縁部から頭部にかけて細かい規則的な剝離がみられる。37～39は接合資料である。37は石核である。上下両方向からの剝離が認められる。38・39は削片で、37の残った打面形成以前に剝離されたものである。40～42は接合資料である。削片3点が接合する。43～44は使用痕と思われる剝離がみられる削片である。45は打面調整削片である。46～49は小削片類である。50～52は接合資料である。50は石核である。上下両方向からの剝離が認められる。



第29図 A地点第6石器群遺物分布図

53-70はこの石器群から出土の小剥片類である。61は使用痕がみられる。

この石器群の特徴は、まず第1に大形剥片（刃器状剥片に類するもの）の存在である。そしてその大部分が使用されたと思われる。第2に刃器状の剥片の分割した例（3・5・17など）がみられることである。

石器群全体としてはスクレイパー的石器の器種が多数をしめており、それらの使用の場（第二次的に石器の製作も行なわれた）として考えられる。

A地点第7石器群・第1炭化物集中地点（第31図）

A地点の台地上の南面に位置する。6 B28を中心としてやや粗く広がる。遺物総数は16点と少ない。層位はⅤ層～Ⅵ層上位にかかる。主体はⅤ層で、第6石器群よりやや古い時代の遺物と思われる。石材は安山岩10点、硬質砂岩2点、メノウ4点である。

1は安山岩の剥片である。背面に複数の剝離面および自然面を残す。安山岩のその他の剥片類も背に自然面を残すものが多い（3・4・6・10・11・13～15・17）。7と12は硬質砂岩の剥片である。7の縁辺と先端部には使用痕と思われる小剝離が認められる。2・5・9・16はメノウの剥片、砕片類である。16の小剥片には小剝離が認められる。2・16は自然面を残す。

8のナイフ形石器は泥岩である。Ⅱc層の出土であるが、直接この石器群には属さないと思われる。

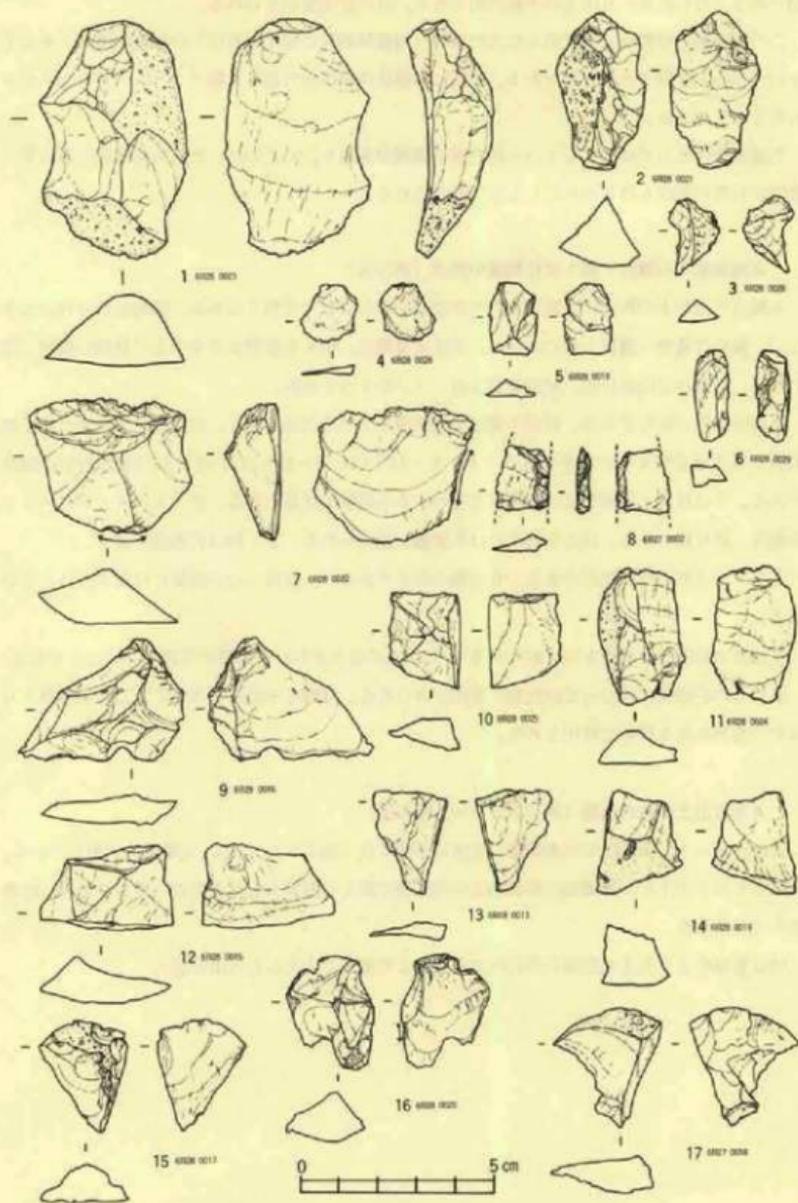
石器群の特徴は自然面を残す剥片が多く、しかも石核と思われる遺物が存在しないことである。

またこの石器群に伴って炭化物の集中がみられる。Ⅴ層を中心に分布していて、石器群よりはやや北側に密な状態で検出された。

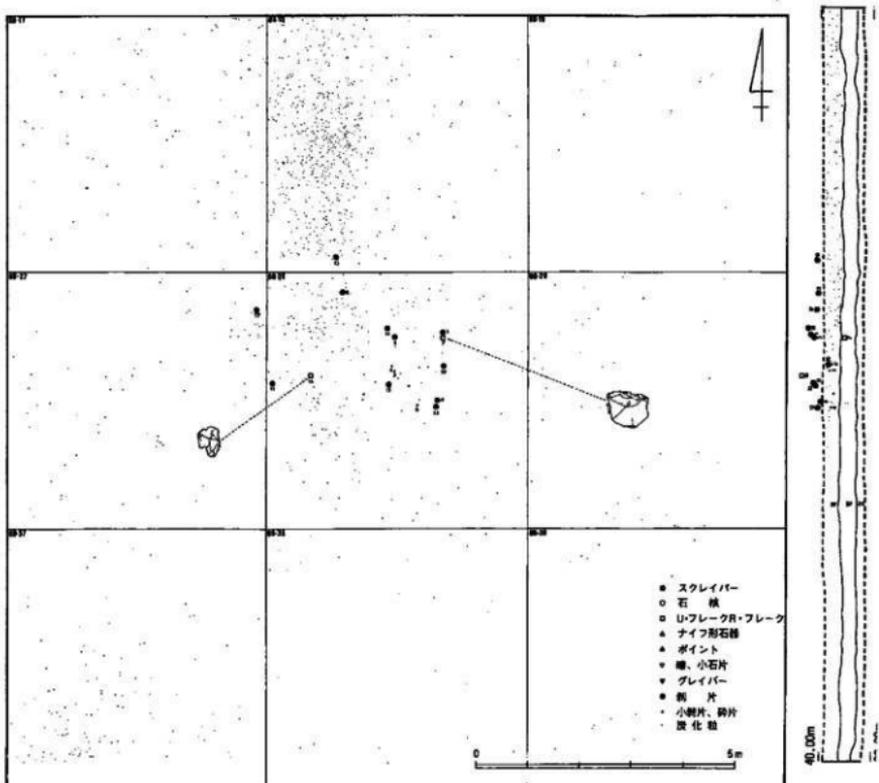
A地点出土の他の石器（第19図97-99、第32図）

97はチャートの両面加工の尖頭器で全体に非常に良く加工されている。先端部は欠損している。98は6 C26で出土した黒曜石の両面加工の尖頭器で第5石器群の石材と似ているもので同じ時期のものであろう。

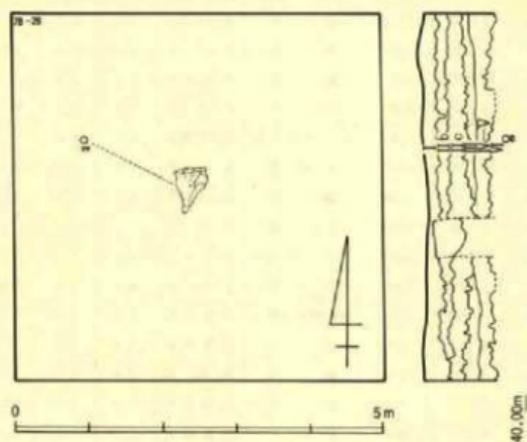
99はⅢ層中より出土の黒曜石の石核で7 B28より単独で出土した（第32図）。



第30図 A地点第7石器群遺物実測図



第31図 A地点第7石器群遺物及び炭化物分布図



第32図 A地点ブロック外出土の石器

第3章 A地点の調査

第1表 A地点先石器時代石器計測表 (1)

| 石器群名 | 検出番号 | 出土地点 | 遺物番号 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|-------|-------|-------|--------------|---------|-------|--------|-------|--------|------------|
| 第1石器群 | 11-1 | 3 D00 | 0203 | 加工痕ある剥片 | チャート | 3.0 | 2.8 | 0.9 | 接合一部欠損 |
| | 2 | 3 D00 | 0207 0206 | 剥片 | チャート | 4.3 | 2.15 | 0.8 | |
| | 3 | 3 D00 | 0204 | 砕片 | チャート | 1.9 | 1.3 | 0.2 | |
| | 4 | 2 C99 | 0020 | 剥片 | チャート | 2.15 | 2.0 | 0.5 | |
| | 5 | 3 D00 | 0091 | 剥片 | チャート | 2.2 | 1.8 | 0.4 | |
| | 6 | 3 D00 | 0001 | 砕片 | チャート | 1.7 | 1.3 | 0.7 | |
| 第2石器群 | 7 | 5 C08 | 0010 | ナイフ形石器 | 硅質粘板岩 | 4.6 | 1.6 | 0.6 | 片面加工 接合 |
| | 8 | 5 C07 | 0007 | 尖頭器 | 安山岩 | 4.1 | 1.65 | 0.8 | |
| | 9a | 5 D10 | 0008 | 剥片 | 安山岩 | 4.4 | 4.65 | 1.75 | |
| | 9b | 5 C09 | 0008 | 石核 | 安山岩 | | | | |
| | 10 | 5 C08 | 0003 | スクレイパー | チャート | 6.2 | 3.0 | 1.45 | |
| | 11 | 5 C19 | 0009 | 剥片 | 安山岩 | 4.0 | 2.6 | 0.9 | |
| 第3石器群 | 13-1 | 6 C10 | 0026 | 使用痕ある剥片 | 硅質頁岩 | 7.65 | 3.35 | 1.05 | 一部欠損 接合 |
| | 2 | 6 C2I | 0025 | 剥片 | 硅質頁岩 | 3.4 | 2.2 | 0.7 | |
| | 3 | 6 C2I | 0024 | 剥片 | 黒曜石 | 2.45 | 1.05 | 0.35 | |
| | 4 | 6 C11 | 0040 | 砕片 | 硅質頁岩 | 0.9 | 1.35 | 0.15 | |
| | 5 | 6 C11 | 0030 | 剥片 | 硅質頁岩 | 1.05 | 1.8 | 0.4 | |
| | 6 | 6 C11 | 0093 | 砕片 | 硅質頁岩 | 1.55 | 0.65 | 0.15 | |
| | 7 | 6 C11 | 0057 | 砕片 | 硅質頁岩 | 0.9 | 0.8 | 0.1 | |
| | 8 | 6 C11 | 0018 | 砕片 | 硅質頁岩 | 0.95 | 0.5 | 0.15 | |
| | 9 | 6 C11 | 0089 | 砕片 | 硅質頁岩 | 0.9 | 1.25 | 0.1 | |
| | 10 | 6 C11 | 0037 | 剥片 | 硅質頁岩 | 2.55 | 2.9 | 0.55 | |
| | 11 | 6 C11 | 0050 | 剥片 | 硅質頁岩 | 2.25 | 2.15 | 0.35 | |
| 第4石器群 | 12 | 7 B59 | 0005 | 削器 | 硬質砂岩 | 5.5 | 3.45 | 1.7 | 接合 |
| | 13 | 7 B69 | 0014 | スクレイパー | 安山岩 | 3.1 | 3.9 | 1.2 | |
| | 14 | 7 B79 | 0003 | スクレイパー | 黒曜石 | 2.9 | 2.1 | 0.9 | |
| | 15 | 7 C60 | 0003 | 剥片 | チャート | 2.6 | 1.9 | 0.45 | |
| | 14-16 | 7 C70 | 0004 | 削器 | 硅質頁岩 | 4.5 | 3.95 | 2.2 | |
| | 17 | 7 B79 | 0004 | 剥片 | チャート | 3.3 | 2.45 | 0.7 | |
| | 18 | 7 B69 | 0015 | 剥片 | 玄武岩 | 2.15 | 2.2 | 0.2 | |
| | 19 | 7 B69 | 0018 | 使用痕ある剥片 | チャート | 2.25 | 2.15 | 0.9 | |
| | 20 | 7 C70 | 0003 | 剥片 | チャート | 2.15 | 2.2 | 0.2 | |
| | 21 | 7 B69 | 0013 | 剥片 | 安山岩 | 2.9 | 2.5 | 0.7 | |
| | 22 | 7 C50 | 0006 | 剥片 | 安山岩 | 2.1 | 2.8 | 0.7 | |
| | 23 | 7 C60 | 0004 | 石核 | 安山岩 | 4.3 | 7.65 | 2.2 | |
| | 24 | 7 C50 | 0005 | 剥片 | 安山岩 | 3.8 | 3.1 | 0.55 | |
| | 第5石器群 | 17-1 | 6 C24 | 0092 | 形器 | 黒曜石 | 2.75 | 1.3 | |
| 2 | | 6 C24 | 0065 | 形器 | 硅質頁岩⑤ | 2.7 | 1.35 | 0.7 | 東内野型 |
| 3 | | 6 C14 | 0046 | 尖頭器 | 硅質頁岩⑤ | 1.6 | 1.3 | 0.55 | 先端部なし |
| 4 | | 6 C14 | 0035 | 尖頭器 | 黒曜石 | 2.15 | 0.75 | 不能 | 一部欠損 |

第1表 A地点先土器時代石器計測表(2)

| 石器群名 | 検出番号 | 出土地点 | 遺物番号 | 種別 | 石 材 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 備 考 |
|-------|--------------|--------------|--------------|--------|-------------|-------------|--------------|--------|-------|
| 第5石器群 | 17-5 | 6C24 | 0092 0170 | 彫 器 | 黒 曜 石 | 2.8 | 1.5 | 0.7 | 1と接合 |
| | 6 | 6C24 | 0003 | 尖 頭 器 | 硅質頁岩㊟ | 2.95 | 1.6 | 0.65 | |
| | 7 | 6C24 | 0050 | スクレイパー | 硅質頁岩㊟ | 2.3 | 2.35 | 0.35 | 欠損品 |
| | 8 | 6C23 | 0026 | 尖 頭 器 | 黒 曜 石 | 0.9 | 0.9 | 0.4 | 先端部のみ |
| | 9 | 6C13 | 0037 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 2.0 | 1.7 | 0.6 | |
| | 10 | 6C24 | 0106 | ナイフ形石器 | 硅質頁岩㊟ | 3.3 | 1.35 | 0.4 | |
| | 11 | 6C24 | 0128 | ナイフ形石器 | 硅質頁岩㊟ | 1.95 | 1.15 | 0.3 | 半欠 |
| | 12 | 6C14 | 0020 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.8 | 1.5 | 0.2 | |
| | 13 | 6C24 | 0011 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 3.2 | 2.5 | 0.2 | |
| | 14 | 6C14 | 0053 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 2.7 | 1.75 | 0.2 | |
| | 15 | 6C24 | 0089 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.5 | 1.1 | 0.1 | |
| | 16 | 6C24 | 0013 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.6 | 1.4 | 0.08 | |
| | 17 | 6C24 | 0051 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.75 | 1.2 | 0.1 | |
| | 18 | 6C24 | 0238 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 2.1 | 1.1 | 3.5 | |
| | 19 | 6C23 | 0015 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.55 | 2.9 | 0.2 | |
| | 20 | 6C24 | 0063 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 2.0 | 1.65 | 0.2 | |
| | 21 | 6C14 | 0028 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.2 | 1.2 | 0.1 | |
| | 22 | 6C24 | 0252 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.9 | 1.0 | 0.15 | |
| | 23 | 6C24 | 0206 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.2 | 2.1 | 0.15 | |
| | 24 | 6C24 | 0091 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.65 | 1.8 | 0.2 | |
| | 25 | 6C13 | 0038 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 2.2 | 1.25 | 0.2 | |
| | 26 | 6C24 | 0008 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 0.9 | 1.45 | 0.2 | |
| | 27 | 6C14 | 0054 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.65 | 1.0 | 0.1 | |
| | 28 | 6C24 | 0229 | 剥 片 | 黒 曜 石 | 1.3 | 1.1 | 0.1 | |
| | 18-29 | 6C24 | 0105 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 2.0 | 1.85 | 0.3 | |
| | 30 | 6C24 | 0016 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.75 | 1.75 | 0.35 | |
| | 31 | 6C24 | 0045 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.8 | 1.9 | 0.25 | |
| | 32 | 6C24 | 0104 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.65 | 1.55 | 0.35 | |
| 33 | 6C24 | 0217 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.55 | 2.25 | 0.2 | | |
| 34 | 6C24 | 0037 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.5 | 1.85 | 0.3 | | |
| 35 | 6C14 6C24 | 0030 0030 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 3.4 1.45 | 2.35 2.0 | 0.25 0.25 | | |
| 36 | 6C24 | 0143 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.1 | 1.9 | 0.4 | | |
| 37 | 6C14 | 0033 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.7 | 1.4 | 0.3 | | |
| 38 | 6C14 | 0015 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.7 | 1.7 | 0.15 | | |
| 39 | 6C14 | 0059 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.85 | 1.65 | 0.2 | | |
| 40 | 6C24 | 0043 | 使用痕ある剥片 | 硅質頁岩㊟ | 2.4 | 1.3 | 0.6 | | |
| 41 | 6C24 | 0195 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.4 | 1.0 | 0.15 | | |
| 42 | 6C24 | 0196 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.3 | 1.8 | 0.6 | | |
| 43 | 6C24 | 0052 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.45 | 1.6 | 0.3 | | |
| 44 | 6C24 | 0123 | 剥 片 | 硅質頁岩㊟ | 1.5 | 1.65 | 0.45 | | |

第1表 A地点先土器時代石器計測表(3)

| 石器群名 | 検出番号 | 出土地点 | 遺物番号 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|-------|--------|--------|------|-------|-------|--------|-------|--------|----|
| 第5石器群 | 18-45 | 6 C 24 | 0062 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.35 | 1.95 | 0.3 | |
| | 46 | 6 C 24 | 0066 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.5 | 1.95 | 0.6 | |
| | 47 | 6 C 14 | 0013 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.7 | 1.1 | 0.15 | |
| | 48 | 6 C 13 | 0029 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 0.9 | 2.0 | 0.6 | |
| | 49 | 6 C 24 | 0154 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.0 | 1.6 | 0.3 | |
| | 50 | 6 C 24 | 0026 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.5 | 1.7 | 0.15 | |
| | 51 | 6 C 24 | 0195 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.5 | 1.3 | 0.3 | |
| | 52 | 6 C 24 | 0282 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.45 | 1.1 | 0.25 | |
| | 53 | 6 C 24 | 0156 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 2.1 | 0.7 | 0.15 | |
| | 54 | 6 C 24 | 0078 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.7 | 1.2 | 0.2 | |
| | 55 | 6 C 24 | 0228 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.1 | 1.55 | 0.2 | |
| | 56 | 6 C 14 | 0018 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.1 | 1.4 | 0.15 | |
| | 57 | 6 C 14 | 0014 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.1 | 1.5 | 0.2 | |
| | 58 | 6 C 24 | 0101 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.15 | 1.5 | 0.2 | |
| | 59 | 6 C 24 | 0021 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.6 | 0.9 | 0.15 | |
| | 60 | 6 C 14 | 0016 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.1 | 1.6 | 0.2 | |
| | 61 | 6 C 24 | 0086 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.6 | 1.3 | 0.15 | |
| | 62 | 6 C 24 | 0236 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.2 | 1.5 | 0.15 | |
| | 63 | 6 C 24 | 0051 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.05 | 1.35 | 0.35 | |
| | 64 | 6 C 24 | 0168 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 1.4 | 0.9 | 0.1 | |
| | 65 | 6 C 14 | 0006 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 1.1 | 1.5 | 0.2 | |
| | 66 | 6 C 24 | 0259 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 1.15 | 1.0 | 0.15 | |
| | 67 | 6 C 24 | 0297 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 1.0 | 1.4 | 0.15 | |
| | 68 | 6 C 24 | 0293 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 0.9 | 0.25 | 0.1 | |
| | 69 | 6 C 24 | 0293 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 0.9 | 1.1 | 0.2 | |
| | 70 | 6 C 24 | 0164 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 0.75 | 1.0 | 0.1 | |
| | 71 | 6 C 24 | 0266 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 0.9 | 0.8 | 0.1 | |
| | 72 | 6 C 24 | 0062 | 割片 | 流紋岩 | 1.8 | 1.2 | 0.3 | |
| | 19-73 | 6 C 24 | 0227 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 2.2 | 1.8 | 0.25 | |
| | 74 | 6 C 24 | 0082 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.65 | 2.1 | 0.45 | |
| | 75 | 6 C 24 | 0035 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.5 | 1.5 | 0.25 | |
| | 76 | 6 C 24 | 0243 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.75 | 1.4 | 0.2 | |
| | 77 | 6 C 24 | 0090 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.25 | 1.75 | 0.2 | |
| | 78 | 6 C 24 | 0044 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.2 | 1.7 | 0.15 | |
| 79 | 6 C 24 | 0292 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 1.4 | 1.0 | 0.25 | | |
| 80 | 6 C 24 | 0214 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 0.9 | 0.9 | 0.1 | | |
| 81 | 6 C 24 | 0294 | 割片 | 珪質頁岩㊶ | 0.95 | 0.8 | 0.15 | | |
| 82 | 6 C 14 | 0030 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 3.2 | 2.4 | 0.2 | | |
| 83 | 6 C 24 | 0134 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 2.0 | 1.7 | 0.15 | | |
| 84 | 6 C 24 | 0178 | 砕片 | 珪質頁岩㊶ | 1.9 | 1.5 | 0.1 | | |

第1表 A地点先土器時代石器計測表 (4)

| 石器群名 | 採回番号 | 出土地点 | 遺物番号 | 種別 | 石 材 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 備 考 |
|-------|-------|--------------|------|--------------------|-------|-------|------|------|------------|
| 第5石器群 | 19-85 | 6C24 | 0018 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.4 | 1.25 | 0.1 | |
| | 86 | 6C24 | 0237 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.05 | 1.3 | 0.1 | |
| | 87 | 6C24 | 0015 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.0 | 1.3 | 0.15 | |
| | 88 | 6C24 | 0190 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.15 | 0.75 | 0.4 | |
| | 89 | 6C14 | 0047 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.5 | 0.9 | 0.1 | |
| | 90 | 6C24 | 0059 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 2.2 | 0.7 | 0.4 | |
| | 91 | 6C14 | 0035 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 2.0 | 0.8 | 0.2 | |
| | 92 | 6C24 | 0115 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.2 | 1.0 | 0.1 | |
| | 93 | 6C24 | 0288 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.2 | 0.6 | 0.1 | |
| | 94 | 6C24 | 0137 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 0.8 | 1.3 | 0.1 | |
| | 95 | 6C14 | 0043 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 1.0 | 0.45 | 0.1 | |
| | 96 | 6C24 | 0048 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 0.9 | 1.1 | 0.15 | |
| | 97 | 3C97 | 0005 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 5.1 | 2.1 | 1.0 | |
| 98 | 6C26 | 不明 | 尖頭器 | 黒曜石 | 2.8 | 1.65 | 0.6 | 一部欠損 | |
| 99 | 7B28 | 0002 | 砕片 | 粘質頁岩㊟ | 3.3 | 2.3 | 1.25 | | |
| 第6石器群 | 22-1 | 8C02 | 0090 | ナイフ形石器 | 粘質頁岩㊟ | 7.2 | 2.4 | 1.0 | 一部欠損 |
| | 2 | 8C12 | 0005 | スクレイパー | 粘質頁岩㊟ | 4.5 | 2.6 | 1.05 | 先端部欠損 |
| | 3 | 8C13 | 0012 | 加工痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.8 | 2.7 | 1.2 | 半分欠損 |
| | 4 | 8C02 | 0029 | スクレイパー | 粘質頁岩㊟ | 6.1 | 1.7 | 1.2 | 欠損 |
| | 5 | 7C92 8C02 | 0043 | スクレイパー | 粘質頁岩㊟ | 10.3 | 3.75 | 1.0 | 接合(3点) |
| | 6 | 8C03 | 0020 | ナイフ形石器 | 粘質頁岩㊟ | 4.8 | 2.05 | 0.65 | 欠損 |
| | 7 | 7C92 | 0019 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 4.15 | 2.5 | 1.2 | 半分欠損 |
| | 23-8 | 7C92 | 0033 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 13.1 | 3.35 | 1.1 | |
| | 9 | 7C92 | 0038 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 11.9 | 1.9 | 1.5 | |
| | 10 | 8C02 | 0027 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 10.5 | 2.3 | 1.3 | |
| | 11 | 8C02 | 0047 | 加工痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 11.15 | 4.25 | 0.95 | |
| | 24-12 | 8C03 | 0015 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 8.8 | 2.1 | 1.0 | } 接合 |
| | 13 | 8C03 | 0013 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 1.9 | 1.1 | 0.5 | |
| | 14 | 8C02 | 0025 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 7.95 | 2.3 | 0.6 | |
| | 15 | 7C92 | 0023 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.3 | 2.0 | 0.8 | |
| | 16 | 8C03 | 0014 | 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 4.0 | 0.95 | 1.0 | |
| | 17 | 8C02 | 0024 | 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 5.5 | 3.4 | 1.05 | |
| | 18 | 8C02 | 0046 | 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 4.1 | 0.9 | 0.5 | |
| | 19 | 8C02 | 0036 | 加工痕ある剥片 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.2 | 1.2 | 0.5 | |
| | 25-20 | 8C02 | 0071 | 石 核 | 粘質頁岩㊟ | 4.8 | 4.3 | 1.9 | } と22接合 |
| | 21 | 7C92 | 0009 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 1.75 | 1.7 | 0.4 | |
| | 22 | 7C92 | 0028 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.2 | 2.85 | 0.95 | } 20,21と接合 |
| | 23 | 8C02 | 0065 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.6 | 0.7 | 0.4 | |
| | 24 | 7C92 | 0014 | 剥片 | 粘質頁岩㊟ | 4.6 | 1.8 | 0.7 | |
| | 25 | 8C03 | 0018 | 使用痕ある剥片 | 粘質頁岩㊟ | 3.0 | 1.2 | 0.4 | |

第1表 A地点先土器時代石器計測表(5)

| 石器群名 | 採区番号 | 出土地点 | 遺物番号 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 | |
|-------|-------|------|------|---------|-------|--------|-------|--------|----|----|
| 第6石器群 | 25-26 | 8C02 | 0019 | 使用痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.6 | 1.3 | 0.55 | 欠損 | |
| | 27 | 8C02 | 0051 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.9 | 1.6 | 0.55 | | |
| | 28 | 7C92 | 0029 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.05 | 1.65 | 0.5 | | |
| | 29 | 7C92 | 0032 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 1.95 | 1.45 | 0.35 | 接合 | |
| | 26-30 | 8C02 | 0039 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 4.2 | 2.75 | 2.2 | | |
| | 31 | 8C02 | 0028 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.4 | 1.75 | 0.5 | | |
| | 32 | 8C03 | 0016 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 5.5 | 2.4 | 1.25 | | |
| | 33 | 8C02 | 0014 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.9 | 1.0 | 0.5 | | |
| | 34 | 8C02 | 0015 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.4 | 0.7 | 0.7 | | |
| | 35 | 7C92 | 0010 | 加工痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.85 | 1.3 | 0.45 | 接合 | |
| | 36 | 7C92 | 0018 | 石核 | 硅質頁岩⑤ | 3.35 | 3.4 | 0.9 | | |
| | 27-37 | 8C03 | 0012 | 石核 | 硅質頁岩⑤ | 4.4 | 3.5 | 2.1 | 接合 | |
| | 38 | 8C03 | 0021 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.5 | 1.5 | 0.3 | | |
| | 39 | 8C02 | 0062 | 使用痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 6.45 | 0.65 | 0.6 | | |
| | 40 | 8C02 | 0069 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.5 | 1.6 | 0.7 | 接合 | |
| | 41 | 8C02 | 0058 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 1.75 | 2.35 | 0.75 | | |
| | 42 | 8C02 | 0054 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.55 | 1.65 | 0.7 | | |
| | 27-43 | 8C02 | 0020 | 使用痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.9 | 2.5 | 0.7 | 接合 | |
| | 44 | 8C02 | 0017 | 加工痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 5.25 | 1.0 | 0.4 | | |
| | 45 | 8C03 | 0017 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.2 | 1.05 | 0.8 | | |
| | 46 | 8C02 | 0063 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.95 | 1.0 | 0.3 | | |
| | 47 | 8C02 | 0068 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.5 | 0.95 | 0.4 | | |
| | 48 | 8C02 | 0037 | 砕片 | 硅質頁岩⑤ | 1.1 | 1.7 | 0.3 | | |
| | 49 | 8C02 | 0056 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.15 | 0.6 | 0.2 | | |
| | 28-50 | 8C02 | 0026 | 石核 | 硅質頁岩⑤ | 3.6 | 2.6 | 1.8 | | 接合 |
| | 51 | 8C02 | 0041 | 砕片 | 硅質頁岩⑤ | 1.35 | 1.1 | 0.4 | | |
| | 52 | 7C92 | 0037 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.15 | 2.8 | 1.1 | | |
| | 53 | 8C02 | 0066 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.9 | 1.65 | 0.95 | | |
| | 54 | 7C92 | 0021 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.25 | 1.85 | 0.6 | | |
| | 55 | 8C02 | 0042 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.2 | 1.0 | 0.35 | | |
| | 56 | 7C92 | 0011 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 3.15 | 1.4 | 0.45 | | |
| | 57 | 8C02 | 0040 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 1.95 | 2.55 | 0.8 | | |
| | 58 | 8C02 | 0052 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.4 | 1.1 | 0.4 | | |
| | 59 | 7C92 | 0008 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 1.6 | 2.45 | 0.6 | | |
| | 60 | 7C92 | 0030 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 1.95 | 1.7 | 1.15 | | |
| | 61 | 7C92 | 0039 | 加工痕ある剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.0 | 1.65 | 0.35 | | |
| | 62 | 7C92 | 0020 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.5 | 1.1 | 0.6 | | |
| | 63 | 8C02 | 0064 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.15 | 1.95 | 0.6 | | |
| | 64 | 7C92 | 0036 | 砕片 | 硅質頁岩⑤ | 1.8 | 1.8 | 0.6 | | |
| | 65 | 8C03 | 0019 | 剥片 | 硅質頁岩⑤ | 2.1 | 2.25 | 0.3 | | |

第1表 A地点先土器時代石器計測表(6)

| 石器群名 | 検出番号 | 出土番号 | 遺物番号 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 | |
|-------|-------|--------|--------|------|--------|--------|------------|-------------|-------------|--|
| 第6石器群 | 28-66 | 8 C 02 | 0049 | 割片 | 硬質頁岩㊦ | 1.7 | 2.3 | 0.4 | | |
| | | 67 | 8 C 02 | 0044 | 割片 | 硬質頁岩㊦ | 2.4 1.7 | 0.85 2.3 | 0.2 0.55 | |
| | | 68 | 8 C 02 | 0023 | 割片 | 硬質頁岩㊦ | 1.2 | 2.15 | 0.2 | |
| | | 69 | 8 C 02 | 0055 | 割片 | 硬質頁岩㊦ | 1.9 | 1.6 | 0.3 | |
| | | 70 | 7 C 92 | 0034 | 割片 | 硬質頁岩㊦ | 1.7 | 1.7 | 0.65 | |
| 第7石器群 | 30-1 | 6 B 28 | 0023 | 割片 | 安山岩㊦ | 5.15 | 3.7 | 1.8 | | |
| | | 2 | 6 B 28 | 0021 | 割片 | メノウ | 4.1 | 2.3 | 1.8 | |
| | | 3 | 6 B 28 | 0028 | 割片 | 安山岩 | 2.0 | 1.2 | 0.5 | |
| | | 4 | 6 B 28 | 0026 | 割片 | 安山岩 | 1.45 | 1.4 | 0.2 | |
| | | 5 | 6 B 28 | 0018 | 砂片 | メノウ | 1.8 | 1.2 | 0.4 | |
| | | 6 | 6 B 28 | 0029 | 砂片 | 安山岩 | 2.35 | 0.9 | 0.5 | |
| | | 7 | 6 B 28 | 0022 | 割片 | 硬質砂岩 | 3.45 | 4.0 | 1.4 | |
| | | 8 | 6 B 27 | 0002 | ナイフ形石器 | 泥岩 | 1.65 | 1.4 | 0.4 | |
| | | 9 | 6 B 28 | 0016 | 割片 | メノウ | 3.1 | 4.2 | 0.8 | |
| | | 10 | 6 B 28 | 0025 | 割片 | 安山岩㊦ | 2.35 | 1.85 | 0.8 | |
| | | 11 | 6 B 28 | 0024 | 割片 | 安山岩㊦ | 3.5 | 2.25 | 0.85 | |
| | | 12 | 6 B 28 | 0015 | 割片 | 硬質砂岩 | 2.15 | 3.35 | 1.15 | |
| | | 13 | 6 B 18 | 0013 | 割片 | 安山岩㊦ | 2.6 | 2.0 | 0.4 | |
| | | 14 | 6 B 28 | 0019 | 割片 | 安山岩㊦ | 2.7 | 2.2 | 1.5 | |
| | | 15 | 6 B 28 | 0017 | 割片 | 安山岩㊦ | 2.9 | 2.2 | 0.95 | |
| | | 16 | 6 B 28 | 0020 | 割片 | メノウ | 2.95 | 2.2 | 1.25 | |
| | | 17 | 6 B 27 | 0018 | 割片 | 安山岩㊦ | 3.0 | 2.3 | 1.0 | |
| | | 18 | 6 B 28 | 0018 | 割片 | 安山岩㊦ | 1.8 | 1.3 | 1.45 | |
| ブロック外 | 32-99 | 7 B 28 | 0002 | 石核 | 黒曜石 | 3.3 | 2.25 | 1.2 | | |

第2節 縄文時代の遺構

A地点から検出された遺構は炉穴11基、陥し穴16基、土坑11基でいずれも新期テフラ層下より発見されたところから、縄文時代に属するものと思われる。(第3図)

1. 炉 穴

ここで炉穴としたものの中には、焼土のみが覆土中に入るものや焼土が底面から完全に浮きあがったもの等を含んでいるが、説明の便宜上炉穴とした。

1号炉穴(2Cイ003 第33図、図版4)

2C99グリッドにあって、長さ1.52m、最大幅1.04mを測る楕円形を呈する。東南隅の一段高い部分に炉部が設けられているが、火床部はほとんど焼けていない。深さ0.34m。

覆土

1. 暗褐色土 焼土粒を少量含み、炭化粒を微量含む。
2. 焼 土
3. 黄褐色土 焼土粒を少量含み、炭化粒を微量含む。

2号炉穴(2Dイ004 第33図、図版4)

2D81グリッドにあって、1.42m×1.24mの不整形をなし、断面は深さ0.35mのすり鉢状を呈する。焼土が浮いた状態で検出され、底面との間に焼土をまったく含まない層がある。

覆土

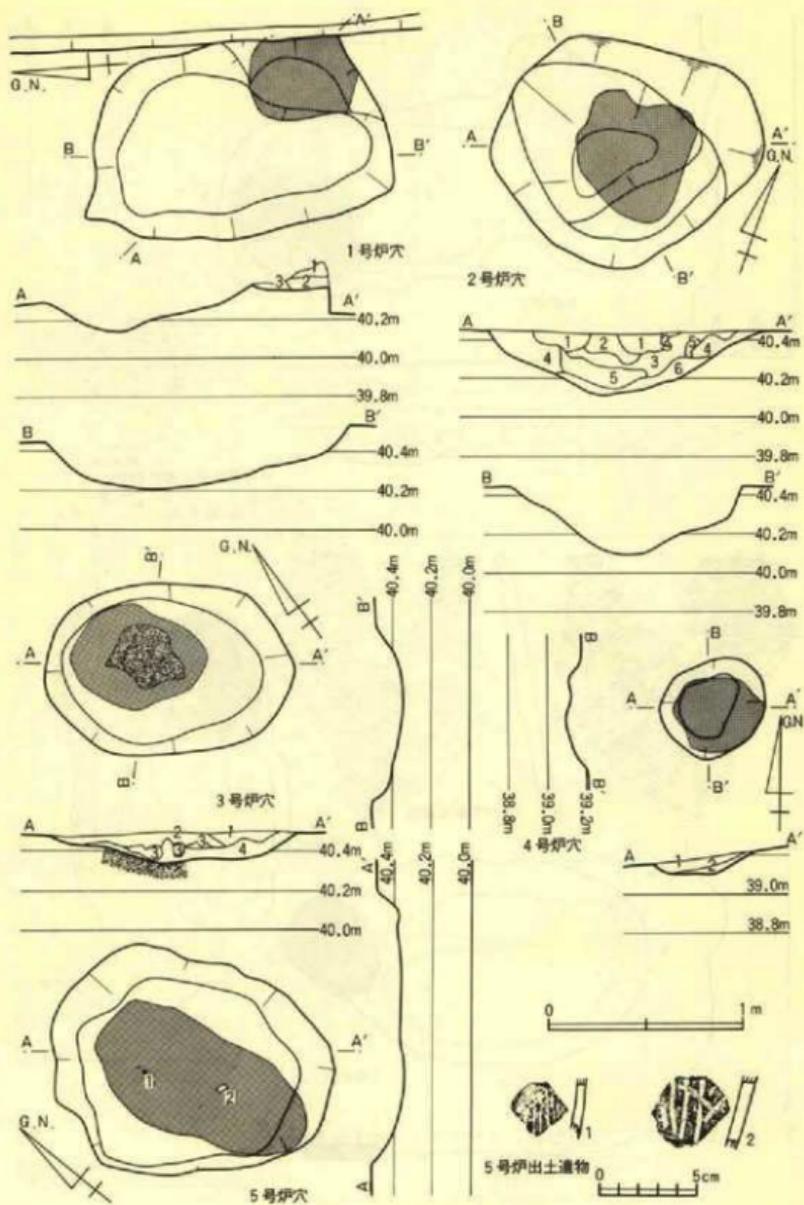
1. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を微量含む。
2. 焼 土
3. 褐色土 焼土粒、炭化粒、ローム粒を微量含む。
4. 暗黄褐色土
5. 暗黒褐色土
6. 黄褐色土

3号炉穴(2Dイ001 第33図、図版4)

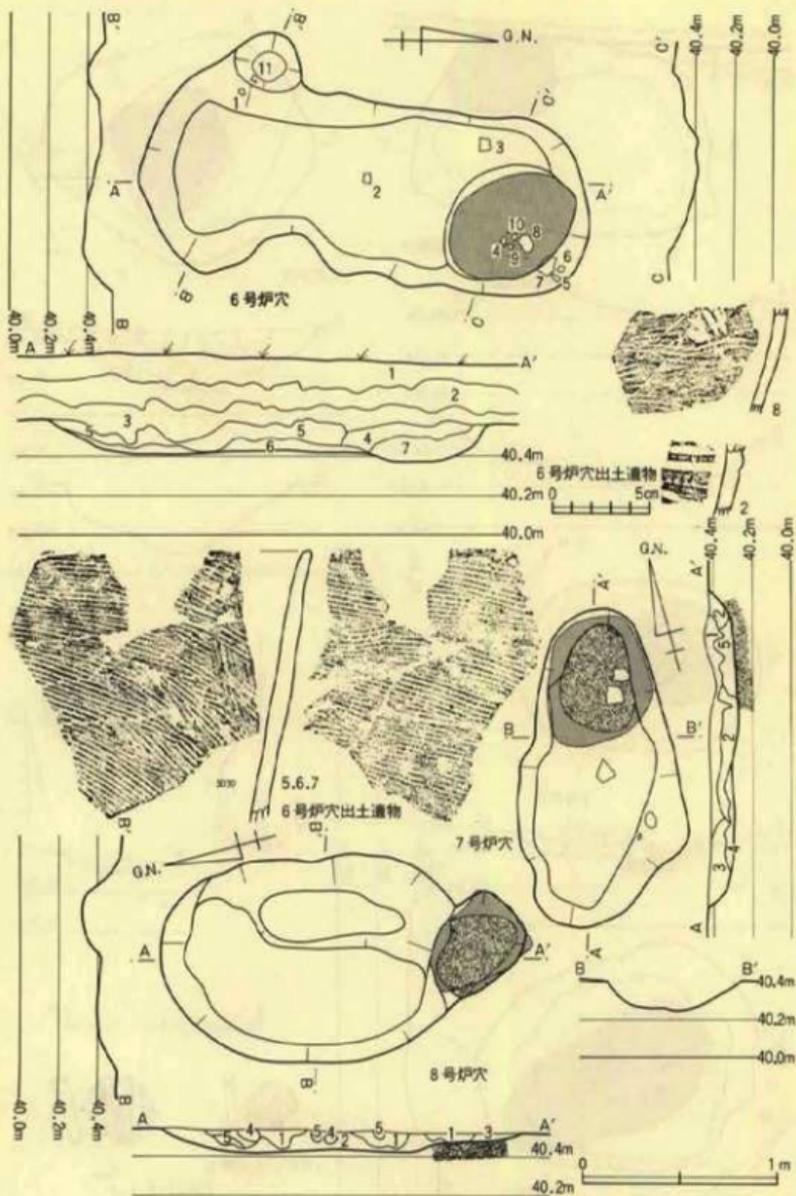
2D91グリッドにあって、長さ1.29m、幅0.88mの楕円形を呈する。焼土は底面からわずかに浮いた状態で認められ、底面のほぼ中央が焼けていた。

覆土

1. 暗褐色土
2. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を含む。
3. 焼 土
4. 黄褐色土 焼土粒、炭化粒を微量含む。



第33図 A地点炉穴実測図1 (1/30)



第34図 A地点炉穴実測図2 (1/30)

4号炉穴(3Cイ002 第33図、)

3C07グリッドの斜面より検出された。0.54m×0.54mのほぼ円形で、深さ0.10mを測る小形の炉穴である。壁から底面全体がよく焼けていた。

覆土

1. 黒褐色土 炭化粒を少量含む。
2. 焼土

5号炉穴(3Dイ005 第33図、図版4)

3D03、04グリッドにあって、長さ1.47m最大幅1.15m、深さ0.18mを測る。楕円形のプランを有し、断面は皿状を呈する。Ⅱc層中に焼土があり、焼土と墳底との間に黒褐色土が介在する。焼土中より野島式の小破片が2点出土している。

6号炉穴(3Dイ002 第34図、図版4)

3C39、3D30グリッドにあって、長さ2.35m、幅0.94mの長楕円形を呈する早期後半の典型的な炉穴である。炉部は足場より一段深く掘りこまれ、厚さ0.13mの焼土が堆積していた。また、炉部の底面は非常によく焼けており、その範囲は焼土の分布範囲とほぼ一致する。足場には浅い小ピットが付属する。長軸の方向はN8°Eである。焼土上から表裏条痕の大形口縁部破片、鶴ヶ島台式の体部破片がまとめて出土している。

覆土

1. 表土
2. 標準土層Ⅱb層
3. + Ⅱc層
4. 暗黄褐色土 焼土粒、炭化粒を微量含む。堆積にしまりがある。
5. 暗黄褐色土 しまりがある。
6. 黄褐色土 しまりがある。
7. 焼土 黄褐色土が混じる。しまりあり。

7号炉穴(3Dイ003 第34図、図版4)

3D30グリッドにあって、長さ1.66m、最大幅1.38mで長楕円形を呈する。掘り込みは浅いが、やはり炉部が足場より若干深い。焼土の厚さ0.10mで、炉部の底面はよく焼けている。長軸の方向はN20°Eである。図中の出土土器片は、第60図9の一部であるが、検出面より完全に浮いた状態で認められたものである。

覆土

1. 黒褐色土 焼土粒、炭化粒を少量含む。しまりがある。
2. 暗黄褐色土 焼土粒、炭化粒を微量含む。しまりがある。
3. 暗褐色土 しまりがある。
4. 黄褐色土 しまりがある。
5. 焼土 黄褐色土を含む。

8号炉穴（3 Dイ004 第34図、図版4）

3 D 23、33グリッドにあり、長さ1.90m、最大幅1.06mで楕円形を呈する。掘り込みは約0.10mと浅く、炉部は1号炉穴と同じく一段高く設けられている。炉部の底面は焼けているが焼土の堆積は顕著ではない。

覆土

1. 暗黄褐色土 炭化粒を微量含む。しまりがある。
2. 黄褐色土 しまりがある。
3. 黄褐色土 しまりがある。

9号炉穴（4 Cイ005 第35図、図版4）

4 C 57、58グリッドにあり、2.75m×2.35mではほぼ円形を呈する。焼土は西側及び南側に多量に検出され、西側の焼土下の底面がわずかに焼けていた。底面はかなり凹凸が認められる。出土遺物は大部分が検出面付近の焼土中及びその周辺で発見された。いずれも燃系土器の体部破片である。

覆土

1. 暗黒褐色土 ローム小ブロック、ローム粒少量含む。炭化粒微量。しまりあり。
2. 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を多量に含む。焼土粒少量、しまりあり。
3. 焼土 炭化粒を多量に含む。ローム粒少量。黒褐色土が多量に混じる。
4. 暗黄褐色土 炭化粒少量、焼土粒微量含む。しまりあり。
5. 黄褐色土 しまりあり。

10号炉穴（5 Cイ015 第35図、図版5）

5 C 14グリッドにあって、長さ1.48m、最大幅1.15mの円形に近い形状を呈する。底面はやや凹凸があるが、焼土下では一部焼けた状態が確認された。壁際の2個の小ピットは覆土6層が入っており、本炉穴に伴うかどうか断定できなかった。

覆土

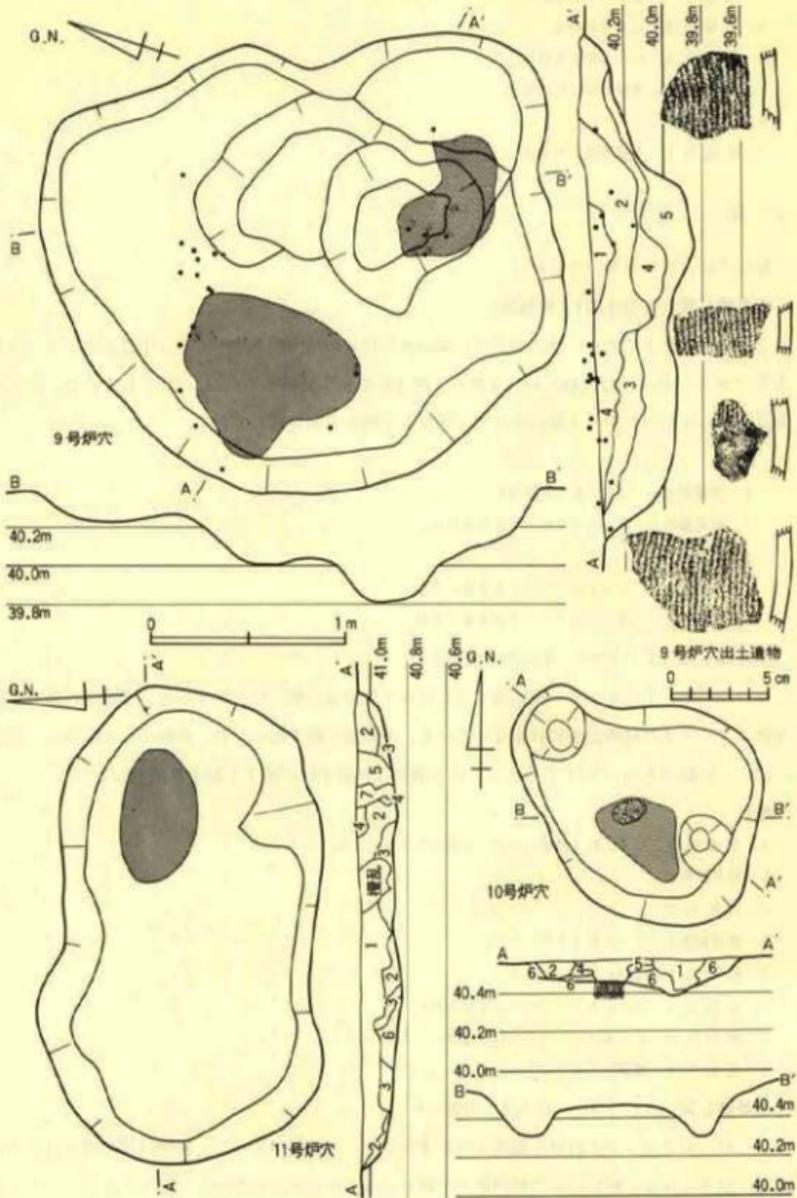
1. 黒褐色土 黄褐色土の小ブロックを多量に含み、焼土粒を少量含む。しまりがある。
2. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
3. 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、焼土粒、炭化粒を少量含む。しまりがある。
4. 黄褐色土 焼土粒、炭化粒を少量含む。しまりがある。
5. 焼土
6. 黄褐色土 しまりがある。

11号炉穴（7 Cイ019 第35図、図版5）

7 C 17グリッドにあり、長さ2.46m、最大幅1.40mの長楕円形であり、深さは0.22mで浅い皿状の断面を呈する。焼土下の底面は中央付近がわずかに焼けている。

覆土

1. 暗褐色土 炭化粒を含み、しまりがある。



第35図 A地点炉穴実測図3 (1/30)

2. 茶褐色土 しまりがある。
3. 黄褐色土 しまりがある。
4. 焼土 ローム粒を多量に含む。
5. 茶褐色土 多量の炭化粒を含む。
6. 茶褐色土
7. 茶褐色土 多量の焼土粒を含む。

2. 陥し穴

陥し穴は合計16基発見された。

1号陥し穴 (2Dイ021 第36図)

2D61グリッドにあり、検出面では1.60m×1.13mの楕円形を呈するが、下底面のプランは長方形で長さ1.35m、最大幅0.43mを測る。深さ0.87m、長軸の方向は、N32°Eである。出土遺物は掲載しなかったが、土器の小片でいずれも上層から発見されている。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
2. 暗黄褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
5. 黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

2号陥し穴 (2Dイ007 第36図、図版5)

2D73グリッドにあって、検出面では2.81m×1.36mの楕円形を呈するが、下底面は非常に幅が狭くなり、また縦断面が袋状をなしている。下底面の最大幅0.22m、長軸の長さ3.76m、深さ1.60m、長軸の方向はN71°Eである。出土遺物は土器小片が覆土上層より出土している。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒を微量に含む。堆積にしまりがある。
2. 暗黄褐色土
3. 黄褐色土
4. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。
5. 暗褐色土 堆積にしまりがある。
6. 黄褐色土 ほとんどハードロームよりなる。
7. 黄褐色土 ロームブロックを含む。堆積にしまりがない。
8. 黒褐色土 堆積にしまりがない。

3号陥し穴 (3Cイ001 第36図、図版5)

3C86、96グリッドの台地平端面よりわずかに下った位置にあって、長軸は等高線とはほぼ平行する。長さ3.16m、幅1.42mの楕円形で、掘り込みの中程から長方形のプランとなり、これが本来の形状と考えられる。下底面の長さ1.67m、最大幅0.67m、長軸の方向はN5°Wである。

覆土

1. 黒褐色土
2. 暗黄褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
3. 黄褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
4. 黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

4号陥し穴(5Dイ001 第37図、図版5)

5D11、12、21、22グリッドにまたがって発見され、検出面でのプランは楕円形で長さ2.88m、幅1.25mを測る。下底面は幅が狭く幅0.10m程度にすぎない。縦断面はわずかに袋状をなす。深さ1.45m、長軸の方向はN22°Eである。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を微量含む。堆積にしまりがある。
2. 暗褐色土 多量のローム粒と微量の炭化粒を含む。堆積にしまりがある。
3. 褐色土 多量のローム粒とローム小ブロックを含む。
4. 黄褐色土 ほとんどロームブロックよりなり、堆積にしまりが無い。
5. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりが無い。

5号陥し穴(5Cイ027 第37図、図版5)

5C51、52、61、62グリッドにまたがって、先土器時代の調査中ハードローム上面で検出された。長さ1.98m、幅0.40mの不整形のプランを呈するが、下底面のプランは2号・4号陥し穴等と同じく幅が0.17m以下と狭くなる。深さ0.84m、長軸の方向はN40°Eである。

覆土

1. 暗褐色土 堆積にしまりがある。
2. 褐色土 ローム粒を少量含む。堆積にしまりがある。
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。堆積にしまりがある。
4. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。堆積にしまりがある。

6号陥し穴(5Cイ011 第37図、図版5)

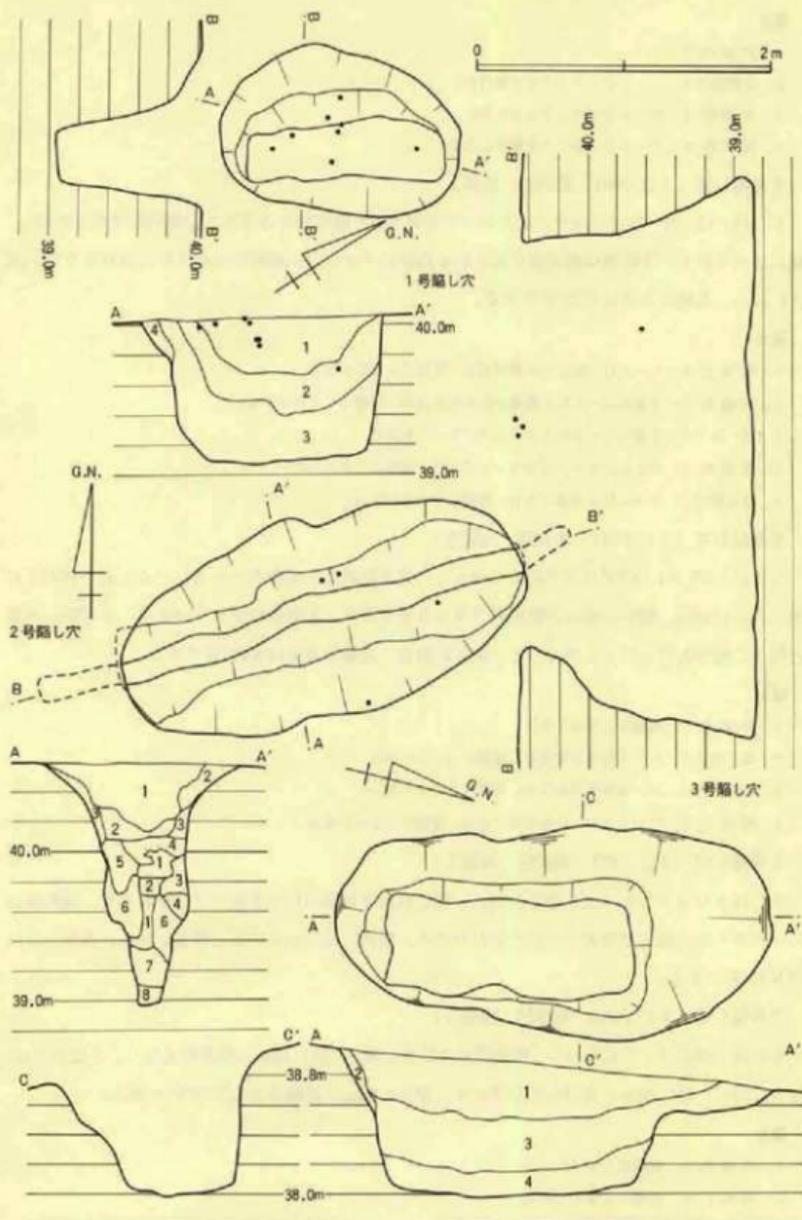
5C76グリッドにあって、長さ3.32m、幅1.31mで長楕円形の上面プランを有する。縦断面はハードロームの最上部付近で一旦くびれたのち、袋状に拡がっている。深さ2.50m、長軸の方向はN44°Eである。

7号陥し穴(6Cイ040 第38図、図版5)

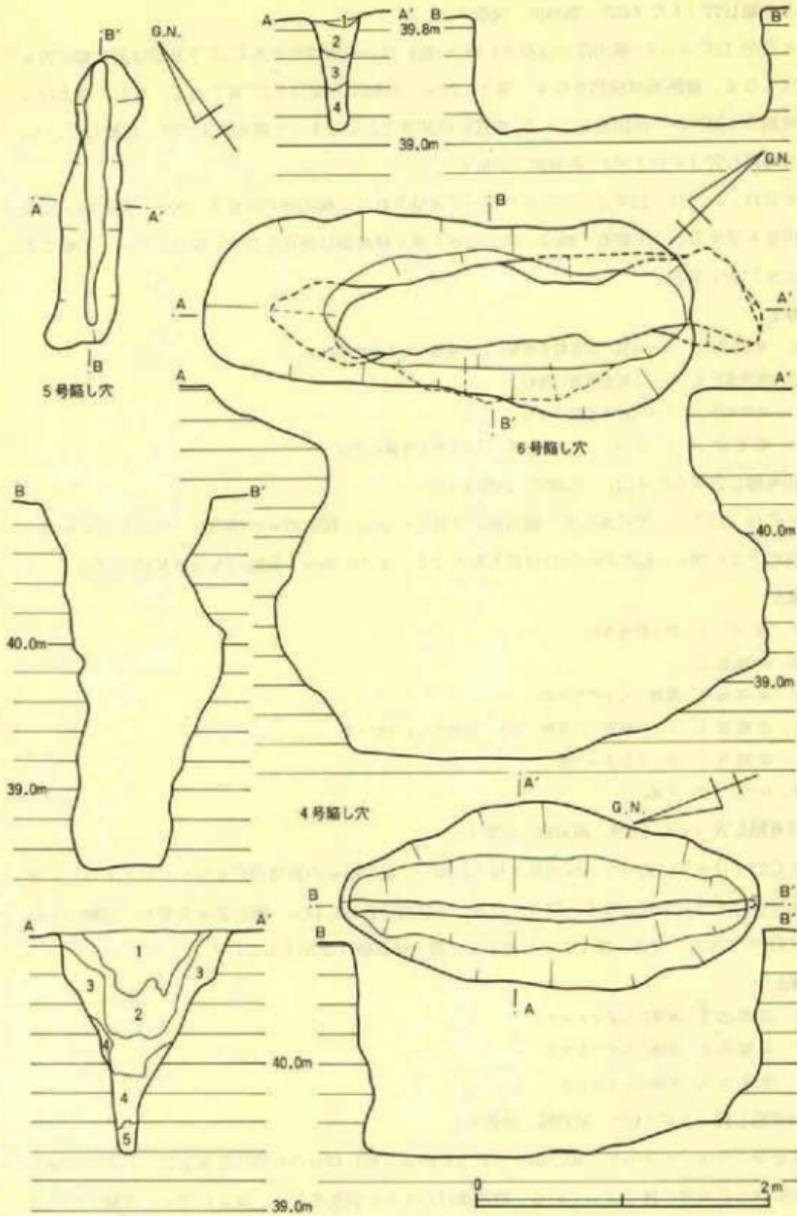
6C08、09グリッドにあって、検出面では長さ2.06m、幅1.18mの楕円形を呈し、下底面では、長さ1.73m、幅0.88mのほぼ長方形をなす。深さ0.82m、長軸の方向N76°Wである。

覆土

1. 暗褐色土 堆積にしまりが無い。
2. 黄褐色土 堆積にしまりがある。
3. 暗黄褐色土 堆積にしまりがあり、かたい。



第36図 A地点陥し穴実測図1 (1/40)



第37図 A地点陥し穴実測図2 (1/40)

8号陥し穴(6Cイ037 第38図、図版6)

6C09、19にあって、検出面では長さ1.99m、幅1.14mの楕円形であるが、下底面は最大幅0.27mと狭くなる。縦断面は袋状をなす。深さ0.02m、長軸の方向はN22°Wである。なお、覆土中より晩期の土器片が一点出土している。墳底には非常によくしまった黄褐色土が厚く堆積している。

9号陥し穴(6Dイ001 第38図、図版6)

6D11、12、21、22グリッドにまたがって発見された。検出面では長さ2.00m、幅0.68mの長楕円形を呈するが、下底面の幅は0.18m以下と狭く縦断面は袋状をなす。深さ1.26m、長軸の方向はN7°Wである。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を微量含む。堆積にしまりがあがる。
2. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。
3. 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量、ローム粒を多量に含む。

10号陥し穴(6Cイ027 第38図、図版6)

6C14、15グリッドにあって、検出面では長さ1.58m、幅0.95mの楕円形プランを呈するが、下底面では1.29m、幅0.49mのほぼ長方形となる。深さ0.90m、長軸の方向はN43°Wである。

覆土

1. 褐色土 焼土粒を含む。
2. 暗褐色土
3. 茶褐色土 堆積にしまりがあがる。
4. 茶褐色土 3より粘質で、黒味がある。堆積にしまりがあがる。
5. 黄褐色土 かたくしまった層。
6. ロームブロック塊。

11号陥し穴(6Cイ028 第39図、図版6)

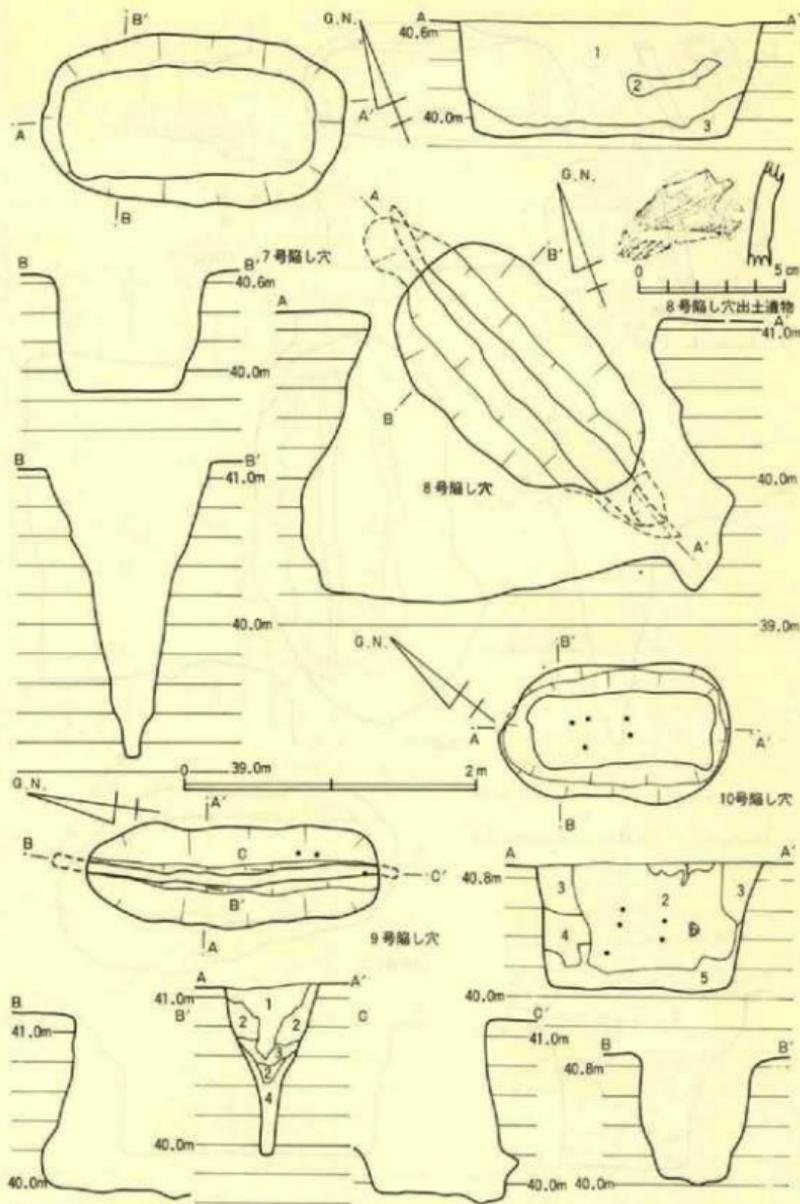
6C27グリッドにあって、検出面で長さ1.88m、幅0.81mの長楕円形を呈し、ハードローム最上部付近以下は長方形となる。深さ0.73m、下底面の長さ1.43m、幅0.50mを測り、長軸の方向はN81°Wである。なお、覆土中より燃来文土器の体部破片が出土している。

覆土

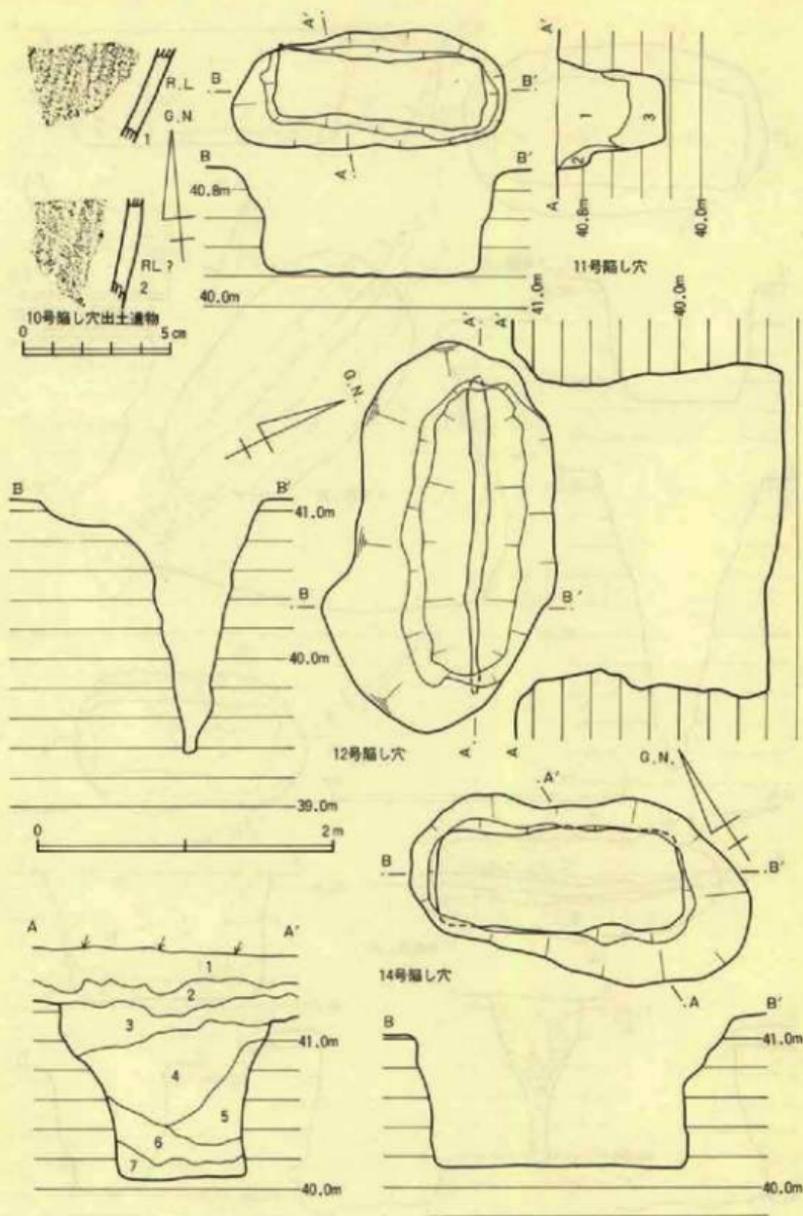
1. 暗褐色土 堆積にしまりがあがる。
2. 茶褐色土 堆積にしまりがあがる。
3. 暗褐色土 堆積にしまりがあがる。

12号陥し穴(6Cイ036 第39図、図版6)

6C38グリッドにあって、検出面では長さ2.66m、幅1.48mの長楕円形を呈し、下底面は最大幅が0.14mと非常に狭くなっている。縦断面はわずかに袋状をなす。深さ1.70m、長軸の方向はN63°Wである。墳底は、黄褐色の非常によくしまった土層が厚く堆積していた。



第38図 A地点陥し穴実測図3 (1/40)



第39図 A地点陥し穴実測図4 (1/40)

13号陥し穴 (6 C イ026 第40図、図版6)

6 C 64, 74グリッドにあって、検出面では長さ2.02m、幅1.07mのほぼ長方形を呈し、下底面では長さ1.67m、幅0.60mの長方形となっている。深さ0.65m、長軸の方向は座標北に一致する。

覆土は黒褐色土のみで、堆積にしまりが無い。一時に埋没したものと思われる。

14号陥し穴 (6 D イ006 第39図、図版6)

6 C 89, 6 D 80グリッドにあって、検出面で長さ2.33m、幅1.26mの長楕円形を呈し、ハードローム最上部付近以下は長方形となる。下底面の長さ1.68m、幅0.72mを測る。深さ1.02m、長軸の方向はN58°Wである。

覆土

1. 表 土
2. 標準土層IIも層
3. 褐色土 ローム粒を微量含む。堆積にしまりがある。
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
5. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
6. 黄褐色土 堆積にしまりがある。ソフトロームの崩壊土かと思われる。
7. 黒褐色土 堆積にしまりがある。

15号陥し穴 (7 B イ005 第40図、図版6)

7 B 37, 47グリッドにあって、検出面で長さ2.31m、幅0.82mの長楕円形を呈し、下底面では最大幅0.15mと狭くなっている。縦断面は袋状で、深さ1.32m、長軸の方向は、N21°Eである。

覆土

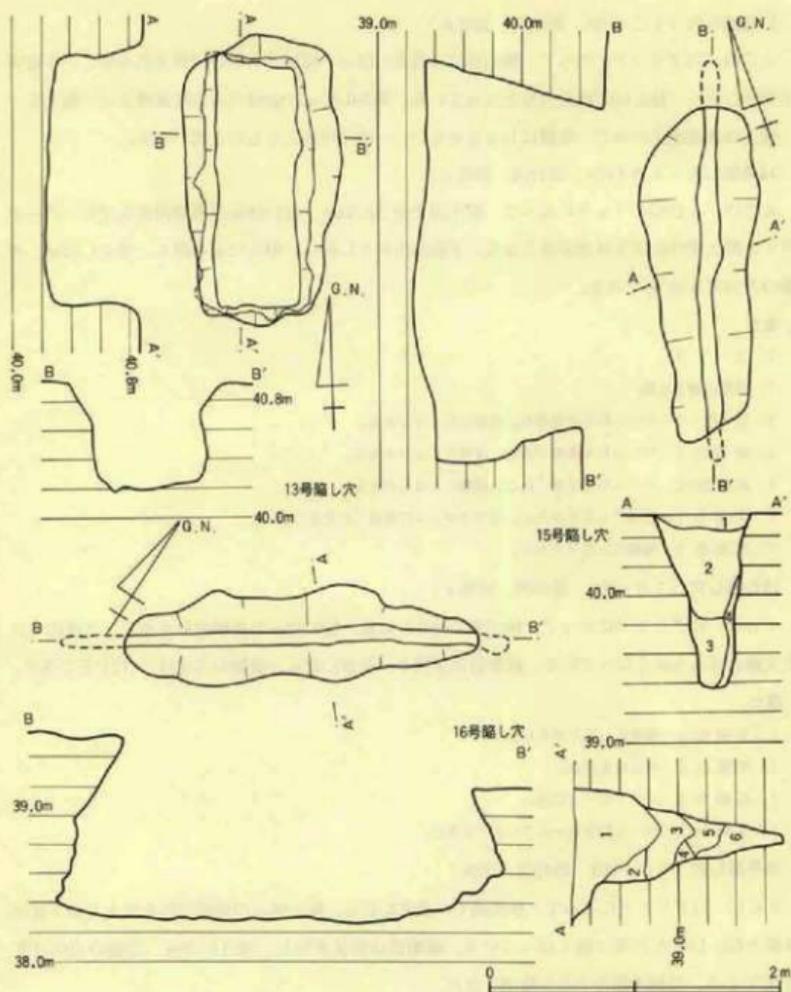
1. 茶褐色土 堆積にしまりがある。
2. 暗褐色土 炭化粒を含む。
3. 茶褐色土 ソフトロームに近い。
4. 黄褐色土 ローム質でロームブロックを含む。

16号陥し穴 (8 C イ001 第40図、図版7)

8 C 10, 11グリッドにあって、検出面では長さ2.45m、幅0.66mの長楕円形を呈するが下底面は最大幅0.12mと非常に狭くなっている。縦断面は袋状を呈し、深さ1.29m、長軸の方向はN61°Eである。風倒木痕の下から検出された。

覆土

1. 風倒木痕覆土
2. 黄褐色土 ソフトロームに近い。
3. 暗褐色土 ソフトロームの小塊を多く含む。
4. ハードロームブロック
5. 暗褐色土 ハードロームの小塊を少量含む。
6. 暗黄褐色土 暗褐色土とソフト・ハードロームが混在する。



第40図 A地点陥し穴実測図5 (1/40)

3. 土 壌

合計11基検出された。楕円形、長楕円形のプランを呈し、皿状ないしはすり鉢状の断面をもつ。底面及び壁は比較的しっかりしているが、出土遺物もほとんどなく遺構の性格を推定できない。したがって、ここでは、堆積土の説明のみを記載することにする。

なお、ほかに不整形のプランを有する落ち込みが多数検出されたが、遺構と判定しえなかった。

1号土壌 (2Cイ001 第41図、図版7)

1. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
2. 暗黄褐色土 しまりがある。
3. 黒褐色土 *
4. 黄褐色土 暗褐色土の小ブロックを含む。しまりがある。
5. 暗黄褐色土 ハードローム小ブロックを多量に含む。しまりがある。

2号土壌 (4Dイ001 第41図、図版7)

小ピットと重複し、土層の観察から小ピットのほうが古いと考えられる。

1. 黒褐色土 堆積にしまりがある。
2. 暗黄褐色土 ローム粒を含む。しまりあり。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。
4. 黄褐色土 しまりあり。

3号土壌 (5Cイ018 第41図、図版7)

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
2. 暗黄褐色土 暗褐色土とローム粒の混合。
3. 黄褐色土 暗褐色土が少量混じる。しまりがある。

4号、5号土壌 (5Cイ016、017 第41図)

4号、5号土壌の新旧関係は不明である。

1. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。炭化粒微量。
2. 暗黄褐色土 堆積にしまりがある。

6号土壌 (5Cイ012 第41図)

1. 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を微量含む。しまりあり。
2. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
3. 黄褐色土 黒褐色土が少量混じる。しまりあり。
4. 黄褐色土 ローム小ブロックを少量含む。しまりあり。

7号土壌 (5Cイ014 第42図)

土層断面はとらなかつた。黒褐色土を主体とし、ローム粒を多量に含む、しまりのある覆土。

8号土壌 (5Dイ014 第42図、図版7)

1. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまりあり。

2. 暗黄褐色土 しまりあり。

9号土壌 (6Dイ007 第42図、図版7)

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。炭化粒微量。しまりあり。

2. 褐色土 ローム粒、炭化粒微量含む。しまりあり。

3. 黄褐色土 しまりあり。

10号土壌 (6Cイ024 第42図、図版7)

1. 茶褐色土 しまりあり。

2. 茶褐色土 炭化粒を多く含む。しまりあり。

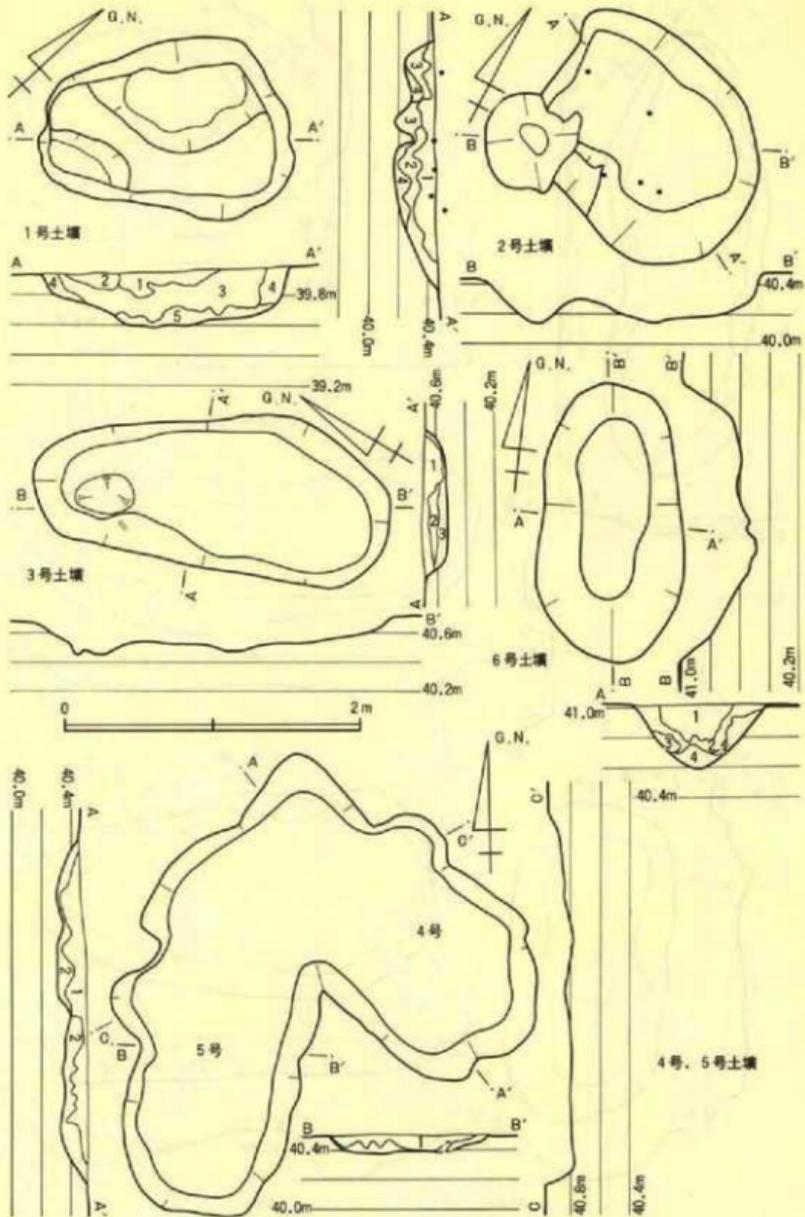
11号土壌 (7Cイ008 第42図、図版7)

1. 暗褐色土

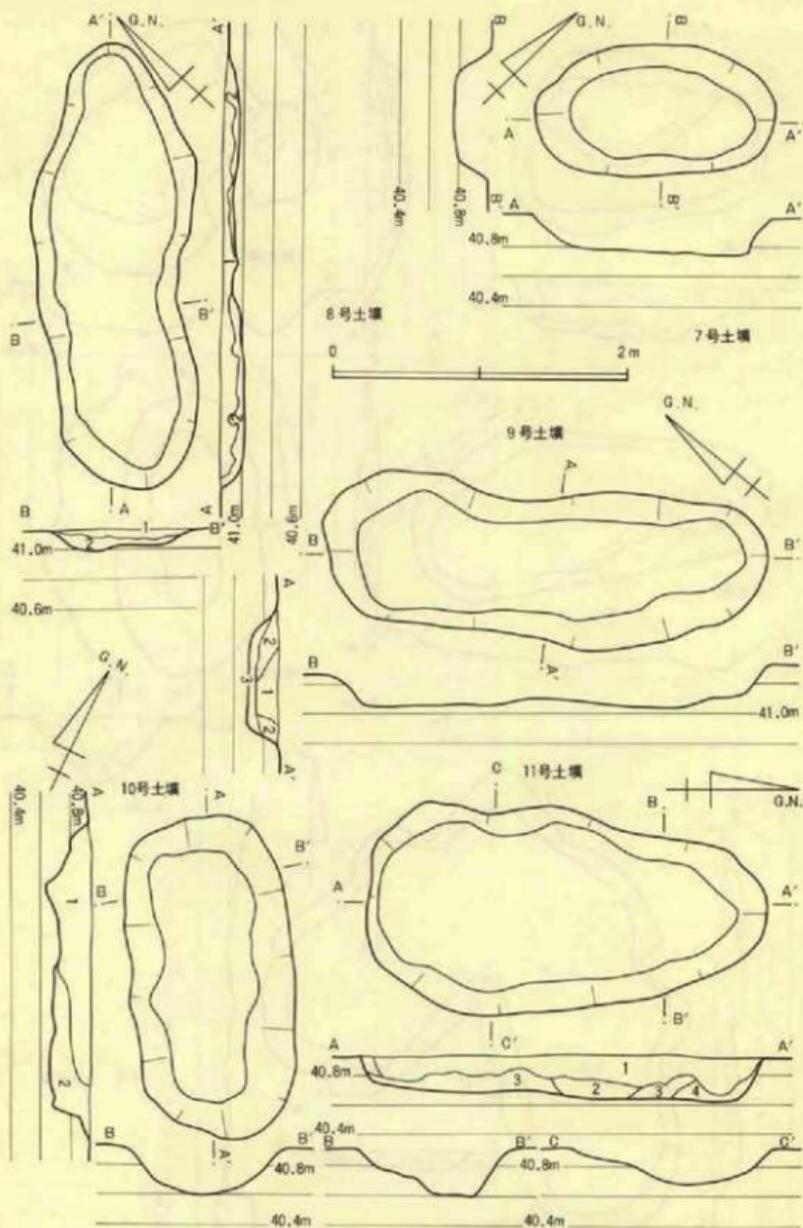
2. 茶褐色土 ローム粒を含む。しまりあり。

3. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。

4. 茶褐色土 ロームを含む。



第41図 A地点土壤実測図1 (1/40)



第42図 A地点土壌実測図2 (1/40)

第3節 縄文時代の遺物

1. 土 器

A地点より出土した土器は、草創期後半の燃糸文系統土器から、晩期までの多数の型式にわたっている。大別すると下記の7群に分類される。

- 第1群土器 草創期後半の燃糸文系統土器
- 第2群土器 早期前半の沈線文系統土器
- 第3群土器 早期後半の貝殻条痕系統土器
- 第4群土器 前期縄維土器及び浮島式系統土器
- 第5群土器 前期末から中期初頭にかけての土器
- 第6群土器 中期後半から後期初頭の土器
- 第7群土器 後期中葉から晩期にかけての土器

土器群はさらに細分されるわけであるが、その分類はB地点の土器となるべく一致させるよう心がけた。

第1群土器 燃糸文系統土器

各型式にわたって出土している。量的にはあまり多くないが、推定復元しうる土器が比較的多いことは、注意しなければならない。出土位置は井草Ⅰ・Ⅱ式はともに6B、6Cグリッドを中心としてまとまりをもつ。夏高式は6Bグリッドから、6Cグリッドの西端にかけてややまとまり、4C、4D、5Cグリッドにかけてと7Cグリッドの中央付近においても、まとまりがある。稲荷台式及び以降については、7B、7Cグリッド南端を中心として分布する。

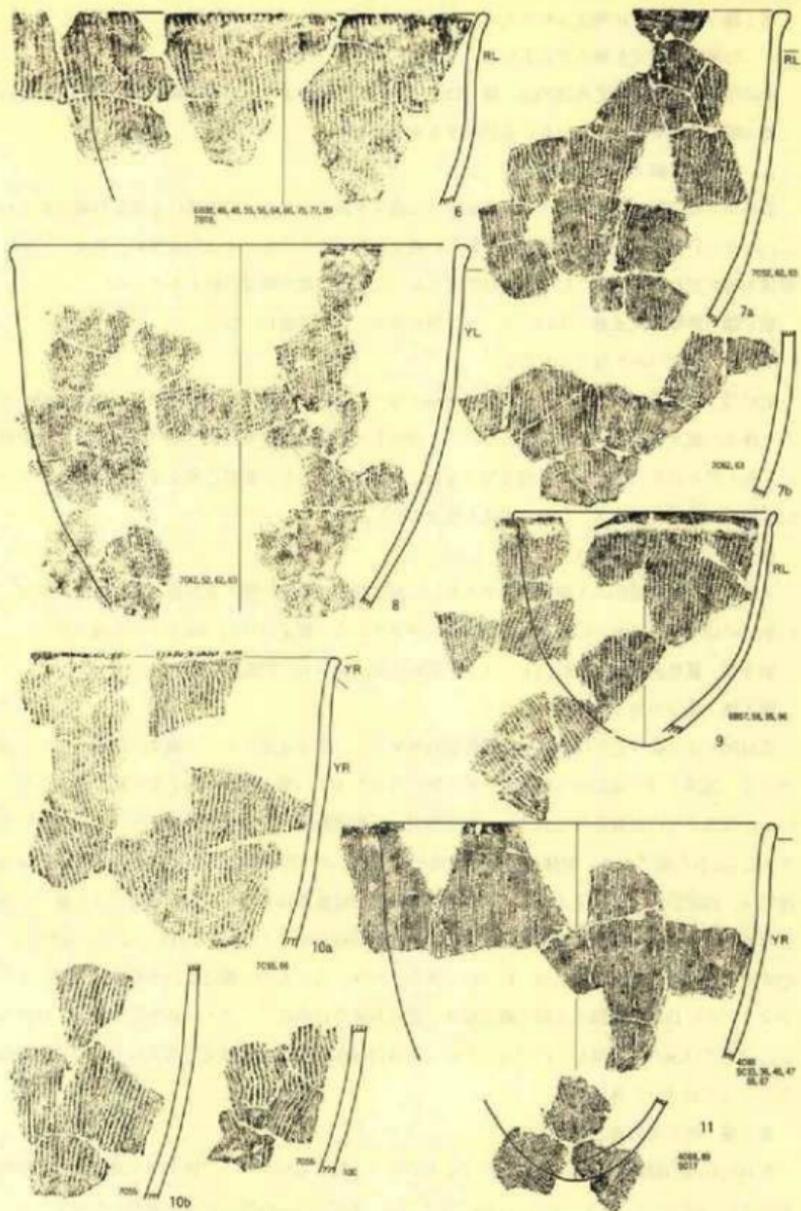
なお、各類の胎土・焼成・整形技法は、多量に出土したB地点のものと同様である。

第1類 井草Ⅰ式土器(第43図1～3、第45図1～5、図版19・21)

第1種 押圧縄文のあるもの。

第43図1は口縁の推定外径27cm。文様はすべて同一の原体によって施文されている。口縁の縄文は2段みられ、異方向に回転させることによって羽状に近い効果をあげている。口頸部は縄文が横走するが、押圧縄文より上部は施文後に指頭圧痕がめぐり、大部分の縄文は消えている。

同図2は口縁に押圧縄文が付されたもの。以下の縄文はすべて同一原体による。口縁の回転縄文は縦走している。第45図1は口頸部に押圧縄文の付くものであるが、口縁断面の肥厚外反が弱く、あるいは井草Ⅱ式かもしれない。口縁の縄文は縦走し、口頸部には爪形の圧痕が認められる。



第44図 A地点草創期後半土器実測図2 (1/4)

第2種 縄文のみが施文されるもの。

a. 口頸部の縄文が横走するもの。

第43図3は口縁の推定外径30cm。縄文はすべて同一原体による。口端の縄文は縦走り、口頸の上部は細い無文帯となっている。第45図2も本類に入る。

b. 口頸部の縄文が斜行するもの。

第45図3は口頸部から体部にかけて縦走する縄文を施文した後、口頸部に1段斜行縄文を入れている珍しい例である。口端は縦走と斜行の縄文が施されている。4は口頸部斜行縄文の下部に原体末端が現われている。口縁断面は肥厚しない。5は口端の縄文が縦走する。

第2類 井草Ⅱ式土器(第43図4・5、第45図6~10、図版19・21)

第1種 縄文のみが施文されるもの。

第43図4は推定口径17cm、器厚1.0~1.1cmと厚く、小形の土器である。口頸部には無文帯があり、体部の縄文は斜行ぎみに施されている。同図5は口縁の推定外径28.5cmで、器高は30cm程度になると思われる。口頸部には無文帯はない。第45図6~9も口頸部に無文帯がないもの。9は口縁断面が肥厚外反せず、口端の縄文も施文の幅が狭い。

第2種 燃糸文の施文されたもの。

A地点では第45図10の1個体のみである。口端に横走する細い燃糸文が施され、体部は無文。口頸部には爪形を入れ、口縁をわずかに外反させている。推定口径12.3cmの小形土器である。

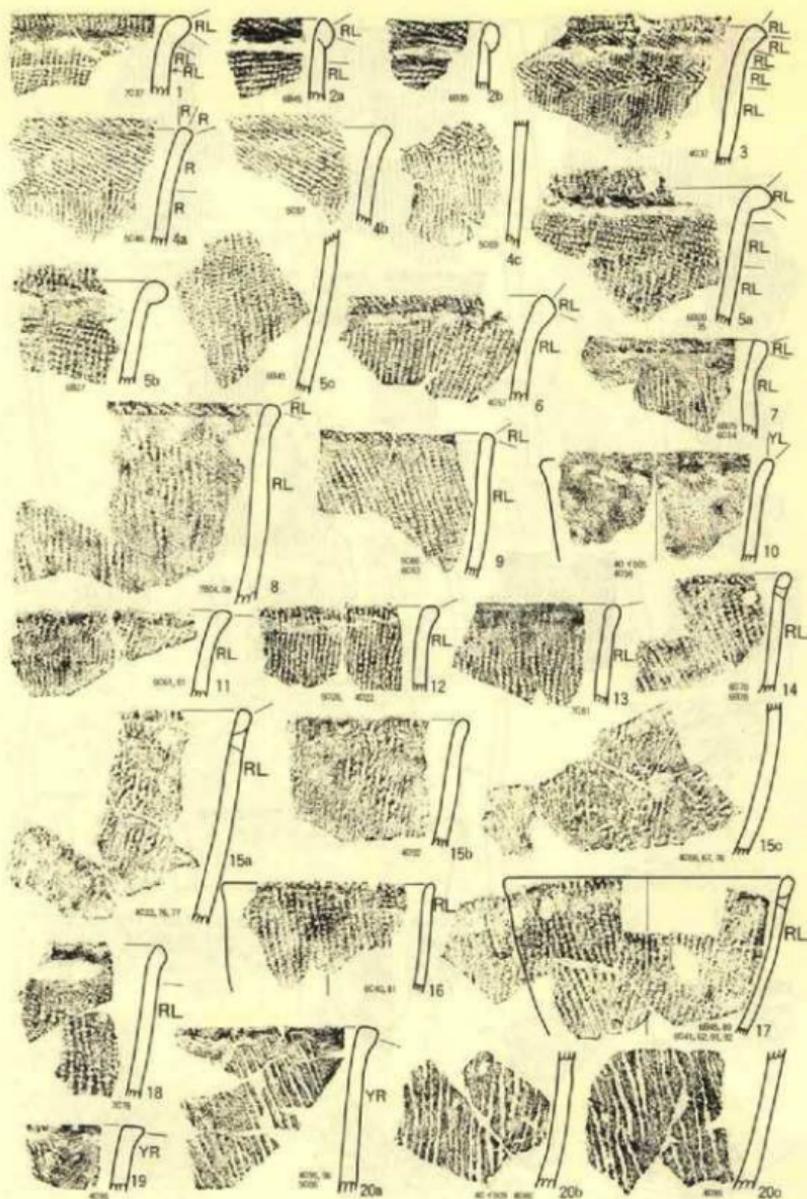
第3類 夏島式土器(第44図6~11、第45・46図11~32、図版20~22)

第1種 縄文の施されるもの。

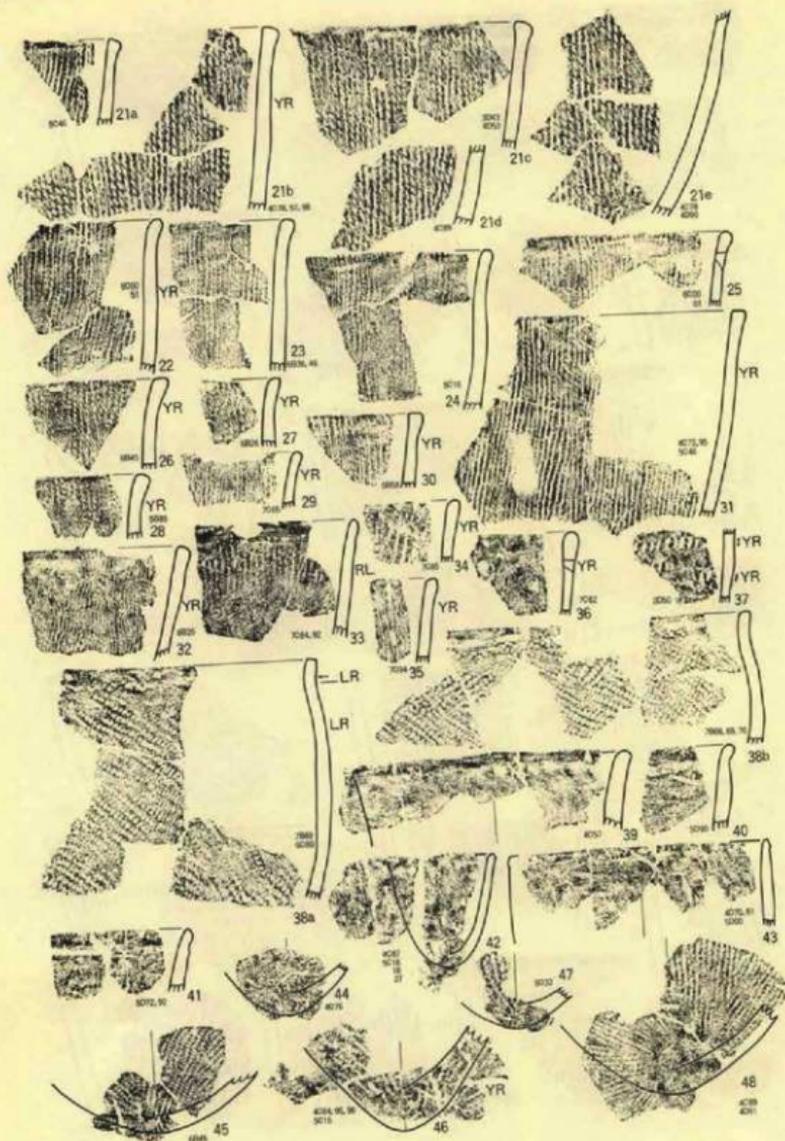
第44図6は口縁推定外径28cm。口縁断面は外反し、口端は丸味をもつ。縄文は口端直下から施される。同図7は口縁断面が肥厚して角頭状になるもの。口端より約2cm下から縄文が施されている。同図8は口縁推定外径31.5cm、推定高31cm。口縁断面は肥厚して丸味をもつ。縄文は口端下約1.5cmから施される。原体は燃りが非常にゆるく、かつ均等に燃られていない。9は口縁外径18cm、器高約16cmと推定される小形土器である。口縁断面は丸味をもつ。口縁下より縄文が施されるが、施文後口頸部には指頭によると思われる凹線がめぐる。第45図11~12は口縁断面がわずかに肥厚して外反するもの、13~17は断面が丸味をもつもの、縄文はいずれも口端直下より施文される。15は第44図8に似て縄文原体の燃りが非常にゆるい。16・17は小形土器で、16は推定口縁外径11cm、17は同じく15.5cmである。18は口縁部に約2cmの無文帯のあるもので、口縁断面は尖ってわずかに外反する。

第2種 燃糸文の施されたもの。

第44図10は口縁断面がわずかに肥厚するもので、口端に多少かかって燃糸文が施される。原体の長さ1.5cm前後で、施文の長さは口縁で約1.5cm、体部で5cm程度であり、重複して施文されている。同図11は推定口縁外径27cm、口縁断面はわずかに先細りで丸味をもつ。燃糸文は条が細く、



第45図 A地点草創期後半土器拓影図1 (1/3)



第46図 A地点草創期後半土器拓影図2 (1/3)

密接している。原体の長さは、2.5cm。第45・46図19～21は口縁断面が肥厚するもの。いずれも角頭状を呈する。20の燃糸文は燃紐の燃りがゆるく、口縁部付近は斜行し、体部下は縦走するものと思われる。22～29は口縁断面がゆるく外反し、丸味をもつ。燃糸文はいずれも条が細く密接している。30・31は断面が角頭状を呈する。32は断面が丸味をもち、外反しない。燃糸文は条がきわめて細い。

第4類 稲荷台式土器（第46図33～36第117図10、図版22）

33は縄文が軽く施されたもの。34～36は燃糸文。口縁断面はいずれもわずかに外傾して丸味をもつものである。なお、第117図10は誤ってB地点に含めてしまった。

第5類 燃糸文系統土器の末期に属するもの（第46図37・38、図版22）

37は絡糸体圧痕が2段施されている。器面はあれている。38は口頸部に押圧縄文を1条めぐらし、以下同一原体を回転施文している。焼成良好。口辺部は一部羽状となっているが、体部は縦位回転のみになると思われる。花輪台Ⅰ式に近いが、口縁断面及び羽状縄文が明瞭でない点で異なっている。

第6類 無文土器（第46図39～43）

39は推定口縁外径15.5cmで口縁断面は丸味をもつ。40・41は口頸部に指頭による凹線がめぐっている。42は口縁推定外径6cm、器高6cm程度のミニチュア土器である。43は口縁推定外径14cm。断面は口端が尖る。これら無文土器がいずれの型式に属するか難しい。特に40・41は燃糸文末期の可能性もあるが、出土位置が5D00グリッド付近を中心とする夏島式の分布と重なることから該期に相当する可能性が強いと思われる。

第2群土器 早期沈線文系統土器

第1類 三戸式土器（第47図1、第48図1～3、図版23・24）

4個体のみ出土である。第49図1は口縁推定外径28.5cm、現存高25.5cmである。口縁断面は内削ぎとなり、口端には深い刻みがめぐる。文様は貝殻条痕による格子目文が全面に施されている。第48図1は口縁推定外径11cm、器高18.5cm程度になると思われる。黒味をおび、胎土は緻密、口縁断面は軽く外反し、口端は外傾する。底部は比較的角度の大きい尖底になるものと思われる。口縁部に2個1対の耳状突起が2対付けられている。文様はすべて先端のとがった篋状工具によって施されている。口辺部及び体部下半には細沈線帯と左傾の刻み目列をくりかえし施文しており、口辺部の下2段の細沈線帯上及び体部下半の上2段の細沈線帯上には、やはり左傾の刻み目が3～4回間隔をあけて施される。この上下の細沈線帯にはさまれた体部上半は縦方向の刻み目列によって2つに分帯され、分帯間には帯状格子目文が配されている。2aは細沈線帯間に左傾の細沈線が施文されたもので、2bはその体部下半の破片である。3は胎土に長石、石英の小角礫を多量に含む。細沈線帯間は左傾と右傾の沈線による格子目文である。

第2類 田戸下層式土器 (第47図2-8、第48・49図2-29、図版23・24)

尖底を含め32個体程度の出土である。主に2Dグリッド西半から3Cグリッドにかけて出土している。胎土中には長石、石英の粒子を含み、焼成は一般に比較的良好。器表面のあれたものが多く、内面は滑沢を呈するものと整形時の擦痕が顕著につくものがある。

第1種 主に太沈線、細沈線と爪形文、刺突文が組みあわさったもの。

第47図2は口縁の推定外径21cmを測る。口縁部の縦位沈線帯には間隔をあけて矢羽状の細沈線が入る。体部の文様構成は2条の太沈線によって大きく鋸歯状の文様を描き、それによってできた三角形の区画内に3条単位の太沈線を充填しているものらしい。体部下半には細沈線による格子目文が2段認められる。第48図4 a-4 fは口縁部を欠く同一個体。太沈線と細沈線によって三角形の区画文を作り、その中を太沈線による弧線と貝殻腹縁疔痕を充填している。各区画文の間には列点が重下する。同図5は体部上半に左傾と右傾の太沈線を8条程度を単位としてくりかえし、太沈線間を列点と細沈線によって交互にうめている。6は刺突列と太沈線の組みあわせ。7は器厚1.7-2cmの厚手の土器で黄褐色を呈し、器面はあれている。口端には矢羽状の細沈線が施文される。体部には太沈線と細沈線による菱形状の区画文がみられる。8は口縁が左右非対称の波状口縁(8C)で、口端には左傾の刻みがつく。口縁部の文様は横位の細沈線による区画内に縦位の太沈線が充填されている。9は細沈線のみによって文様が施される。尖底付近では沈線が結節状となっている。10は体部上半に、太沈線による縦の区画文内を弧線でうめた文様が施される。12は斜線の間貝殻腹縁文がみられる。13は下方に開く爪形文が連続して施されている。15の刺突文は三角形を呈する。

第2種 細沈線による格子目文が施されるもの。

5個体出土した。20は口縁にそって2条の細沈線が施される。いずれの個体も格子目文はかなり雑に施文されている。23は沈線がきわめて細い。

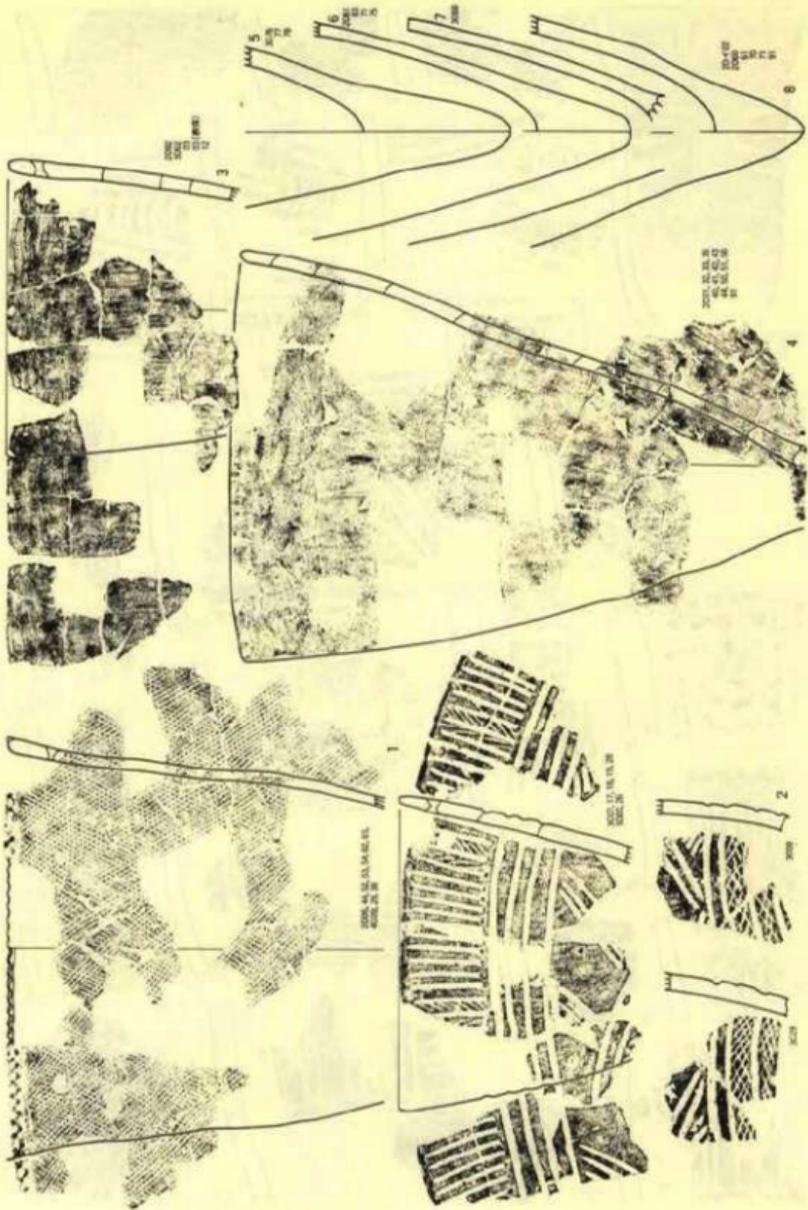
第3種 無文土器

第47図3は口縁推定外径20cm、口縁は横方向、以下縦方向に篋状工具によって器面が整形されている。同図4は口縁推定外径28cm、器高は42cm程度に達すると思われる。器表面はザラついている。第49図25・26も縦方向の整形痕が残る。尖底は角度が鋭角で、部厚なつくりのものが多い。第49図29は角度がやや開き気味である。

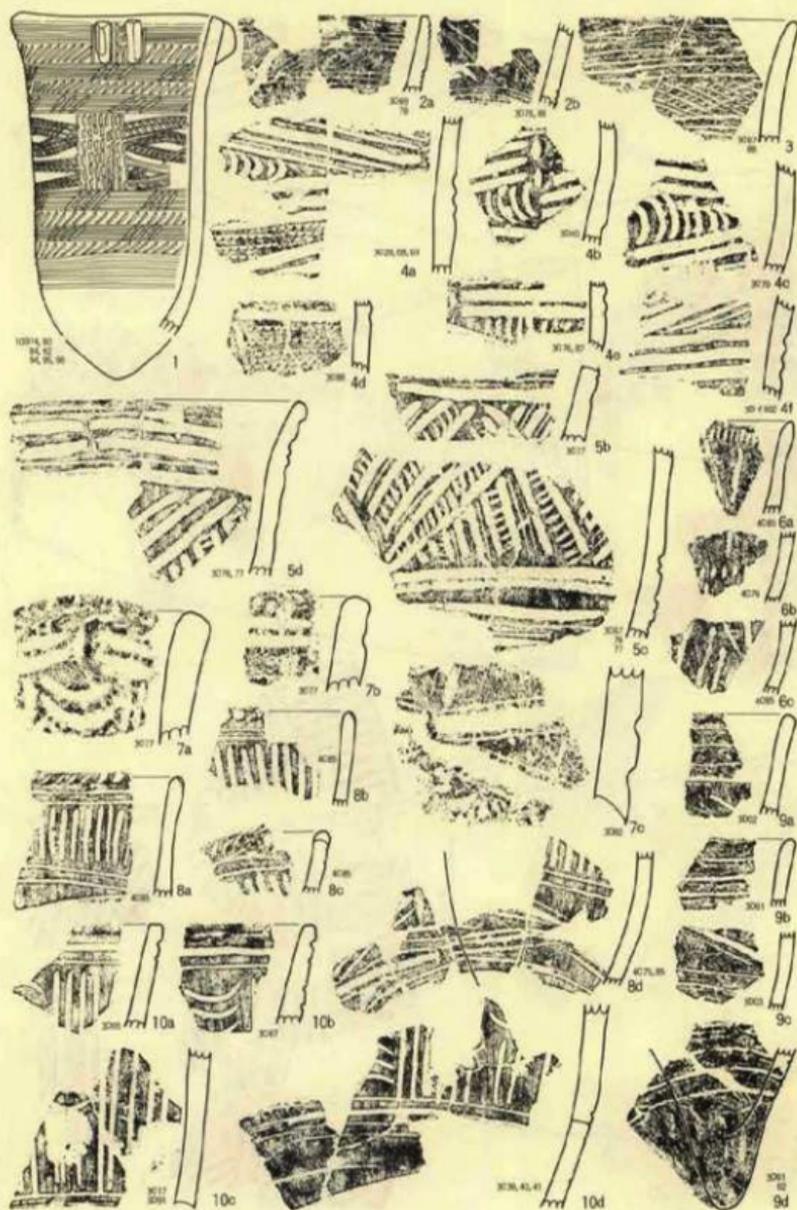
第3類 田戸上層式土器 (第50-56図、図版26-29)

田戸上層式は35個体が確認できた。個体数は少ないが、同一個体として識別されるものが多く、全体の文様構成をうかがうことのできるものが多数ある。田戸上層式の理解を深める上で貴重な資料となりえよう。出土位置は個体ごとに近接したグリッドから出土するが、田戸上層式全体としては、A地点のほぼ全域に散漫に分布しており、特定のまとまりは認められない。

まず、本遺跡で出土した田戸上層式の型式上の特徴を列記する。器形は田戸下層式に比べて変



第47図 A地点早期前半土器実測図1 (1/4)



第48图 A地点早期前半土器拓影图1 (1/3)

化に富んでいる。口縁が内湾するものが多く、ほとんどの場合、口縁裏側に爪形の深い刺突列や貝殻腹縁圧痕が施される。頸部がくびれて口辺部が内湾して拡がり、体部は丸味をもつキャリパー状を呈するものが多い。頸部のくびれが強く、屈曲するものもある。また口辺部が湾曲せず、ゆるく外反し、頸部がかかるくびれてそのまま底部へつづくものや単純な深鉢形のものもある。底部は丸底、開き気味の尖底が多いと思われるが、田戸下層式と同じような鋭角で部厚な尖底もある。口縁は多く波状を呈し管状、瘤状の突起を配するものもある。焼成良好なものが多いが、ものもある。胎土中には繊維を含むものと含まないもの両方がある。前者の繊維の含有量は少ないものが多く、器表面にまったく表われない微量なものもある。文様は直線による文様と組み合わせられて曲線文が多く認められ、細沈線文、貝殻文、刺突文、押引文、隆起線文、瘤状の突起といった複数の文様要素が複合してバラエティーに富んでいる。貝殻文、刺突文、押引文の各々も施文工具、施文技法に幾つかの種類がある。貝殻文はフネガイ科の一般的な腹縁をはは直角に押すもの、貝の腹縁を内側にやや傾けたもののはか、瘤状突起の頂部には左右殻をあわせて深く押捺したものがある。また、巻貝の殻頂を押しつけた円点文もある。押引文の工具には先端の丸く尖ったもの、三角形に尖らせたもの、直角に切ったものが確認された。以下、11種に分類したが、前述のように文様の複合したものが多く、便宜上の分類にすぎない。

第1種 瘤状の突起を口縁部、文様帯の区画文上等に付けるもの。(第50図1・2、第54図1)

第50図1は口縁部の最大外径が推定で24cm、器高27cm程度で丸底になると思われる。胎土中の繊維はごく微量で、主に長石の細砂を多く含む。焼成は比較的よいが、もろく体部下半は小破片となってしまう。口縁はゆるい波状をなし、貝殻文が深く押捺された大形の瘤が波頂部に、小形の瘤が波底部に配される。大形の瘤は4単位と思われる。口縁裏側には深い刻みが施される。口辺部の広い文様帯は、その上下を刻みの付いた隆起線によって画され、上の隆起線上には波頂部と波底部の下の位置に瘤が付く。波底部の瘤は場所によって省略される。下の隆起線上の瘤は波頂部下の位置に置かれている。口辺部の文様帯は波底部の下中央の位置に瘤を貼りつけ、これを中心に展開する。ただ口辺部の破片が多く欠失しており正確を期せない。2-3条の沈線による三角形を基調とする文様が交互に配されるようである。三角形の文様は瘤をとりまいて下部区画帯へ斜めにつながるもの、瘤に対して上部区画帯へつながるものを中心とし、残った空間部にはW字状、逆W字状の文様を入れている。この三角形を基調とする文様内には2-3条の弧線が入れられている。体部下半は無文。

第50図2は胎土中に繊維を混入しない厚手大形の一括破片である。長石を主とする細砂を多く含み、器表面はザラつく。ゆるい波状口縁で波頂部には管状の突起がつく。この突起の頭部はフネガイ科の貝殻によってえぐられている。口縁裏側には貝殻腹縁による深い刻みが施される。口縁部には刻みの付された低い隆起線が2条めぐり、波頂部下の位置には瘤が配される。隆起線の間及び口縁の波頂部帯には貝殻腹縁でえぐった刺突列がみられる。口辺部の文様帯はこの下に配

される。文様帯の下限はくびれた器形の屈曲部にあっており、細く低い隆起線によって区画されている。この隆起線上には波状口縁の波底下部の位置に小さな瘤が付く。体部は2条の沈線間に波状文が施されており、以下は無文になるとと思われる。口辺部の文様帯は両側に沈線を添わせた細く低い隆起線が大きく鋸歯状に描かれる。この鋸歯状の区画文は山の頂部が波状口縁の波底部に、山の底が波状口縁の頂部下に相当するように配置されている。なお、区画文の底の部分には小さな瘤が付される。この区画文によって、口辺部の文様帯は上下に分けられる。下の区画内は逆W字状及び弧線を組みあわせた文様が施され、中に貝殻文が充填される。上の区画内は三角形と弧線を組みあわせた文様が描かれ、中と同じく貝殻文が充填されている。

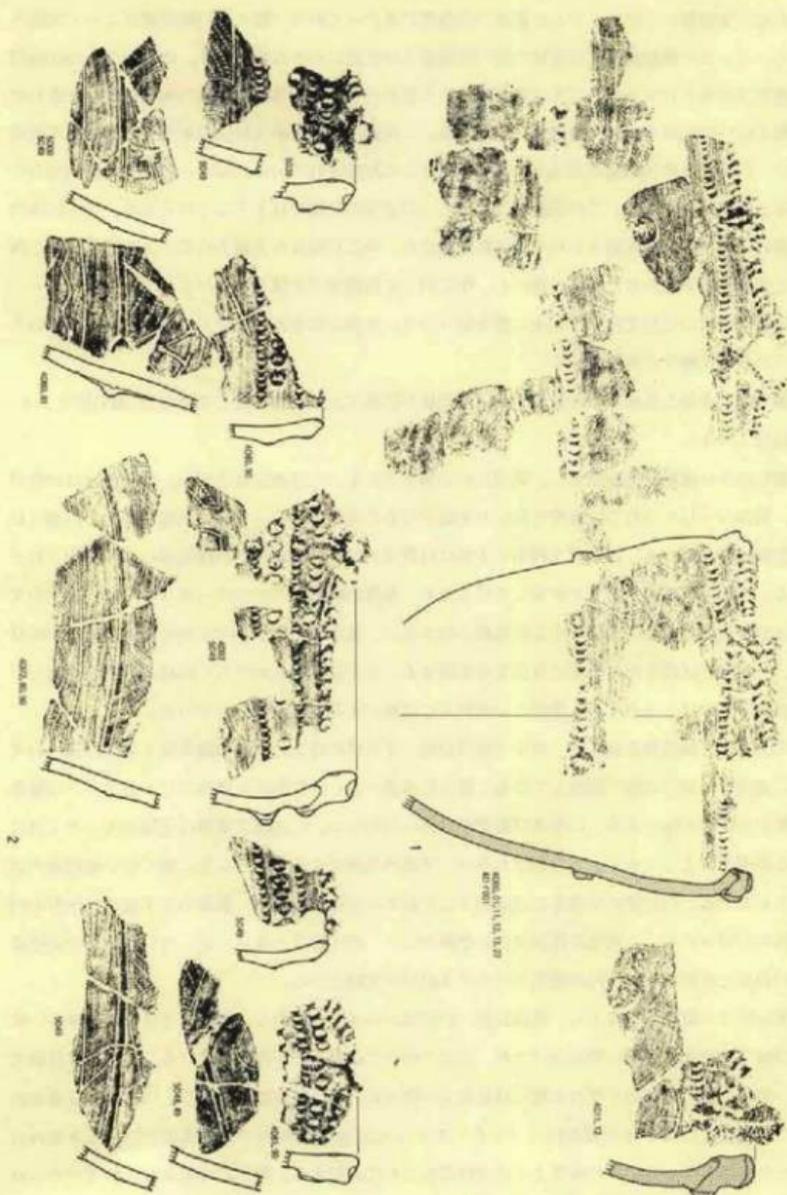
第54図1は口辺部文様帯の中央に瘤を貼りつけ、沈線が瘤をとりまいている。また文様帯の下半には波状沈線文が施される。

第2種 直線と弧線を組み合わせた三角形の区画文が主要な文様となるもの(第51図3・4、第54図2～4)

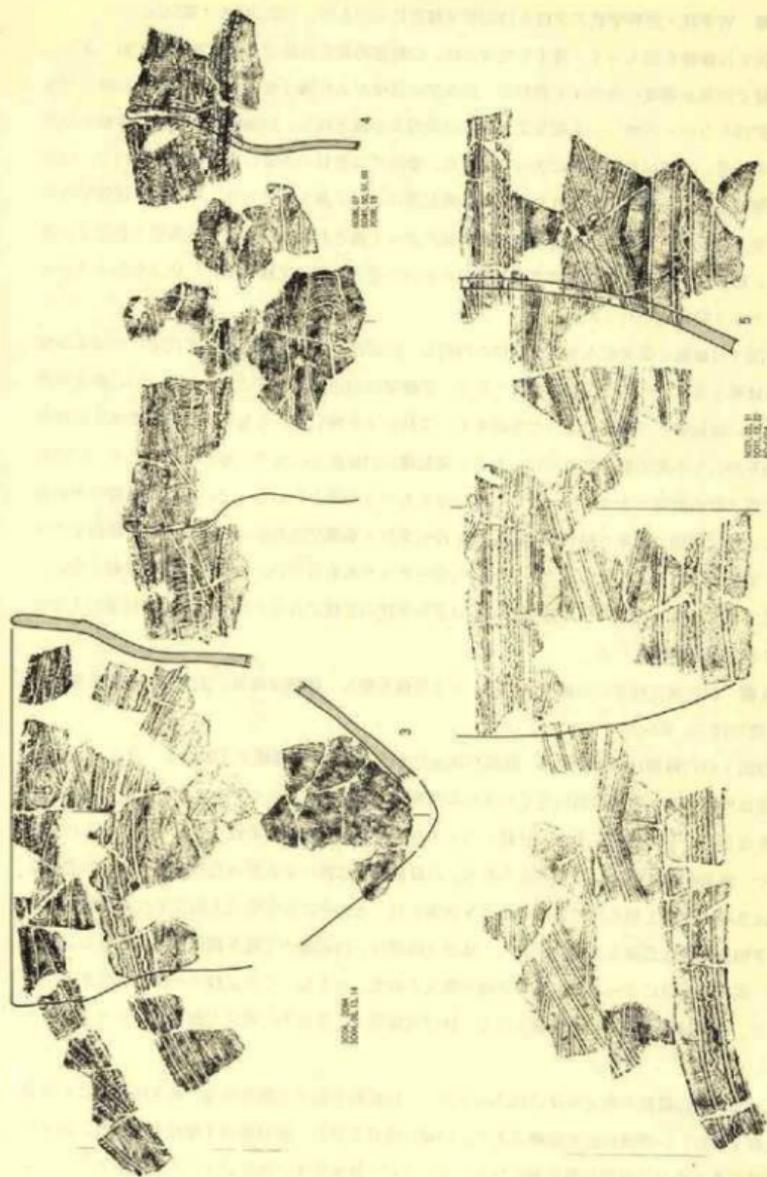
第51図3は繊維を微量混入し、焼成良好で薄手である。口縁推定外径27cm。口辺部はほぼ直口し、頸部が一旦くびれて、角度の開いた尖底になると考えられる。平縁の土器である。口端に貝殻腹縁圧痕がめぐる。口辺部文様帯の下部は貝殻文の付された細く低い隆起線によって画されている。口辺部文様帯は下半が欠失しているため、全体の構成が今一つはっきりしない。上半の文様は巻貝頂部による円点文を中心に弧線が向きあい、弧線の下端から左右斜め上方に直線がのびて、三角形の区画を作り、中に貝殻文を充填する。下半の文様もおそらく同様のものが逆転して描かれるのではなかろうか。頸部には波状文と直線が2条交互に配されている。

同図4は、繊維微量混入し、薄手で焼成良好。4単位のゆるい波状口縁を呈する。口辺はわずかに湾曲し、頸部は強く屈曲してゆるく膨らむ体部へ達し、底部は丸底風になるらしい。口縁部の推定外径は30cmである。口端及び裏側には刻み目がない。口辺部文様帯は先端の尖った工具による押引文によってその上下を画されるが、下部の区画は2条で、その間に細く低い隆起線がさまれている。口辺部の文様帯には同図3に近似する文様が施され、弧線の上下端には小形の円形刺突が付される。三角形の区画文は一部押引文、一部沈線文となり一定しない。体部の文様帯も口辺部と近似するが、円形刺突を中心に入組風の文様となる。

第54図2は繊維微量混入し、焼成良好。口辺部がわずかに内湾し、頸部はくびれる。ゆるい波状口縁で波頂部には低い突起が付され、突起の中央には貝殻文が押されている。口端には貝殻文が一部めぐる。頸部のくびれ上端には貝殻文が押された低い隆起線がめぐり、口辺部文様帯を画す。隆起線上には小さな瘤が付く(2B・2h)。口辺部の文様はやはり弧線と三角形を組み合わせた文様となっている。体部上半の文様帯もこれに近似する。頸部には細かな波状文がみられる。同図3・4もほぼ同様の口辺部文様をもつ。3は繊維を含まない。



第50図 A地点早期前半土器実測図2 (1/4)



第51図 A地点早期前半土器実測図3 (1/4)

第3種 W字状・逆W字状の文様を口辺部文様帯にもつもの。(第52図6、第54図5)

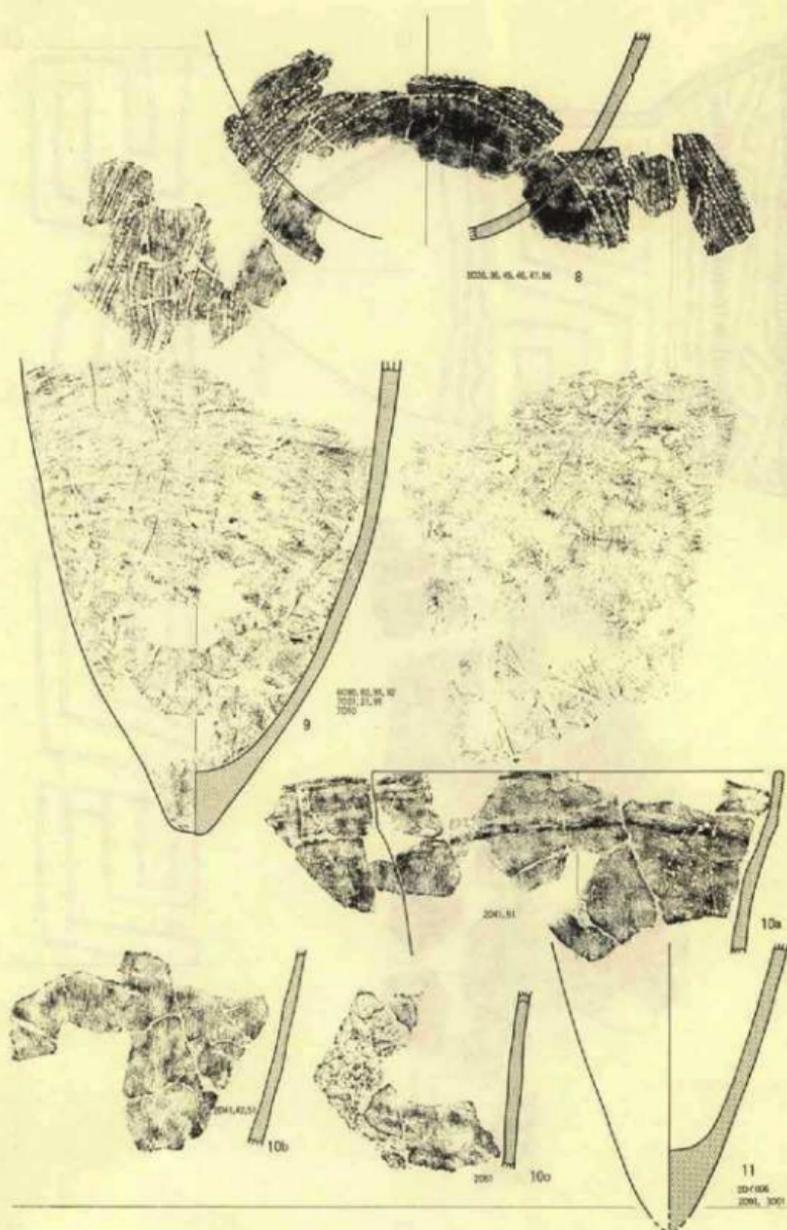
第52図6は繊維を混入せず、薄手で焼成良好。口縁部の推定外径は35cmであり、大形である。波状口縁で頸部が極度に屈曲する器形で、屈曲部は器壁がより薄くなっている。波状口縁の頂部は強く肥厚しながら内湾し、上端及び両脇には貝殻文が施される。口端内側は篋による細かい刻み目がめぐる。文様は貝殻腹縁によって施され、要所には巻貝の殻頂による円点文が付く。口辺部文様帯は上下を貝殻文の付された低く細い隆起線によって画されており、W字状・逆W字状の文様が交互に配される。上部区画帯と波状口縁によって画された空間には、三角形に貝殻文が施される。体部の文様帯は雷文風の文様と間隔のあいた逆三角形の文様の間に杵状文を組みあわせた文様とが2段に施されている。

第54図5は繊維を微量混入する。口縁が内折し、口辺部から体部にむかって次第にすぼまる単純な深鉢形と考えられる。口縁は平縁である。文様帯は口辺部と体部に分かれる。口辺部文様帯は細く低い隆起線と三角形に尖った先端をもつ工具による押引文からなり、文様の要所には巻貝の殻頂を押した小形の窟が貼りつけられる。隆起線は口縁直下に水平に添わせるものと、口辺部上半にW字状の両端が大きく開いた形で添わせるものとが組み合わさっている。隆起線の両裾及び2つの隆起線間に出来た杵状の空間には、押引文が1条施文される。口辺部下半の押引文はW字状の隆起線に平行するものとコの字状のもの2つがあるらしい。体部の文様帯は細く浅い貝殻条痕を地文とし、大ぶりな曲線文ないしは逆W字状の文様になると思われる。文様帯の上下は1条の沈線で画されている。

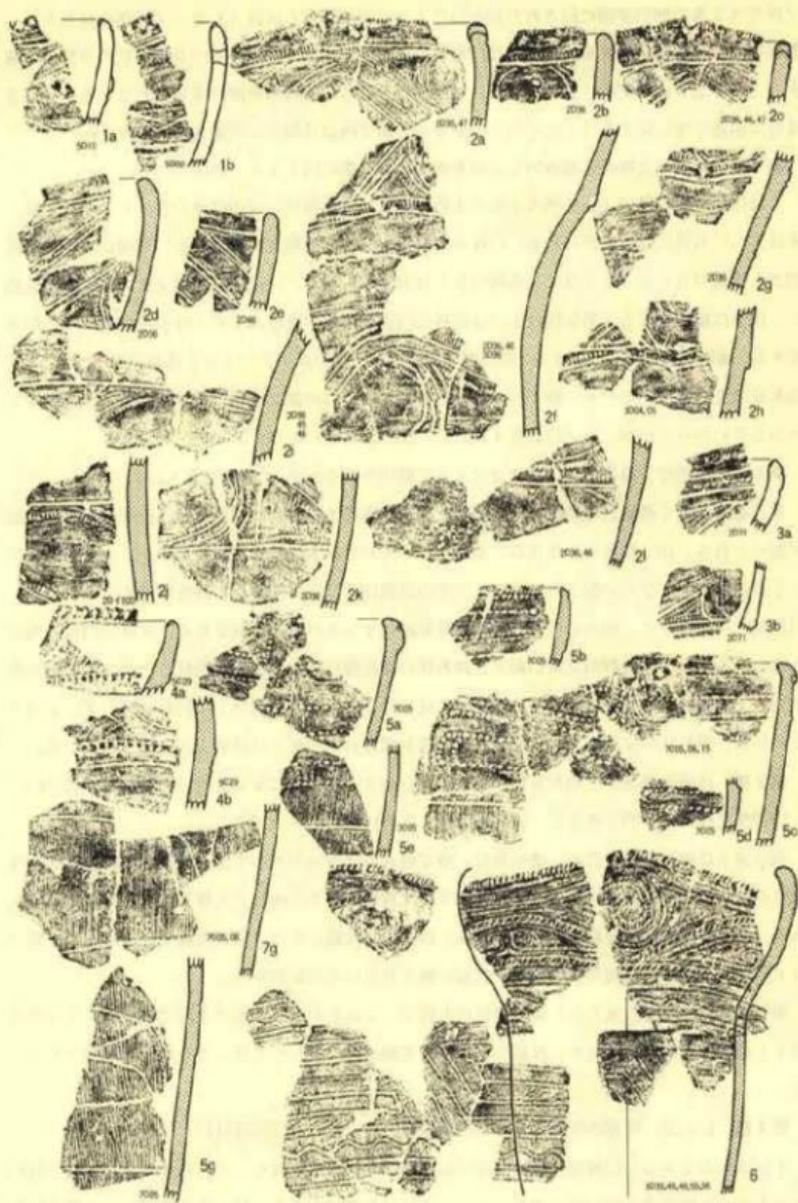
第4種 口辺部文様帯に曲線文を中心とする文様を配し、体部文様帯に雷文風の文様を施すもの。(第52図7、第54図6)

第52図7の口縁部は外径が31cm、器高が38cmである。胎土中に繊維を比較的多く含み、もろい。口辺部は外反しながら、口端付近でわずかに内湾し、頸部でくびれているため、キャリバー状の器形をなしている。体部下半は一旦軽くふくらみ、やや開き気味の尖底へとつづく。ゆるい波状口縁で、波頂部は6個になると考えられる。口縁裏側には篋による刻み目が施される。口辺部文様帯は2条の沈線と刻み目によって上下を区画され、その中にS字状の入組文を沈線で施している。空間部分には弧線文が充填される。体部文様帯は、口辺部の文様を描いたものと同じ、先端が丸く尖った工具によって雷文風の文様が施文される。ただし、この文様は一部で混乱をきたしている。沈線は部分的に結節沈線となる。体部文様帯の上下は平行線文と波状文によって区画されている。

第54図6の口縁部の推定外径は18.5cmであり、比較的小形の土器である。胎土中にはごく微量の繊維を含有し、焼成良好で堅緻である。口縁は波状を呈し、波頂部は4単位であろう。器形は口辺部がゆるやかに内湾し頸部がくびれたキャリバー状を呈す。体部はふくらみをもたない。文様は篋による刻み目、先端が細くとがった工具による押引文及び貝殻腹縁圧痕よりなる。口辺部



第53図 A地点早期前半土器実測図5 (1/4)



第54図 A地点早期前土器拓影図3 (1/3)

文様帯は2条の押引文間に付された刻み目によって頸部以下と区画される。文様帯内は刻み目、弧状文及び渦巻文を配する。押引文は口縁に沿うもの、渦巻文に沿うもの及び弧状の空間内の継手文というように副次的に施文される。貝殻文はこれらの文様の空隙に充填されている。体部文様帯は前述の第52図7とほとんど同じであるが、雷文内は貝殻文が充填されている。

第5種 口辺部文様帯に曲線的な文様を施すもの(第55図7・8、第56図12)

7は体部の最大径14.5cmを測る小形の土器。繊維は微量含む。口辺はやや外反し、頸部で軽くすばまって丸底になると思われる。口縁の表裏両上端には貝殻文が施される。文様は口辺部、体部とも先端が丸く尖った工具による押引文と貝殻文からなる。口辺部の押引文は大きく曲線を描く。体部は横帯となる。第56図12もほぼ同様の口辺部文様が施されるが、押引文自体は三角形を呈する。繊維はごく微量混入する。第55図8は隆起線と細い押引文によって曲線文が施されるが、隆起線の先端には小形の丸い瘤が付されている。本種の口辺部文様は、全体的にどのようなのかよくわからないが、城ノ台貝塚4種Cに一部近似したものがある。

第6種 口辺部文様帯が主に波状文によって構成されるもの。(第55図9・10)

9は繊維をごく微量含む焼成良好の土器。口縁の表裏上端に刻みが付され、波状と水平の沈線が認められる。10は繊維を少量含む、表面がややあれている。波状口縁であるが、大形の波頂部と小形の波頂部が交互に配されている。大形の波頂部には低い隆起線が鉢巻状にめぐっている。口辺部文様帯は狭く、刻みの付された低い隆起線によって以下と区画される。文様帯内は先端が丸味のある工具による押引文が口縁及び鉢巻状の隆起線に沿って1条、波状に1条、下部区画帯に沿って1条施されている。貝殻腹線文がまばらにみられる。頸部以下は同様の押引文によって三角形、菱形の文様や大ぶりの弧状の文様が描かれ、一部には貝殻文が充填されている。

第7種 体部文様帯が三角形及び菱形が組み合わさった文様になるもの。(第51図5、第53図8)

口辺部文様帯は不明であるが、あえて分類しておいた。

第51図5は繊維を微量含む、焼成良好。推定最大外径32cmの大形土器である。底部は丸底の可能性が高い。体部文様帯の上下を波状と水平の沈線によって区画し、文様帯内は直線によって三角形、菱形の区画文様を組み合わせている。区画内は沈線に平行に貝殻腹線文がまばらに充填されている。口辺部の文様にはわずかに弧線が施されていたのがわかる。

第53図8は繊維を少量含む、焼成良好の丸底で、これもあり大形の土器であろう。文様構成は5とほとんど同じであるが、沈線かわりに先端が丸く尖った工具による押引文が施されている。

第8種 口辺部、体部の文様帯とも単純な横帯となるもの。(第56図11)

1個体のみである。口縁部の推定外径は20cmであり、体部が軽くふくらむキャリパー状の器形を呈する。4単位の波状口縁と考えられる。底部は丸底であろう。胎土中に繊維をごく微量混入し、焼成良好で堅緻な土器である。口縁裏側には篋による刻み目がめぐる。口辺部中央に刻み目

がめぐり、口縁部と頸部に文様帯が分かれている。口縁部の文様帯は各々口縁直下及び刻み目の直上に沿って沈線がひかれ、貝殻文が充填される。頸部及び体部の文様帯は同一の文様が繰り返えされており、横帯の貝殻文は2段であるが、上下の横帯間はゆるい波状の沈線によって区画されている。体部文様帯の上下は波状文によって仕切られる。沈線自体の工具は細く鋭利なもので、深く施されており、他の田戸上層式の工具と異なっている。

第9種 全体の文様構成のよくわからないものを一括した。(第56図13-20)

13は口辺部にのみ文様帯があるもので、文様帯内には大ぶりの弧線が認められ、一部に貝殻文が施される。13b拓影中央には低い突起がみられる。14-17には細く低い隆起線や沈線による三角形の文様が施されている。19は瘤のついた低い隆起線による区画帯と波状文がみられる。20は先端が丸味をもって尖った工具による押し文が施されている。

第10種 刺突文のみが施されたもの。(第56図21・22)

2個体の出土である。口縁裏側に刻み目が施される。21は口端直下に篋による刻みがぐる。22は先端が直角に切られた工具による刺突列が施されている。いずれも繊維は含まない。

第11種 無文土器(第53図9-11、第56図23・24)

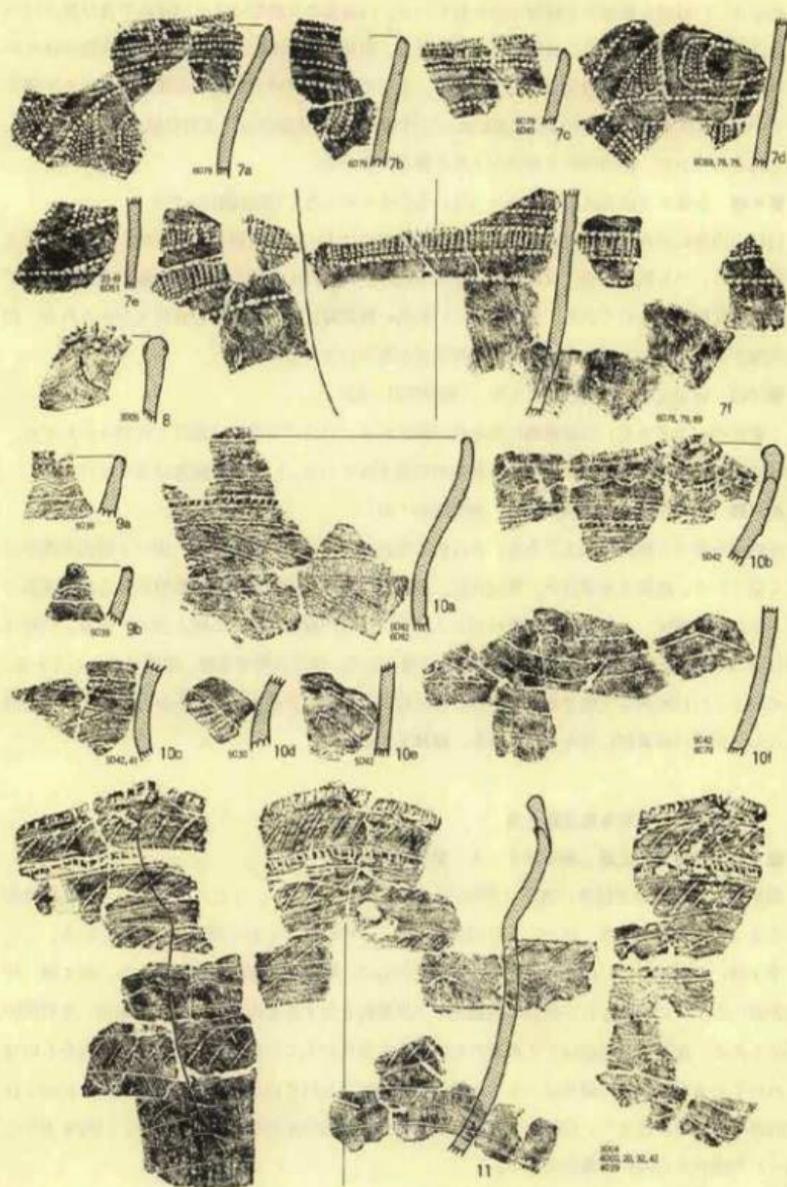
尖底部を含め5個体の出土である。9は最大径26cm、現在高32cmを測る。田戸下層式の器形によく似ている。繊維を少量含み、焼成良好。器表面は篋による横方向の整形痕がみられ、裏面には下半は主に縦位、上部は横位の擦痕がみられる。10の口縁部は推定外径が28cmである。口縁はほぼ直口し、頸部はゆるくくびれる。繊維を少量含むが、焼成良好で堅緻、器面は滑らかである。やや薄手。11は鋭角な尖底で底部は分厚。第56図23は口縁の表裏上端に刻みが付される。繊維混入なし。24は口縁裏側に刻みが付される。繊維を少量含む。

第3群土器 貝殻条痕系統土器

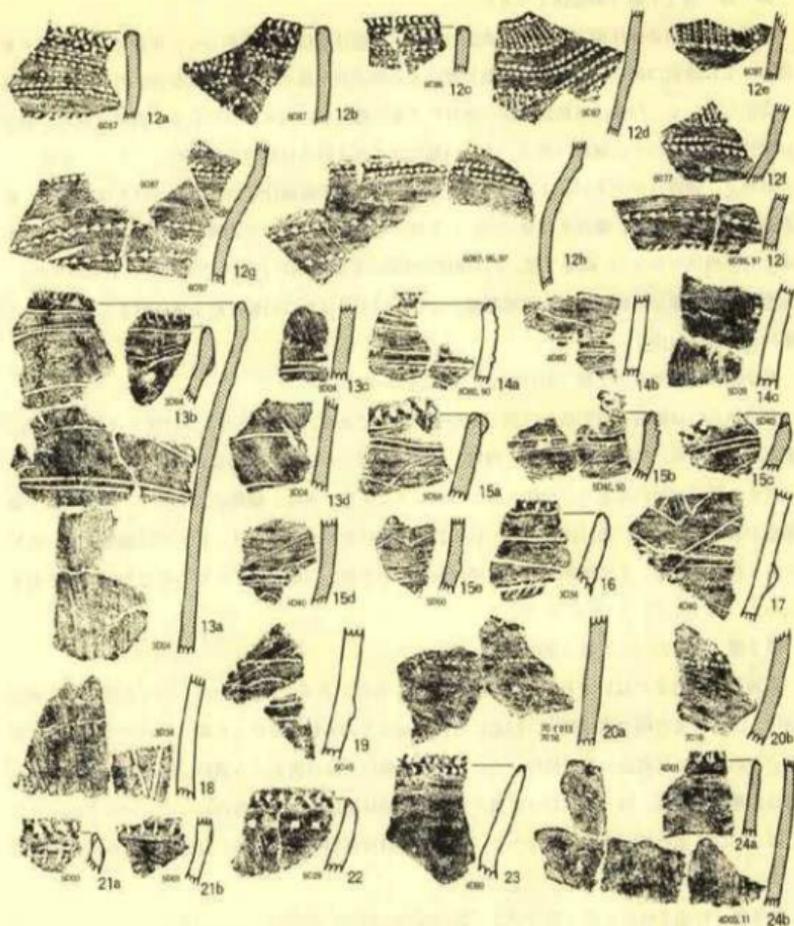
第1類 子母口式土器(第57図2・3、第62・63図)

器形のわかるもの2個体、破片は398点出土した。2C、2D、3C、3Dグリッドに比較的同時に出ており、ほかに5D00グリッド、6C82グリッドの周辺に出土している。

第1種、有文のもの、第2種、表裏とも無文のもの、第3種、擦痕の顕著なもの、第4種、片面条痕のもの、に分類した。色調は暗褐色から黒褐色を呈するものが多いが、黄褐色、赤褐色のものもある。繊維の含有量はごく微量のものから少量含むものがほとんどで、多量に含むものはきわめてわずかである。繊維痕が多くの場合器面にあらわれている。器壁の厚さは5-10mmで比較的薄手のものが目立つ。口縁断面は細く突るもの、口端が平らなものもあるが、口端を水平に切った角頭状の口縁が特徴的である。



第55図 A地点早期前半土器拓影図4 (1/3)



第56図 A地点早期前半土器拓影図5 (1/3)

第1種 有文土器(第62図1-6)

1は口端に絡条体圧痕をもつ。表面は無文、裏面は横位の擦痕がつく。平縁で、繊維は少量含む。2は波状口縁で、口縁部に多載竹管による刺突列が施される。刺突が深いため、裏面が軽く突出している。口端には拓影右端の部分に2本の細く鋭い刻みがみられる。表面は無文、裏面は横位の擦痕がつく。繊維は微量。3は口端にフネガイ科の貝殻の背圧痕がつくもの。平縁で、表裏無文。繊維はやや多い。4は同じくフネガイ科貝殻の腹縁圧痕が3条施された体部破片。表裏とも擦痕はない。繊維を多量に含む。5は一本引きの沈線が2条施された平縁の小破片。表裏とも擦痕はつかない。繊維少量。6は横位の沈線と拓影左端に右下りの沈線が3条認められる。裏面に横位の雑な擦痕がつく。繊維微量。なお、以上のほかに口端に絡条体圧痕をもつ無文の小破片が1個体分出土している。

第2種 表裏無文の土器(第57図2、第62図7-22)

無文あるいは擦痕か成形痕か区別のつかないものである。総数185点。第57図2は最大径17cm、器高32cmを測る。口縁部はわずかに内湾し、頸部が軽くくびれて鋭角な尖底へ続く。底部は厚味がある。器面は凹凸があり、全体にアンバランスな土器である。繊維の含有が多く、表裏ともに繊維痕が表われている。第62図12・13・15・22は口端に刻みが付く。8・10・12は繊維微量で砂粒を多く含んでいる。7は体部の最大外径12cmの小形土器。口端が水平に切られた角頭状の断面をもつ。

第3種 擦痕のつく土器(第63図23-42)

表裏面の両方またはいずれか一方に擦痕のつくものである。総数146点。23は表面右傾、裏面横位。24は表面右傾で裏は無文。口端には径2mmほどの半載竹管による鋭い刻みが付く。25は表面のみ右傾。26は裏面のみで横位。27は表裏とも横位。28は裏面のみ横位。29は表面のみ縦位。30は表裏とも縦位。31・32・37は表裏とも横位。33は裏面のみで多方向につく。34は表面のみで右傾。35は表面右傾、裏面は雑につく。36・38-41は裏面のみで横位。42は裏面のみ右傾の擦痕である。

第4種 片面条痕の土器(第57図3、第63図43-53)

表裏いずれか一方に貝殻条痕の施されるものである。総数62点。条痕の方向は縦位、横位、斜位と多様である。第57図3は口縁推定外径23cm、現存高22.5cmである。口辺部と体部の間に軽い屈曲がみられる。表面は凹凸があり、あれている。繊維の含有量は多く、表裏面ともに繊維痕が多くみられる。口端には半載竹管内側による刺突列が施されている。表面には縦位の条痕が付けられているが、口縁部は磨消され、部分的に条痕が残る。また、この無文部には一部丹塗りの痕跡が残っている。

第63図43は口端に刻みが付されている。43-48は表面に条痕が施されており、このうち裏面に擦痕のあるものは43・47・48である。49-52は裏面に条痕のつくもの、いずれも表面は無文であ

る。なお、51の表面拓影左上端には一部条痕がみられる。53は表裏に条痕が施されているが、浅く細く施され繊維も微量であり、一応本種に含めた。

第2類 野島式土器 (第57図1・第64図1～3、図版30・31)

4個体のみ出土である。出土地点は鶴ヶ島台式のそれと完全に重なっている。

第1種 区画文が貼り付けの細隆起線によるもの。

第64図2の1個体のみである。繊維微量で長石の微粒子を含む。焼成良好。波状口縁で、口端には刻みが付く。粘土紐の貼り付けによる細隆起線が垂下し、口辺部の文様帯を縦に区画している。区画内は細い丸棒状の工具による沈線によってさらに区画され、充填文は同じ工具による斜線文、多重の菱形文が施される。裏面は無文だが、2aの底部付近では表裏とも浅い条痕が付く。

第2種 区画文が貼り付けによらない細隆起線及び沈線で施されるもの。

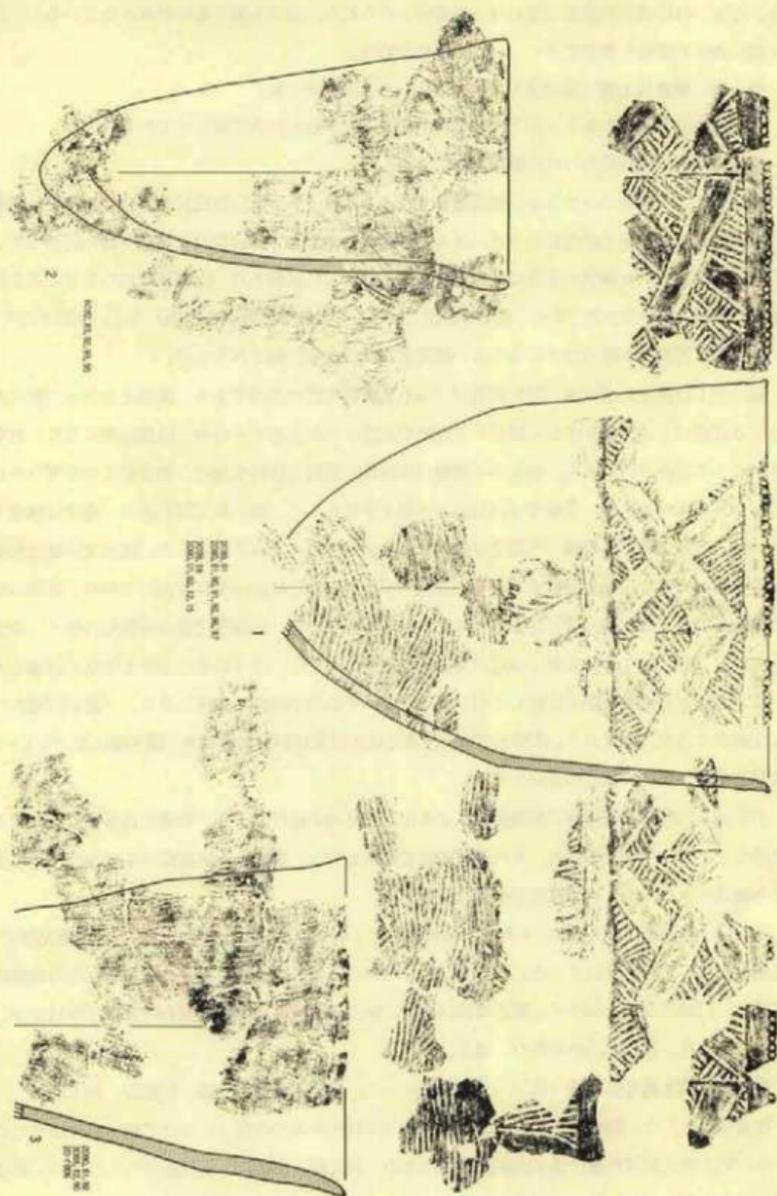
第57図1は推定口径28cm、推定器高34.5cmの比較的大形の土器である。体部上半から口縁にかけては直口し、体部下半から屈曲して丸底の底部になると考えられる。口端は細くなり、竹管外側による刻みが付される。胎土中の繊維は中程度で微細な砂粒を含む。器表面はややザラつており、焼成やや不良。文様帯は口辺部と体部上半にあつて、間に無文帯があり、完全に独立している。区画文は細隆起線、充填文は竹管外側による沈線によってなされる。区画文の細隆起線は第1種と異なり、その両脇を竹管外側で深く引きずることによって作り出しており、沈線はその後すり消されて細隆起線を浮き立たせている。したがって、区画無文部の両側端は低く、中央が高い。この区画文は口辺部では縦に文様帯を区画したのち、さらにその中をX字状に区画している。充填文の沈線は深く密接して引かれており、その内が細隆起線状となる。一部の区画内では沈線が多方向に施される。体部上半の文様帯では区画文は斜位と弧状で、縦区画はないらしい。体部下半及び裏面は横位の条痕である。

第64図3の区画文も同様の細隆起線による体部文様帯の破片である。充填文は多截竹管による沈線だが、やはり深く引かれ、その間が細隆起線状となる。裏面は浅い縦位の条痕がつく。胎土中の繊維は少なく、長石の微粒子が目立っている。

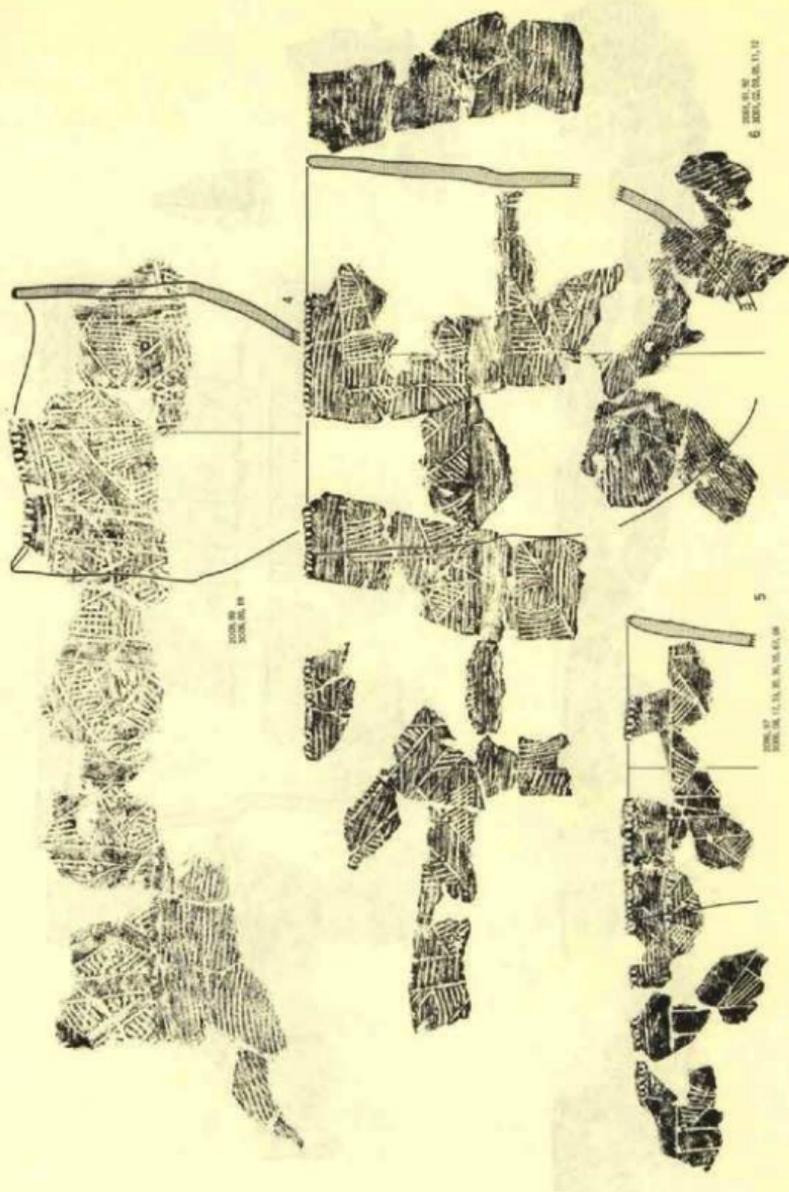
第64図1は区画文、充填文とも篋による細沈線によって施される。注意すべきは区画無文部で、指頭によってすり消されている。体部とは貼り付けの隆帯によって区画される。鋭い山形の波状口縁で、口端には刻みが付く。裏面は浅い条痕。胎土中の繊維は微量で長石の微粒子が目立つ。焼成やや不良。器面に凹凸があり、薄手。

第3類 鶴ヶ島台式土器 (第57・58・59図4～7、第64～66図4～16、図版23・30～32)

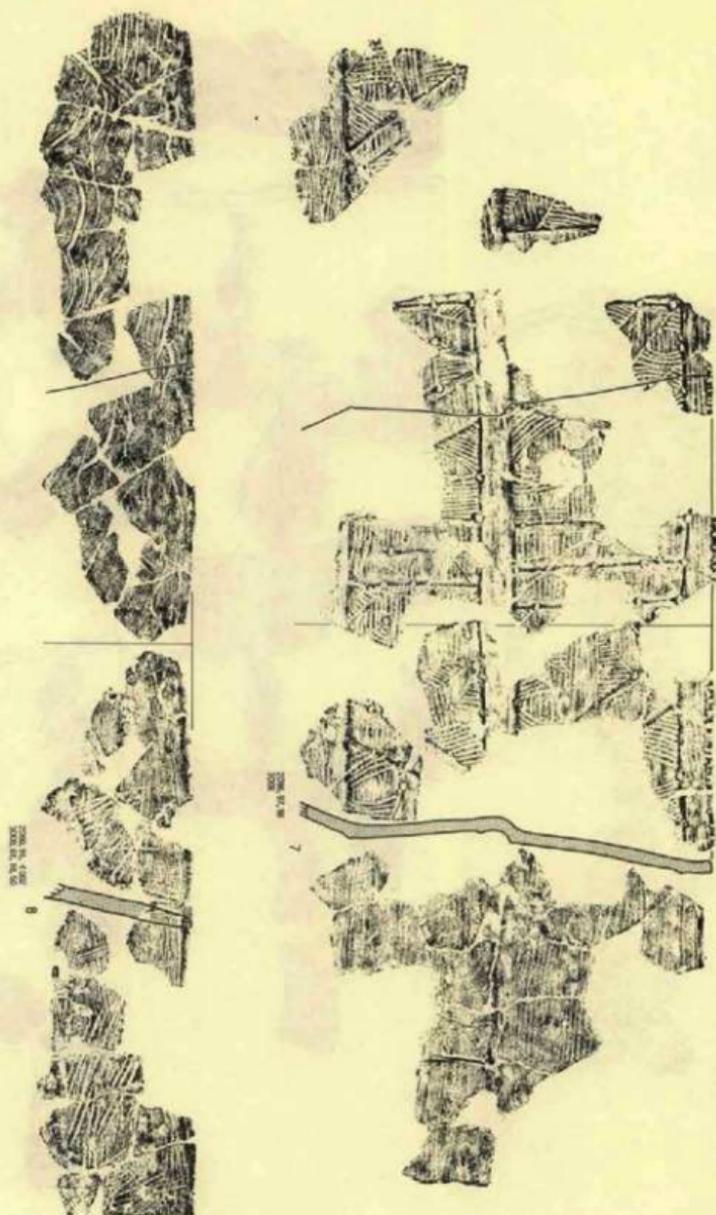
16個体出土した。野島式と同じく3D00グリッド周辺からその東方にかけて集中的に出土している。第1種、細隆起線による区画文をもつもの、第2種、沈線による区画文をもつもの、第3種、区画文をもたないものに分類した。



第57図 A地点早期後半土器実測図1 (1/4)



第58図 A地点早期後半土器実測図2 (1/4)



第59図 A地点早期後半土器実測図3 (1/4)

第1種 細隆起線による区画文をもつもの。

第59図7は口縁部推定外径34cmの大形土器である。口辺部はやや外傾し、その下は強くくびれる。体部にも屈曲部がある。口縁断面はわずかに内削ぎできざみがつく。胎土中の繊維は少量、長石の微粒子が目立つ。焼成やや不良。条痕は表裏とも横位で不完全にすり消されている。区画文に用いられた細隆起線は野島式第2種の細隆起線と同じ技法により篋で作り出されたもので、上下2段の文様帯とも文様帯の区画、3条の縦位区画、及び斜位の区画文として使用される。細隆起線の区画文内はさらに、細い半載竹管外側による沈線で直線、弧状に区画され、充填文も同一工具による集合沈線である。区画文の要所に配された刺突文は、充填文に使用された半載竹管により軽くえぐるように施されている。

第64図4の細隆起線も同様に篋で削り出されたものであるが、非常に低くほとんど形骸化している。このため区画文は細沈線によって改めて強調される。充填文は半載竹管外側による集合沈線。区画文の要所に配された刺突文も同一工具による。体部及び裏面は横位の条痕。口縁には管状の把手がつき、波状をなす。第65図5は口辺部文様帯の細隆起線が貼りつけによるもので、渦巻状をなし区画文に見えない。一部に施された充填文は細い円形竹管による斜位刺突である。くびれ部分の文様は円形竹管文と、これを連結するように施された多載竹管による沈線文である。条痕は細く表裏とも横位で表面は軽くすり消されている。

第2種 沈線による区画文をもつもの。

11個体出土した。

第58図4は口辺がやや内傾し、体部で内側に折れている。推定口径19.5cm、現存高20cm。ゆるやかな4単位の波状口縁である。繊維少量で長石の微粒子が目立つ。焼成不良。文様は区画文、充填文とも半載竹管外側による沈線で施される。各波頂部及びその中間に縦区画を配し、その間をX字状を基本とした区画文が施されるが、各縦区画内で少しずつ異なり、一部に弧状の区画文が認められる。区画文の要所には刺突文が付されるがまばらで不規則である。条痕は表裏とも横位。

第58図5は口縁推定直径20cmを測る。胎土中に繊維を少量含み、長石の粒子が目立つ。表面の条痕は軽くすり消され、裏面は無文。区画文、充填文とも篋による沈線である。区画文の要所に配された刺突文は丸棒状の工具による。

同図7は口縁推定径27cm、器高は30cmを越える。口縁は直口し、体部上半で一旦くびれた後、丸底に近い平底になると考えられる。胎土中の繊維は少量で、長石の微粒子が目立つ。焼成やや不良。器表面の条痕は体部下半は細く、文様帯のある部分は太い別種の条痕である。口辺部と体部上半の文様帯はほぼ同じであるが、後者は縦位区画がより広い。区画文、充填文とも細い竹管外側で施文され、要所の円形竹管刺突と同一工具である可能性が高い。

第65図5は口縁断面が細く尖り、口端に鋭い刻みがつく。繊維を微量含み、長石の微粒子を多

く含む。焼成やや不良。条痕は斜位で細い。口辺部文様帯は貼り付け降帯によって体部と画される。区画文は細い竹管外側を用いてなされるが、不明瞭で5dでは隆起帯直上まで区画されていない。充填文は細い竹管外側による押引文、細い篋による集合沈線、多載竹管による集合沈線の3種が不規則に施される。区画文の要所には区画文と同一の細い円形竹管の刺突がつく。同図7は口辺部からくびれ部にかけての破片で、細沈線による区画文内に竹管外側による集合沈線が充填される。bによれば体部文様は区画文がないらしい。区画文上の刺突文は半載竹管による。8・11は区画文、充填文とも7と同じ。ただし8は口端直下から直接文様が始まっている。10は竹管外側による区画文と円形竹管による斜位刺突の充填文、12は充填文が多載竹管による集合沈線である。9は区画文が1条の太い竹管外側による沈線によってなされ、充填文は別の円形竹管による斜位刺突と短沈線によって施されるものである。したがって、区画文上には刺突文が付されない。

第3種 区画文のないもの。

13はaの拓影上部に篋による鋭い横位の沈線がみられ、以下竹管外側による格子目文が施される。体部上半の文様帯部分の破片であろう。14は条痕を縦位と横位に施し、文様としている。15は体部下半の破片で乱雑な篋による細沈線がみられる。16は口縁部からくびれにかけて全面に太い多載竹管による横位の沈線が施される。dによって大形の波状口縁を有する土器であったことがわかる。

第4類 (第59図8、図版30)

全面に半載竹管による乱雑な弧線の文様が施されるもので、型式不明。芽山上層式以降か。口縁推定径38cm。胎土中の繊維は微量で、長石粒が目立つ。焼成はかなり良好で、裏面の条痕は雜に付く。

第5類 器表裏面とも条痕の土器 (第60・61図9～15、第66～69図17～52、図版23)

条痕のみの土器は比較的多く出土した。出土位置は鶴ヶ島台式の分布とはほぼ重なり、より広く分布する。全般に繊維の含有量は少なく、長石、微細な砂を含むものがほとんどで、中にはやや大粒のものを多く含んだものもある。焼成は比較的良好なものややや不良なものや相半ばし、非常にもろいものや堅緻なものはない。器壁の厚さ6～7mm前後のものと9mm程度のものが大部分で、10mmを越す厚手のものはほとんどない。条痕の方向は多様で多方向のものや部位によって走行の異なるものもあるが、横方向の条痕も比較的多くみられる。条痕の太さは細めのものが目立ち、比較的浅く施されたものが多い。口端に刻みの付されたものとそうでないものとに一応分類した。

第1種 口端に刻みを付されたもの。(第60・61図9～12・14・16、第66・67図17～29)

第60図9は口縁推定径28cm、器高36.5cmの大形の土器。太目の条痕が表裏面とも横位に施される。口縁は直口し、次第にすばまって丸底となる。口端には大きく深い刻みが密接して付され、小波状をなしている。繊維の含有少なく、焼成比較的良好。鶴ヶ島台式かと思われる。

同図10は口縁部推定外径28cm、現存高27cmの大形の土器。繊維は微量で、長石の微粒子を多く含む。器面に凹凸がある。口端の刻みは半載竹管内側によるもの。表面の条痕は口辺部が横走り、体部は縦位である。条痕の走行が異なる部分には屈曲部はみられないが、明らかに轆ヶ島台式の文様帯構成を意識している。

同図11は口縁部推定径が26cmである。繊維は多めに含まれ焼成不良。薄手の土器である。器面の凹凸が激しい。表裏とも多方向の条痕が施される。第61図12は口縁部推定径27.5cmである。繊維をやや多く含む。口縁断面は細く尖る。口端の刻みは細い半載竹管内側による。裏面の条痕は口縁部で横走り、底部にむかうにしたがって次第に右下りとなる。同図14・16はともに繊維微量で、長石の粒子を多く含んでいる。口縁断面は内削ぎになる。ともに条痕は浅い。

第66・67図17～19・21～25・29は薄手の土器。口縁断面がやや薄くなるものと尖るものが多い。口端の刻みは大部分は竹管外側によるが、18は篋による細く鋭い刻みである。22も篋による刻み、21・23は多載竹管を口端にそって斜め上方から連続刺突した刻みである。また29は半載竹管内側による刻み。20・28は器厚8～9mmの中程度のもの。20は口縁断面がやや薄くなるもの。28は内削ぎ状である。20は胎土中に長石粒を多量に含んでいる。

第2種 口端に刻みの付されないもの。(第61図13・15、第67・68図30～34)

刻みの付されたものより個体数は少ない。第61図13は口径16.5cm、器高22cmの比較的小形の尖底土器である。口縁断面は内削ぎとなる。繊維少なく、長石粒を多く含む。器面はザラついている。条痕は表裏とも口縁部は横走、以下は縦位である。同図15は口端付近が内折し、うすく尖る。口縁部の上面観が隅丸形状になる。第67・68図の口縁部破片では内削ぎ状の口縁断面をもったものが多い。特に33は轆ヶ島台式のそれに近似する。32の口端には条痕と同一の貝殻による背圧痕が付され、34の口端には横走する条痕が認められる。

第3種 体部から底部にかけての破片(第68・69図35～52)

38は丸底になると考えられるもの。39・41は丸底に近い平底と思われる。40・42は平底で、42は上底となっており底面にも条痕が付く。

第4群土器 前期繊維土器及び浮島式系統土器

第1類 黒浜式、植房式土器(第70図1～16、図版33)

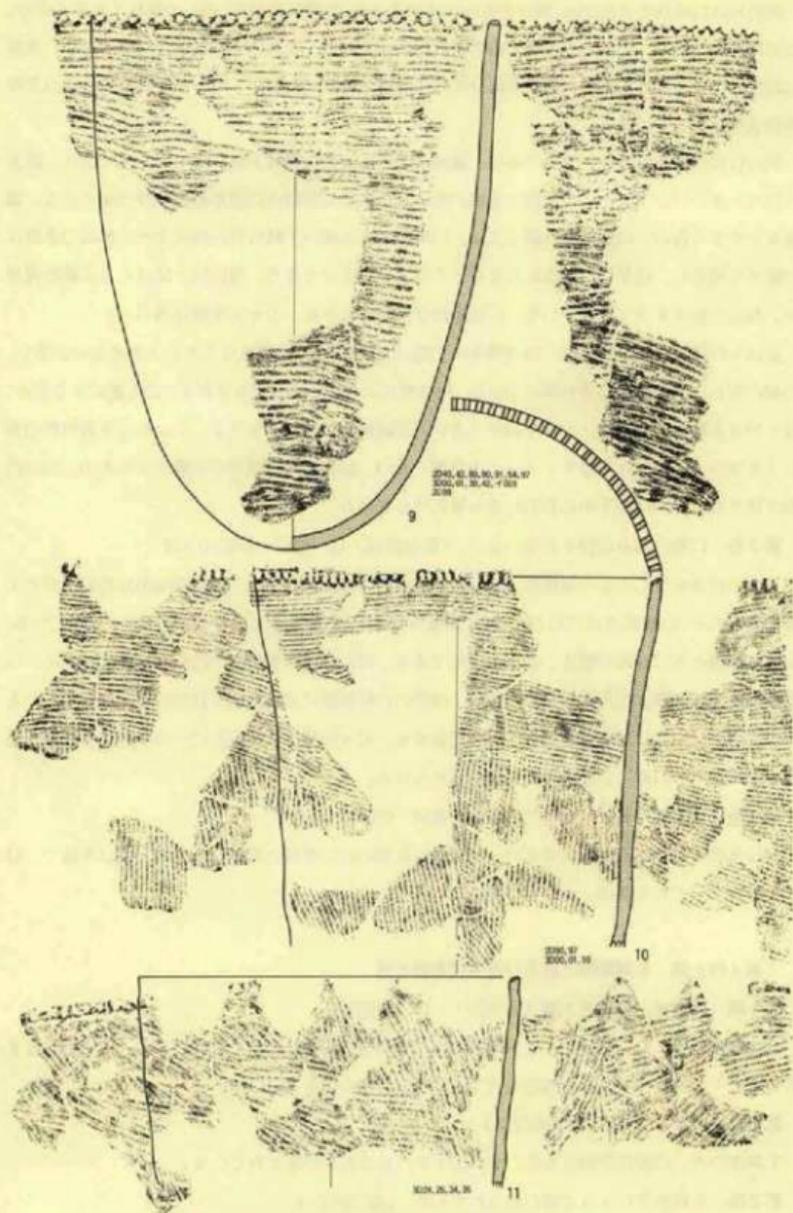
個体数16と少ない。繊維を多く含み、内面が滑沢を呈するものが主体的である。出土地点は6 Bグリッドを中心とし、その周辺のグリッドからも多少出土している。

第1種 突帯をもつもの。(第70図1)

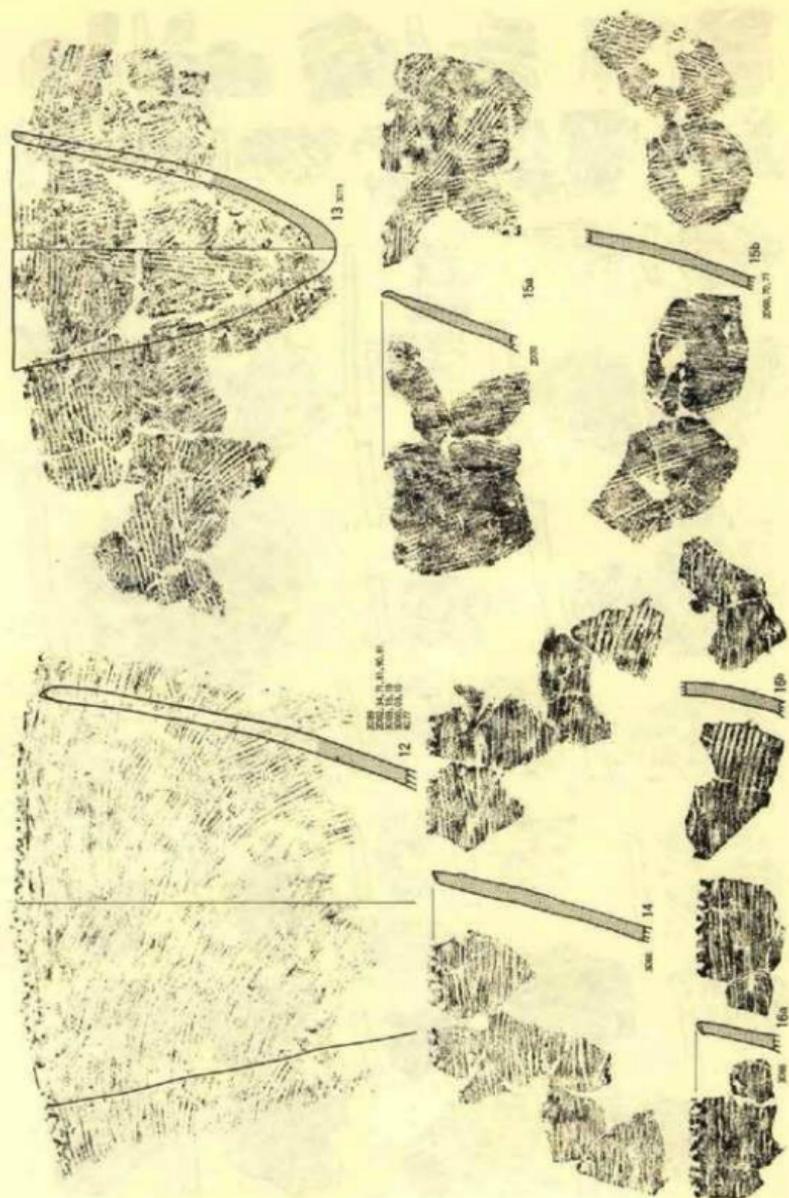
1個体のみ。口縁に突帯をもち、その上下に円形竹管文が施されている。

第2種 半載竹管による文様が施されたもの。(第70図2～6)

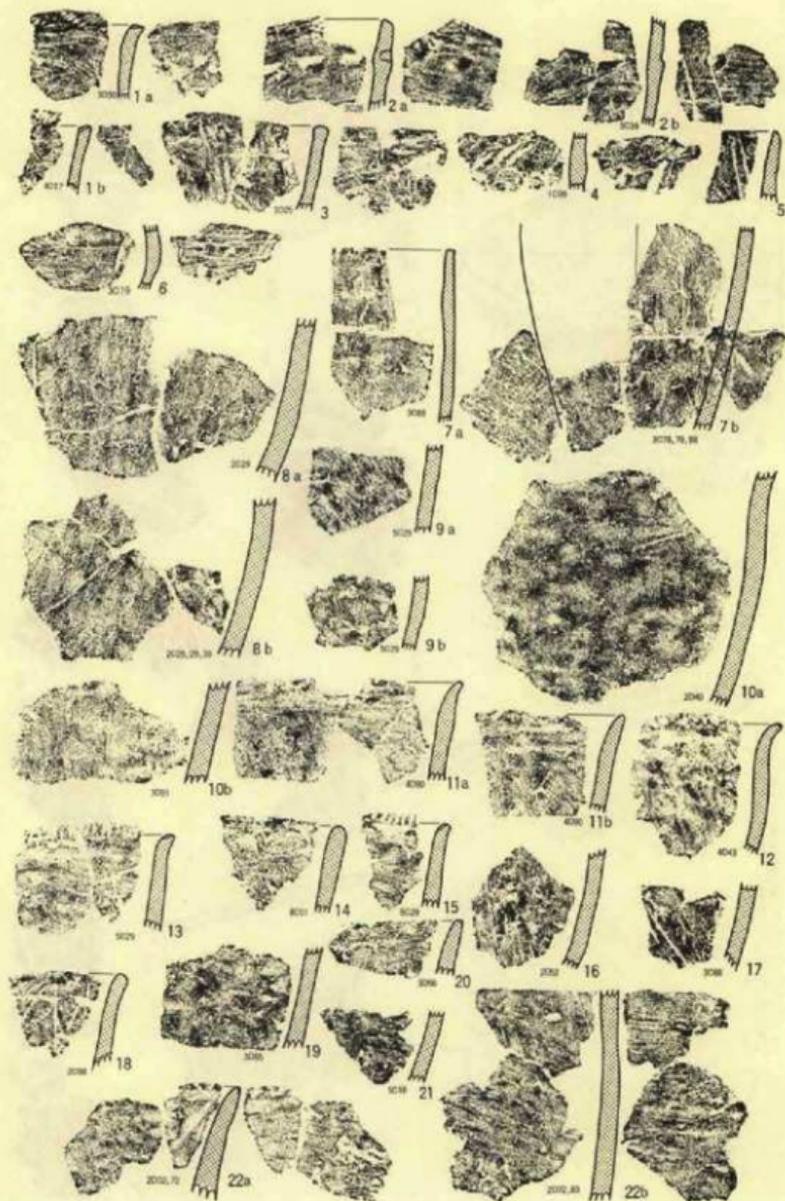
5個体出土した。2は口縁部に大きな弧状の文様を2段施している。3は波状口縁で多載竹管



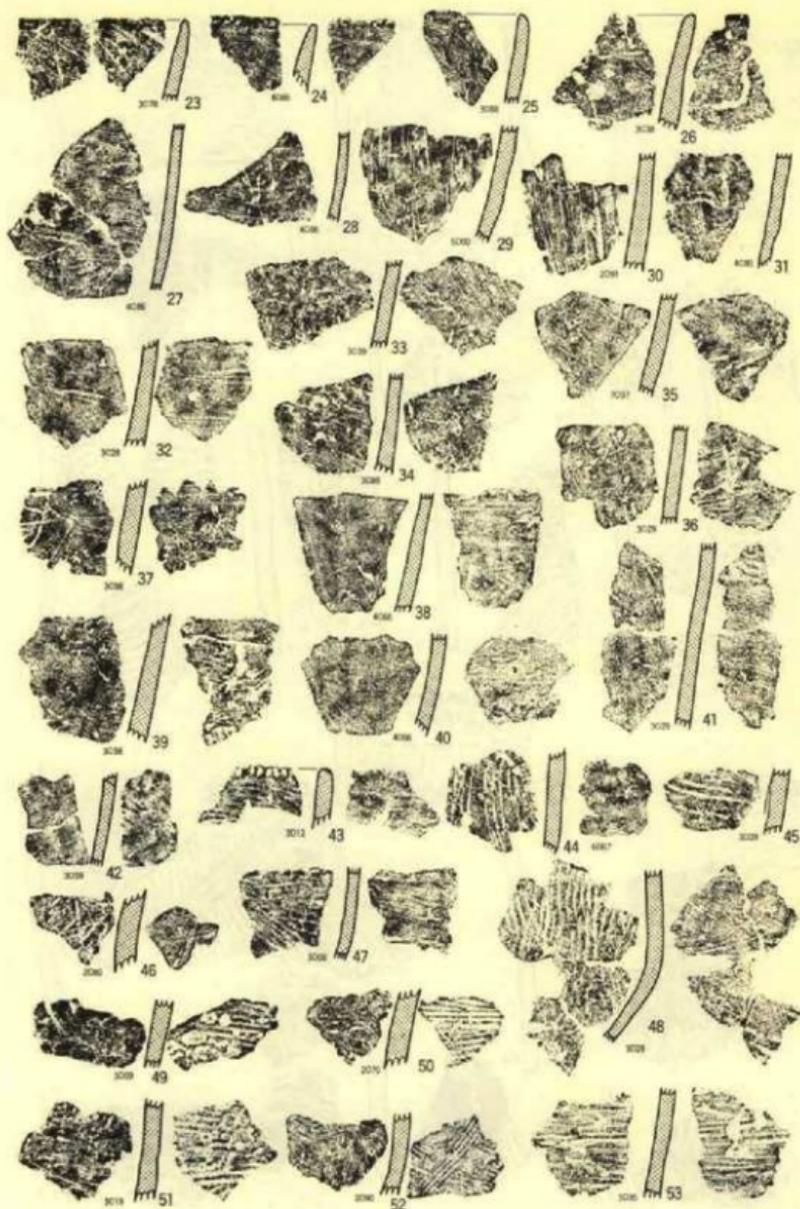
第60図 A地点早期後半土器実測図4 (1/4)



第61図 A地点早期後半土器実測図5 (1/4)



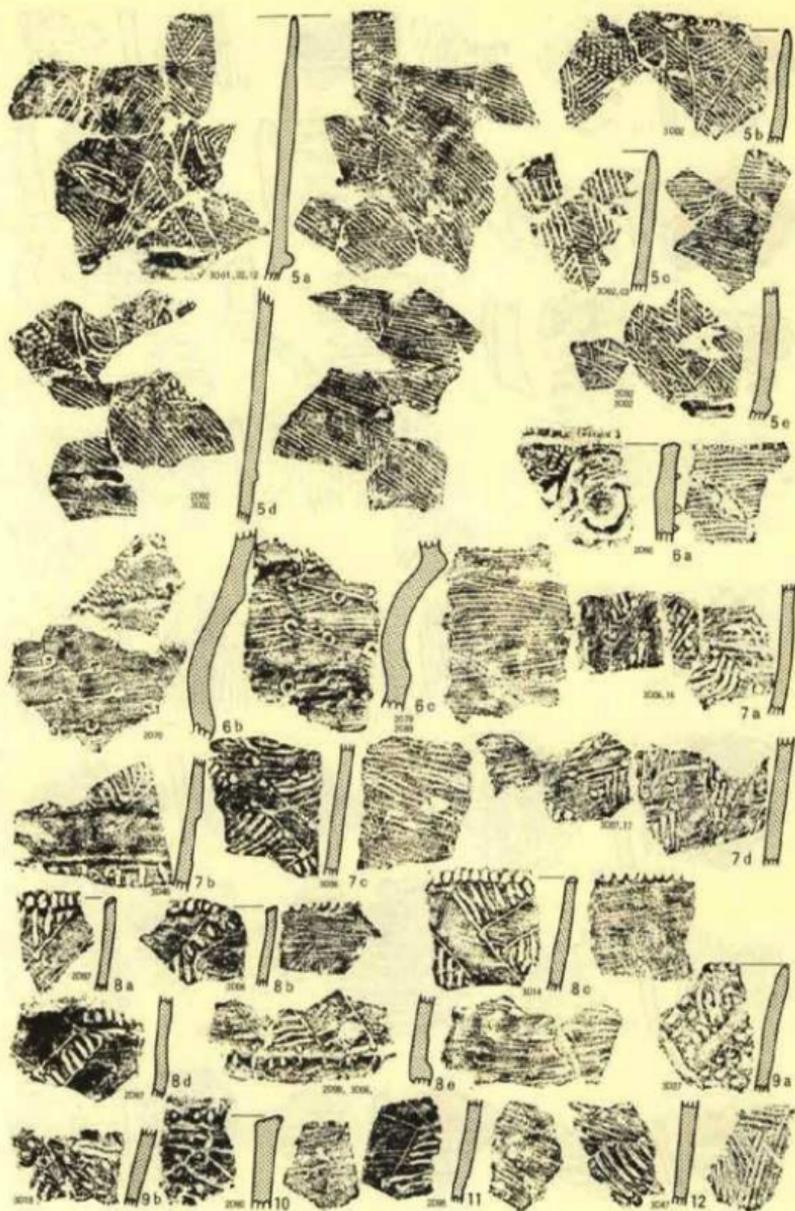
第62図 A地点早期後半土器拓影図1 (1/3)



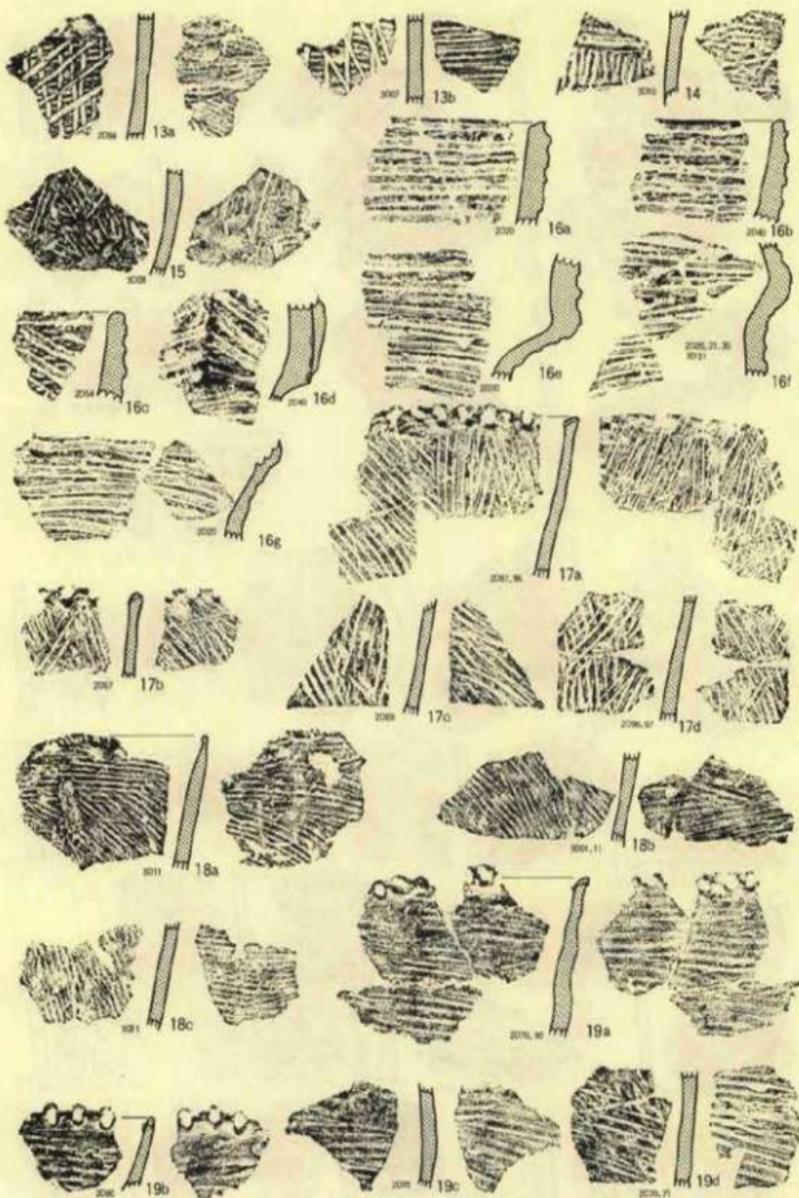
第63図 A地点早期後半土器拓影図2 (1/3)



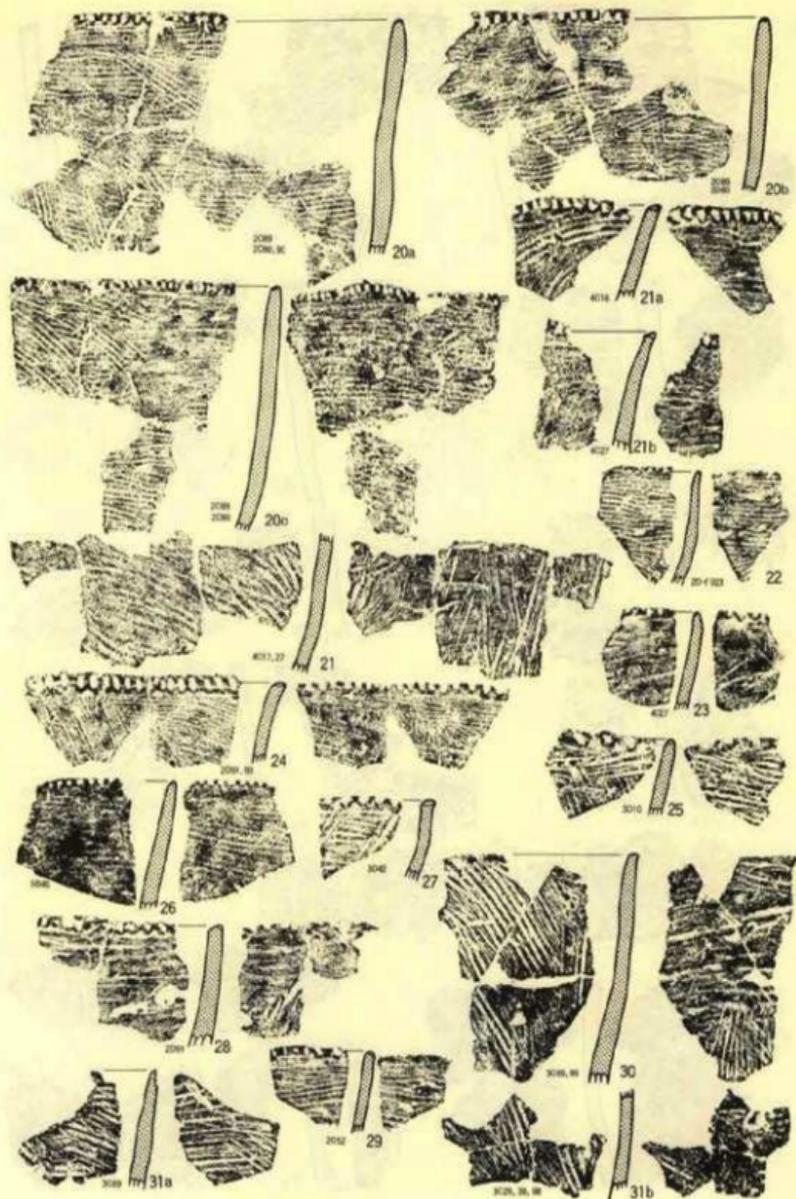
第64図 A地点早期後半土器拓影図3 (1/3)



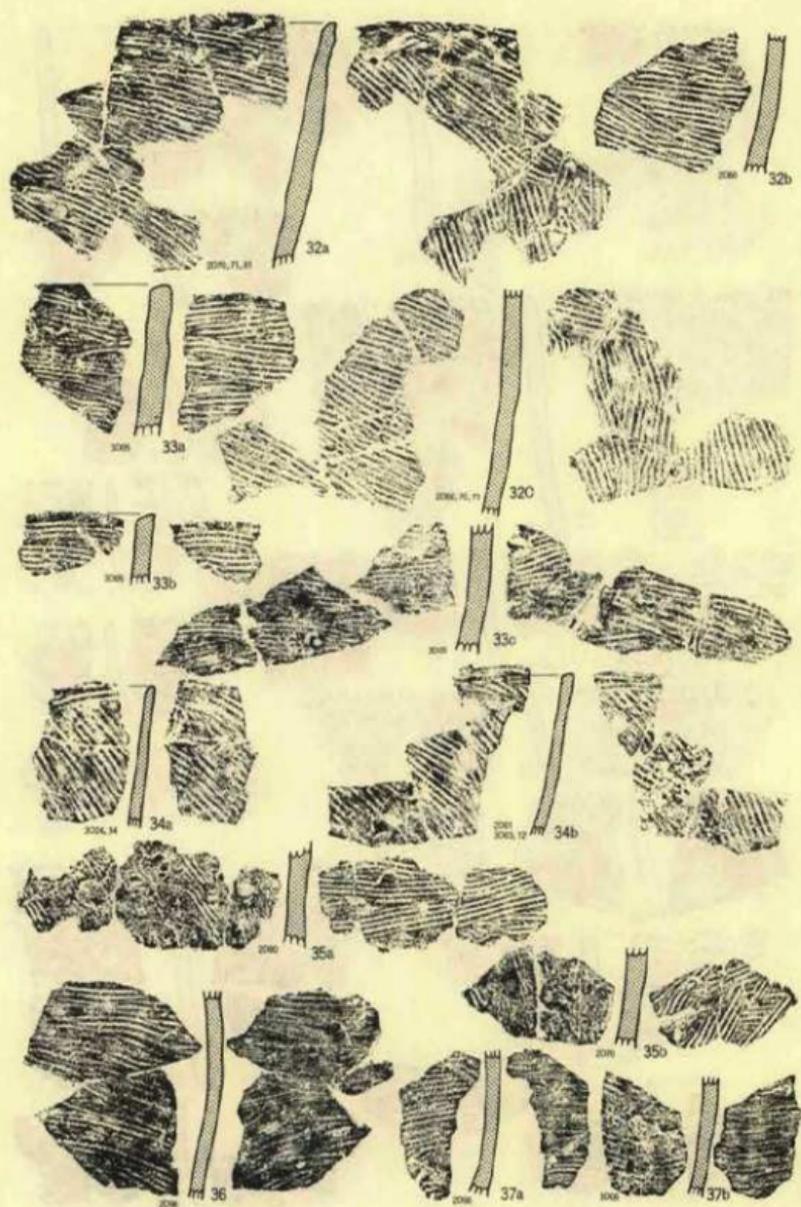
第65図 A地点早期後半土器拓影図4 (1/3)



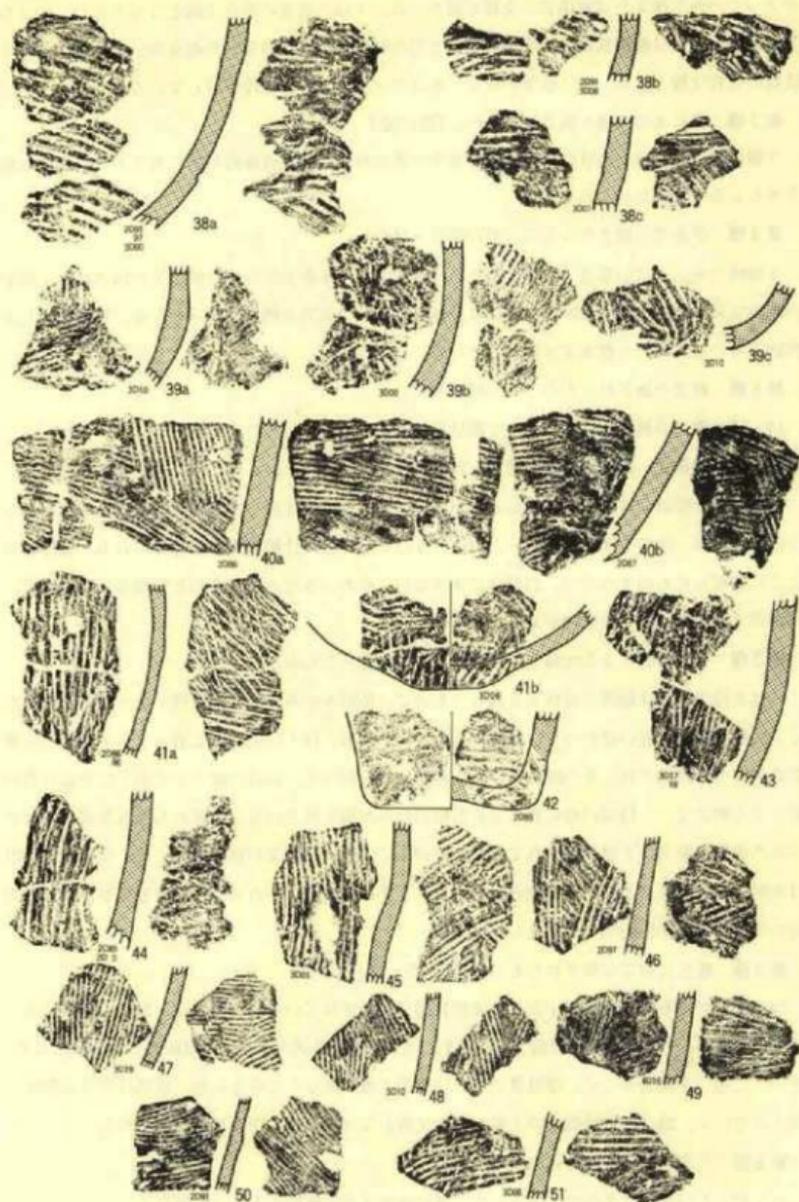
第66図 A地点早期後半土器拓影図5 (1/3)



第67図 A地点早期後半土器拓影図6 (1/3)



第68図 A地点早期後半土器拓影図7 (1/3)



第69図 A地点早期後半土器拓影図8 (1/3)

によって三角形または鋸歯状の文様が描かれる。4は小波状の集合沈線となっており、やはり三角形ないしは鋸歯状の文様を構成すると思われる。工具は竹管の外側を用いている。5も小波状の集合沈線となる。bは底部の破片。6はコンパス文で、3段平行している。

第3種 柳による文様が施されたもの。(第70図7・8)

2個体出土。7は小波状の集合沈線が水平に施される。8は直線的に施されており、aには垂下する2条の沈線がみられる。

第4種 燃糸文の施されるもの(第70図9~11)

3個体のみ。9は口端直下を無文帯とし、その下から4条単位の細い燃糸文が施される。燃紐の原体はR。10は太目の燃糸文。aには原体がRとLの両方の燃糸文がみられる。11はRとLの燃紐をあわせて絡げた燃糸文が施されている。

第5種 縄文の施されたもの(第70図14~16)

14・15は燃りの異なる縄文を施して羽状を構成する。16はLRの縄文。

第2類 浮島式、興津式土器(第70・71図17~43、図版33・34)

本類は谷の傾斜のはじまる部分からやや内側に入った位置に沿って調査区のほぼ全体にかかって出土したが、中でも3D00グリッド周辺、4Cグリッドに比較的集中が認められる。個体数はここに掲載したもののすべてで、27個体にすぎない。なお、B地点をも含めた分類を行ったので、本地点では出土していない種がある。

第2種 半載竹管による沈線文、変形爪形文の施されたもの。(17~22)

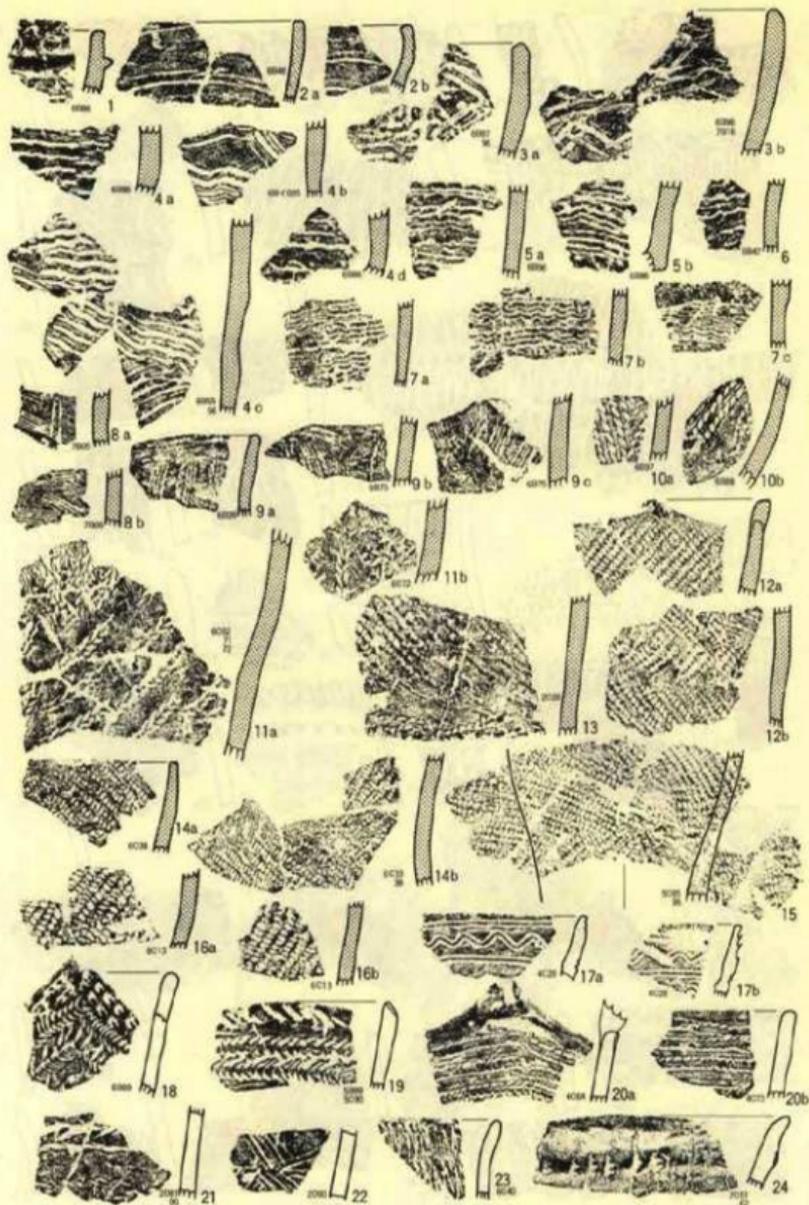
17は2段の平行沈線間に波状文を施したもので、拓影bから波状文が2段であったことがわかる。口縁裏側には軽い段がつく。諸磯a式かと思われる。18・19は口縁に沿ってやや大きめの変形爪形文が2段施され、その間に篋による左傾の刻みがつく。18は口縁とその直下に半載竹管内側による刺突文が、19は口端に篋による右傾の刻みが施されている。いずれも浮島Ⅲ式。20は小ぶりの変形爪形文が3段に施されており、その下には平行沈線文が施されている。浮島Ⅱ式。21は大形の変形爪形文とその中に刻みが施され、下半には綾絡文がみえる。浮島Ⅲ式か。22は多方向の平行沈線文が拓影中央で集合している。

第3種 波状貝殻文の施されたもの。(23~25・27~30)

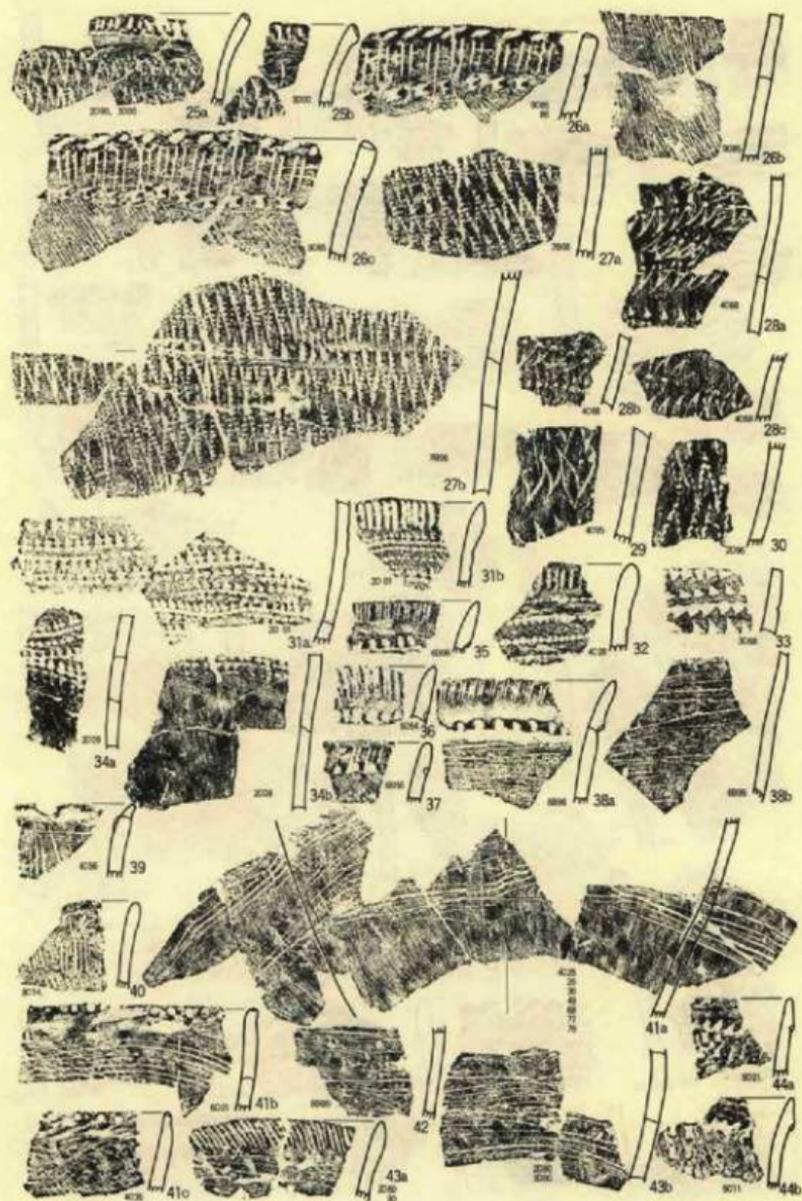
23は口縁がゆるく外反し、小ぶりの波状貝殻文が施されている。浮島Ⅱ式。24は口縁下に低い隆起帯があり、その上に波状貝殻文の施されたもの。浮島Ⅱ式か。25は口縁断面が片刃状となり、その上に短い条線帯がつく。浮島Ⅲ式。27は大型土器であったと考えられ、波状貝殻文は整然と施されている。28は波状貝殻文の上端が三角文風となっており、浮島Ⅲ式と思われる。

第5種 三角文の施されたもの(31~34)

31・32とも口縁部に条線帯がみられる。34は体部下半の破片である。浮島Ⅲ式。



第70図 A地点前期土器拓影図1 (1/3)



第71図 A地点前期土器拓影図2 (1/3)

第6種 凹凸文のあるもの。(35-37)

35・36とも口縁の折り返し部分に竹管によると思われる凹凸文を施している。36の体部は第7種と同じ柳歯による条線文となっている。37は口縁部条線帯の下が凹凸文ではなく竹管裏側の刺突文であり、以下無文。他に含めるべきところがなかったので、一応ここに類別しておいた。いずれも興津式。

第7種 口縁部から体部にかけて条線文の施されたもの(38-42)

38・39は半截竹管による縦位の条線文。38は口端に指頭状の圧痕があり、興津式。39は口縁断面が丸味をもち、わずかに外反しており、浮島Ⅱ式かと思われる。40-42は柳歯条線文の施された土器。40には口端に竹管の背によると思われる圧痕が付されており、興津式。42は口縁部に条線帯があり、口縁断面が片刃状をなしているの、浮島Ⅲ式と考えられる。

第8種 型式不明の土器(43)

口縁の折り返し部分に三角形の刻みが付き、体部には垂下する2条の刺突列と左傾、右傾の平行沈線文が施されている。浮島、興津式には該当しない。

第5群土器 前期末から中期初頭にかけての土器

浮島式系統土器以降に位置する縄文を多用した土器、無文土器及び五領ケ台式を本群とした。出土したほとんどの個体について掲載した。調査区のはほぼ全域から比較的散漫に出土しているが、谷側にやや片寄る傾向にあり、2C80グリッド周辺に集中した分布が認められる。

第1類 横位回転の結節縄文の施されたもの。(第76図1、第72図1-16)

黄褐色から暗褐色の色調のものが多く、一部には赤褐色のものもある。胎土中に長石の微粒子を含む。焼成やや不良の土器が多い。大部分前期末と考えられるが、一部中期初頭の可能性のあるものもある。

第1種 太くかつ粗い結節縄文が施されたもの。(第76図1、第72図1-5)

口縁部付近に1段から数段にわたって輪積みの痕跡や凹凸が残るのを一つの特徴とする。第76図1は口縁推定外径28.5cm、現存高33cmの脷長の大形土器である。口縁部に弱いくびれをもち、口端には低い舌状の突起が3個付けられている。微細な砂、長石の微粒子を含み、黄褐色から暗褐色の色調をもつ。口端直下は幅の狭い無文帯となり、以下太く粗雑な結節縄文が施されている。縄文はLR。

第72図1は結節自体は粗雑だが、回転縄文は比較的整っている。口端にも同様の回転縄文が付く。2-5は第76図1と同じく縄文より結節が強調されているもの。4-5は結節内に縄の節、繊維痕がなく、樹皮や動物の腱によるものと思われる。

第2種 結節縄文が口縁部にのみ施されるもの。(第72図6-9)

結節縄文よりむしろ口端の縄文に特徴がある。第1種と同じく輪積みの痕跡や凹凸が認められ

る。6・7は口端に口縁部と同じLRの回転縄文が施される。8・9は同個体の可能性があるが、口端にLRの縄による縦の押捺がみられる。

第3種 細く整った結節縄文の施されるもの。(第72図10-16)

10は折り返し風の口縁をもつ薄手の土器。結節縄文は約1cmの間隔をあけて施されている。12は縄文原体の先端から結節された末端まで器面に現われている。原体の長さ3cm。13の結節縄文はやや太目である。縄文の燃りは13の不明を除き、LないしLRに限られている。

第2類 縦位回転の縄文が施されるもの(第73・74図17-42)

第1類に比べて色調が赤褐色を呈し、長石の粒子を多く含んで器面のザラつくものが多い。中期初頭から阿玉台式直前の段階にかけてのもので、多くは新しい方に属するものと思われる。

第1種 縦位の結節縄文をもち、口縁が直口のもの。(17-18)

17は結節縄文が横位に施された後に縦位に入るもの。拓影下端には隆帯があり、縦位の結節縄文がかかっている。口端には口縁の外側から内側にむかって、半截竹管の斜位刺突がめぐるっている。縄文はLR、19は口縁内側に稜をもつ、口端には器面と同じRL原体による刻みが付く。

第2種 口縁が内湾し、頸部がくびれたキャリバー状の器形を呈するもの。(21-30)

本種の特徴としては、頸部に隆帯や瘤のつくものが多い。21は頸部に1条の押圧縄文、口端に同じ押圧による刻みが付く。縄文原体はすべてL。22は2尖の山形突起が付くと考えられるが、一方は欠失している。24は口縁が内側に折り返されているもの。25・27・29は頸部に隆帯がつくもので、27・29には隆帯上にまで縄文がかかっている。29の隆帯上にはさらに指頭圧痕がつく。26・28は頸部に横長の瘤がつくもの。瘤上には縦位の押圧縄文がみられるが不明瞭で、28では施文後つぶされている。27・28は縄文が羽状を呈する。30はキャリバー状の器形を持たないが、頸部に隆帯があることからここに含めた。隆帯上にはさらに糸巻形の貼り付けが認められる(30aの拓影中央)。体部の隆帯は垂下し、細い。口端には篋による刻みが付く。口縁部の縄文は横回転、体部で縦回転となる。

第3種 縦位回転の縄文のみ施されたもの。(20・31-42)

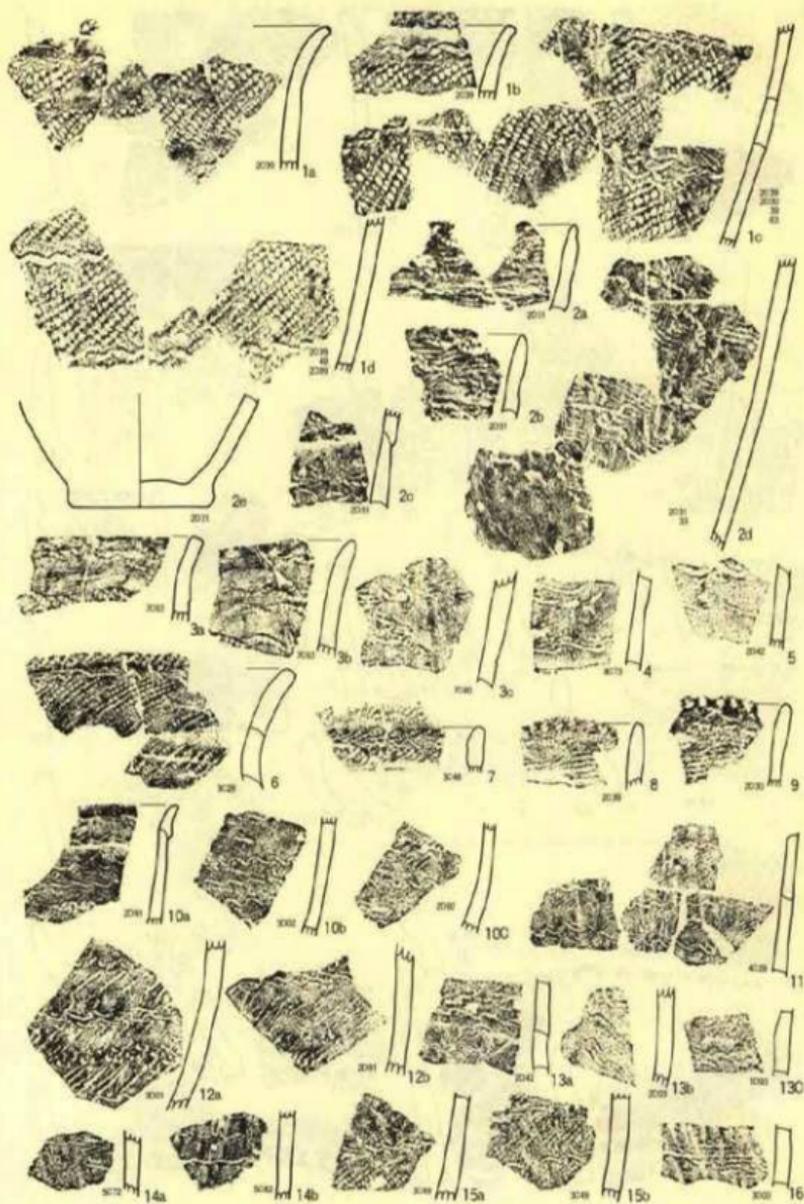
口縁直口ないしゆるやかに湾曲する器形を呈する。体部の破片もここに含める。32は丸味をもった山形の突起部分の破片。33は口端直下が横位回転でその下が斜位回転の縄文である。胎土、焼成は本類のものと同じである。37は口端直下が横位回転、以下縦位回転の縄文が施される。

第3類 無文土器(第74・75図43-53)

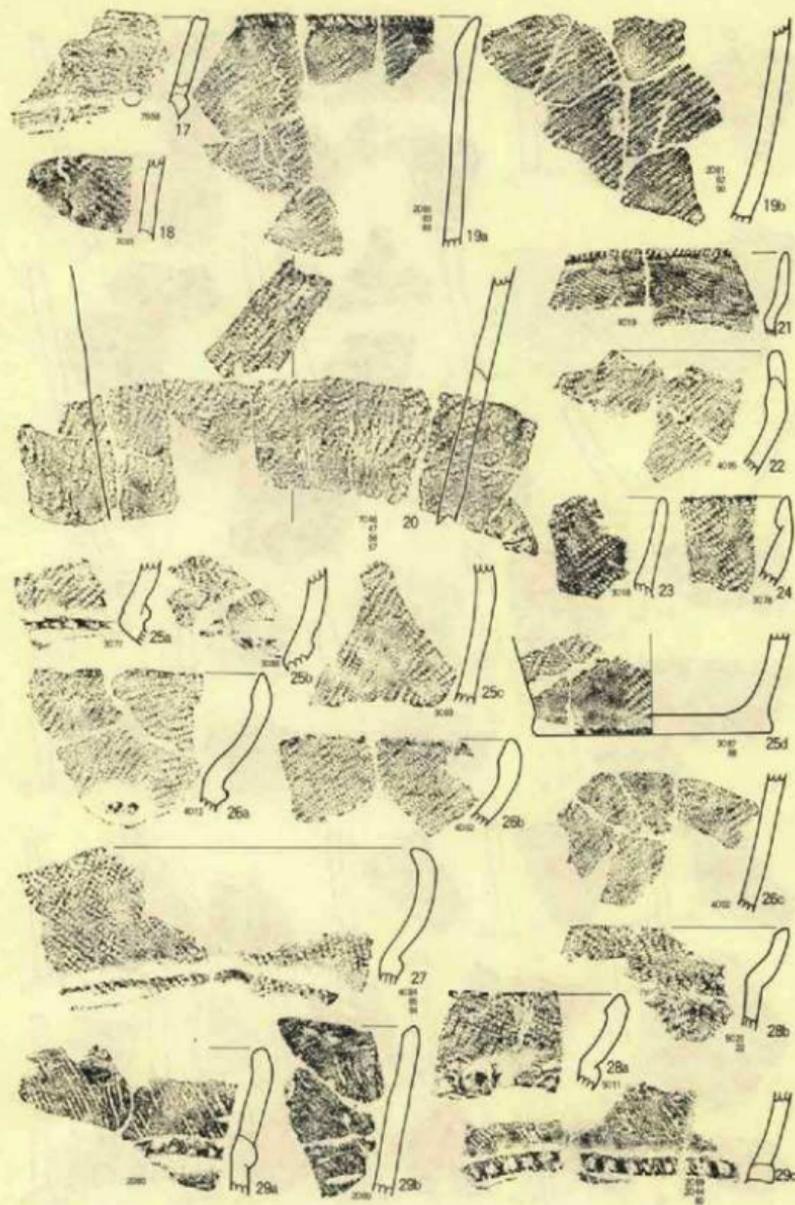
中期初頭から阿玉台式直前にかけてのものであろう。

第1種 折り返し口縁または輪積痕を残すもの(43-46)

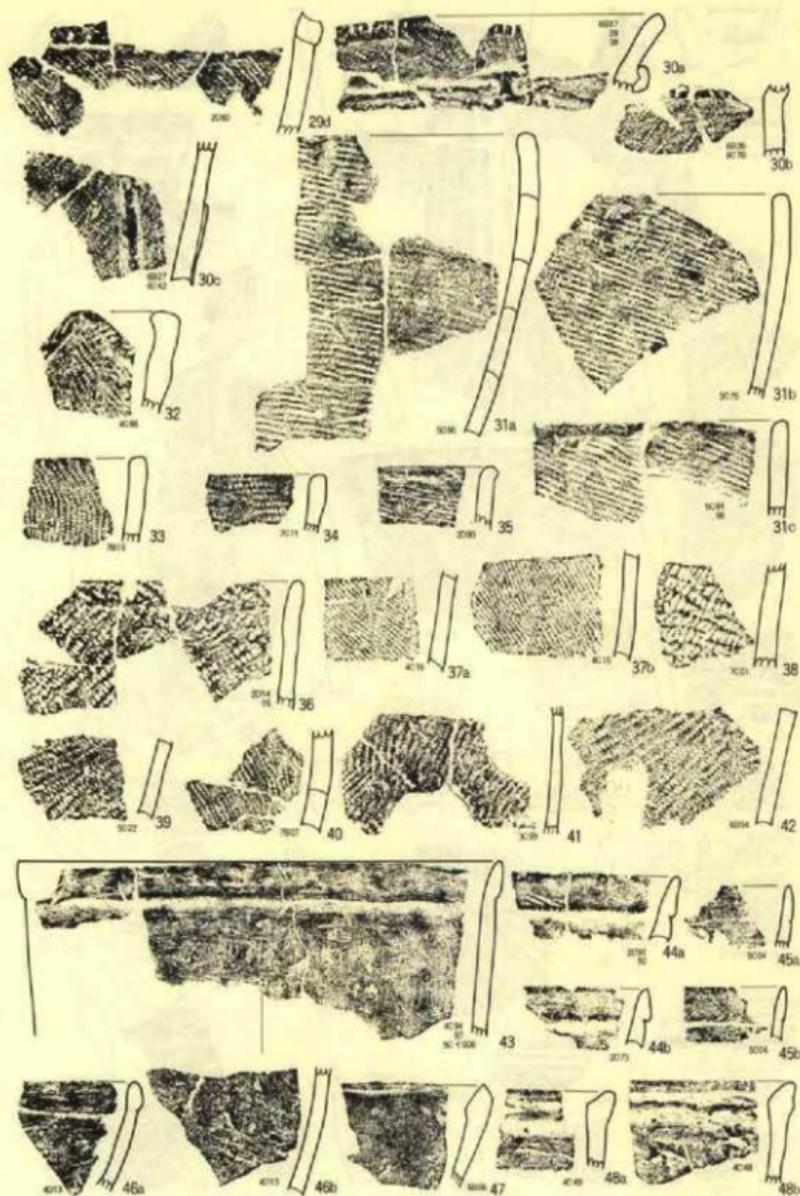
43は推定口縁外径24.5cmである。暗赤色で表裏とも滑沢を呈する。折り返しの口縁をもつ。44・45は輪積痕を残すもので、43と同様口端が尖る。46は折り返し口縁で、体部には成形痕が残っている。



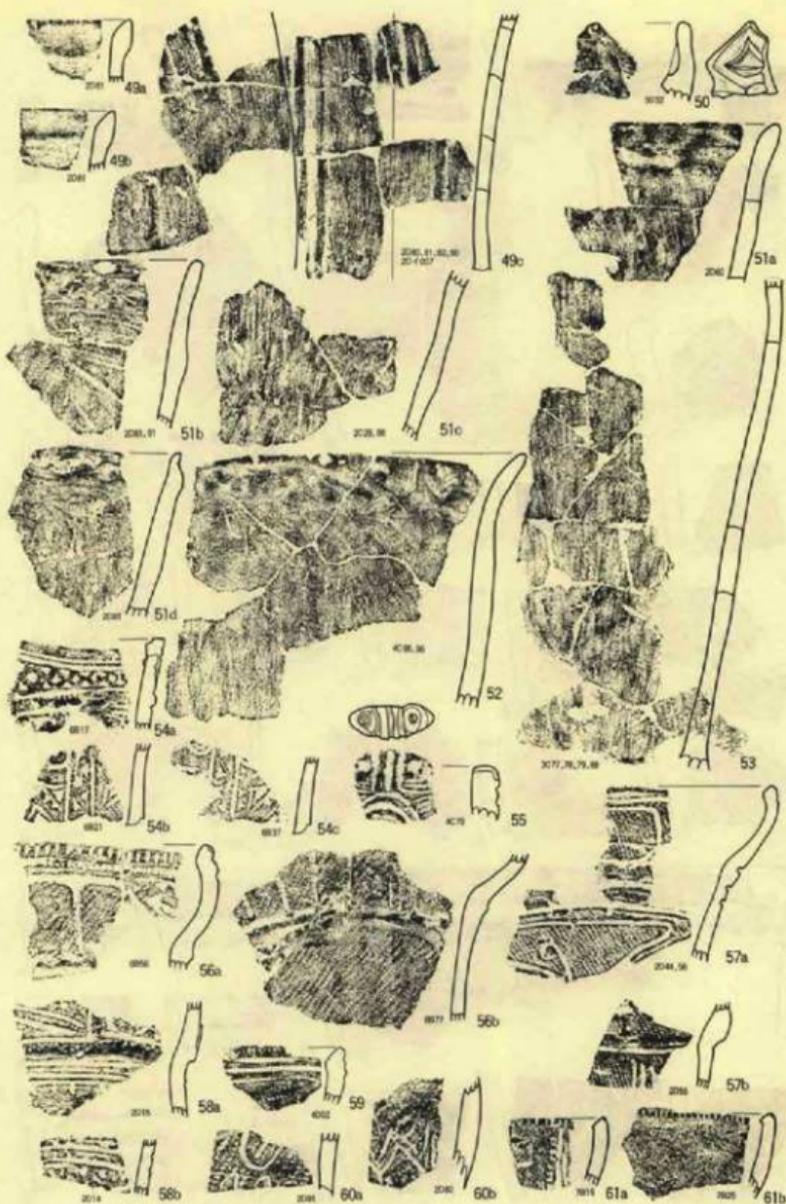
第72図 A地点前期末~中期初頭土器拓影図1 (1/3)



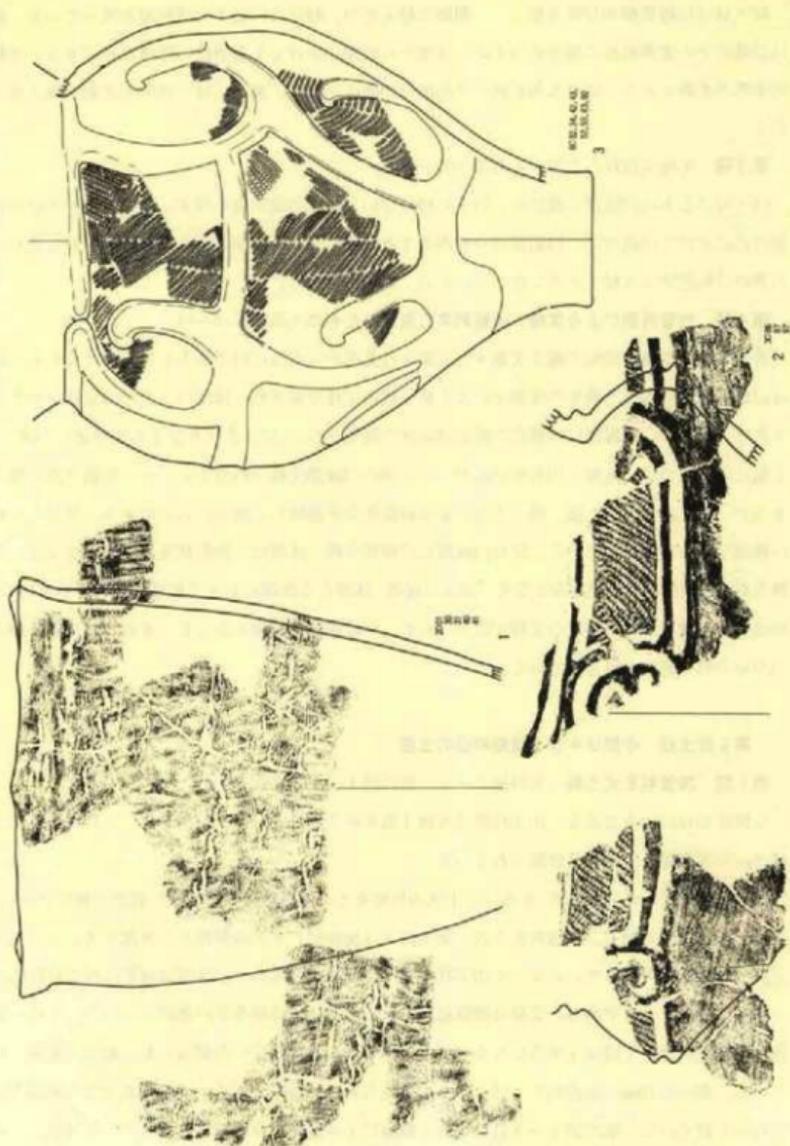
第73図 A地点前期末～中期初頭土器拓影図2 (1/3)



第74図 A地点前期末～中期初頭土器拓影图3 (1/3)



第75図 A地点前期末～中期初頭土器拓影図4 (1/3)



第76図 A地点前期末～中期土器実測図(1/4)

第2種 口縁断面が内削ぎで、内側に稜をもつもの。(47-50)

47・48は口縁表側が厚味を増して、明瞭な稜をもつ。48には口縁下に成形痕が残っている。49は口縁直下の表裏両面に稜をもつもの。体部から底部にかけて2条単位の隆帯が垂下する。比較的小形の土器である。50は五角形状の突起部分の破片である。表面には三角形の沈刻が施されている。

第3種 単純な深鉢形を呈するもの(51-53)

51・52はともに口辺部に横位の、以下に斜位ないし縦位の成形痕を残す。53は口辺付近から底部付近にかけての破片で、口辺部はやや内湾する。縦位の成形痕が認められる。いずれも長石、石英の比較的大きな粒子を多く含むことから、本類に含めた。

第4類 竹管外側による沈線、連続刺突の施されたもの(第75図54-61)

多くは地文に縦位回転の縄文を施す。五領ケ台Ⅱ式から直後に相当するものと考えられる。54は口縁部は菱形及び三角形の沈刻文による格子状の文様が施され、体部は三角形の沈刻文が多用されている。また、口縁部には横位の断面蒲葺状の隆帯がつく。55は舌状を呈する突起部分の破片。上端には3条の深い沈線と円形の刺突がつく。56の口縁部文様は内皮をえぐった半載竹管外側によって一度沈線を引いた後、同一工具による斜位刺突を連続して施したものである。頸部には低い断面三角の隆起線がめぐる。57は口縁部に窓枠状文様、体部に三角形及び垂下した文様とが施される。頸部は低い隆起線となる。58は口縁部、体部とも沈線に沿って刺突文が付されている。60は一部に重なったY字状の文様が認められる。61は縦位の沈線に沿って、多載竹管による横方向からの斜位刺突が付されている。

第6群土器 中期後半から後期初頭の土器

第1類 加曾利E式土器(第76図2・3、第77図1-3、図版35)

5個体のみ出土である。出土位置は浅鉢土器をのぞいて5C、5D、6C、6Dグリッドで41.5cmの等高線の内側にほぼ限られている。

第76図2は大形の浅鉢土器。そろばん玉状の形態をとる体部破片で、口縁部、底部の破片はない。最大外径48.4cmを測る。加曾利E2式。第76図3は加曾利E4式の頸部から体部下半にかけての土器。口縁部は欠失しているが、くの字状に強く外反すると思われ、体部は球形に近く比較的小さい底部に続くようである。文様は微隆起線による上下2段の渦巻文が連続している。下段の渦巻は5単位あり、上段は4単位になるものと推測される。渦巻文の内側はLRの縄文が充填されている。現存高33cm。加曾利E4式にはあまり見られない器形である。文様構成は次の称名寺式に極めて似ている。第77図1-3はいずれも櫛歯による集合沈線の施されたもの。1は直口する深鉢形、2・3はキャリバー状の深鉢である。加曾利E式後半であろう。

第2類 称名寺式土器 (第77図4～第79図38、図版35～37)

破片数としては比較的多いが、同個体のものが多く、個体数は40個体程度であろう。出土位置は4Cグリッド以南で、個体ごとに比較的良好な状態で出土している。

第1種 称名寺Ⅰ式土器 (4～21)

沈線による区画内に縄文を充填させたもので、縦方向に長く文様の展開するもの(6・9・21)、横長に文様の展開するもの(11)、渦巻状の文様が見られるもの(5・14)等多様である。4は沈線が粗雑にひかれ、無文部と縄文帯の区別が厳密でない。Ⅰ式の中でも古手の可能性がある。11は胎土精良で、表裏面とも滑沢があり、他の土器に比べて異質である。20は区画文様がかなりくずれてしまっている例でⅡ式に近いと考えられる。なお、21には縄文帯内に列点が認められる。突起部の装飾は7・8・12のように簡単なものと、10のように弧線と円形刺突を組み合わせた複雑なものがある。15の例は堀之内式の突起装飾に似るが、口辺部にわずかに磨消縄文が認められる。茨城県小山台貝塚に類例がある(小山台報文第17図3)が、小山台のものは中央が貫通した円孔となっている。なお、15Cは突起と突起の間部分の破片で、円形の貼り付け文がみられる。

第2種 称名寺Ⅱ式土器 (22～34)

沈線による区画内に列点のあるもの及び区画文のみのものである。列点のあるものは区画沈線と列点とが同一工具によって施されており、丸棒状の工具や半截竹管の外側を用いたものがある。32は突起部に装飾がみられ、33には拓影下端に条線が認められる。32～34は同一個体かもしれない。

第3種 装飾ある把手及び突起部。(35～38)

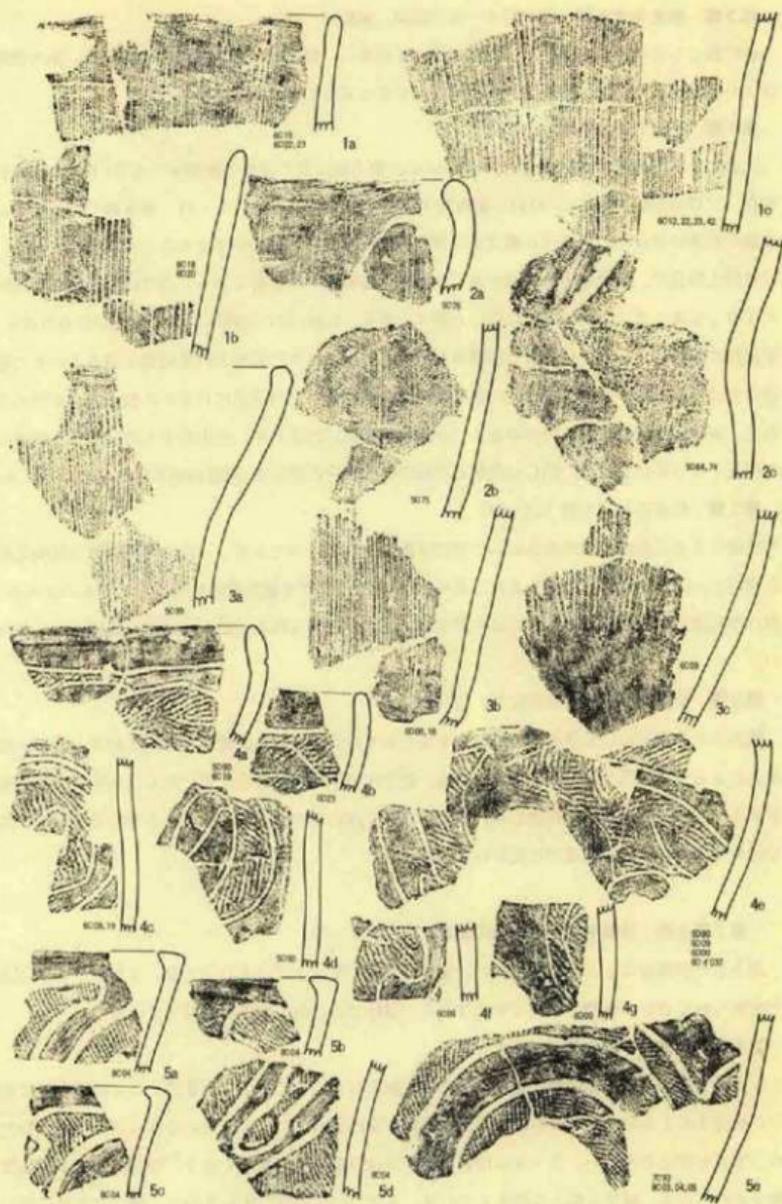
装飾された把手ないし突起部分の破片をまとめておいた。35は表裏ともに円形刺突と弧線が組みあわさった立体的な装飾が施されている。把手中央には対になると思われる三角形の貫通孔がある。36も側面に2個の貫通した円孔があり、立体的である。37・38は8の字状及び円形の貼り付けの中央に、貫通孔及び盲孔がみられる。

第7群土器 後期中葉から晩期の土器 (第80図1～23)

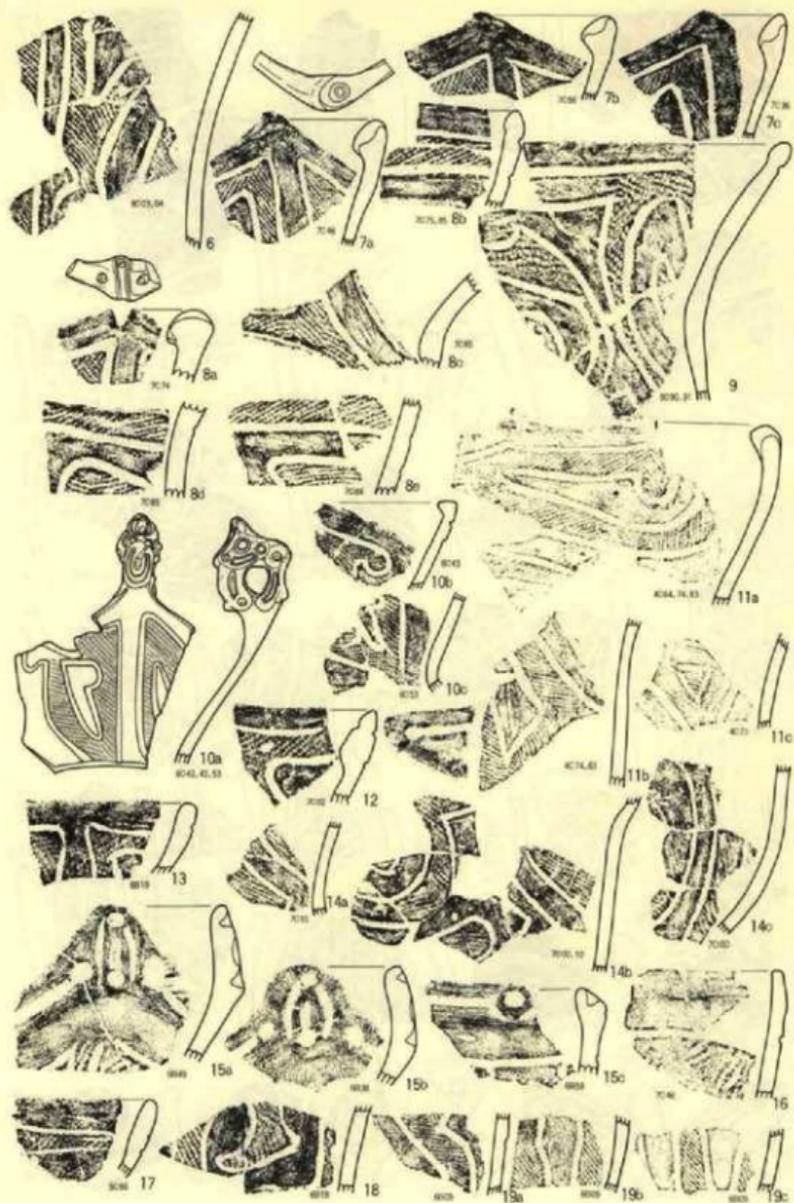
出土した個体のほとんどを採掘した。加曾利B式、安行Ⅰ式は1D、2D、3Dグリッドに出土が限られており、晩期の土器は少数ながら、個体ごとに出土地点が異なっている。

第1類 加曾利B式土器 (1～5)

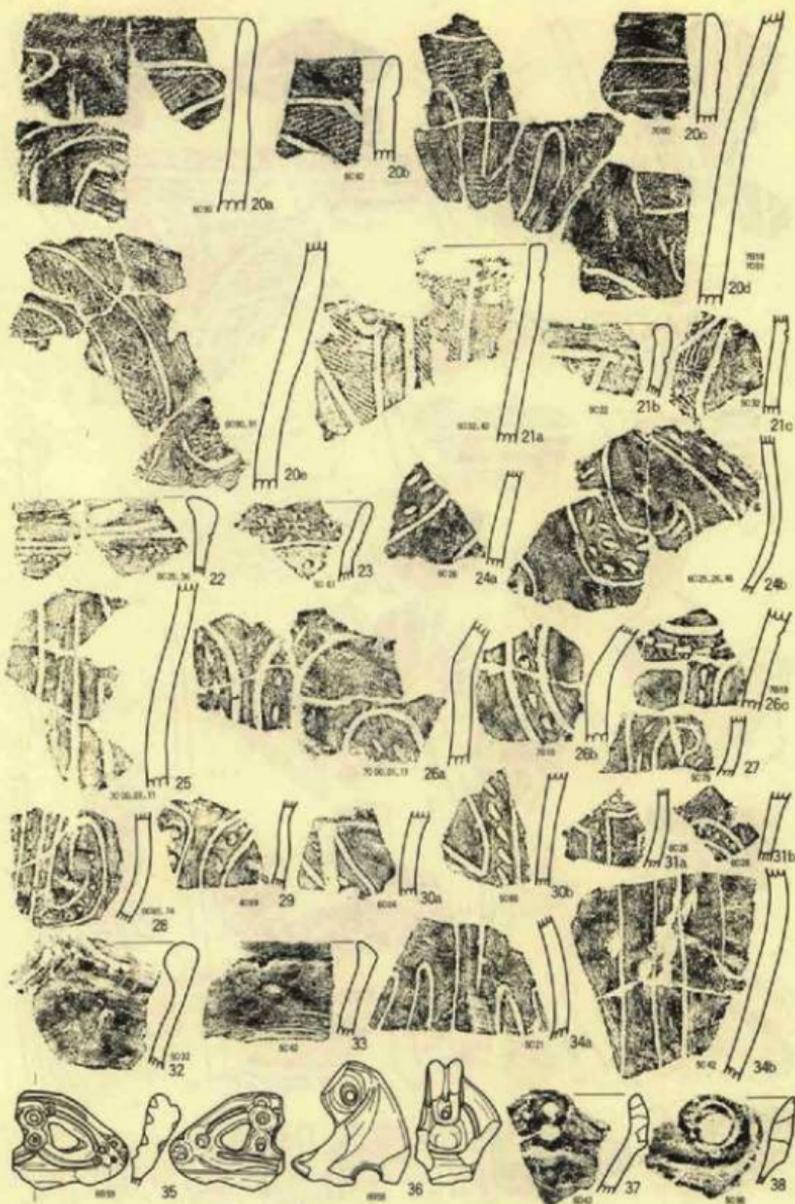
1は縄文地に横走る沈線と蛇行する沈線が施されている。BⅠないしⅡ式。2は口端直下に刻みと横走る1条の沈線がみられる。BⅡ式から安行Ⅰ式にかけてのものであるが、小破片のため、型式を確定できない。3・4は粗製土器。3は口辺部が湾曲しており、口端直下に1条の沈線が認められる。縄文は粗大な節をもつLR。4は口辺部が直口するもので、縄文施文後に細い隆帯を口縁部に貼り付けている。5は口端直下に刻みの付された隆起帯をもち、以下に縦位の線



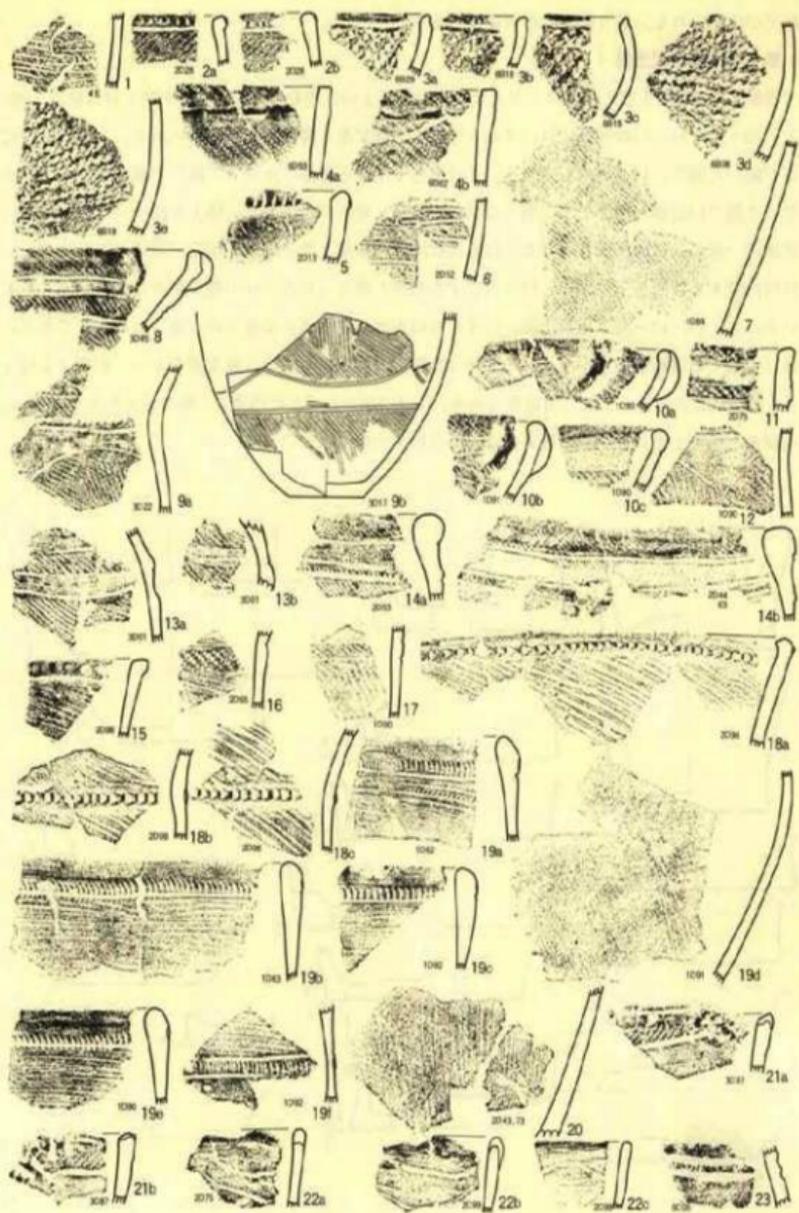
第77図 A地点中期～後期初頭土器拓影図1 (1/3)



第78図 A地点中期～後期初頭土器拓影図2 (1/3)



第79図 A地点中期～後期初頭土器拓影図3 (1/3)

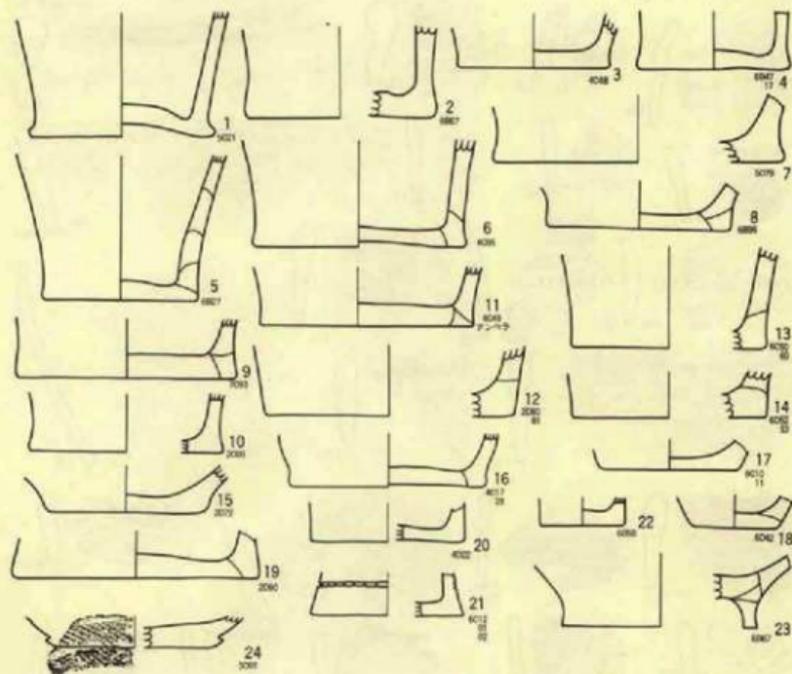


第80図 A地点後期～前期土器拓影圖 (1/3)

絡文が認められる。第5群土器の可能性もある。

第2類 安行式土器 (6-20)

精製土器、粗製土器ともにほとんどがI式としてよいと思われる。7~14・16・17は精製土器。8・10・11・14の口縁部破片はいずれも平縁で、縄文帯と瘤状突起が認められる。8・10は口辺部が開いた器形。14は内湾している。7は体部下半から底部にかけての破片で縄文のみ。9は小形の土器で口辺部と体部上半の間にくびれがあり、刻みが付される。体上半部はコンパス文、口辺部の一部には弧線文がみられる。12もほぼ同様の体部上半の破片。10と同個体かもしれない。13は内湾する器形を呈し、16・17は直口する形態と考えられる。16の縄文帯下は条線文となっている。6・15・18~20は粗製土器。いずれも口辺部及び体部に条線のみが施されるものである。15は口端下に直接紐線文が付くもの。18は頸部と口端下にわずかな無文帯をもって紐線文を付ける。加曾利B式にさかのぼる可能性もある。19は口縁がわずかに内湾し、胴の張る器形を呈する。口縁部と体部上半には半截竹管外側による爪形文が付されている。



第81図 A地点前期後半以降底部実測図 (1/3)

第3類 晩期に属する土器 (21~23)

21は波状口縁で頂部には鉢巻状の粘土紐の張り付けがみられる。姥山Ⅱ式。22も波状口縁で無文地に弧状の沈線が施されるもの。姥山Ⅲ式。23は太い2条の沈線が施される。胎土に砂粒をほとんど含まず、黄褐色を呈する。晩期後半に属するものであろうか。

底部 (第81図)

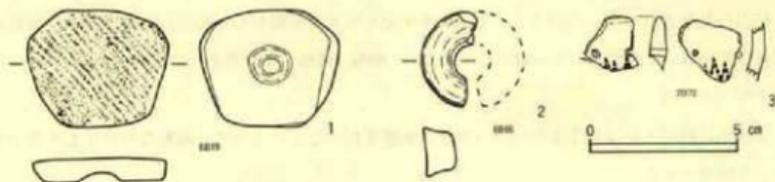
前期後半以降の底部を一括しておいた。11の底面にはアンペラ痕がつく。21は竹管による爪形文がみられ、諸磯a式であろう。23は中期の器台と思われる。24は弥生式であるが、1点のみの出土のため、ここに含めた。

2. 土製品 (第82図1・2、図版40)

1は燃糸土器の体部破片を利用した円板。横4.75cm、縦4.00cm、厚さ0.80cmを測る。やや赤味があった黄褐色を呈す。縁辺は研磨され、裏に未貫通の孔がある。表面の縄文はRL。胎土に長石、石英の細砂を多く含み、裏面には砂粒の移動による擦痕があることから井草式ないしは夏島式期のものと思われる。

2は球状耳飾の半欠品。赤褐色から黄褐色を呈し、焼成良好。推定外径3.5cm、中央孔径1.2cm、厚さは側縁の最も厚い部分で1.7cmを測る。周縁から中央孔にむかって次第に薄くなり、周縁が内側に湾曲するいわゆる白形を呈している。浮島式から興津式にかけての時期に属するものであろう。

3は浮島式期のミニチュア土器で、口縁下1.3cmの所に径2mmの貫通した円孔をめぐらせたものである。器厚4mm、口縁はわずかししか現存しないが、やや尖り気味の断面を呈している。円孔の下には波状貝殻文が施されている。



第82図 A地点土製品実測図 (1/2)

3. 石器 (第83図～第86図、図版38～40)

A地点より出土した石器は総数73点である。内訳は草創期初頭と考えられる石器3点、石鏃47点、石錐1点、スクレイパー5点、不定形刃器2点、磨製石斧1点、礫器1点、磨石2点、敲石4点、敲石を併用した磨石6点、石皿1点である。剥片、砕片及び礫の出土も比較的多い。草創期の石器3点は各々単独で包含層中に発見された。その他の石器もほとんど各時期の土器片とともに単独で出土しており、伴出土器からの石器の時期決定はほとんど困難である。剥片、砕片を伴った石器は14の石鏃と50・51のスクレイパー2点である。3C88・89・98・99グリッドのⅡC層中からチャートの剥片20点ほどとともに出土している。

(1)草創期初頭の石器 (1～3)

1は両面加工の打製石器で、一方の側縁はほとんど直線状を呈し、もう一方は湾曲している。末端はわずかに欠失しているが、左端に残った調整剥離の状態からみて、尖頭状を呈していたとは思われない。部厚なつくりで重量感がある。両側縁とも入念に調整されているが鋸歯状をなし、特に両側縁の調整に差は認められない。単独出土であり、部厚な点も気になるが、形態からみて草創期初頭の半月形の両面石器または半月形のナイフと呼ばれるものに属すると考えられる。2は頭部がわずかにすばまっているが、ほとんど直線上の側縁を有する石器である。側縁の調整は比較的あらい。裏面側には細部の加工の段階で頂部の中軸線よりやや左側より深い剥離が行われている。末端側は最終段階で折れているが、折り取った位置がやはり中軸より左側にやや片寄っており、意図的な切断とみられる。したがって、この形態で完形品であって、石槍とするには無理がある。植欠とみるのが妥当であろう。3は先端及び基部がわずかに折れた、細身の尖頭器である。両側縁とも細かな調整剥離によって鋸歯状に作り出されている。

(2)石鏃 (4～45)

47点が発見されたが、このうち、5点は半欠品や残欠で形態がわからないため、図及び表には掲載していない。形態のわかる42点については、側縁、脚部の形状等から以下のように分類した。

I類 (4～11)

先端部に特に入念な加工またはノッチ状の剥離を行うことによって、鋭利な作り出しを設けることを特徴とする。

a. (4) 先端から側縁にかけてゆるやかな曲線状を呈するもの。基部は一部折損しているが、ごく浅い弧状になると思われる。先端の作り出しは入念な細部加工によっている。

b. (5～6) 側縁が内側にゆるく湾曲するか、くびれており、基部は弧状にゆるく湾曲する。先端部は5・6ともノッチ状の剥離によって作り出している。

c. (7~10) 側縁はbと同様の形態であるが、基部は強くえぐられている。7・8とも入念な細部加工によって先端部を作り出している。9・10は先端部を折損するが、形態が同じであることからここに含めた。

d. (11) 先端部を作り出しを持たないが、側縁及び基部がゆるやかに内側に湾曲することからI類に含めた。

II類 (12~19)

正三角形形状を呈し、基部は直線状か、ごくわずかに内側に湾曲するもの。13は剥片の縁辺のみを加工して石鎌としたもの。先端が厚く基部は薄くなっている。したがって側縁はスクレイパーエッジに似た形となっている。裏側の加工は基部及び右側縁の下半のみに認められる。14・16は表裏とも全体に入念な加工が施されている。15は裏面中央に主要剥離面が残る。17・18はきわめて小形の石鎌で表裏とも縁辺加工のみである。基部はわずかに内側に湾曲する。19は全体に丸味をもち、この類に入れるには問題があるが、表裏とも縁辺加工のみによって作られていることから、ここに含めた。表面は原石面が残っている。

III類 (20~26)

II類より細身で基部がわずかに内側に湾曲するもの。20は基部の挟りがやや深い。側縁はやや丸味をもっている。25・26はかなり細身のものである。

IV類 (27~30)

側縁がわずかに内湾するか直線状で、基部は弧状に強く湾曲するもの。いずれも細かい加工が施されており、先端は29のように鋭利になるものと思われる。扁平薄手である。

V類 (31~33)

先端はやや開き気味で、直線状の側縁をもち、基部がはっきりとえぐれるもの。表裏とも入念な調整が行われており、31・33は薄手の作りである。

VI類 (34~36・38)

Vに形態的に似ているが、より細身のもの。34には主要剥離面が残り、厚手。

VII類 (37・39)

VIに近似する細身のものであるが、基部はより深くえぐれており、脚が湾曲ないしは意識的に作り出されている。39は薄手で先端部は鋭利である。

VIII類 (40~42)

側縁で丸味をもち、基部が明瞭にえぐれるもの。40は表裏に主要剥離面が残るが、薄手扁平で、丁寧に作られている。41は小形品であるが全体に加工が施されている。42はすんぐりした形状で、裏側に主要剥離面を残す。

IX類 (43)

基部が凸となるもの。裏側に主要剥離面がわずかに残るが、細かな加工が施されている。

X類 (44)

木葉形を呈するもの。裏側は原石面が残り縁辺のみが加工されているだけである。

XI類 (45)

大形の石鏃を本類とした。重量4.67gを量る。左右非対称形で、表面には先端部及び中央に原石面が残り、裏面中央には主要剥離面が残る。

(3)石鏃 (46)

頂部及び両側縁に細部加工が施されただけのもので、原石面が大きく残っている。裏面には加工痕はない。小形品である。

(4)スクレイパー (47-51)

47は部厚な剥片を利用したもので、表面の左上方に両面加工の刃部を、右下方に片面加工の刃部をもつ。なお、表面右上方には節理面が残る。48は縦長剥片のバルブ付近を取り除き、右側縁に剥離を施して、薄い刃部を作っている。49は表面に大きく節理面が残り、周縁にはあらい剥離がなされている。裏面は頂部を除き周縁にあらい剥離が施されている。50は頂部に打面を残す。丸味をもった剥片の周縁を両面加工したスクレイパーである。刃部は左側縁から右側縁下半にかけて、及び右上方である。薄手の刃部である。51は右側縁から左下方にかけて刃部となっている。片面のみの加工による。

(5)不定形刃器 (52・53)

52は横長の剥片を利用したもので、わずかに右側縁に細かな剥離が認められる。53は縦長剥片の一方をあらく両面加工したものの。

(6)磨製石斧 (54)

頸部を欠失している。刃部は斜刃となり、使用痕が顕著に残っている。表裏面とも主に横方向の磨痕が残り、側縁は縦方向の磨痕が認められる。両側縁方向から形状を整えるための剥離が残る。前期以降の所産であろう。

(7)鏃器 (55)

片刃のチョッパーである。下方からのあらい剥離をくりかえすことによって刃部を作出している。厚味があり、片手で持つには手ごろの大きさである。

(8)磨石 (56・57)

2点の出土である。56は図の上部を除き、側縁全体に磨痕が認められるもの。57は図の下方が欠失するが、ほぼ側縁全体に磨痕が認められる。

(9)敲石 (58-61)

58は両面及び側縁のほとんど全体に敲打痕が顕著に残るもの。61は礫の一端にのみ敲打痕が認められる。59・60は小礫の一部に敲打痕があるもので、59は五面体、60は扁平である。一般の敲石とは異なった使用法が想定しうる。

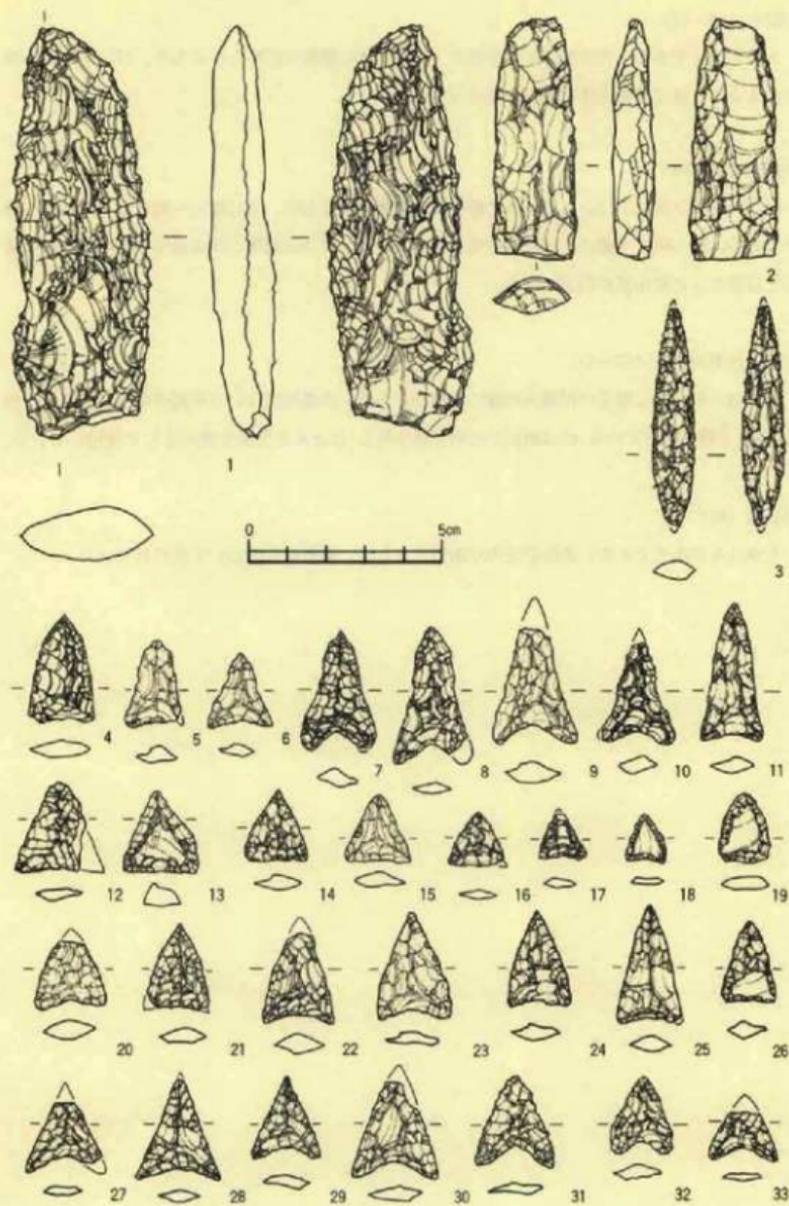
(10)敲石併用の磨石 (62-67)

62・64・65・67は厚手の円礫の周縁に磨痕がみられ、表裏両面ないし片面の中央に敲打痕が残る。67は火熱を受けている。63は断面が三角形状を呈し、ほとんど全面を磨石として使用している。

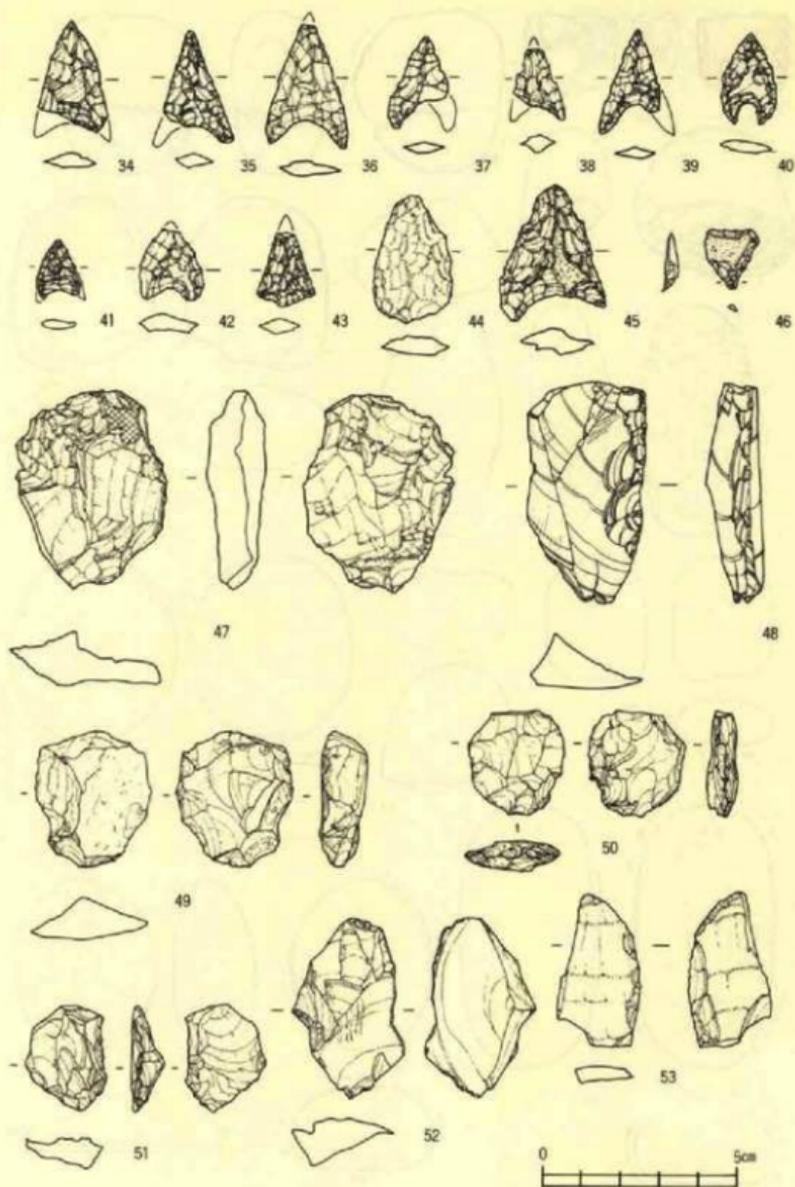
(11)石皿 (68)

1点のみの出土である。表面の使用が顕著であるが、裏面も石皿として使われている。

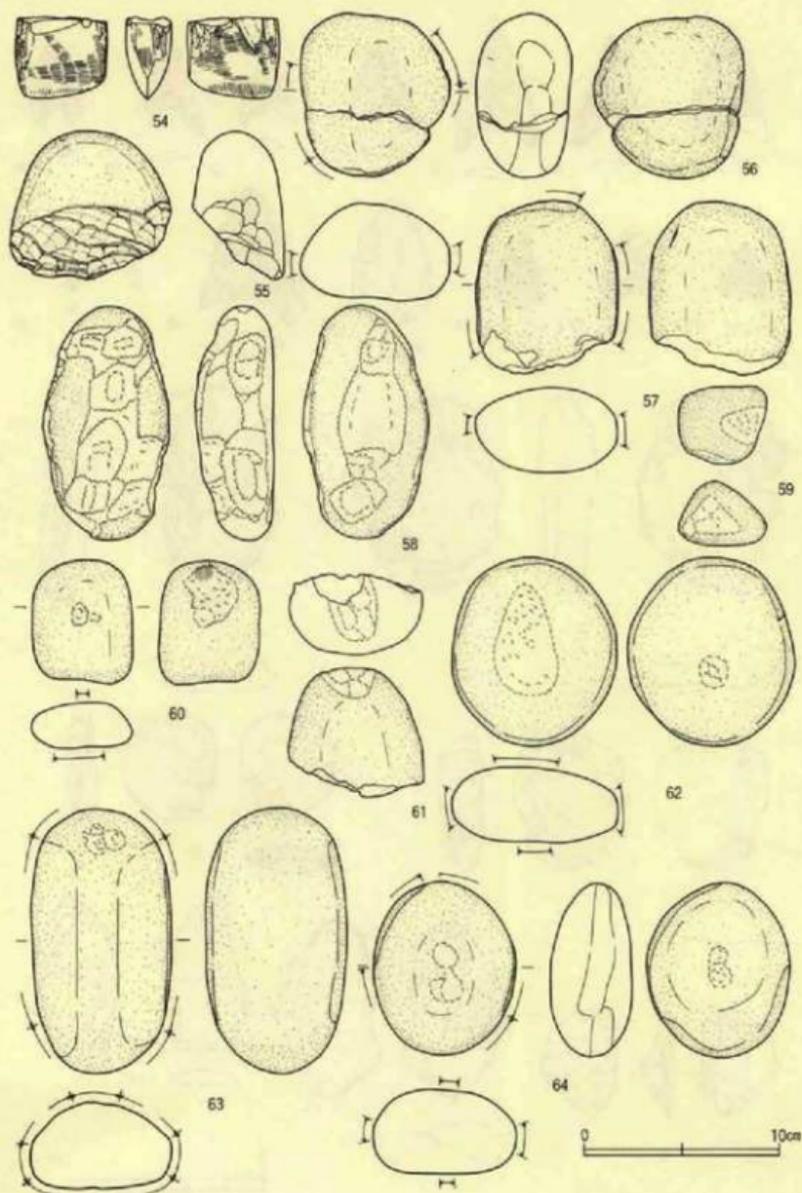




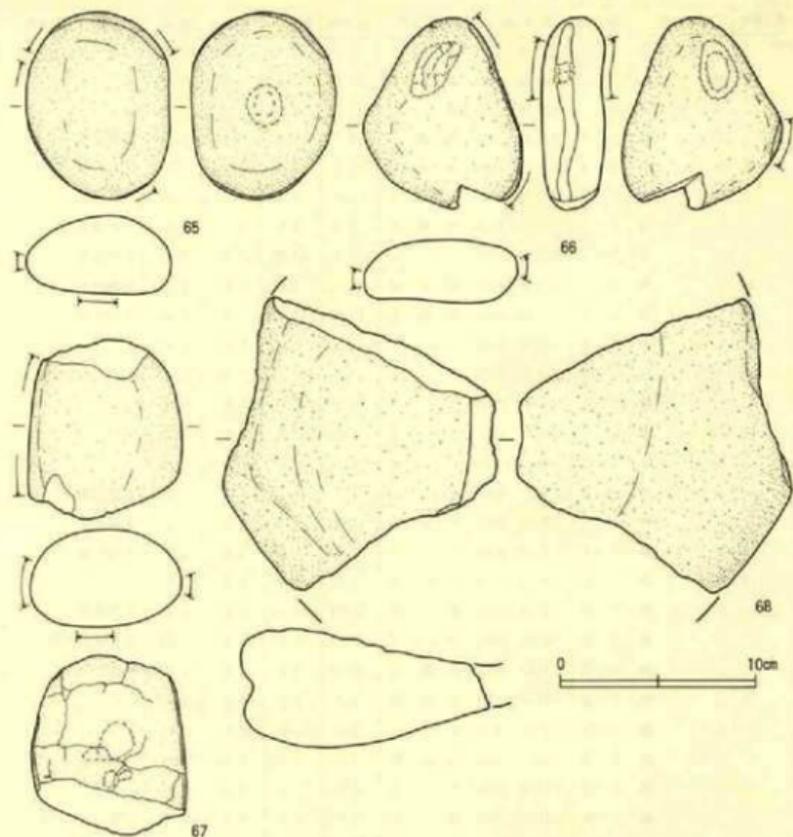
第83図 A地点石器実測図1 (2/3)



第84図 A地点石器実測図2 (2/3)



第85図 A地点石器実測図3 (1/3)



第86図 A地点石器実測図4 (1/3)

第2表 A地点縄文時代石器計測表(1)

| 検出番号 | 名称 | 分類 | 出土地点 | 石質 | 長さmm | 幅mm | 厚さmm | 重さg | 備考 |
|-------|------|-------|-----------|------|--------|--------|------|-------|-----------|
| 83-1 | 打製石器 | 1 | 3C38 0014 | 黒曜石 | 10.6 | 3.75 | 1.4 | 60.2 | 下端一部破損 |
| 2 | 槌 | 刀 | 3D62 0002 | 頁岩 | (6.3) | 2.3 | 0.95 | 17.08 | |
| 3 | 尖頭器 | 1 | 6B08 0009 | 頁岩 | (5.7) | 1.15 | 0.55 | 2.78 | |
| 4 | 石鏃 | 2-I | 7C45 0002 | 黒曜石 | 2.7 | 1.85 | 0.45 | 1.63 | 脚部折損 |
| 5 | 石鏃 | 2-I | 3C29 0010 | 安山岩 | 2.2 | 1.45 | 0.45 | 0.97 | 右脚折損 |
| 6 | 石鏃 | 2-I | 4C75 0014 | 安山岩 | 1.9 | 1.65 | 0.3 | 0.68 | |
| 7 | 石鏃 | 2-I | 7C01 0026 | 黒曜石 | 3.0 | 1.9 | 0.5 | 1.69 | 右脚端折損 |
| 8 | 石鏃 | 2-I | 6D90 0002 | チャート | 3.4 | (1.9) | 0.35 | 2.32 | 右脚折損 |
| 9 | 石鏃 | 2-I | 6B19 0001 | 安山岩 | (2.9) | 2.2 | 0.6 | 2.80 | 先端折損 |
| 10 | 石鏃 | 2-I | 7C14 0002 | 黒曜石 | (2.6) | (1.85) | 0.5 | 1.34 | 先端折損 |
| 11 | 石鏃 | 2-I | 3D30 0008 | チャート | 3.5 | 1.65 | 0.45 | 1.80 | |
| 12 | 石鏃 | 2-II | 3D00 0001 | チャート | 2.3 | (1.8) | 0.35 | 1.42 | 右脚・左脚端折損 |
| 13 | 石鏃 | 2-II | 2C98 0005 | チャート | 2.1 | 1.9 | 0.6 | 1.85 | |
| 14 | 石鏃 | 2-II | 3C98 0007 | チャート | 1.85 | 1.6 | 0.4 | 0.85 | |
| 15 | 石鏃 | 2-II | 5D42 0010 | 安山岩 | 1.75 | 1.7 | 0.4 | 0.86 | |
| 16 | 石鏃 | 2-II | G8 0001 | チャート | 1.4 | (1.4) | 0.25 | 0.41 | 右脚折損 |
| 17 | 石鏃 | 2-II | 2D70 003L | 黒曜石 | 1.35 | 1.25 | 0.3 | 0.25 | 先端折損 |
| 18 | 石鏃 | 2-II | 4C75 0003 | チャート | 1.3 | 1.05 | 0.2 | 0.31 | 先端折損 |
| 19 | 石鏃 | 2-II | 4C08 0004 | チャート | 1.85 | 1.35 | 0.3 | 0.82 | |
| 20 | 石鏃 | 2-III | 3D34 0004 | 花崗岩 | (1.8) | 1.8 | 0.5 | 1.23 | 先端折損 |
| 21 | 石鏃 | 2-III | 3D34 0001 | チャート | (2.2) | (1.6) | 0.4 | 1.12 | 左右脚部折損 |
| 22 | 石鏃 | 2-III | 2D40 0028 | 黒曜石 | (2.4) | 1.8 | 0.5 | 1.37 | 先端折損 |
| 23 | 石鏃 | 2-III | 7B08 0004 | 安山岩 | 2.8 | 1.9 | 0.3 | 1.64 | |
| 24 | 石鏃 | 2-III | 3D48 0021 | チャート | 2.5 | 1.6 | 0.5 | 1.22 | |
| 25 | 石鏃 | 2-III | 3D00 0001 | 安山岩 | 3.0 | (1.65) | 0.45 | 1.94 | 右脚折損 |
| 26 | 石鏃 | 2-III | 2D62 0018 | チャート | 2.15 | 1.35 | 0.45 | 0.80 | |
| 27 | 石鏃 | 2-IV | 2D61 0032 | 頁岩 | (1.8) | (1.9) | 0.3 | 0.72 | 先端・右脚折損 |
| 28 | 石鏃 | 2-IV | 5C15 0007 | チャート | (2.55) | 2.1 | 0.25 | 1.21 | 先端折損 |
| 29 | 石鏃 | 2-IV | 2D91 0145 | 頁岩 | 2.1 | 1.8 | 0.3 | 0.66 | |
| 30 | 石鏃 | 2-IV | 6C38 0004 | チャート | (2.5) | 2.25 | 0.4 | 1.60 | 先端・右脚一部折損 |
| 31 | 石鏃 | 2-V | 3D00 0201 | チャート | 2.35 | 2.0 | 0.3 | 0.94 | |
| 32 | 石鏃 | 2-V | 7D 0001 | 黒曜石 | 2.0 | 1.85 | 0.4 | 0.84 | |
| 33 | 石鏃 | 2-V | 4C19 0002 | チャート | (1.25) | 1.75 | 0.2 | 0.42 | 先端折損 |
| 84-34 | 石鏃 | 2-VI | 6C81 0004 | チャート | (2.95) | 1.8 | 0.4 | 2.11 | 左脚・右脚端折損 |
| 35 | 石鏃 | 2-VI | 2D91 0108 | 黒曜石 | (3.0) | (1.7) | 0.45 | 1.24 | 左脚・右脚端折損 |
| 36 | 石鏃 | 2-VI | 7C16 0011 | 安山岩 | (3.25) | 2.1 | 0.45 | 1.91 | 先端折損 |
| 37 | 石鏃 | 2-VI | 2D61 0061 | チャート | 2.45 | (1.5) | 0.35 | 0.83 | 右脚折損 |
| 38 | 石鏃 | 2-VI | 表 採 | 安山岩 | (1.9) | (1.3) | 0.5 | 0.71 | 先端・左脚折損 |
| 39 | 石鏃 | 2-VI | 2D42 0004 | チャート | 2.75 | (1.6) | 0.3 | 0.72 | 右脚折損 |
| 40 | 石鏃 | 2-VI | 5D43 0002 | チャート | 2.45 | 1.4 | 0.3 | 0.94 | |

第2表 A地点縄文時代石器計測表2)

| 検出番号 | 名称 | 分類 | 出土地点 | 石質 | 長さ(mm) | 幅(mm) | 厚さ(mm) | 重さ(g) | 備考 |
|-------|--------|------|------------------------|--------|--------|--------|--------|-------|-----------|
| 84-41 | 石 鏃 | 2-I | 2D42 0022 | 黒曜石 | (1.7) | (1.2) | 0.3 | 0.33 | 左右脚折損 |
| 42 | 石 鏃 | 2-I | 3C19 0020 | チャート | (1.8) | 1.65 | 0.5 | 1.33 | 先端折損 |
| 43 | 石 鏃 | 2-IV | 7C37 0002 | チャート | (1.9) | 1.55 | 0.45 | 0.99 | 先端・基部端折損 |
| 44 | 石 鏃 | 2-X | 3C37 0001 | 砂岩 | 3.3 | 2.1 | 0.5 | 3.42 | |
| 45 | 石 鏃 | 2-XI | 6C86 0002 | チャート | 3.5 | 2.7 | 0.7 | 4.67 | |
| 46 | 石 鏃 | 3 | 6B56 0027 | 安山岩 | 1.6 | 1.4 | 0.2 | 0.67 | |
| 47 | スクレイパー | 4 | 3D31 0007 | チャート | 5.1 | 3.8 | 1.4 | 26.22 | |
| 48 | スクレイパー | 4 | 2D86 0063 | 黒曜石 | (5.65) | 3.0 | 1.4 | 21.60 | |
| 49 | スクレイパー | 4 | 2C99 0013 | チャート | 3.5 | 3.0 | 1.1 | 12.05 | |
| 50 | スクレイパー | 4 | 3C88 0019 | 珪岩 | (2.2) | 2.4 | 0.8 | 4.94 | |
| 51 | スクレイパー | 4 | 3C99 0028 | チャート | 2.8 | 2.05 | 0.8 | 3.45 | |
| 52 | 不定形刃器 | 5 | 3C67 0003 | 珪岩 | 4.65 | 2.95 | 1.2 | 9.76 | |
| 53 | 不定形刃器 | 5 | 4D51 0002 | 安山岩 | 3.95 | (2.15) | 0.5 | 5.32 | |
| 85-54 | 磨製石斧 | 6 | 3D40 0005 | 緑泥片岩 | (4.3) | 4.8 | 2.3 | 73.1 | 頸部欠失 |
| 55 | 磨 石 | 7 | 7C94 0005 | 凝灰岩 | (7.9) | 8.25 | (4.7) | 353.4 | |
| 56 | 磨 石 | 8 | 3D15 0004 3D05 0000 | 花崗岩 | 9.0 | 7.8 | 4.85 | 443.4 | |
| 57 | 磨 石 | 8 | 2D80 111 | 凝灰岩 | (8.9) | 7.8 | 4.3 | 421.6 | |
| 58 | 敲 石 | 9 | 4C84 0006 | 砂岩 | 11.9 | 6.55 | 4.0 | 410.1 | |
| 59 | 敲 石 | 9 | 6C16 0003 | コンクリート | 4.05 | 4.65 | 3.3 | 86.9 | |
| 60 | 敲 石 | 9 | 4C74 0001 | 花崗岩 | 6.45 | 5.15 | 2.3 | 118.5 | |
| 61 | 敲 石 | 9 | 7B77 0002 | 石英斑岩 | (6.65) | 6.9 | (4.2) | 234.6 | |
| 62 | 磨 石 | 10 | 6C69 0004 | 砂岩 | 9.7 | 8.55 | 3.95 | 451.5 | 敲石伊用 |
| 63 | 磨 石 | 10 | 6C45 0004 | デイサイト | 13.5 | 7.2 | 4.4 | 668.5 | 敲石伊用 |
| 64 | 磨 石 | 10 | 3D23 0005 | 閃緑岩 | 8.9 | 7.45 | 4.15 | 378.4 | 敲石伊用 |
| 86-65 | 磨 石 | 10 | 6B99 0005 | 砂岩 | 9.8 | 7.3 | 4.05 | 401.3 | 敲石伊用 |
| 66 | 磨 石 | 10 | 2C79 0009 | 砂岩 | (10.0) | 8.1 | 3.3 | 342.4 | 敲石伊用一部破損 |
| 67 | 磨 石 | 10 | 6B48 0023 | 砂岩 | (9.2) | 8.0 | 5.2 | 479.0 | 敲石伊用上・下破損 |
| 68 | 石 皿 | 11 | 6C21 0003 | デイサイト | 15.1 | (14.0) | 6.0 | — | 破片 |

第4章 B地点の調査

第1節 先土器時代の遺構と遺物

1. 炭化物集中地点

第1炭化物集中地点 (第87・88図)

B地点の台地上の北側縁辺部に位置する。Ⅳ層～Ⅴ層にかけて分布がみられる。Ⅳ層下部が主体と思われる。10B07～10B17にかけての部分と10C00～10C10にかけての部分からは炭化材が出土している。また10B08と10B09の中間より焼土が検出された。10B09の焼土は20cm程の堆積がみられる。調査区域内の炭化物の集中は炭化材の出土した2カ所と焼土の検出された2カ所に集中している傾向がうかがわれる。炭化材は樹種同定の結果ビャクシン属(種不明)ということが明らかになった。(3)を参照)

第2炭化物集中地点 (第89図)

B地点の台地上のほぼ中央の奥部に位置する。第Ⅳ層～Ⅴ層にかけて検出された。Ⅳ層下部にその中心がある。平面分布の状態は11C00を中心に径1.5m程の範囲で密に分布している。

第3炭化物集中地点 (第90図)

B地点の中間やや南に位置する。第Ⅵ層で検出された。平面分布の状態は、11B44に密な部分があるものの全体にはあまり集中している傾向はうかがわれない。

第4炭化物集中地点 (第91図)

第3炭化物集中地点の南西約30mに位置する。第Ⅲ層～第Ⅵ層にかけて検出された。平面分布の状態は、第3炭化物集中地点と同様にあまり集中している傾向はうかがわれない。

第5炭化物集中地点 (第92図)

第4炭化物集中地点の南西約15mに位置する。第Ⅵ層で検出された。平面分布の状態は、12A14と12A15の2カ所で密である。

2. B地点のⅡ層中出土の石器 (第93図)

1～4はB地点の縄文包含層中より出土した先土器時代の遺物である。

1は凝灰岩の石核である。多方向からの剝離を特徴としている。縁辺部の一部には使用痕のような剝離が認められる。2は珪質頁岩のナイフ形石器である。上半分は欠損している。基部加工は素材の変形をなく加えている。3は安山岩の周辺加工された尖頭器である。4は泥岩の小剥片である。

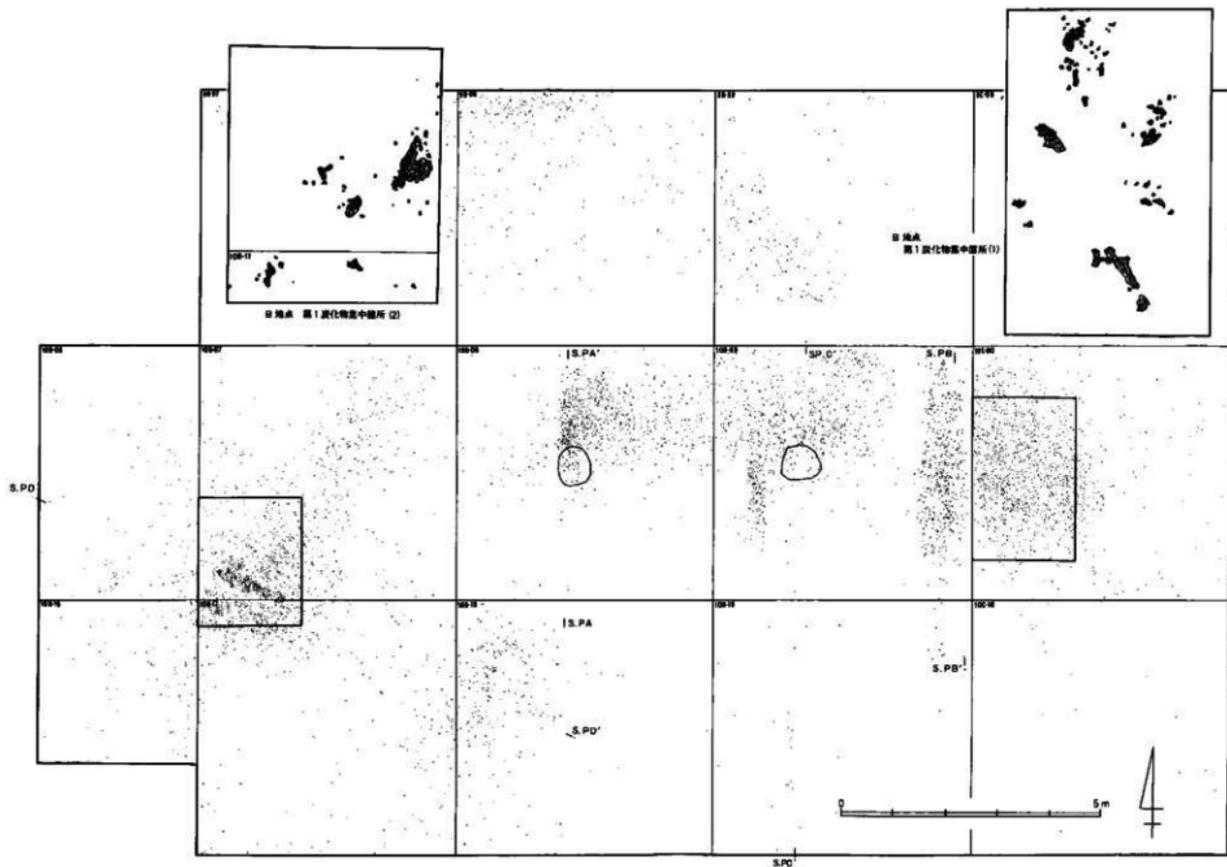
3. 第1炭化物集中地点より出土の炭化材

第1炭化物集中地点からは炭化物の集中土層から炭化材が検出された。その中から特に遺存状態の良いものを選び出し、千野裕道氏に分析を依頼した。以下その報告を記す。

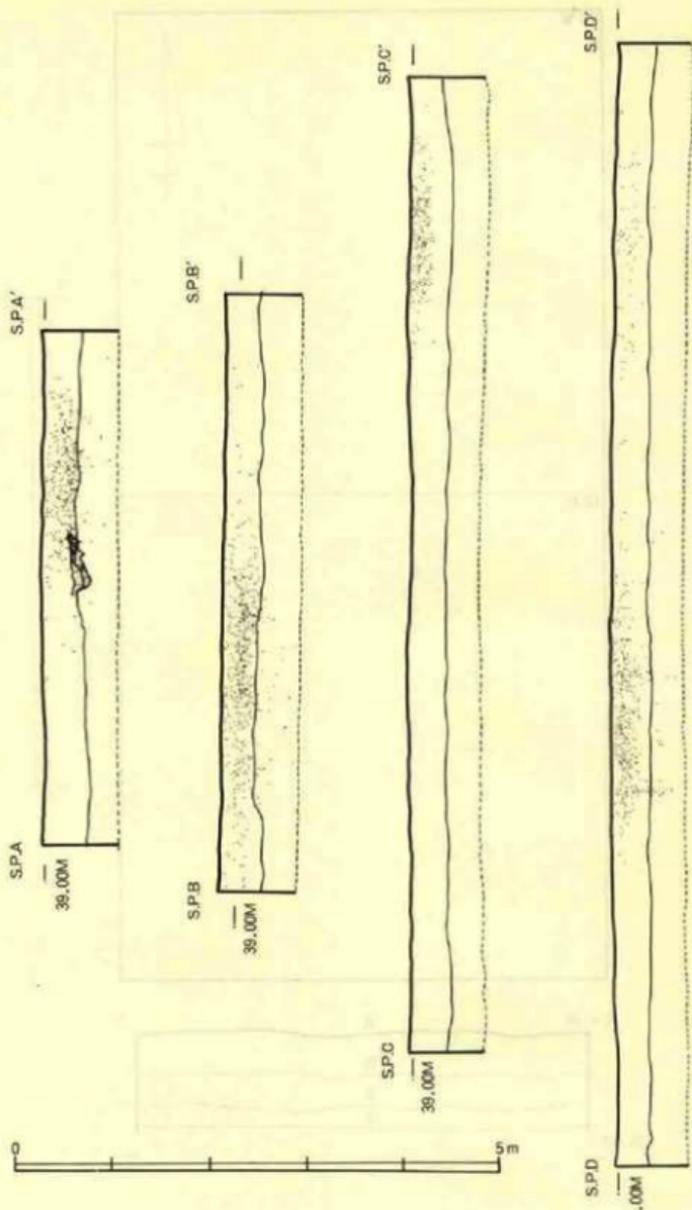
この炭化材の特徴は次のとおりである。

- 1) 樹脂道がない(針葉樹の多くは材に樹脂道がある)
- 2) 放射組織細胞(Ray cells)は一列に配列する。
- 3) Ray cellsに篩孔状の孔(Sieve-like pitting)が認められる。
- 4) 仮導管には、いちじるしい条線(striations)は認められない。仮導管にはまばらではあるが小さな孔がある。
- 5) 放射断面(Radial section)にみられる孔はほぼ一列に配列する。
- 1)~5)の特徴は、球果類のうちJuniperus(ビャクシン属)とAbies(モミ属)の2属に認められる。
- 6) Cross-Field pittingの状態は、juniperusでは、pitが縦列をなすものが多く、Abiesでは、pitが横列をなすものが多く、かつCross-Fieldは横長である。

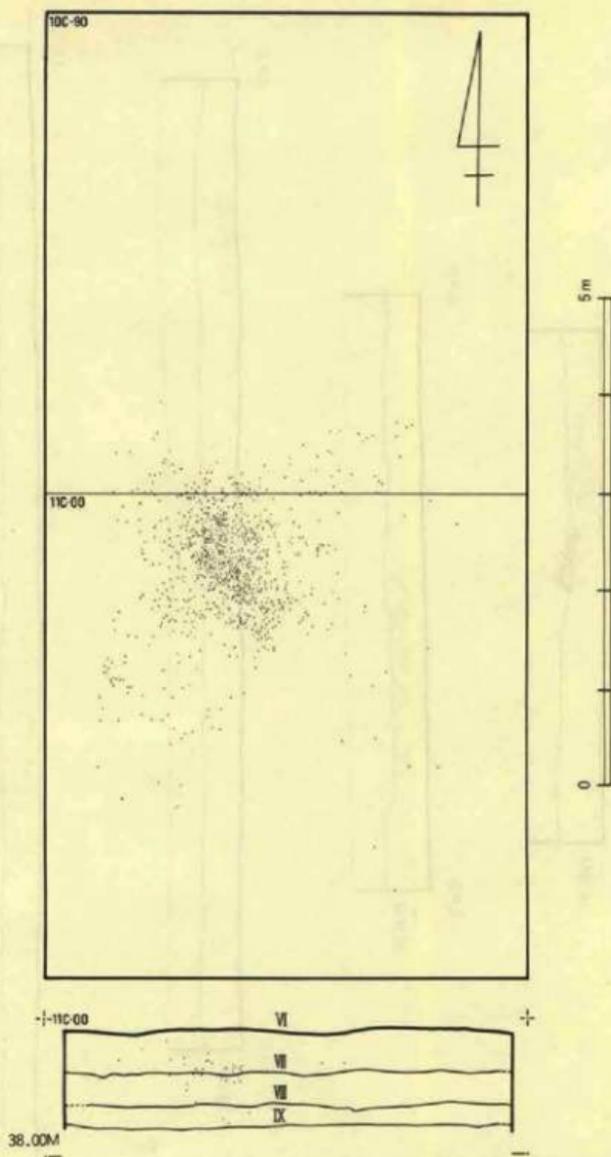
また、6)の特徴をかみすると本材は、Juniperus(ビャクシン属)に属する材と考えられる。種名は明らかでない。



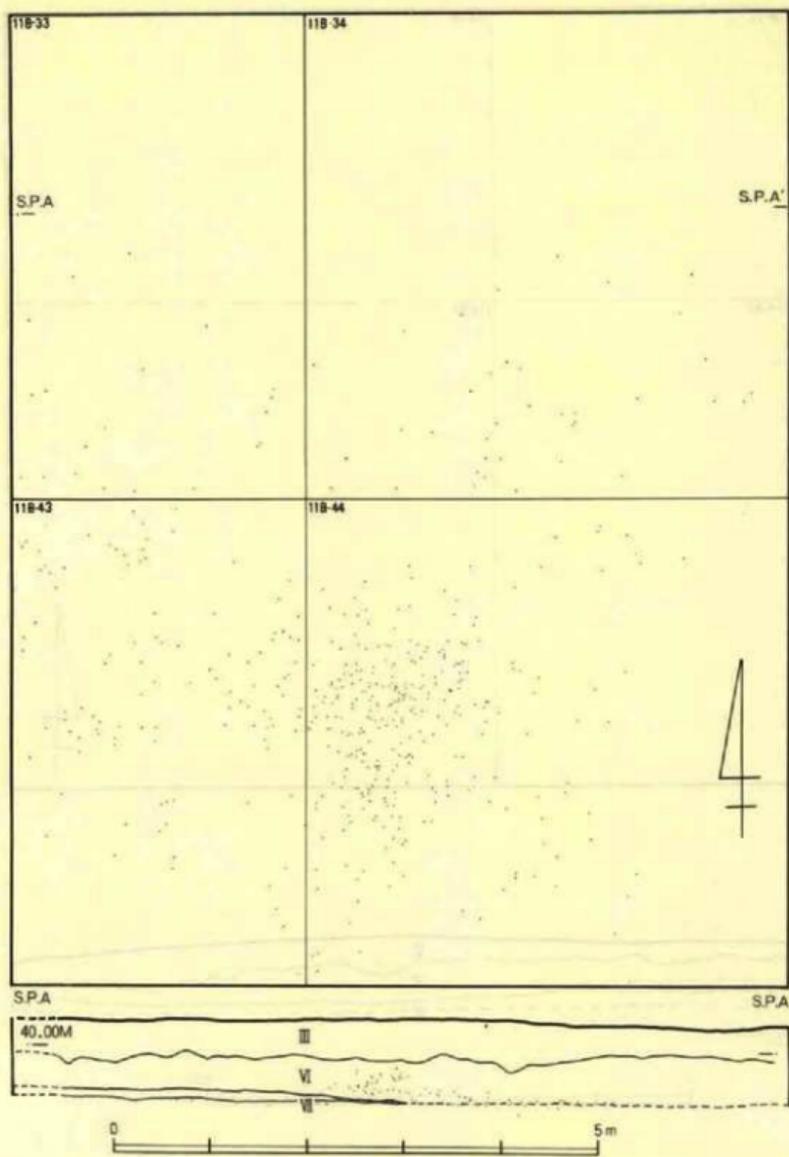
第87図 B地点第1炭化物集中箇所(1)



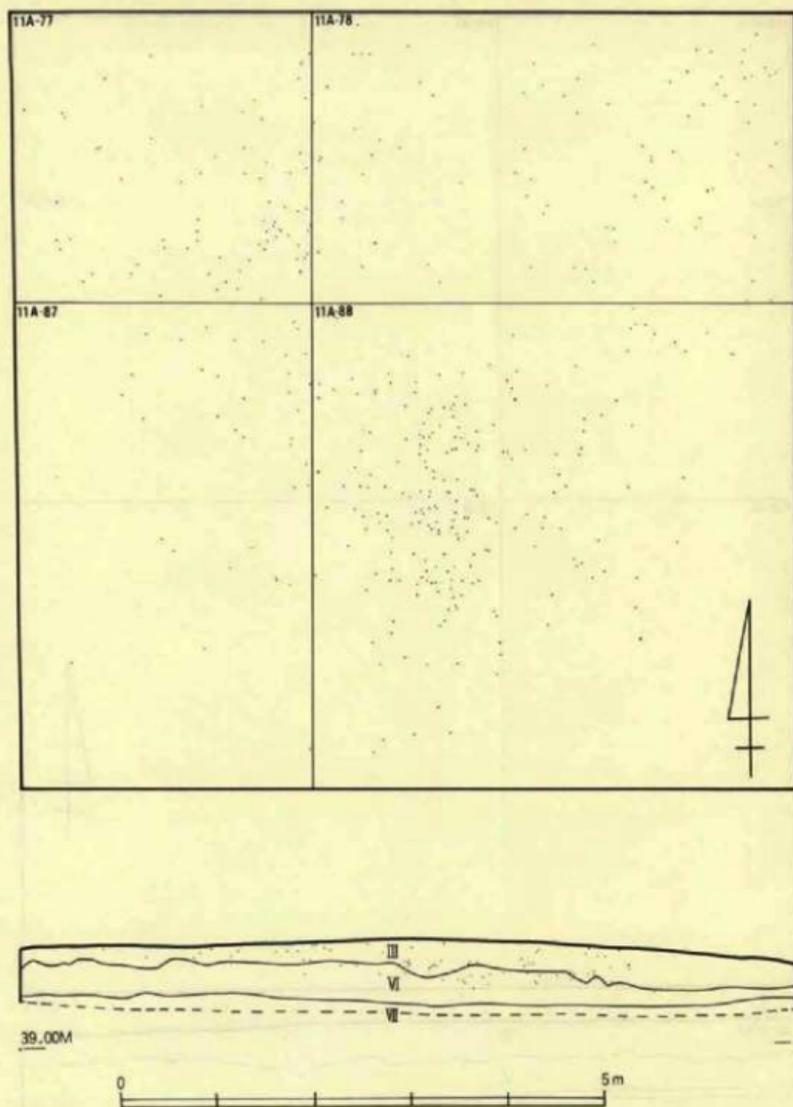
第88図 B地点第1炭化物集中箇所2



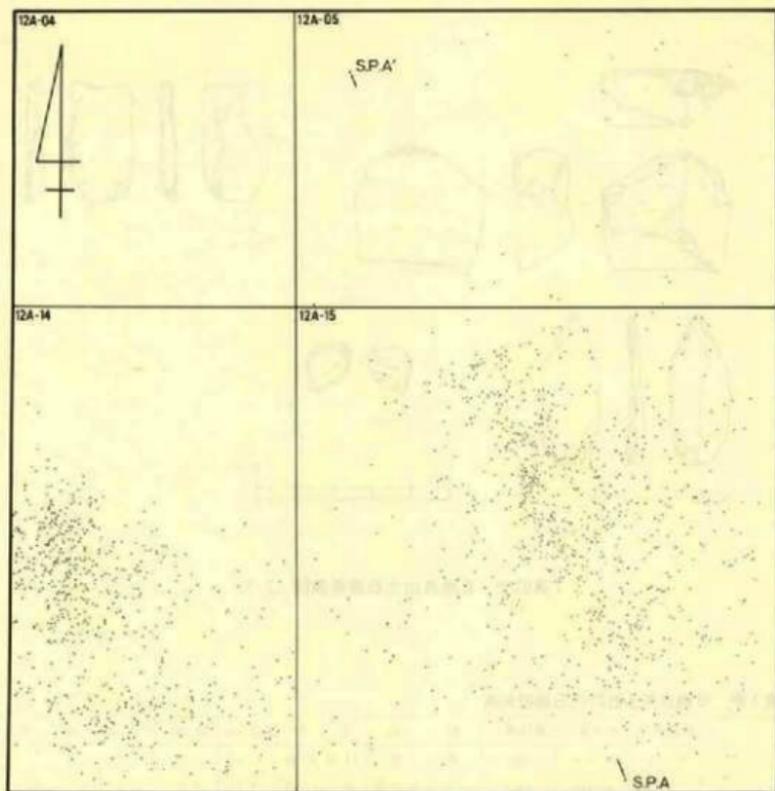
第89図 B地点第2炭化物集中箇所



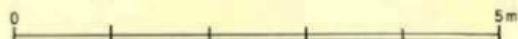
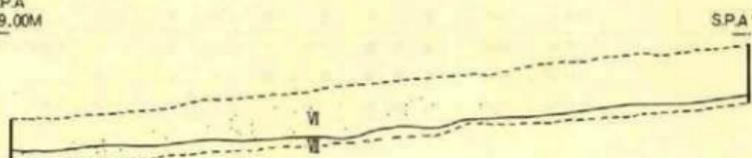
第90図 B地点第3炭化物集中箇所



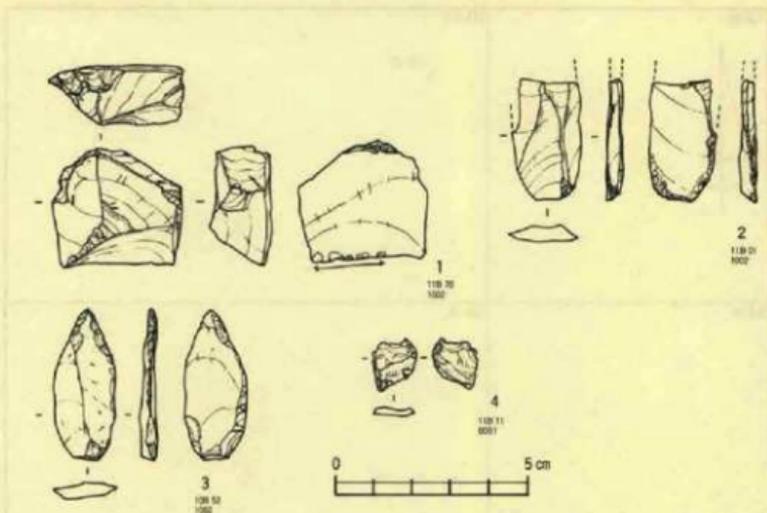
第91図 B地点第4炭化物集中箇所



SPA
39,00M



第92図 B地点第5炭化物集中箇所



第93図 B地点出土石器実測図 (2/3)

第3表 B地点先土器時代石器計測表

| | 検出番号 | 出土番号 | 遺物番号 | 種別 | 石材 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 備考 |
|-------|------|--------|------|--------|------|--------|-------|--------|-------|
| | 93-1 | 11B 70 | 1002 | 石 核 | 稜貫頁岩 | 3.15 | 3.3 | 1.5 | |
| | 2 | 11B 01 | 1002 | ナイフ形石器 | 安山岩 | 3.2 | 1.8 | 0.5 | 半欠 |
| | 3 | 10B 52 | 1002 | 尖頭器 | 安山岩 | 3.8 | 1.6 | 0.4 | |
| | 4 | 11B 11 | 0001 | 刮 片 | 泥 岩 | 1.35 | 1.1 | 0.2 | |
| ブロック外 | | 3C 97 | 0005 | 尖頭器 | チャート | 5.15 | 2.15 | 1.05 | 先端部欠損 |
| | | 10B 52 | 1002 | 尖頭器 | 安山岩 | 3.9 | 1.6 | 0.4 | |
| | | 6C 24 | 0003 | 尖頭器 | | 2.95 | 1.5 | 0.6 | 完形 |

第2節 縄文時代の遺構

B地点において検出された縄文時代の遺構は住居跡2軒、炉穴5基、陥し穴13基、土壇6基である。

1. 住居跡

J-1号住居跡(11Cイ002 第94図、図版8)

11C13・14グリッドにある。4.85m×3.98mの楕円形プランを有する。床面はほぼ中央が最も深く、壁に近づくにしたがって緩やかに浅くなる皿状を呈する。床面の状態は中央部が比較的しっかりしており、壁の周辺は軟弱である。床面積は13.68㎡。壁は0.1～0.2m前後の比較的しっかりした立ちあがりをもち、部分的には垂直であるが、大部分は緩やかな傾斜をもつ。ソフトロームの壁である。住居跡中央よりやや南に片寄って、1.1m×1.1m深さ0.05m～0.08mの隅丸形状の浅い掘り込みがある。覆土11の焼土粒を微量含み、炭化粒を多量に含む土層が入る。この掘り込みの底面はわずかに焼けた状態が確認され、一応炉と考えられる。ピットは合計12個発見され、深さはP₁・41cm、P₂・38cm、P₃・29cm、P₄・35cm、P₅・21cm、P₆・14cm、P₇・14cm、P₈・22cm、P₉・11cm、P₁₀・9cm、P₁₁・51cm、P₁₂・36cmである。

覆土

1. 暗褐色土 褐色土の小ブロック、ローム粒を少量含む。しまりあり。
2. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
3. 暗褐色土 ローム粒を微量含む。しまりあり。
4. 暗黄褐色土 炭化粒、ローム粒を多量に含む。しまりあり。
5. 褐色土 黄褐色土が少量混じる。ローム粒微量。しまりあり。
6. 暗黄褐色土 ソフトロームの小ブロックを少量含み、ローム粒を多量に含む。しまりあり。
7. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
8. 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、炭化粒を微量含む。しまりあり。
9. 暗黄褐色土 暗褐色土が部分的に入り、ローム粒を微量含む。しまりあり。
10. 黄褐色土 暗褐色土が多く混じる。炭化粒を少量含む。しまりあり。
11. 暗黒褐色土 炭化粒を多量に含む。焼土粒微量、しまりあり。

出土遺物は合計71点で、1点のみが確で他はすべて土器片である。炉の北東側に多くみられたが、大部分が覆土中で床面より出土したものはほとんどない。細片が多く採拓できたものは少ないが、すべて燃糸文土器で井草Ⅰ式が多く、同Ⅱ式はわずかである。したがって住居跡の時期は確定できないが、一応井草Ⅰ式期としておきたい。

J-2号住居跡(11Cイ004 第95図、図版9)

11C36・46グリッドにある。長方形のプランを呈すると思われるが、南向きの緩斜面に位置するため、南壁は確認できなかった。短辺2.4m-2.5m、長辺約3.3m程度と思われる。斜面にあるために床面は南にむかってゆるやかに傾斜しているが、比較的しまっている。壁は北側の最も深く掘りこんだ所で0.24mを測る。床面の中央よりやや南に片寄ってきわめて浅い掘り込みがある。ピット2が付随し、楕円形を呈し、長さ0.90m、最大幅0.45m、北側で0.09m、南側で0.02mの深さである。ピットは住居跡内に5個、外に3個検出された。深さは、 P_1 ・15cm、 P_2 ・20cm、 P_3 ・30cm、 P_4 ・20cm、 P_5 ・34cm、 P_6 ・24cm、 P_7 ・9cm、 P_8 ・29cmを測る。住居内の P_1 ~ P_5 は柱穴とも考えられるが、 P_6 ~ P_8 は住居外であり、大きさも異なることから柱穴とは考えられない。しかし、覆土の色調や覆土上出土の遺物が住居跡のものと同じ時期であることから、住居跡と無関係であったとは思われない。

覆土

1. 暗褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。炭化粒、焼土粒を微量含む。
2. 褐色土 ローム粒、ロームブロックを含む。
3. 褐色土 ローム粒、ロームブロックを少量含む。
4. 茶褐色土 ソフトロームが多く混じる。ロームブロック少量。
5. 暗褐色土 ローム粒を含む。

出土遺物はいずれも繊維を含む無文土器片で覆土より出土している。1は低い山形の波状口縁で器厚3mm、口縁は角がある。繊維を微量含み、硬く焼成良好。裏側に横方向の擦痕が顕著に認められる。2・3は同個体で比較的薄手。繊維多く裏側に繊維痕が浮き出ており、もろい。表面には縦位の擦痕が付く。4は P_6 出土。鋭角の尖底で尖端がわずかに突出している。繊維多くもろい。器面は凹凸があり、表面に擦痕が浅く縦位につく。5は4と非常によく似た尖底である。これらは後述する周辺グリッド出土の無文土器と同様の特徴をもち、子母口式と考えられる。したがって、本住居跡は一応子母口期とするのが妥当であろう。

2. 炉 穴

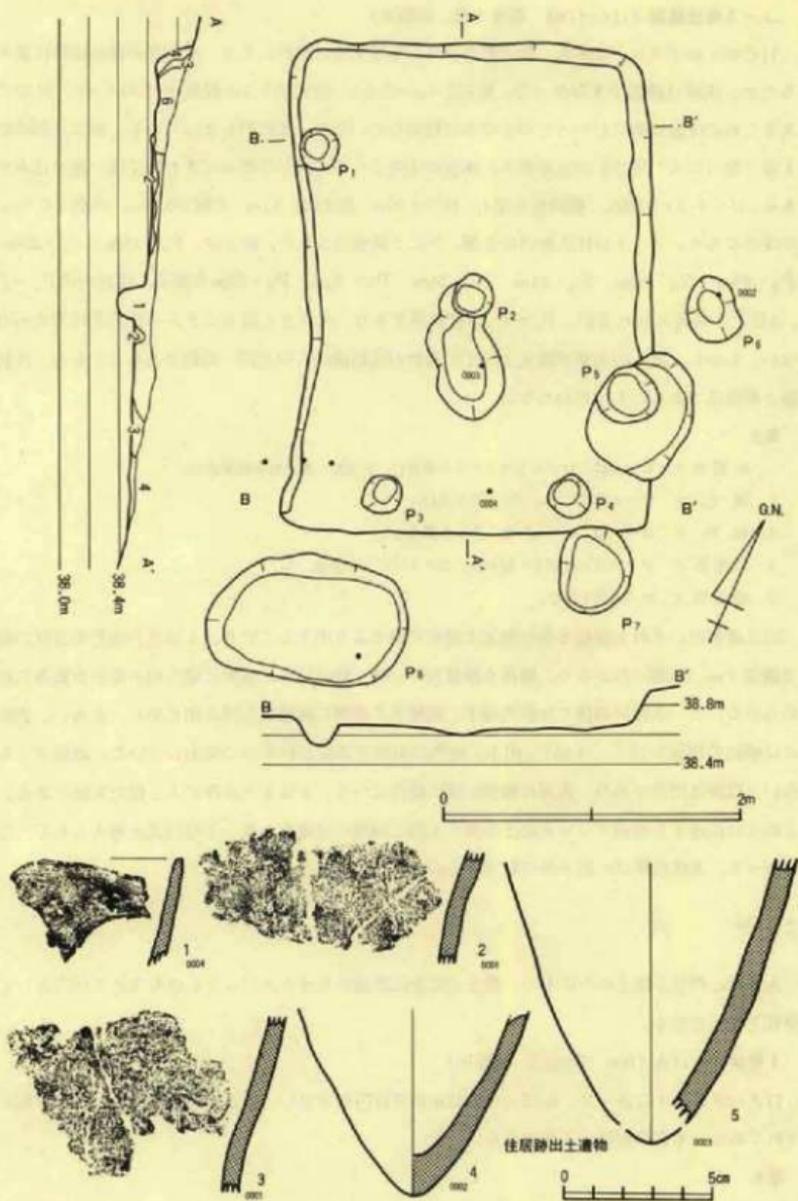
A地点と同じく焼土のみのもの、焼土が完全に底面から浮きあがったものも含めて炉穴として便宜上扱っておく。

1号炉穴(11Aイ006 第96図、図版10)

11A62グリッドにあって、0.55m×0.42mのほぼ円形を呈し、深さ0.05mを測る。上部が削平されており、本来の形状は不明である。

覆土

1. 焼 土
2. 褐色土 ローム粒多量、焼土粒、炭化粒を微量含む。



第95図 B地点J-2号住居跡実測図(1/40)

2号炉穴 (11Aイ003 第96図、図版10)

11A62グリッド、1号炉穴の東約0.7mの位置にあって、0.62m×0.57mのほぼ円形を呈する。深さ0.07m、1号炉と同じく削平されている。底面がわずかに焼けた痕跡がある。

覆土

1. 焼土
2. 赤褐色土 焼土粒を多量に含み、ローム粒、炭化粒を少量含む。
3. 褐色土 ローム粒を多量に含み、焼土粒、炭化粒を微量含む。
4. 褐色土 熱を受けたロームが多く含まれる。

3号炉穴 (11Aイ001 第96図、図版10)

11A57・58・67・68グリッドにまたがってあり、1.25m×1.20mのほぼ円形を呈する。底面は凹凸が激しい。焼土は覆土最上部にあって、底面から完全に浮いている。井草式の口縁部破片及び燃糸文土器の体部破片が覆土中より出土した。

覆土

1. 赤褐色土 焼土粒、炭化粒を多量に含む。比較的しまりがある。
2. 黒褐色土 ローム粒、炭化粒を少量含む。
3. 暗褐色土 ローム粒を多く含む。
4. 赤褐色土 焼土粒、ローム粒を多量に含み、炭化粒を少量含む。
5. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。ロームブロック少量。

4号炉穴 (11Aイ005 第96図、図版10)

11A67・68グリッドにあって、3号炉穴の南約1mの地点から検出された。1.00m×0.80mの楕円形を呈し、深さ0.27mを測る。底面は凹凸が激しい。焼土は覆土のはほぼ全体に含まれるが、純粋な焼土は認められない。覆土中より燃糸文土器が出土している。

覆土

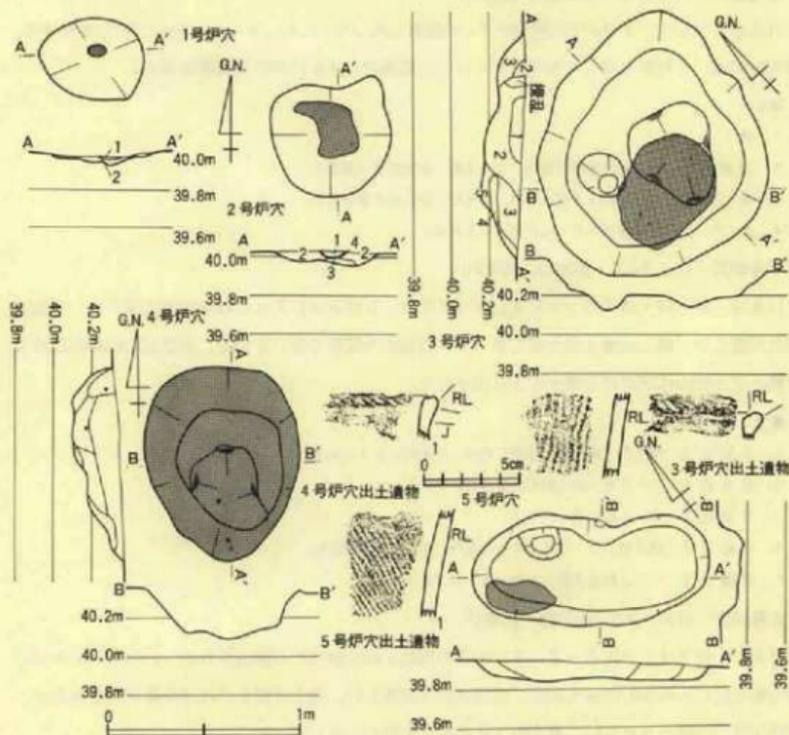
1. 暗褐色土 ローム粒、焼土粒を多く含み、炭化粒を少量含む。しまりがある。
2. 褐色土 ローム粒を多く含み、微量の焼土粒、炭化粒を含む。
3. 暗褐色土 焼土粒、炭化粒を比較的多く含む。
4. 黒褐色土 焼土粒を多く含む。
5. 黄褐色土 ローム粒を多量に含む。

5号炉穴 (11Aイ004 第96図、図版10)

11A84、94グリッドの傾斜面にあって長さ1.24m、最大幅0.55mの長楕円形を呈する。深さ0.11mで、断面は皿状になる。長軸の方向は傾斜に対して直交する。焼土は底面より完全に浮いている。燃糸文土器の体部破片が壁に密着した状態で出土した。

覆土

1. 暗褐色土 ローム粒、炭化粒を少量含む。
2. 褐色土
3. 黄褐色土 ローム粒を多く含む。



第96図 B地点炉穴実測図 (1/30)

3. 陥し穴

1号陥し穴 (9Cイ001 第97図、図版10)

9C92グリッドにあって、検出面では、長さ1.89m、最大幅0.75mの長楕円形を呈するが、坑底は最大幅0.10mと狭くなり、縦断面はわずかに袋状をなす。深さ0.93m、長軸の方向はN65°Wである。

覆土

1. 暗褐色土 黄褐色土がブロック状に混じる。堆積にしまりがある。
2. 暗黒褐色土 暗褐色土が多く混じり、ローム粒を少量含む。堆積にしまりがある。
3. ハードロームブロック
4. 暗黒褐色土 暗褐色土が少量混じる。

5. 暗黄褐色土 褐色土が多く混じる。
6. 黄褐色土 堆積にしまりがある。
7. 褐色土 堆積にしまりがある。
8. 黒褐色土 堆積にしまりがある。

2号陥し穴 (10Bイ005 第97図、図版10)

10B06グリッドにあって、口部がやや拡がった長方形を呈する。坑底の長さ1.84m、幅0.50m、深さ0.63mを測り、長軸の方向はN20°Wである。なお、坑底には3個のピットがあり、深さは北側のものから16cm・15cm・31cmを測る。覆土中より燃糸文土器の体部破片が出土している。

覆土

1. 暗褐色土 黒褐色土が多く混じる。ローム粒を微量含む。堆積にしまりがある。
2. 暗褐色土 褐色土の小ブロックとローム粒を多量に含む。炭化粒微量。堆積にしまりがある。
3. 暗褐色土 褐色土小ブロックを少量含む。堆積にしまりがある。
4. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。堆積にしまりがある。
5. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
6. 暗黄褐色土 暗褐色土を少量含む。

3号陥し穴 (10Bイ001 第97図、図版10)

10B39グリッドにあって、検出面では長さ3.11m、最大幅1.98mの楕円形を呈し、坑底は長さ2.62m、最大幅0.92mの長楕円形である。縦断面では北側が大きく袋状をなしている。深さ2.16m、長軸の方向はN33°Eである。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
2. 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。堆積にしまりがある。
3. 暗褐色土 部分的に黄褐色土が混じる。ローム粒少量含む。堆積にしまりあり。
4. 黄褐色土 部分的に暗褐色土が混じる。堆積にしまりあり。
5. 暗黄褐色土 ハードローム小ブロック及び暗褐色土が少量混じる。しまりがある。
6. 暗黄褐色土 ハードローム小ブロックが少量混じる。しまりがある。
7. 黄褐色土 ハードローム小ブロックを主体とする。
8. 黄褐色土 暗褐色土を部分的に多量に含む。しまりがある。
9. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
10. 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
11. 暗黄褐色土 しまりあり。
12. 黒褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を少量含む。しまりあり。
13. 暗褐色土 非常によくしまっている。
14. 黄褐色土 標準土層Ⅵ層の崩落土
15. 黄褐色土 標準土層Ⅴ層の崩落土
16. 暗褐色土 ハードローム小ブロックを少量、ローム粒を多量に含む。しまりあり。

4号陥し穴 (10Bイ006 第98図、図版11)

10B69、10C60グリッドにあって、東側を試掘坑によって切られている。口部のやや拡がった長方形プランを呈する。墳底は長さ1.84m、最大幅0.53mで、深さは0.70m、長軸の方向はN24°Wである。墳底には4個の小ピットが検出された。覆土は壁際を除き、しまりのある黒褐色土及び暗褐色土であった。

5号陥し穴 (10Cイ001 第98図、図版11)

10C56グリッドにあって、検出面で長さ0.93m、最大幅0.66mの楕円形を呈する小形の陥し穴である。墳底プランは長さ0.58m、最大幅0.45mの長方形で深さは0.87m。断面はハードローム層中でほとんど直口であるが、口部でやや拡がっている。長軸の方向はN7°Wである。

覆土

1. 暗黒褐色土 ローム粒を少量含む。堆積にしまりがある。
2. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
3. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。しまりがある。
4. 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
5. 黄褐色土 ローム及び暗褐色土が多く混じる。
6. 暗褐色土 ロームが少量混じる。

6号陥し穴 (10Cイ004 第98図、図版11)

10C90グリッドにあって、検出面で2.06m、最大幅1.45mの楕円形を呈する。墳底プランも楕円形を呈しており、長さは1.44m、最大幅0.77mで、深さは1.25mを測る。長軸の方向はN85°Wである。墳底には4個の小ピットがあるが、西端のごく浅いものを除きいずれも深さ10cm程度である。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒を含む。堆積にしまりがある。
2. 黒色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
3. 黄褐色土 黒褐色土が混じる。しまりがある。
4. 黄褐色土 黒褐色土が少量混じる。
5. ローム崩落土
6. 暗褐色土 ハードロームブロックと暗褐色土が混じりあった層
7. ハードロームブロック

8号陥し穴 (11Bイ004 第98図、図版11)

11B09、19グリッドにあって、検出面で長さ2.23m、最大幅1.35mの楕円形を呈する。墳底は0.85m、最大幅0.56mの長方形で、深さは2.89mを測る。検出面の長軸と墳底の長軸がかなりずれており、墳底では方向がN26°Wである。断面形態は口部から次第にすばまり、下半はほとんど直口している。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。地積にしまりがある。
2. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
3. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまりがある。
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
5. 暗褐色土 部分的に黄褐色土が混じり、ローム粒を多量に含む。しまりがある。
6. 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多量に含む。しまりがある。
7. 黒褐色土 ローム粒を多量に、ローム小ブロックを少量含む。黄褐色土が部分的に混じる。しまりあり。
8. 暗黄褐色土 暗褐色土が多量に混じる。ローム粒を多量に含む。しまりあり。
9. 黒褐色土 褐色土が少量混じり、ローム粒を多量に含む。
10. ロームブロックを主体とする層
11. 黄褐色土 暗褐色土が少量混じる。しまりあり。
12. 黒褐色土 ローム小ブロック及びローム粒を多量に含む。
13. 暗褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多量に含む。
14. 暗黄褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多量に含む。

7号陥し穴 (11Bイ003 第99図、図版11)

11B06グリッドにあって、検出面では1.10m×0.90mの円形に近い形状を呈し、ハードローム層に達した段階で方形となる。坑底は長さ0.50m、最大幅0.46mで、深さは0.97m、長軸の方向はN17°Wである。

覆土

1. ロームブロック
2. 黒褐色土 暗褐色土のブロックが混じる。地積にしまりあり。
3. 暗褐色土 しまりがある。
4. 暗褐色土 暗褐色土のブロックが多量に混じり、ローム粒を多量に含む。しまりがある。
5. 暗黒褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多量に含む。しまりあり。
6. 暗黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
7. 黄褐色土
8. 暗黒色土 部分的に黄褐色土が混じり、ローム粒を多量に含む。しまりがある。

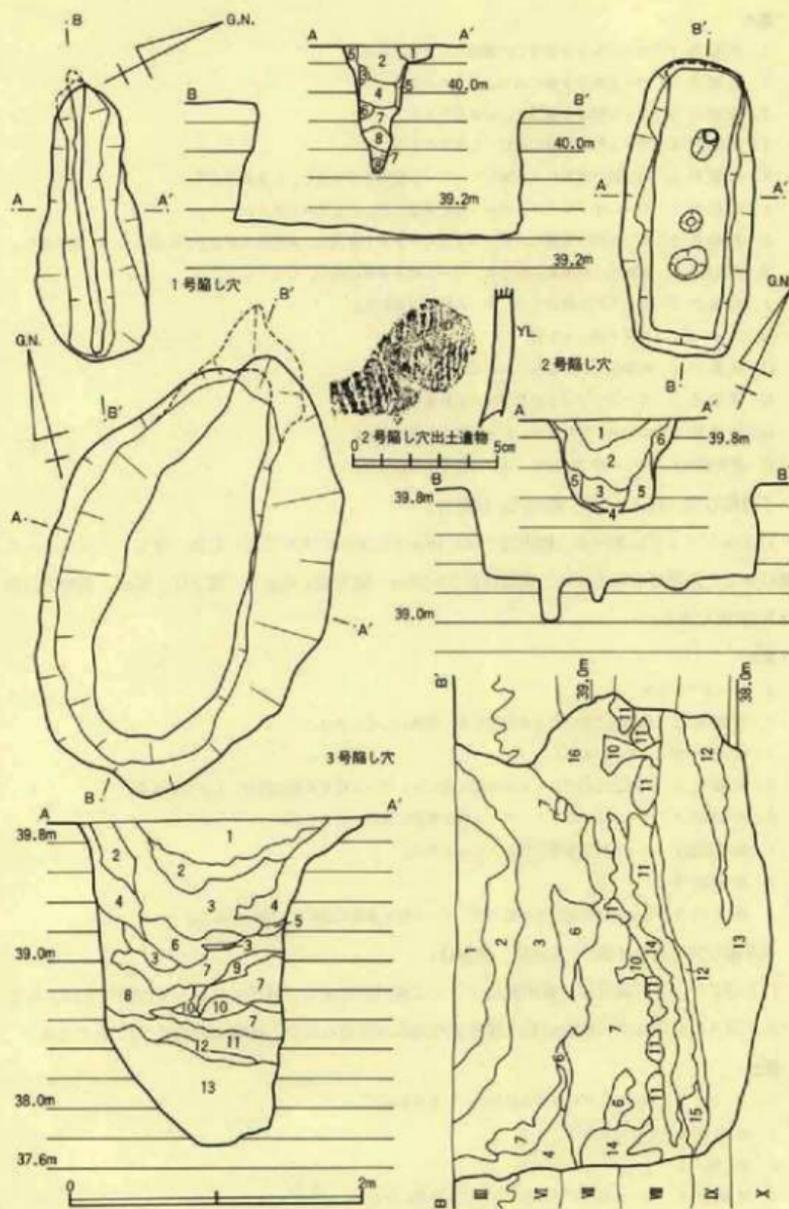
9号陥し穴 (11Bイ005 第99図、図版11)

11B68グリッドにあって、検出面のプランは楕円形を呈し、坑底にむかって次第にすばまっている。深さは3.18mで、坑底は粘土層を切り湧水が認められた。長軸の方向はN13°Eである。

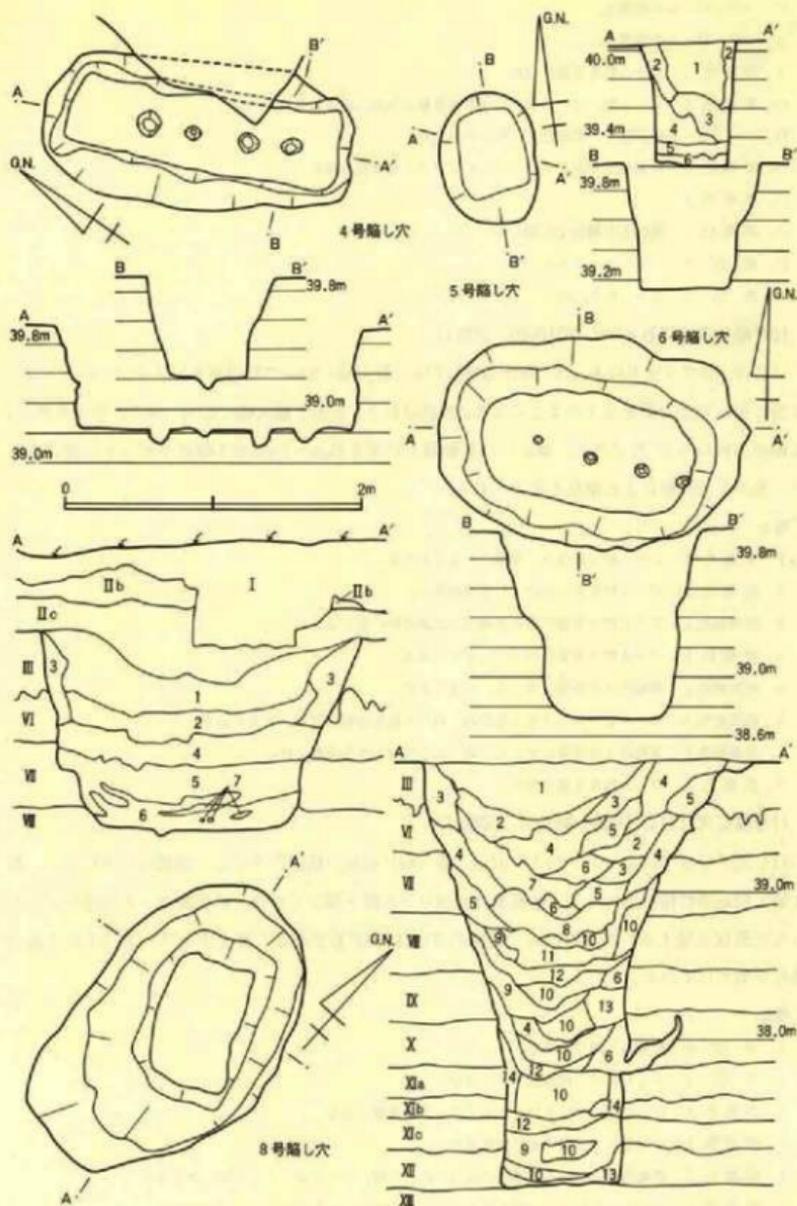
覆土

1. 黒色土 ローム小ブロック少量含む。しまりあり。
2. 暗褐色土 しまりがある。
3. 黒色土
4. 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。
5. 暗褐色土 ロームブロックを多量に含む。
6. 褐色土 黒褐色土とロームブロック、ローム粒が混じる。

第4章 B地点の調査



第97図 B地点陥し穴実測図1 (1/40)



第98図 B地点陥し穴実測図2 (1/40)

7. ハードロームの崩落土
8. ソフトロームの崩落土
9. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。
10. 黒褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを多量に含む。炭化粒を含む。
11. ハードロームの崩落土 暗褐色土の粒子が混じる。
12. 暗褐色土 黒褐色土が混じり、ローム小ブロックを多量に含む。
13. 黒褐色土
14. 黒褐色土 黒色土と褐色土が混じる。
15. 褐色土 ややしまりがある。
16. 黒色土 ローム粒を含む。

10号陥し穴 (11Bイ002 第100図、図版11)

11B79、89グリッドにあって、検出面で1.73m、最大幅0.93mの楕円形を呈するが、ハードローム層に至って長方形を呈するようになる。坑底は長さ1.27m、最大幅0.42m、深さ0.98mを測る。長軸の方向はN28°Eである。坑底には長軸線上に深さ15cm~20cmの3個の小ピットが確認された。他の2個は根による攪乱と考えられる。

覆土

1. 黒褐色土 ローム粒少量含み、堆積にしまりがある。
2. 暗褐色土 ローム粒を多く含み、しまりがある。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含み黄褐色土が部分的に混じる。
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含み、しまりがある。
5. 暗黄褐色土 黄褐色土が多量に混じる。しまりあり。
6. 暗黒褐色土 ローム小ブロックを少量含み、ローム粒を多量に含む。しまりあり。
7. 暗黄褐色土 茶褐色土が多量に混じり、ローム小ブロックを多量に含む。
8. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。

11号陥し穴 (11Cイ006 第99図、図版11)

11C32グリッドにあって、長さ1.92m、最大幅1.40mの楕円形を呈し、坑底は長さ1.50m、最大幅0.73mの長楕円形となる。縦断面は立川ローム最下部でくびれ、武蔵野ローム層部分がふくらんだ袋状を呈する。深さ2.22m、長軸の方向はN42°Eである。覆土中より、井草I式土器の破片が出土している。

覆土

1. 黒色土 堆積にしまりがある。
2. 黒色土 1より黒く、炭化粒を多く含む。
3. 黒褐色土 ローム粒、ソフトローム小ブロックを多量に含む。
4. 黒褐色土 3に近いが多量の炭化粒を含む。
5. 暗褐色土 黒褐色土とローム崩落土の混じりあった層。ハードローム小ブロックを含む。
6. 暗褐色土 5に近いがロームの混入少なくローム小ブロックも少ない。
7. 黄褐色土 ハードローム小ブロックとローム土を主体とし、黒褐色土が混じる。

8. 黒褐色土 ハードロームブロックを多量に含む。
9. 暗褐色土 黒褐色土にローム粒が混じる。
10. ハードローム崩落土
11. 暗褐色土 黒褐色土とロームブロック、ローム粒が等量程度混じり合った層
12. 黄褐色土 ハードローム崩落土に暗褐色土がブロック状に混じる。
13. 黄褐色土 ハードローム崩落土に暗褐色土粒が混じる。
14. 黄褐色土 暗褐色土粒が少量混じる。
15. 黒色土 有機質

12号陥し穴 (11Cイ005 第100図、図版12)

11C61グリッドにあって、検出面では長さ1.88m、最大幅1.00mの長楕円形を呈し、壙底は0.30m以下と狭くなっている。縦断面は袋状をなし、壙底中央に深さ12cmの小ピットがある。深さ1.90m、長軸の方向はN54°Wである。覆土中より出土した井草I式の口縁部破片はJ-1号住居跡出土のものと同一体である。

覆土

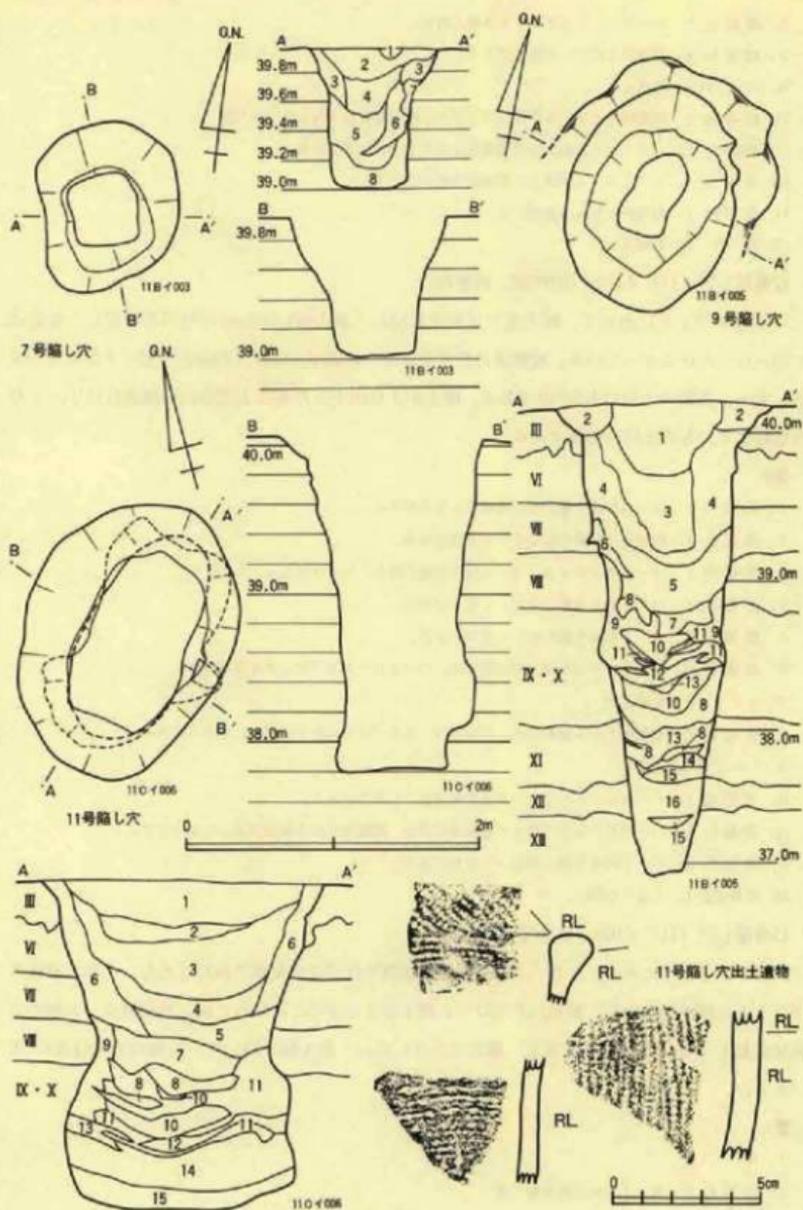
1. 黒褐色土 ローム粒を少量含む。堆積にしまりがある。
2. 黒褐色土 暗褐色土が多く混じる。しまりがある。
3. 黒褐色土 ローム小ブロック、ローム粒を多量に含む。しまりがある。
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
5. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。しまりがある。
6. 暗褐色土 ソフトロームが部分的に混じる。ハードローム小ブロックを少量含む。
7. ソフトロームの崩落土
8. 黄褐色土 暗褐色土が少量混じる。ハードローム小ブロックを少量含む。しまりがある。
9. ハードローム崩落土
10. 黒褐色土 ハードローム小ブロックを少量含む。しまりがある。
11. 黄褐色土 ハードローム小ブロックを多量に含む。黒褐色土が少量混じる。しまりがある。
12. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりがある。
13. 暗黄褐色土 しまりが強い。

13号陥し穴 (11Cイ008 第100図、図版12)

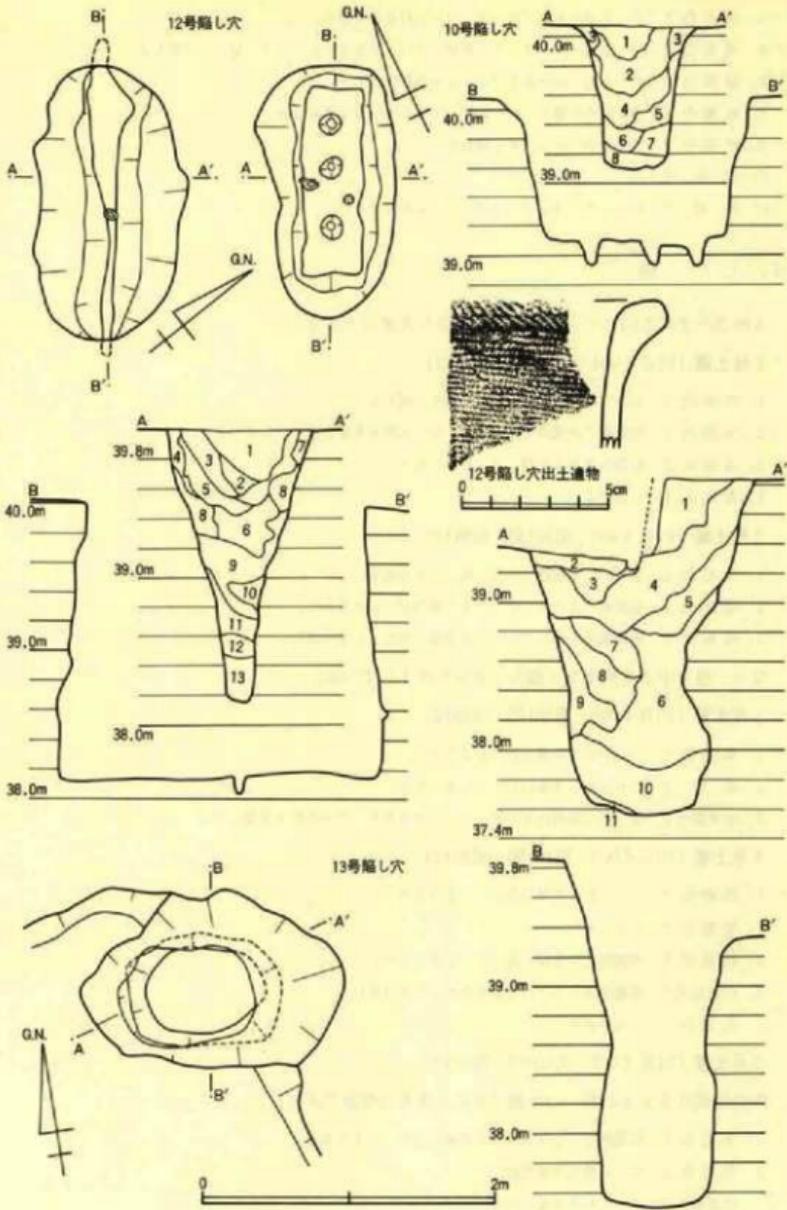
11C17グリッドにあって、H-1号住居跡の調査中住居跡北東隅で検出された。上面、壙底のプランとも楕円形を呈し、断面は立川ローム最下部までゆるくくびれた後、武蔵野ローム層中で袋状に拡がっている。深さ2.36m、壙底は長さ0.81m、最大幅0.59mで、長軸の方向はN85°Wである。

覆土

1. 覆 乱
2. 暗褐色土 H-1号住居跡の貼り床
3. 黒褐色土 ロームブロックを少量含む。H-1号住居跡の振り方覆土
4. 暗褐色土 ハードローム小ブロックを少量、ローム粒を多量に含む。



第99図 B地点陥し穴実測図3 (1/40)



第100図 B地点陥し穴実測図4 (1/40)

5. 暗褐色土 ハードローム小ブロック、ローム粒を多く含む。
6. 黄褐色土 ハードロームブロック、及び小ブロックを主とし、ソフトロームが混じる。
7. 暗褐色土 ローム粒、ローム小ブロックを少量含む。
8. 暗褐色土 7よりやや黒く、ローム粒、ローム小ブロックを含む。
9. 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
10. 黒色土
11. 黄褐色土 ローム小ブロック、ソフトロームからなる。

4. 土 壌

A地点の土壌と同じく、性格不明のものが大部分である。

1号土壌 (10Bイ004 第101図、図版12)

1. 暗褐色土 しまりあり。部分的に黒褐色土が混じる。
2. 黒褐色土 部分的に黄褐色土が混じる。ローム粒を多量に含む。しまりあり。
3. 黄褐色土 暗褐色土が多く混じり、しまりあり。
4. 黄褐色土 しまりあり。

2号土壌 (10Bイ003 第101図、図版12)

1. 黒褐色土 部分的に暗褐色土が混じる。しまりあり。
2. 暗褐色土 暗黄褐色土の小ブロックを少量含む。しまりあり。
3. 暗褐色土 暗黄褐色土の小ブロックを多量に含む。しまりあり。

なお、覆土中より燃系文土器の小破片が出土している。

3号土壌 (10Bイ002 第101図、図版12)

1. 黒褐色土 ローム粒を微量含む。しまりあり。
2. 褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
3. 暗黄褐色土 部分的に黄褐色土が混じり、しまりあり。ローム粒を多量に含む。

4号土壌 (10Cイ003 第101図、図版12)

1. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。
2. 暗褐色土 しまりあり。
3. 暗褐色土 黄褐色土が多量に混じる。しまりあり。
4. 暗黄褐色土 暗褐色土の小ブロックを含む。しまりあり。
5. 黄褐色土 しまりあり。

5号土壌 (11Bイ001 第101図、図版12)

断面鍋底状を呈する唯一の土壌である。床面は明瞭であった。

1. 黒褐色土 暗褐色土の小ブロックを多量に含む。しまりあり。
2. 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
3. 暗黄褐色土 ローム粒を多量に含む。
4. 黄褐色土 暗褐色土が混じる。

5. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。

6号土壌 (11Cイ001 第101図、図版12)

1. 黒褐色土 暗褐色土が混じる。しまりあり。

2. 黒褐色土 しまりあり。

3. 黒褐色土 ローム粒を多量に含む。

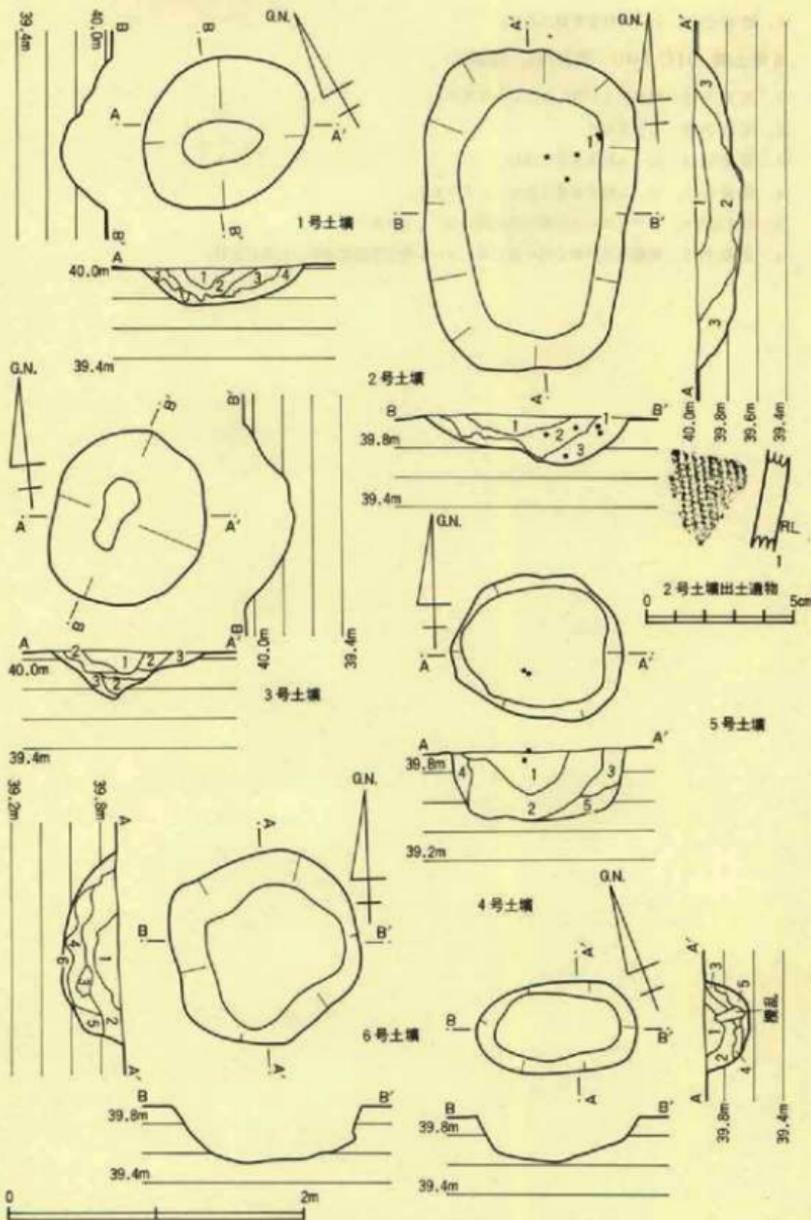
4. 暗褐色土 ローム粒を多量に含む。しまりあり。

5. 暗黄褐色土 ソフトロームが部分的に混じる。しまりあり。

6. 黄褐色土 暗褐色土が部分的に混じり、ローム粒を多量に含む。しまりあり。



11Cイ001 第101図、図版12



第101図 B地点土壌実測図 (1/40)

第3節 縄文時代の遺物

1. 土 器

B地点より出土した土器は、草創期後半の燃糸文系統土器から中期初頭に至るまでの諸型式のものである。大別及び細別はA地点の分類方法と同じである。(73頁参照)

第1群土器 燃糸文系統土器

B地点では調査区のほぼ全域から、豊富に出土した。特に井草Ⅰ、Ⅱ式は多く、縄文、燃糸文の比率をはじめ各文様の数量的比較が充分に可能である。一括土器及び同個体の土器は拓影図に併載したグリッド番号に見るとおり、かなり離れて散っており、A地点の出土状況と対称的である。なお、体部破片については大量に出土しているものの型式分類がほとんど不可能なため掲載しなかった。

第1類、井草Ⅰ式土器(第102図～106図、図版41～45)

井草Ⅰ式は第1種、押圧縄文が口端または口頸部の両方、または一方に認められるもの、第2種、全体が縄文のみ施されるもの、第3種、燃糸文と縄文が同一個体上に施されるものの3種に大きく分類し、さらに細かく分けて述べることにする。

胎土中には長石・石英の粒子、砂粒を含むが、多量に含んでいるものと少ないものとの両方がある。多量に含むものの中には、長石、石英の角礫が5mmほどに達するものがある。口端から口縁裏側にかけては指によるナデがみられるものが半数ほどあり、特に口端を滑らかにしているものが多い。砂粒の移動による擦痕のあるものはきわめて少ない。表面はあれたものと滑らかなものが相なればする。

第1種 押圧縄文の施されるもの(第102図1、第103図1～30)

a. 口端、口頸部の両方に押圧縄文の施されるもの。

第102図1は口縁推定外径28.5cm、現在高21.5cmである。口縁断面はやや肥厚し、強く外反している。口端は上からRLの押圧、RL、LRの横位回転の3種の縄文からなり、羽状の効果がみられる。口頸部はLRとRLの2本一組の押圧縄文列によって体部と画されている。文様帯内は、RL、LRの押圧縄文が2本1対となって6～7条等間隔に並ぶ分帯が2か所にある。分帯内は横回転の羽状縄文、分帯間も同じ羽状縄文となっている。体部文様帯の縄文は条、節ともよく整っている。第103図1は口端に縦位の押圧縄文がみられる。口頸部上端にも押圧縄文が施されるが、以下小破片のため不明。2は口端上及び口頸部に2条間隔をあけて押圧縄文が施される。3の口頸部押圧縄文は上端に2条みられる。4の口頸部押圧縄文は横走る縄文地上に施さ

れる。5の口頸部文様帯は指頭圧痕列の下から始まる、押圧縄文は縄文地の上に施され、回転縄文は2方向である。6・7はともに口頸部に横走縄文を施したのち、口頸部上端に縄文を押圧する。8は口頸部の押圧縄文が上下2段に認められるもので、上段の押圧縄文より上は斜行縄文、以下は縦走の縄文でそのまま体部へ連続している。

b. 口端にのみ押圧縄文の施されるもの

第103図9～22がこれで、9は2条の押圧縄文のみ口端に施されたもの。19は斜めに押圧縄文が施される。他はいずれも同一原体によって押圧と回転縄文が口端に施されている。ほとんどが前述のaと同様に回転縄文は口縁にそって横回転させ、羽状の効果をあげているが、例外もあり、20は斜行回転の縄文で条が縦走している。

c. 口頸部にのみ押圧縄文が施されるもの。

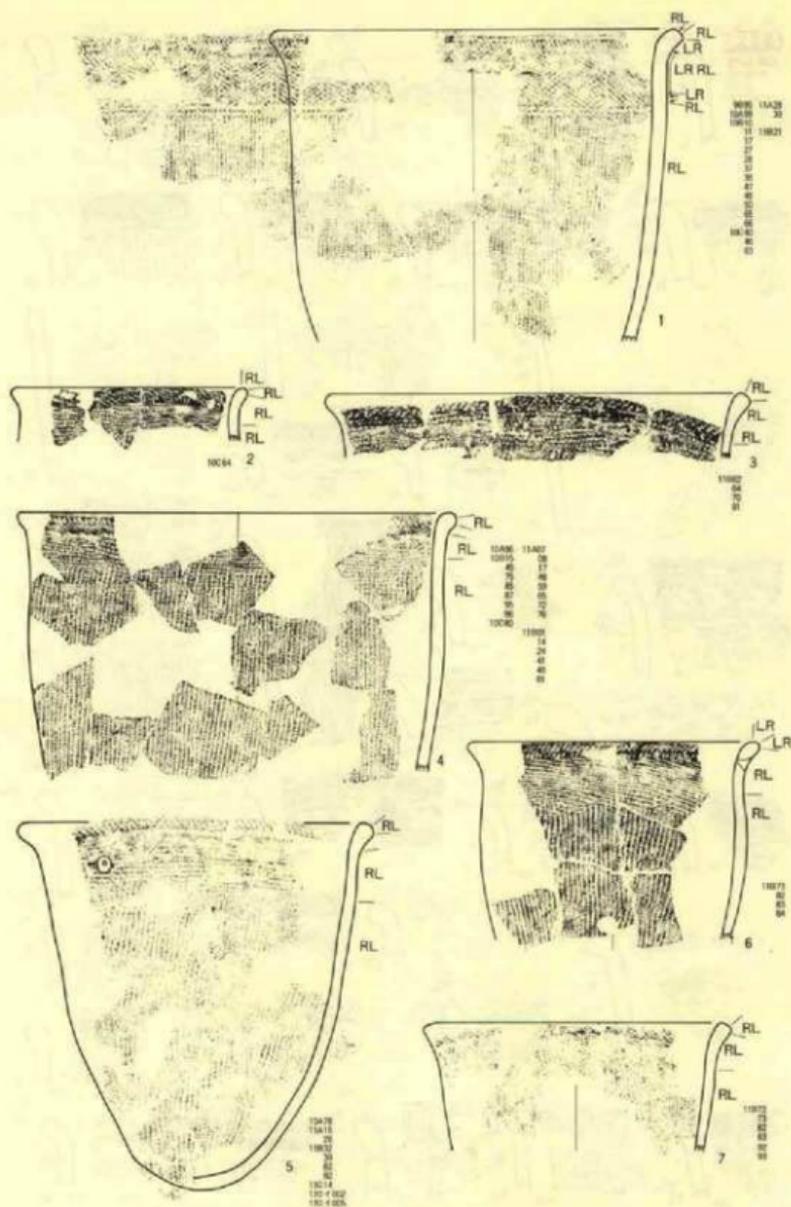
第104図23～30がこれで、23・24は押圧縄文のみ。他は縄文地文の上に押圧縄文を施す。26は2条一組の押圧縄文で口頸部文様帯の上下を区画し、さらにその中を鋸歯状に押圧縄文が施文されている。27は2条で横位の押圧縄文間に、縦位の押圧縄文が施される。30は口頸部から体部にかけて縦走する縄文が施された上に、2条の押圧縄文を付することによって口頸部の文様帯を維持している。

第2種 器面全体が回転縄文のみによって文様の構成が行われるもの。(第102図2～7、第104図31～第106図95)

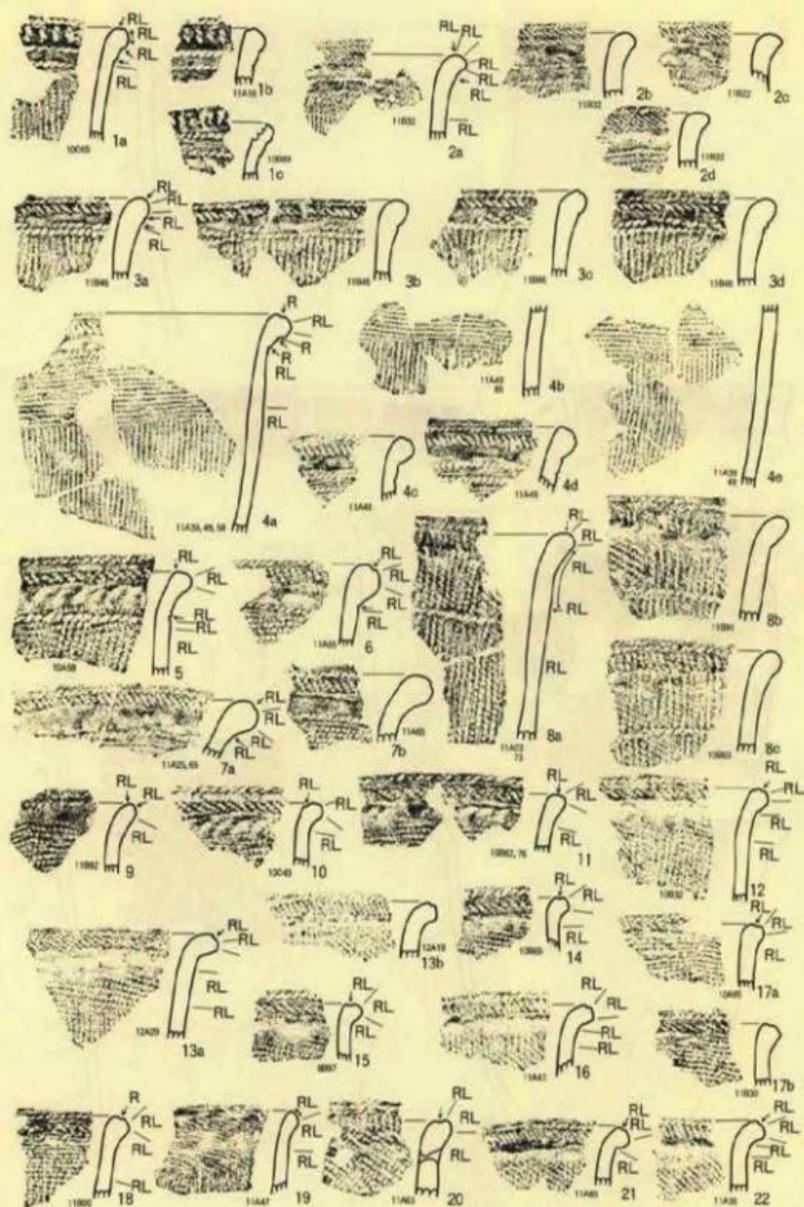
井草Ⅰ式の大部分が本種に含まれる。a. 口頸部の縄文が横走するもの、b. 口頸部の縄文が斜行するもの、c. 口端が無文の特殊なもの、の3種にさらに分類した。ただし、aとbの分離は必ずしも明瞭ではなく、いずれとも判別しがたいものも存在する。

a. 口頸部の縄文が横走するもの

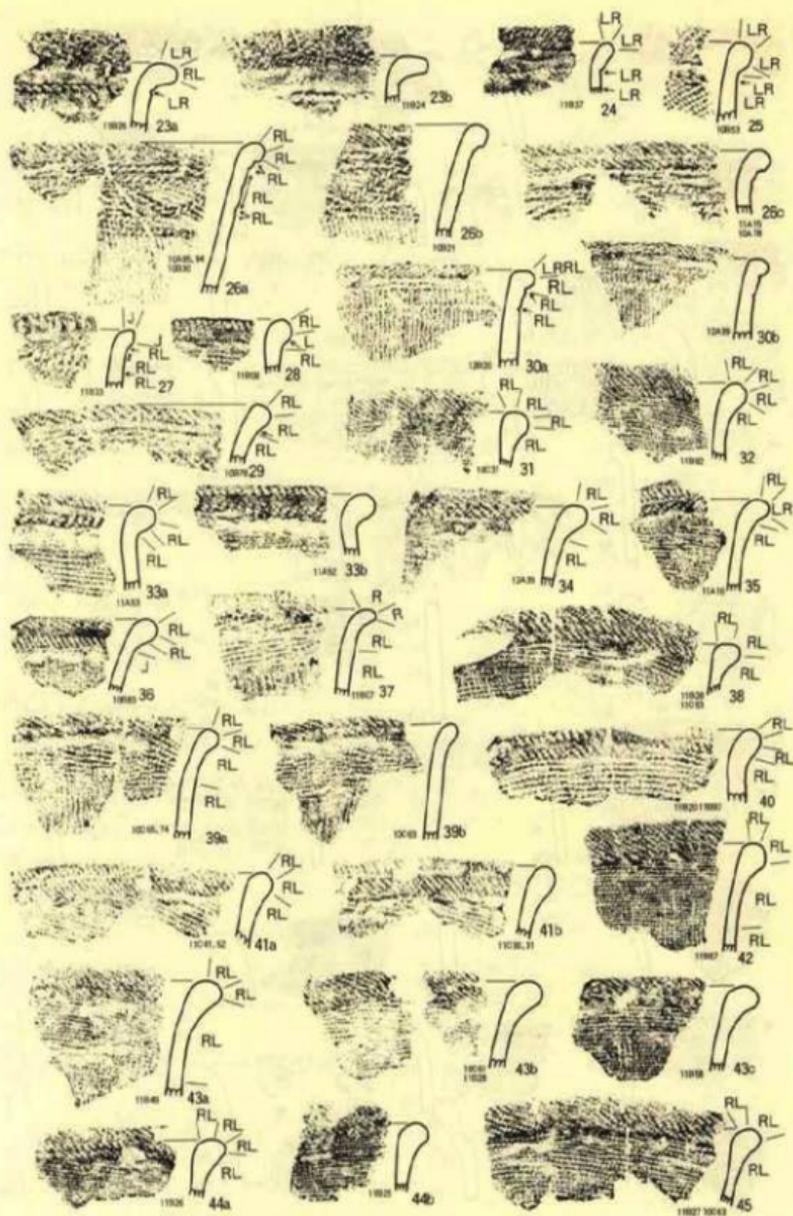
第106図31・32・44は口端の縄文が3段に施されたもの。31・32はあるいは同じ個体かもしれない。きわめて稀な例で、図示した個体のみ出土である。同図33～36は口端に縄文が2段施文され、かつ口縁の肥厚部下から口頸部上端にかけて、指頭圧痕がめぐもの。35は口端の縄文がRLとLRの2種を用いている。第102図2、第104図37～第105図54は口端に2段の縄文が施され、かつ口端と口頸部文様帯間に無文帯のないもの。本遺跡の井草Ⅰ式の中で最も多い。第102図2は口縁部推定外径が16cmである。45は口端の縄文が部分的に3段に施されている。37は口端と口頸部以下の縄文が異種類のもの。第105図55,56は口端の縄文が縦走する稀な例である。2個体のみ。第102図4・5、第105図57～62は口端の縄文が1段で、かつ口縁の肥厚部下から口頸部にかけて指頭圧痕がめぐるか、無文帯となるもの。なお、61は57と同個体である。第102図4は口縁部推定外径が30cmである。第102図3、第105図63～72は口端が1段の縄文で、かつ口端と口頸部間に無文帯をもたないもの。本類も量的には多い。第102図3は口縁部推定外径が29cmである。65は口端と口頸部以下の縄文が異種類のものである。



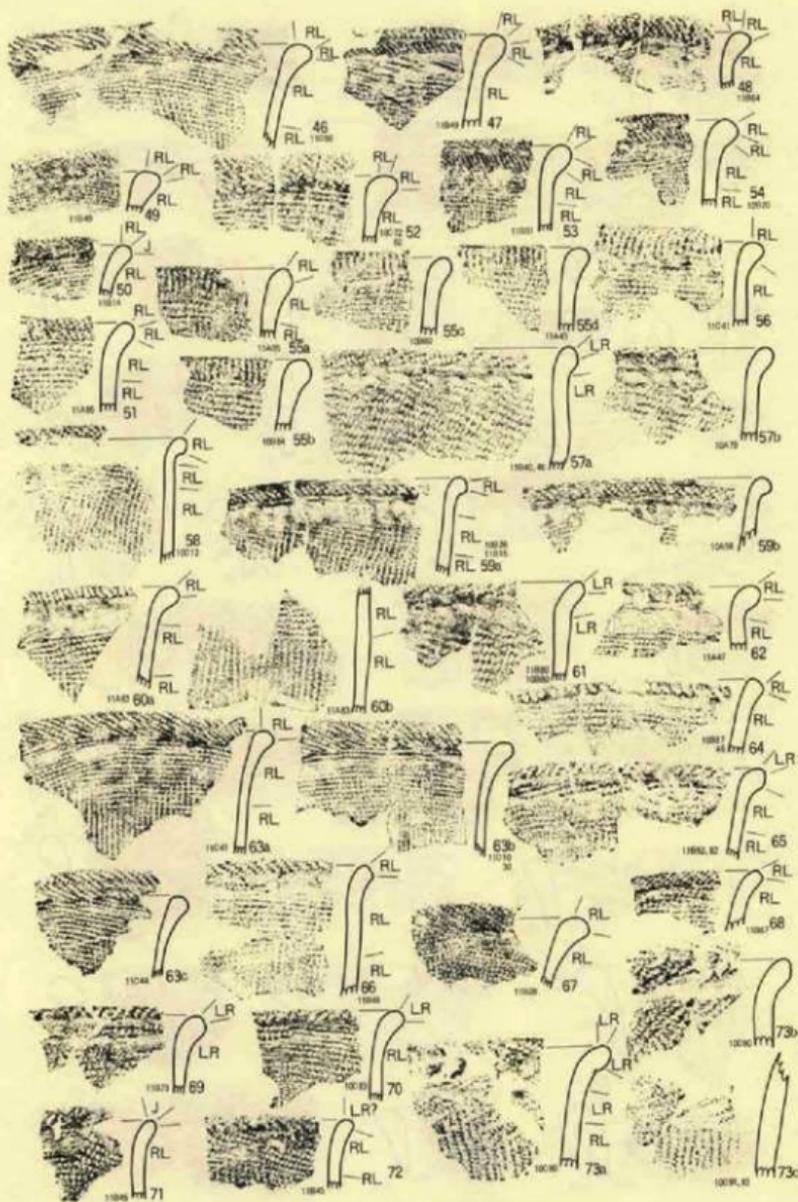
第102図 B地点草創期後半土器実測図1 (1/4)

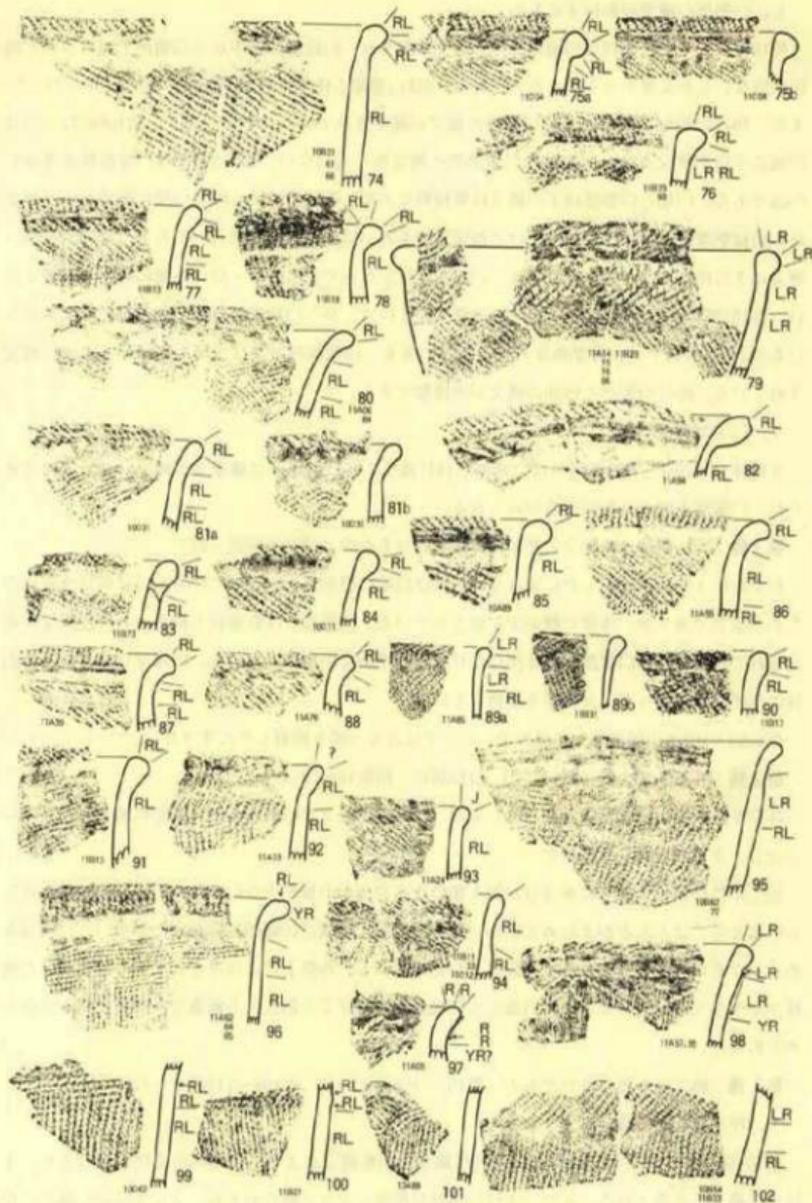


第103図 B地点草創期後半土器拓影図1 (1/3)



第104図 B地点草創期後半土器拓影図2 (1/3)





第106図 B地点草創期後半土器拓影図4 (1/3)

b. 口頸部の縄文が斜行するもの

第105図73～第106図76は口端に2段の縄文が施され、口縁肥厚部下から口頸部上端にかけて指頭圧痕ないし無文帯がみられるものである。73は口頸部と体部の縄文が別種の縄文を用いている。また、76は口頸部にL RとR Lの2種の縄文が施文されている。第102図6、第106図77～79は口端に2段の縄文を施し、口端と口頸部間に無文帯をもたない。第102図6は口縁部推定外径が20cmである。口端と口頸部以下の縄文は異種類である。第106図80～87は口端に縄文が1段施され、口縁肥厚部下から口頸部にかけて指頭圧痕あるいは無文帯の認められるもの。80の口頸部の縄文は2方向に施文され、やや乱れているが羽状となっている。86・87は口端の縄文が縦走に近い。第102図7、第106図88～93は口端の縄文が1段で、かつ口縁肥厚部と口頸部間に無文帯がないもの。第102図7は口縁部推定外径が21cmである。口頸部の縄文は左傾と右傾の2方向に施文されている。89は口頸部と体部の縄文が異種類である。

c. 口端が無文のもの

3個体のみ出土。第106図94は口頸部が斜行縄文。95は口頸部に横走する縄文が部分的に認められ、口頸部上部には指頭圧痕がみられる。

第3種 同一個体上に縄文と燃糸文が施文されるもの。(第106図96～98)

わずかに3個体が出土したにすぎない。96は口端に燃糸文が施されているもの。97は小破片のため不確定であるが、体部に燃糸文が施されている。口頸部には鋸歯状と横方向の押圧縄文が施文されている。98は口頸部から体部にかけて細い燃糸文が施されている。口頸部は横方向と鋸歯状の押圧縄文によって、文様帯を維持している。

なお99～102は口縁部を欠く破片で、ここではごく一部を掲載したにすぎない。

第2類 井草Ⅱ式土器(第107図1～113図15、図版46～52)

井草Ⅱ式は第1種縄文のみ施されたもの、第2種燃糸文が口端あるいは体部に施されたものに二分し、さらに細かく分類した。

胎土中には長石・石英粒を含むが第1類に比べて含有の量が少ない。また、大粒の粒子を含むものはなく、ほとんどがきわめて細かいものである。焼成は比較的良好なものが多い。口端はなめらかなものが多いが、表面は半数以上が荒れている。井草Ⅱ式にはほとんどみられなかった擦痕がやや多くなっている。また口端から口縁裏側にかけての指による顕著なナデはほとんどみとめられない。

第1種 縄文のみ施されたもの(第107～108図1～11、第109～112図1～73)

a. 押圧縄文が口端に施文されるもの。

第109図1～4がこれで、1～3は押圧縄文と回転縄文により、口端部の文様が構成され、4は押圧縄文のみ施される。また、1は口頸部が指頭によって磨り消され、2～4は同じ部位に指頭圧痕がめぐっている。いずれも口頸部文様帯を持っておらず、井草Ⅱ式と考えた。

b. 口端の回転縄文が2段に施文されるもの。

第107図4は口縁部の推定外径が18cmである。口頸部には指頭圧痕がめぐる。第109図5は口端の縄文が羽状をなす。異種の縄文を使用している可能性がある。同図6～8は同一原体を2段口端に施文する。6には口頸部に指頭圧痕列がめぐる。

c. 口端の縄文が1段で、口頸部に指頭圧痕列あるいは狭い無文帯を有するもの。

第107図1は口縁部の推定外径が26cmである。口端の縄文に特徴があり、RLとLRの縄文帯が交互に施されている。同図2は口縁部の推定外径が24.5cmである。第109図9～20もこの類である。15・20は口縁断面がわずかに肥厚外反する。16は口端が平らで、わずかに外反するのみ。17は指頭圧痕が深く、口端は強く外反する。

d. 口端の縄文が1段で、かつ口頸部に無文帯がないか、わずかに認められる程度のものである。

井草Ⅱ式の中で最も普遍的なものである。口縁断面が肥厚外反するものと、ほとんど肥厚せず、口頸部を指でおさえて口縁を外反させたり、ほとんど直口で円頭状の断面となるものがある。第107図3・5、第108図9及び第109～111図21～46は口縁の肥厚外反するもの。3・5はいずれも口縁推定外径24cmである。9は同じく32cmの大形土器である。27～30はほとんど直口し、肥厚部は外へ突出する形状を呈する。28は口縁推定外径15cmの小形。第107・108図6～8・10・11、第111図47～65は口縁断面が強く肥厚していないものである。6は口縁推定外径24cm、推定器高28cm。口頸部で一旦くびれ、口縁は外反する。かなり胴の垂った器形になると思われる。注目されるのは拓影中央の口縁突起である。この突起は口縁の他の部分に比較して瘤状に肥厚しており、明らかに意図して付けられたものである。おそらく1個単独ないしは2個が対面するものであろう。ただし、口縁は一律に水平ではなく、ゆるい波状を呈するようである。8・10・11も口頸部がわずかにくびれて口縁が外反する。8の口縁推定外径は17cm、11では同じく26cmである。10は口縁の外径16cm、器高16.5cm程度の大きさになると思われる。第111図47～60・62は口縁断面がわずかに肥厚するが、口頸部がくびれて外反する器形を呈する。口端は丸味をもつものが多いが、56～58・60のようにやや尖り気味のものもある。第107図7、第111図61図63～65は、口縁断面がほとんど直口でわずかに外反する程度のものである。7は口縁推定外径21.5cm、器高は19.5cmであり、底部は丸底でやや器壁の厚味を増している。口縁断面は角頭状に近い。61も角頭状に近い断面を有する。64は口縁断面が尖り気味となる。なお、49の体部縄文は斜行している。

e. a～cに属さないもの

第112図66は口縁裏側と体部にあらい縄文が施されたもの。口縁上端から口頸部にかけて無文となっている。口縁推定外径22cmの厚手の土器である。67は口端直下から口頸部のくびれにかけて1段縄文を入れている。68は推定口径10cm程度の厚手小形の土器である。口頸部はくびれて、押圧縄文を1列めぐらせている。70～72は体部の縄文が斜行するもので、70・71は口頸部以上が無文、73の口端の縄文は横走するものである。

第2種 燃糸文が施されたもの(第108・第113図12~15、第112図73~86)

a. 口端に縄文、体部に燃糸文の施されたもの

第113図15は口縁推定外径23cm、器高は30cmである。口端はわずかに肥厚して外反する。底部は角度の開いた尖底で器壁が厚くなる。第112図74・75は口端に押圧縄文と回転縄文が施される。76の口端は縄文と燃糸文の両方が施文されている。本類は以上の4個体のみの出土である。なお、77は口端に縄文か燃糸文かいずれかが施されているが、よくわからない。

b. 口端、体部の両方に燃糸文が施されるもの。

第108図12は口縁推定外径が21.5cm、推定器高が22cmである。口頸部はわずかにくびれて、口縁は細くなり外反する。底部は丸底風の尖底。口端の燃糸文は横走し、体部では乱雑で羽状風になる。13は口縁推定外径が28cm、器高が28.5cmである。口縁は肥厚外反する。底部は丸底。口端の燃糸文は一部羽状になり、口頸部には無文帯をもつ。14は口縁推定外径28cmで口縁は外反する。口端の燃糸文は2段に施され、羽状を呈する。第112図77・79・82は口端の燃糸文が斜位に施されている。78・81は口端の燃糸文が横走する。80は横走と斜位の燃糸文が施文される。83~85は口端に縦位の燃糸文が施されたもので、特に84は体部に連続するものである。86は口端にのみ燃糸文がみられるもので、口頸部には指頭圧痕がめぐり、以下無文。口縁断面はほぼ直口する。同種のもは後述するミニチュア土器に1点あるのみで、一応この類に含めておいた。

第3類 夏島式土器(第113図16~21、第115・116図1~40、図版52・54・55)

夏島式は井草Ⅰ・Ⅱ式に比べて量的にはかなり少なくなる。10A、11Aグリッドにややまとまっております。10B、11Bグリッドではかなり散漫になる。土器の胎土は長石、石英の粒子を多く含み、内面があるものが多くみられ、器面成形の際の砂粒の移動による擦痕が目立っている。口端から表裏面の口端直下にかけてはナデつけが行われており、施文はそのあとからなされている。口縁断面は外反するもの、口縁の肥厚部下に浅いくびれがあるもの等の変化がある。したがって、本類は縄文施文の第1種、燃糸文施文の第2種に二分した後、主に口縁断面の形状をもとにさらに細分してみた。

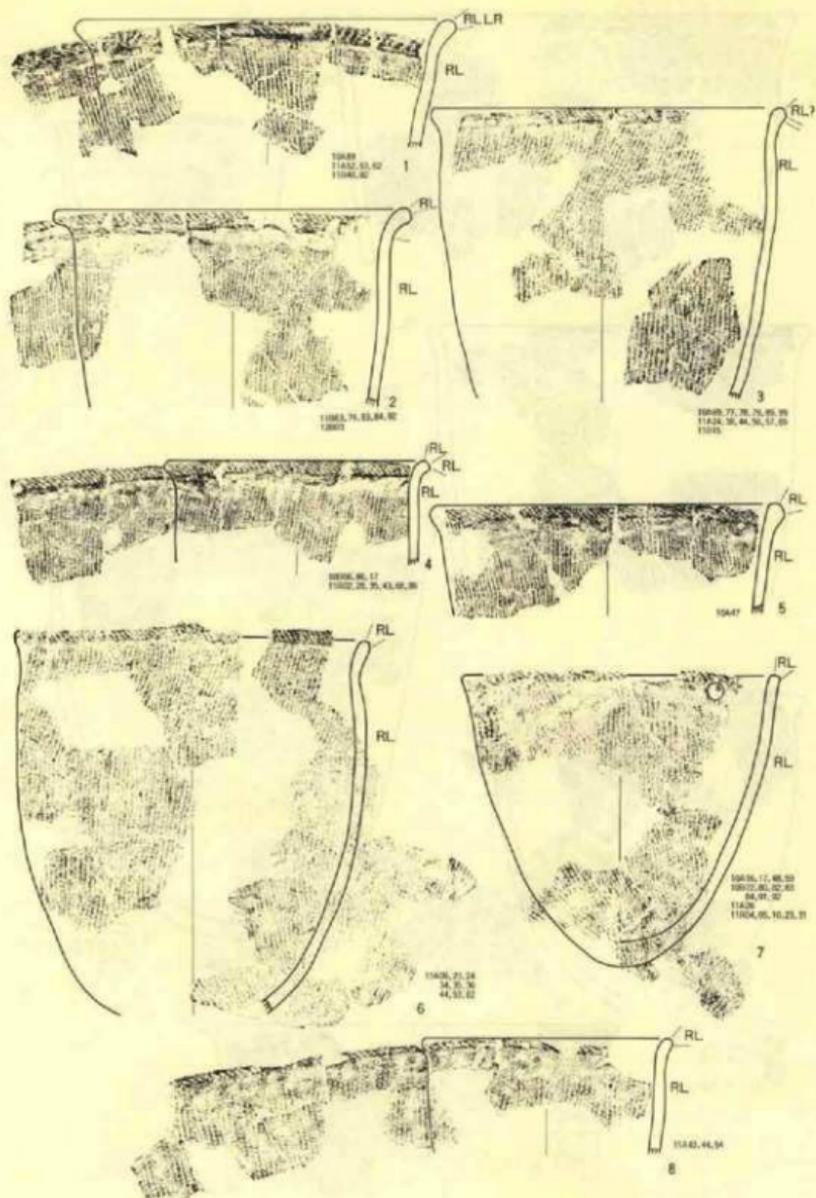
第1種 縄文が施文されるもの。(第113図16・17、第115図1~19)

a. 口縁断面が軽く肥厚外反するもの

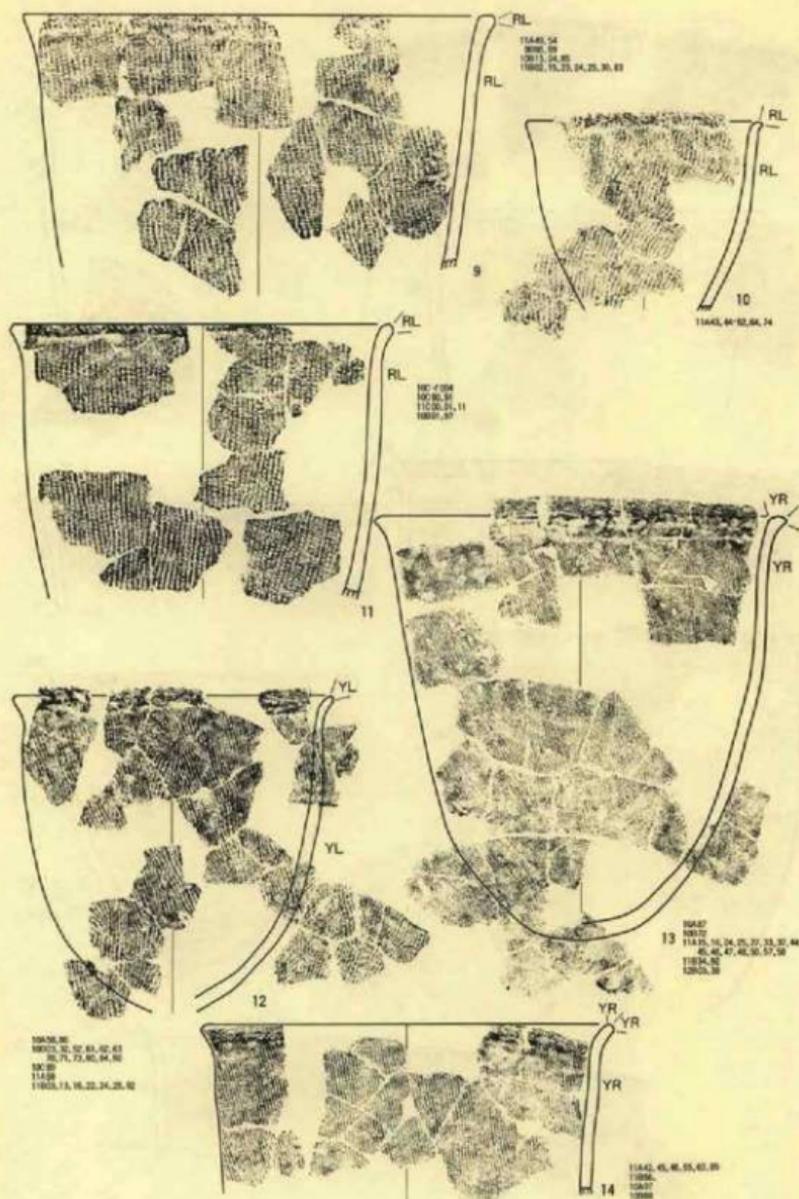
第113図16は口縁推定外径18cmである。口頸部で一旦くびれ、口縁は肥厚する。第115図5・15も同様の口縁断面をもつ。同図1・3・4は口頸部にくびれをもたず肥厚外反する。

b. 口縁断面は肥厚せず外反するもの

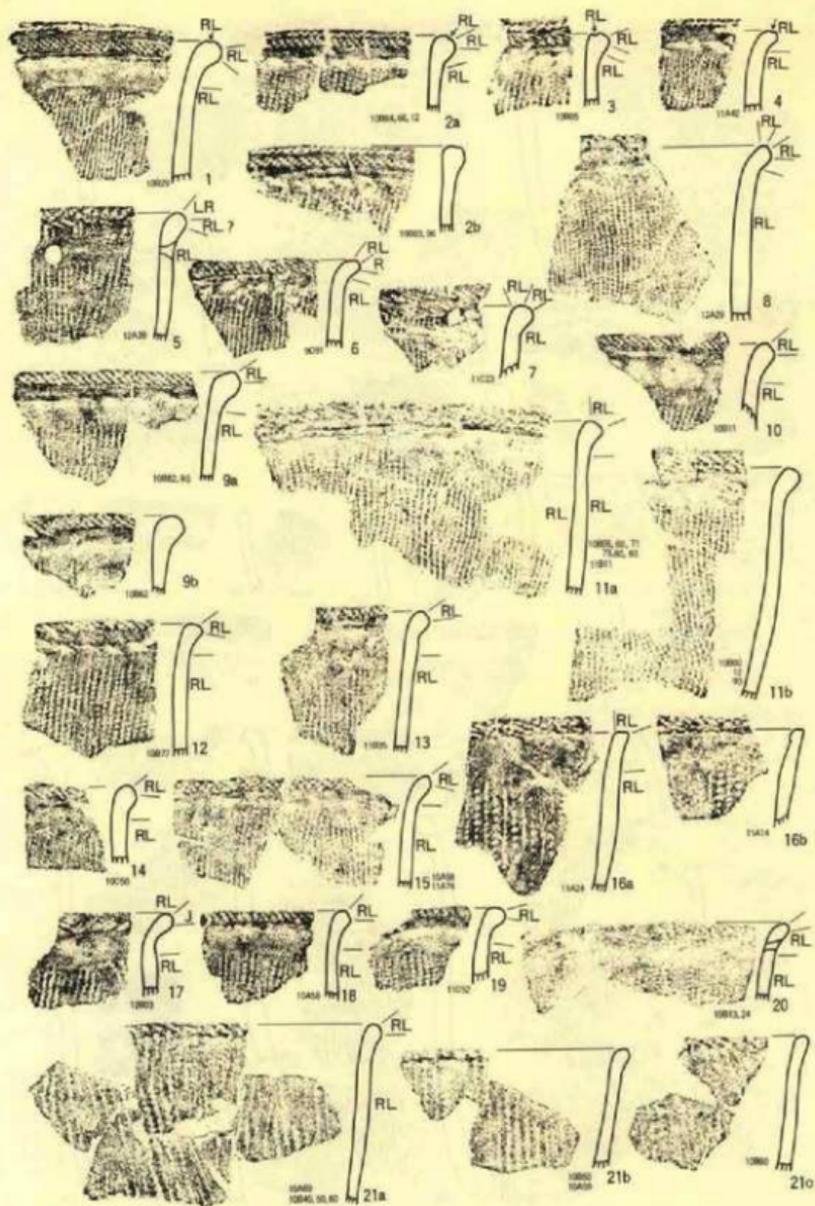
口頸部で一旦くびれるものと、くびれずに外反するものの2種がある。前者は第113図17、第115図6~8、11・12、後者は第115図2・9・10である。第113図17の口縁推定外径は19.5cm、現存高は12.5cmである。第115図12は口端直下が無文帯となっている。



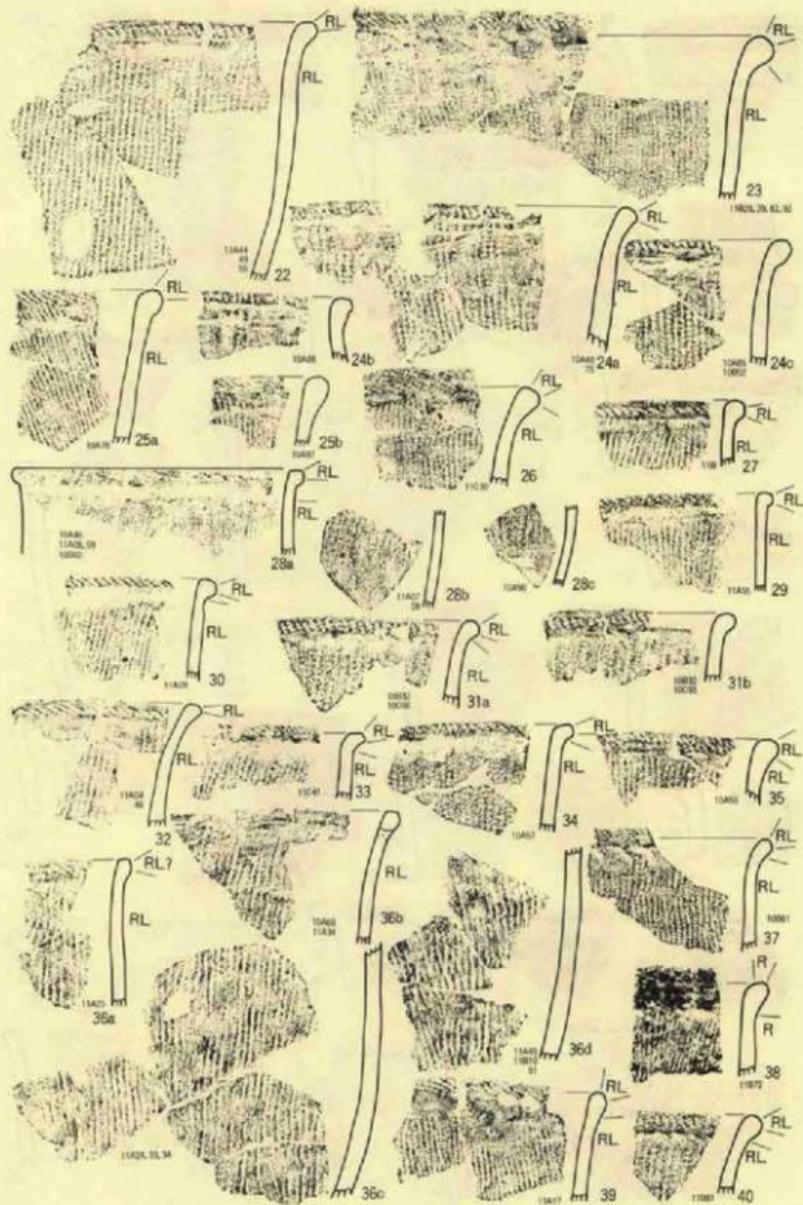
第107図 B地点草創期後半土器実測図2 (1/4)



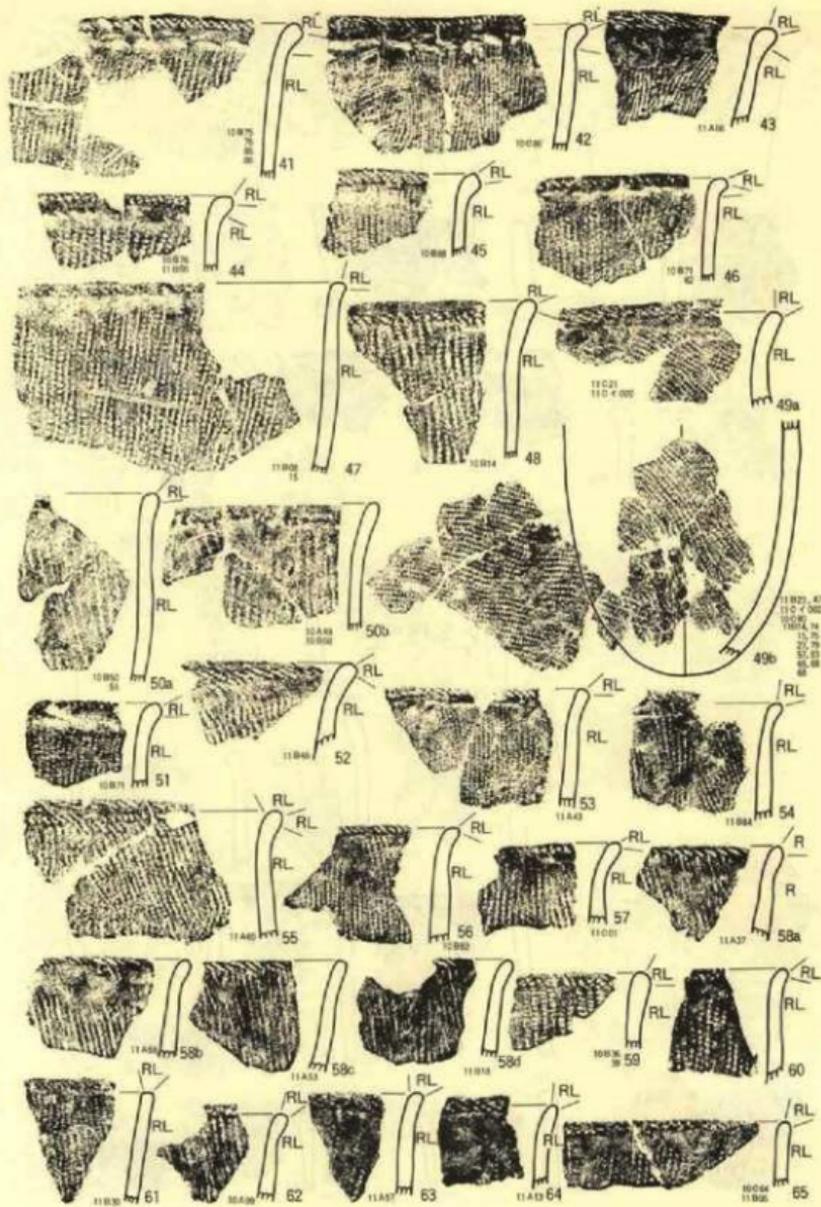
第108図 B地点草創期後半土器実測図3 (1/4)



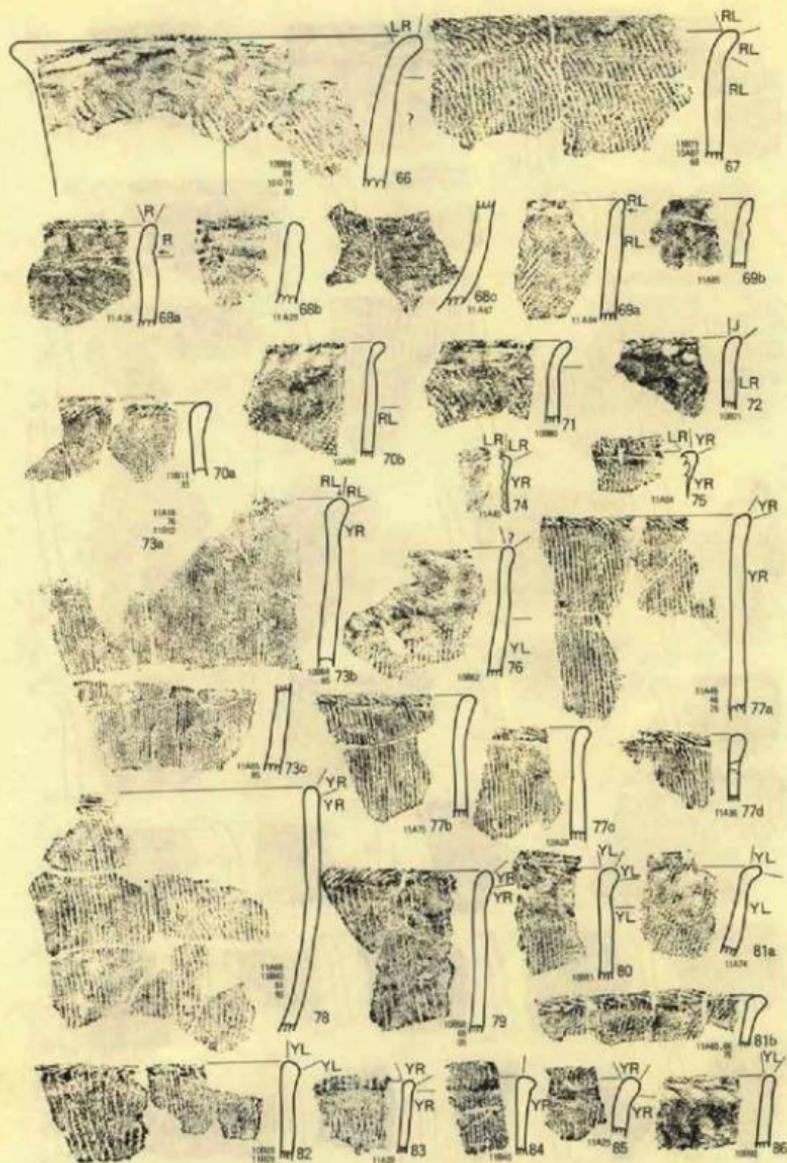
第109図 B地点草創期後半土器拓影図5 (1/3)



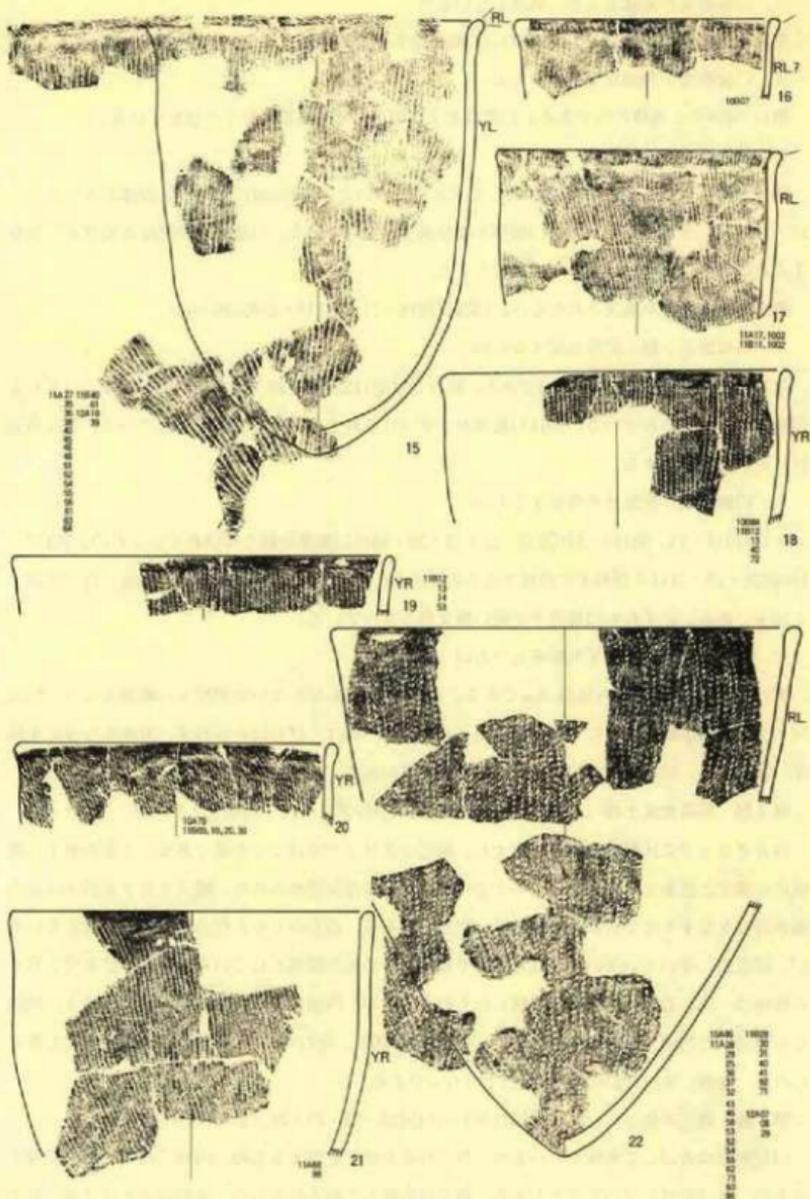
第110図 B地点草創期後半土器拓影図6 (1/3)



第111図 B地点草創期後半土器拓影図7 (1/3)



第112図 B地点草創期後半土器拓影図8 (1/3)



第113図 B地点草創期後半土器実測図4 (1/4)

c. 口縁断面が丸味をもち、外反しないもの

第115図13・14がこの類に入る。14は口縁推定外径11cmの小形土器で、口縁部に無文帯をもつ。

d. 口縁断面が角頭状を呈するもの

第115図16の1個体のみである。口端は水平に切られ、口頸部は軽くくびれている。

e. 斜行縄文をもつもの

縄文が斜行するものを特に本類としてまとめておいた。第115図17-19の3個体のみである。17・18は縦位施文のもの、19は口頸部が横位施文となっている。口縁断面が肥厚外反せず、井草I式とは考えられないことから夏島式とした。

第2種 燃糸文が施文されたもの。(第113図18-21、第115・116図20-40)

a. 口縁断面が軽く肥厚外反するもの

第113図20は口縁推定外径22cmである。破片では第115図20-22・28・32が相当する。いずれも口頸部が一旦くびれている。20は口縁部がナデつけられており、無文帯をなしている。32は角頭状に近い断面を有する。

b. 口縁断面が肥厚せず外反するもの

第113図18・19、第115・116図23・25・29・30・33は口頸部が軽くくびれているもの。第115・116図24・27・31はくびれずに外反するものである。第113図18は口縁推定外径24cm、19では同じく26cmである。いずれも口端直下が細い無文帯となっている。

c. 口縁断面が外反せず丸味をもつもの

第113図21は口縁推定外径24.5cmである。第116図26は外反しないが肥厚する断面をもつ。同図34・35は口頸部にわずかにくびれが認められる。36-40はくびれはみられず、丸味をもった単純な口縁である。35・37には口端直下に細い無文帯がある。

第4類 稲荷台式土器(第113・114図22-26、第117図1-22 図版52・53・56)

11Aグリッドに比較的集中して出土し、周辺のグリッドではごく少量である。土器の胎土、焼成には縄文と燃糸文の施されたものとは、かなりの差が認められた。縄文を有する個体は器内面が滑沢を呈するまで研磨されており、胎土中に石英、長石のやや大粒の粒子を多く含んでいるが、器表面に浮いていない。焼成も良好で夏島式との差が歴然としている。一方、燃糸文を有する個体は一部に器表面を施文後研磨したのもあるが、内面のザラつくものも多く、胎土、焼成から夏島式と判別しがたいものもある。特に第114図24、第117図12・13は夏島式の可能性も考えられる。なお、第117図10はA地点出土のものである。

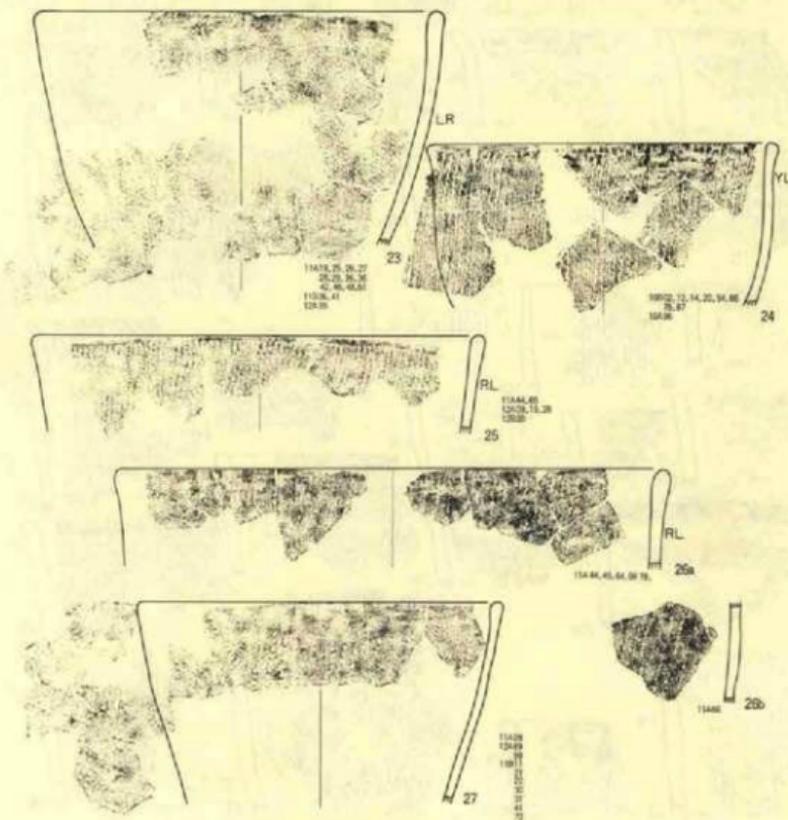
第1種 縄文の施されたもの(第113図-114図22・23・25・26、第117図1-11)

口縁断面は直口して丸味をもつもの、外にゆるやかに肥厚するもの、内側にゆるやかに肥厚するもの、及び肥厚しないものがある。縄文は密接して施されるものと条間隔をあけて施されるものがあるが、多くは軽く施文されている。縄文原体はかたく燃られるものとゆるく雑に燃ら

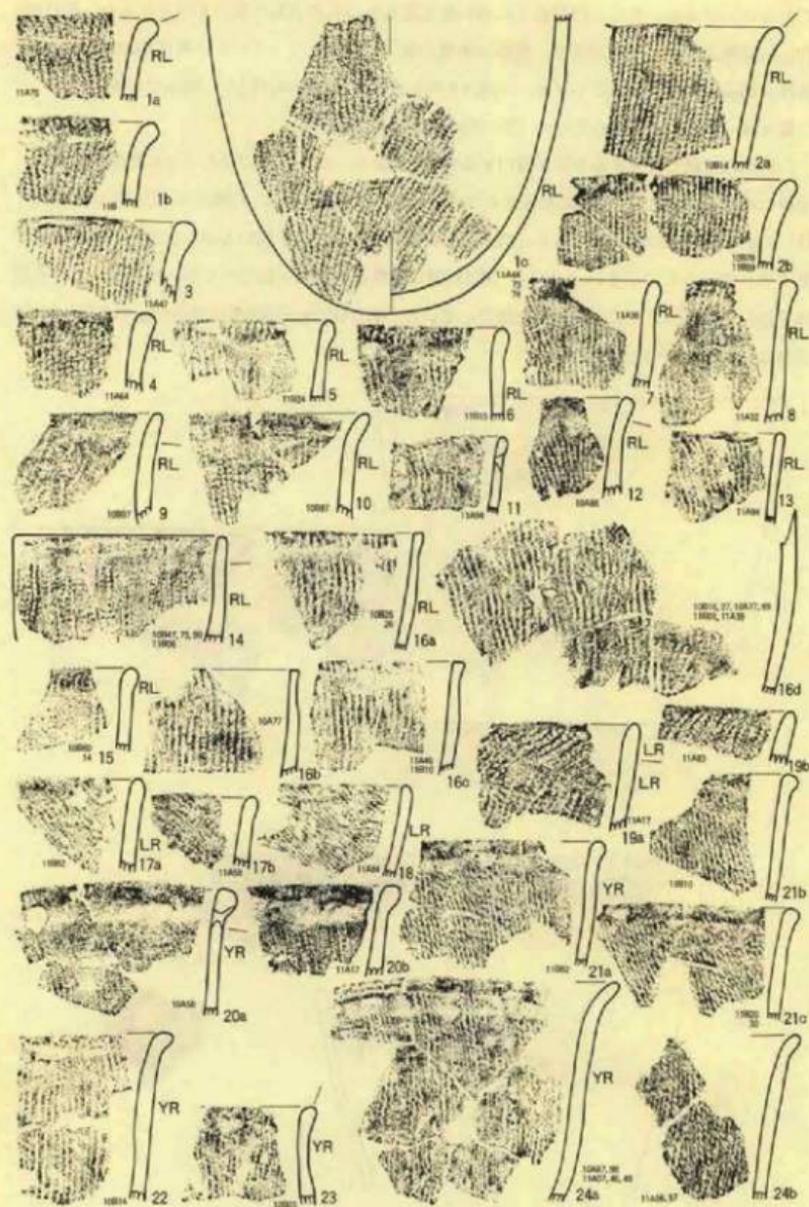
れたものがある。また、口端直下に細い無文帯をもつものともたないものがある。第113図22は口縁推定外径が32cmであり、底部は角度の開いた尖底となっている。第114図23の口縁推定外径は28cm、同図25は同じく31cm、同図26も同じく31cm、同図26は同じく38cmである。

第2種 燃糸文を施されたもの（第114図24、第117図12～22）

口縁断面は軽く外反するものと直口するものがあり、口縁が外にゆるやかに肥厚するもの、全体に厚味をますもの、単純に丸味をもつものといった種類がある。口縁部の無文帯はないもの、狭いもの、広いものと多様である。燃糸文も条間隔の密なもの粗いものがあり、後者は軽く施文されているものが多い。ただし、第117図17は燃糸の間隔が粗であるが、口端直下で一旦原体を器面に押しつけ、以下深く回転施文している。第114図24は口縁推定外径24cmであり、第117図19は12cmの小形の土器である。



第114図 B地点草創期後半土器実測図5 (1/4)



第115図 B地点草創期後半土器拓影図9 (1/3)

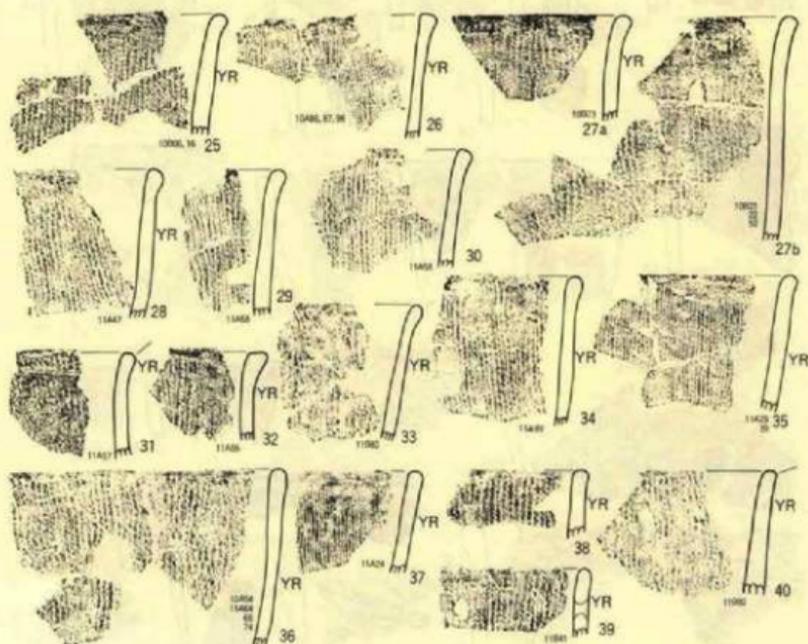
第5類 燃糸文系統土器の末期と思われるもの(第114図27、第117図23~26、第112図69、図版53・56・51)

量的にきわめて少なく、図示した6個体が出土したにすぎない。出土位置は稲荷台式の分布範囲とはほぼ完全に重複している。

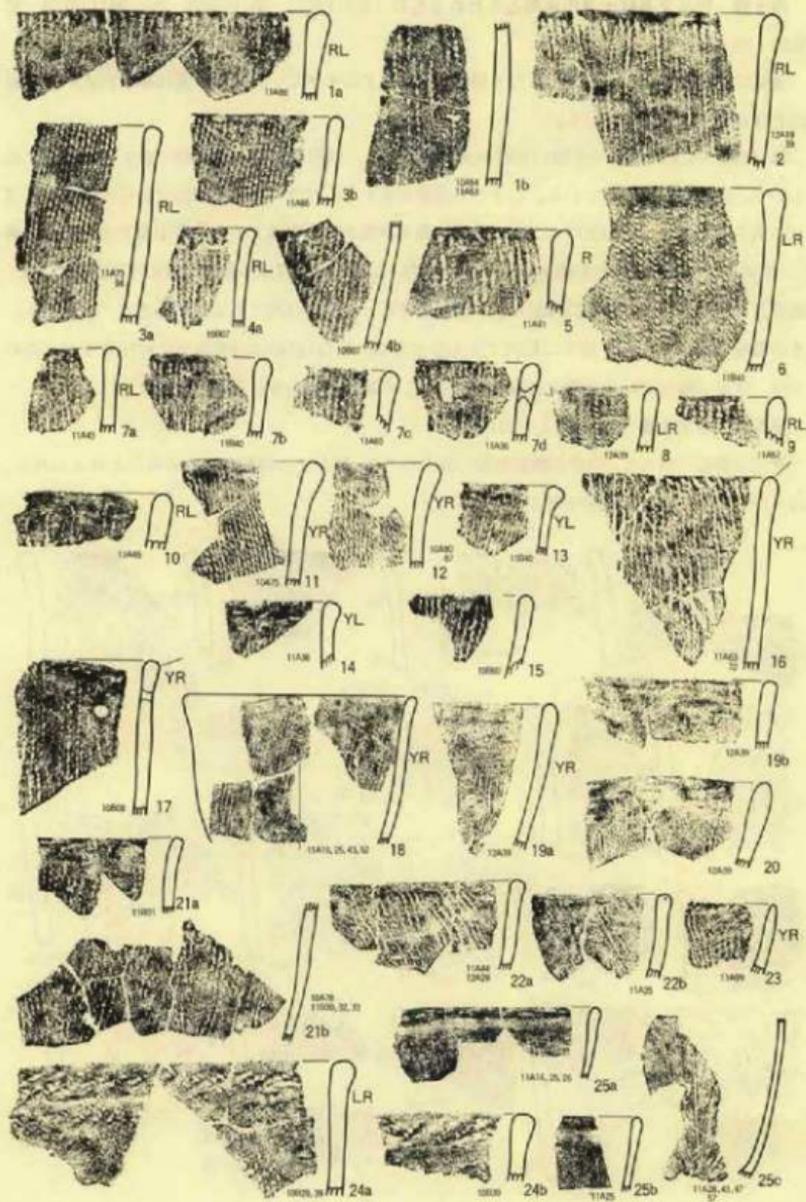
第117図23は条間隔のやや開いた燃糸文が斜行する。同図24は縦位と左傾の燃糸文が交錯するもので、口縁断面は尖っている。いずれも器面があれど、ザラつく。同図25は斜行の縄文がまばらに施されたもの。同図26は木の根No6遺跡第1群第5類に相当する小形の土器である。器壁薄く、器表面は研磨され、細沈線が縦位に施されている。第114図27は口縁部の推定外径25cmである。器表面は研磨されており、口縁部に広い無文帯をもつ。縄文は浅くまばらに施され、縦走る。木の根No6遺跡第1群3類bに相当するものである。第112図69は口端直下に押圧縄文が1条めぐり、体部に縦位回転の斜縄文が施されたもの。口縁断面は尖る。花輪台I式に近い。

第6類 無文土器(第118図1~20)

無文土器を一括した。口縁の断面形態に変化があり、燃糸文各時期にわたるものと考えられる。19・20を除き、ほとんどが小形の土器である。



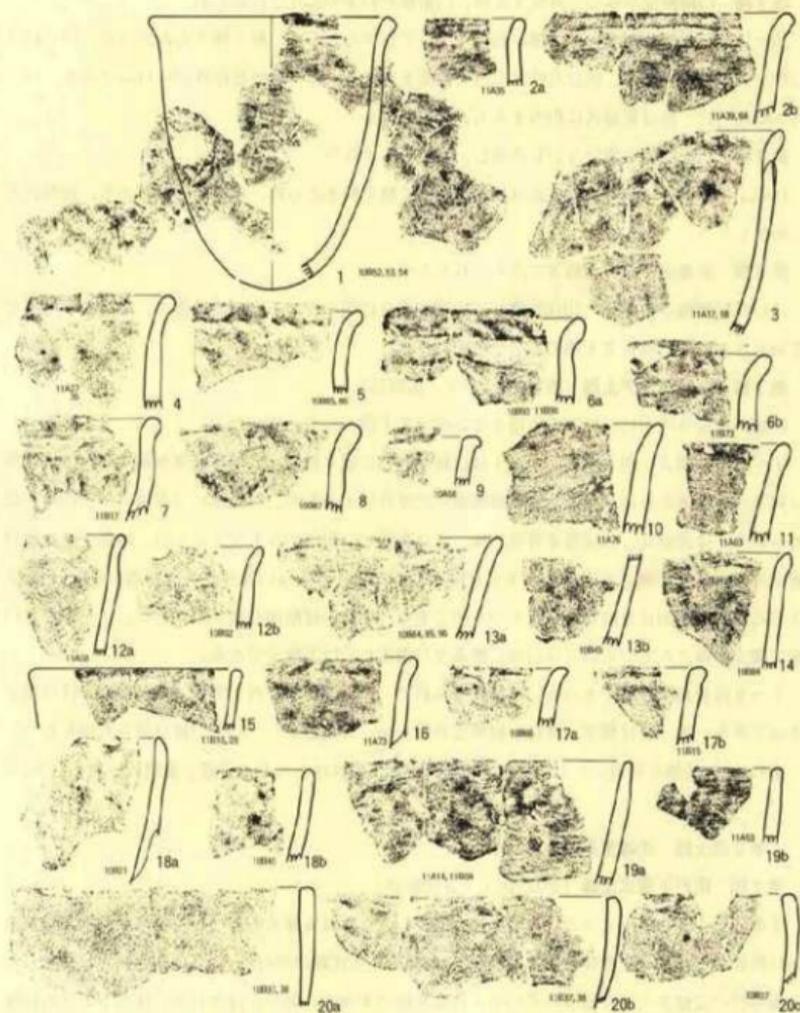
第116図 B地点草創期後半土器拓影図10 (1/3)



第117図 B地点草創期後半土器拓影図11 (1/3)

第1種 口縁断面が肥厚外反するもの

第118図1の1個体のみである。口縁推定外径12.5cm、推定器高14cm。口頸部に指によるナデがみられる。器面は滑らか。井草式に相当するものと思われる。



第118図 B地点草創期後半土器拓影図12 (1/3)

第2種 口縁断面が外反または肥厚するもの

2～9がこれに含まれる。口頸部を指頭によって強くナデるか、連続して強くおさえることによって外反させている。3は口縁が水平でなく、ゆるい波状を呈する。9は口端に細い刻みが施されている。口縁部の特徴から大部分は井草式に相当すると思われる。

第3種 口縁断面がゆるく外反するか、口頸部がわずかにくびれるもの

10～17がこれにあたり、口頸部が指頭によってナデられるか、軽く押えられている。10・14は口端が尖り、17は平坦、他は丸味をもった断面を有する。15は口縁推定外径が11cmである。15・16は稻荷台式、他は夏島式に相当するものと思われる

第4種 口縁断面が直口ないし内湾し、丸味をもつもの

18の1個体のみである。器表面は指頭によって軽く押さえられ、ゆるい凹凸がある。稻荷台式に相当しよう。

第5種 表裏面に擦痕が顕著に認められるもの

19は口縁断面が角頭状、20は内湾して口端が平らに切られている。焼成悪く、横方向の擦痕が全面にみられる。燃糸文末期のものかと思われる。

第7類 ミニチュア土器 (第119図1～9、図版55)

口縁の推定外径が10cm以下の土器をミニチュア土器として一括した。

1～6は井草式に相当するもの。1は口縁が外方に強く折れ、先端に縄文が施文される。体部は無文、口縁推定外径8cm。2は口縁断面が肥厚外反するもの。口頸部には指頭による凹線が認められる。体部無文。口縁推定外径10cm。3は断面が口頸部から外反するもの。体部上半に縦位施文の斜行縄文が施され、体部下半は無文となるらしい。4は口縁外径10cm、器高8.5cmと推定される。口縁断面は単純な丸味をもつものである。5は口縁断面が薄く尖るもの。4・5とも口端に縄文が施されている。6は口端に燃糸文が横走し、以下無文である。

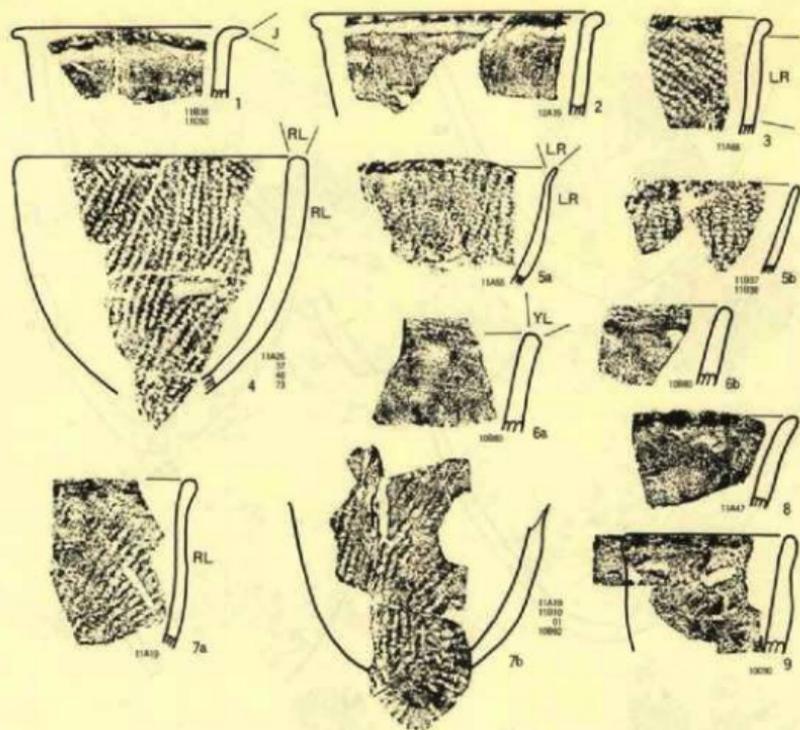
7～9は夏島式以降であろう。7は底部丸底で、口頸部がくびれて外反する。体部の径は推定9cmである。8・9は無文。9は口縁推定外径6cm、口頸部がくびれ、口縁は薄く丸味をもつ。

第120図に底部を掲載しておいた。5は稻荷台式、他はほとんどが井草、夏島式と思われる。

第2群土器 沈線文系統土器

第2類 田戸下層式土器 (第121図1～3 図版57)

3個体出土したのみである。1は口縁が外反し、体部は丸味をもっている。波状口縁で口縁断面は角頭状になりやや厚味を増す。口縁部は細沈線と太沈線の平行線、体部は同じ組み合わせによって菱形状の文様が大きく描かれている。体部沈線の末端には刺突が付される。体部下半にも細沈線と太沈線による平行線が施されるらしい。2は無文の底部付近の破片。3は半截竹管状工具の連続刺突列によって幾何学的な文様が施されている。



第119図 B地点草創期後半土器拓影図13 (1/2)

第3類 田戸上層式土器 (第121図4・5 図版57)

2個体のみの出土である。いずれも繊維は含まない。4は口縁部破片で、口縁裏側に刻みが付された無文土器である。5は乳房状の尖底。

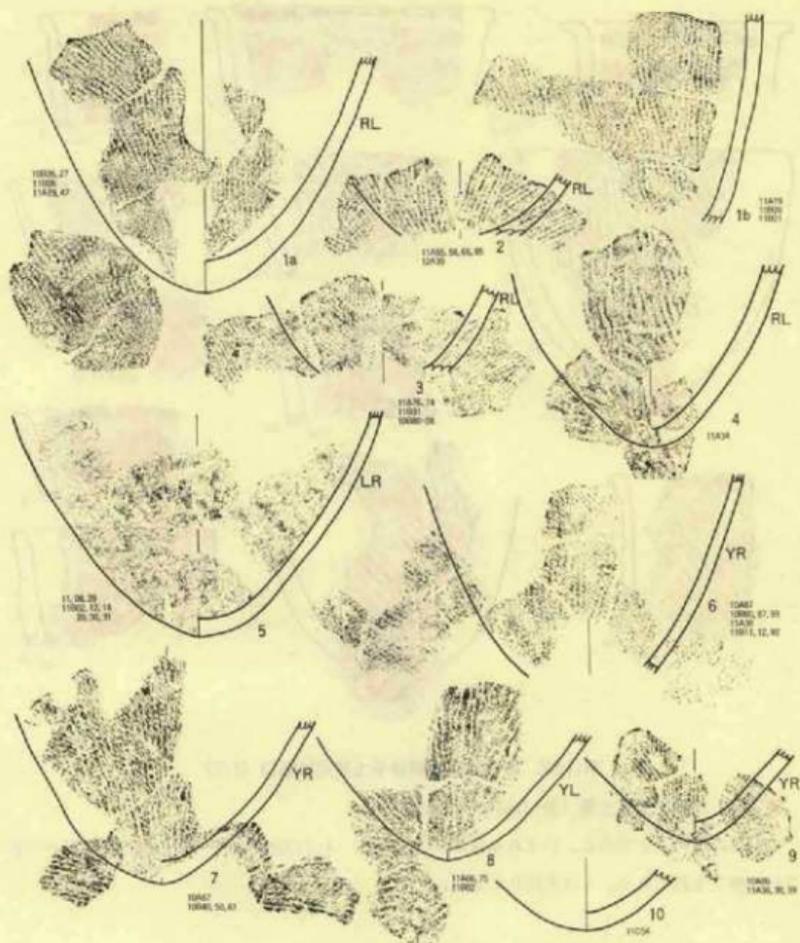
第3群土器 貝殻条痕系統土器 (第121～123図)

第1類 子母口式土器 (第121図6～第123図49、図版57)

総数268点出土した。うち、尖底部の小破片2点がある。ほとんどJ-2号住居跡の周辺からH-1号住居跡付近にかけて集中している。土器の胎土、色調、焼成等はA地点の当該期の項で述べたので、ここでは省略する。ただ角頭状の口縁断面をもつものがここでは多い。

第1種 有文土器 (第121図6～19)

6は低く幅広い隆帯上に結条体圧痕の施されたものである。6aは四角に突出した把手部分の破片で、把手の上端及び両側端にも結条体圧痕が施されている。表面は無文。7～11は口端に結



第120図 B地点草創期後半底部実測図 (1/3)

条体圧痕が付されたもの。絡条体圧痕はいずれも右傾して施されるが、11のみハ字状である。7は平縁で、aには刻みの付された右傾の沈線文がみられ、bでは沈線文が曲線的に描かれている。表面無文。8は平縁で、内皮をえぐりとった半截竹管の内側に下にして押した連続刺突文が、口縁に平行して3段施されている。表面は横位の擦痕がつく。9は波状口縁である。口縁部の文様は水平な3段の刺突列とその下に波状文が施されている。刺突文と波状文の原体はいずれも多截の竹管である。表面は無文。10も波状口縁で、やはり多截の竹管によって2条単位の連続刺突文

を口縁に沿ってと、水平に2段施文している。裏面無文。11は表面が右傾の擦痕、裏面は横位の擦痕である。12は口端と口縁部に深い刺突文が施される。原体は大形の多載竹管。口縁部の刺突文はやや乱れている。裏面は横位の擦痕。13も同じく多載竹管による連続刺突文である。口端には細く鋭い刻みが付く。裏面は横位の擦痕。14は沈線による文様と連続刺突文が複合したもの。刺突列は本来3段以上間隔をあけて施されていたものと考えられる。裏面無文。15は14と近似した文様をもつが、沈線がやや太いことから別個体と思われる。16は多載竹管によって横位と右傾の沈線文が施されたもの。裏面無文。17も多載竹管による沈線文が施されている。なお、上段の横位沈線の直上及び下段の横位沈線と波状沈線の間には細い刺突文が2～3個認められる。裏面無文。18は口端に貝殻腹縁圧痕が施されている。表裏面とも横位の擦痕がみられる。19は口端に深い多載竹管による刺突列が施されている。表裏面とも斜位の擦痕がつく。

第2種 無文土器 (第122・123図20・21・25・26・43～45)

表裏とも無文または擦痕か成形痕か判断のつかないものである。総数36点。20・21は低い波状口縁で、20・21aの拓影右端寄りが頂部である。

第3種 擦痕のつく土器 (第122・123図22～24・26～42)

表裏面の両方または片面に擦痕のつくものである。総数213点。22・24は波状口縁。22は裏面に横位の擦痕、表面はbにのみ擦痕がみられる。23は両面とも横位の擦痕。24は表裏とも横位だが、bの表面には擦痕がほとんどみられない。27は表面に乱雑な擦痕がつく。28は裏面に横位につく。29は表面に複数方向、裏面には横位の擦痕がつく。30は裏面に横方向につくが貝殻条痕の可能性もある。31～33・35・36・38・39は表面が無文で、裏側に横位の擦痕がつくもの。34・41・42は表面無文で裏面の擦痕が斜めのものである。37・40は裏面が無文で表面が擦痕のもの。37では縦位、40では横位につく。

第4種 片面条痕の土器 (第123図46～49)

4点のみ出土した。46・48・49は裏面に貝殻条痕が施されている。ただし46の表面には右端中央に条痕がわずかにみえる。47は表裏面に条痕がつくが、裏面は軽く磨り消されているので、一応ここに含めた。

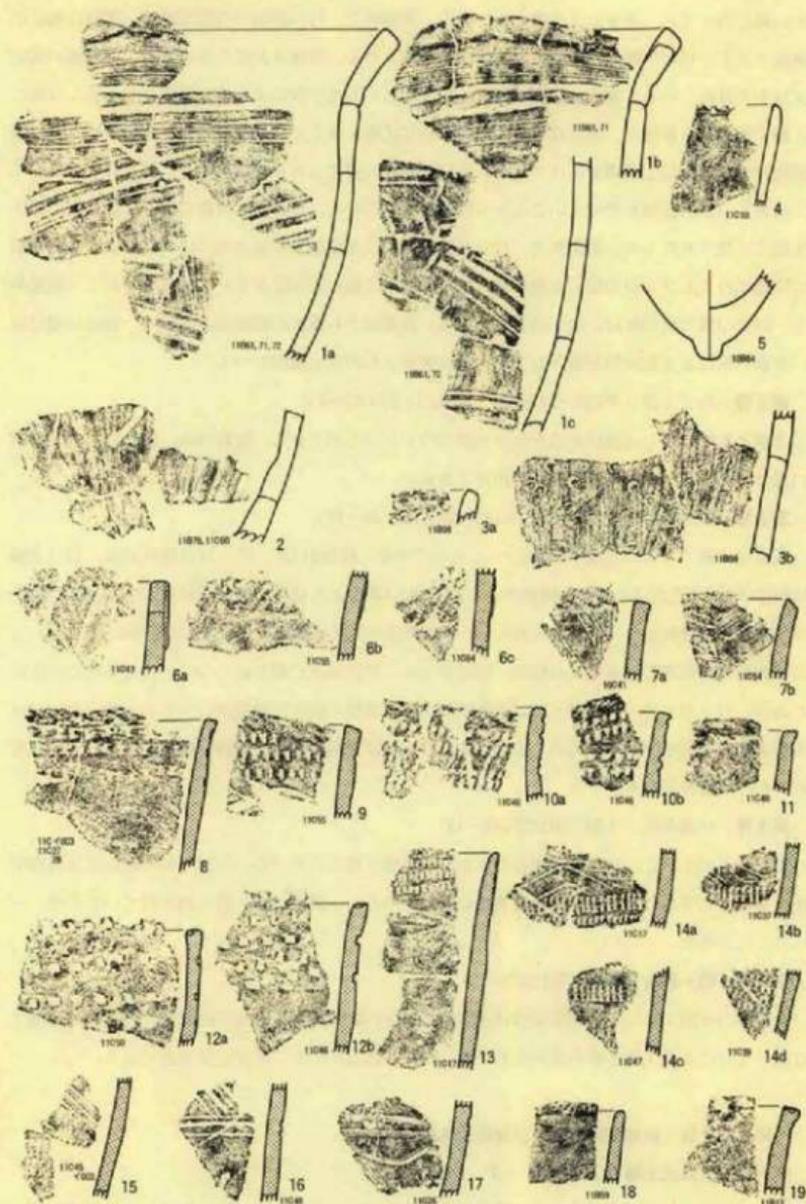
第3類 鶴ヶ島台式土器 (第123図50)

1個体のみ出土した。口辺部文様は条痕地にきさら状の竹管によって区画文が施され、充填文は同一工具による沈線と押引文の両方がみられる。底面は小さく不安定な平底である。

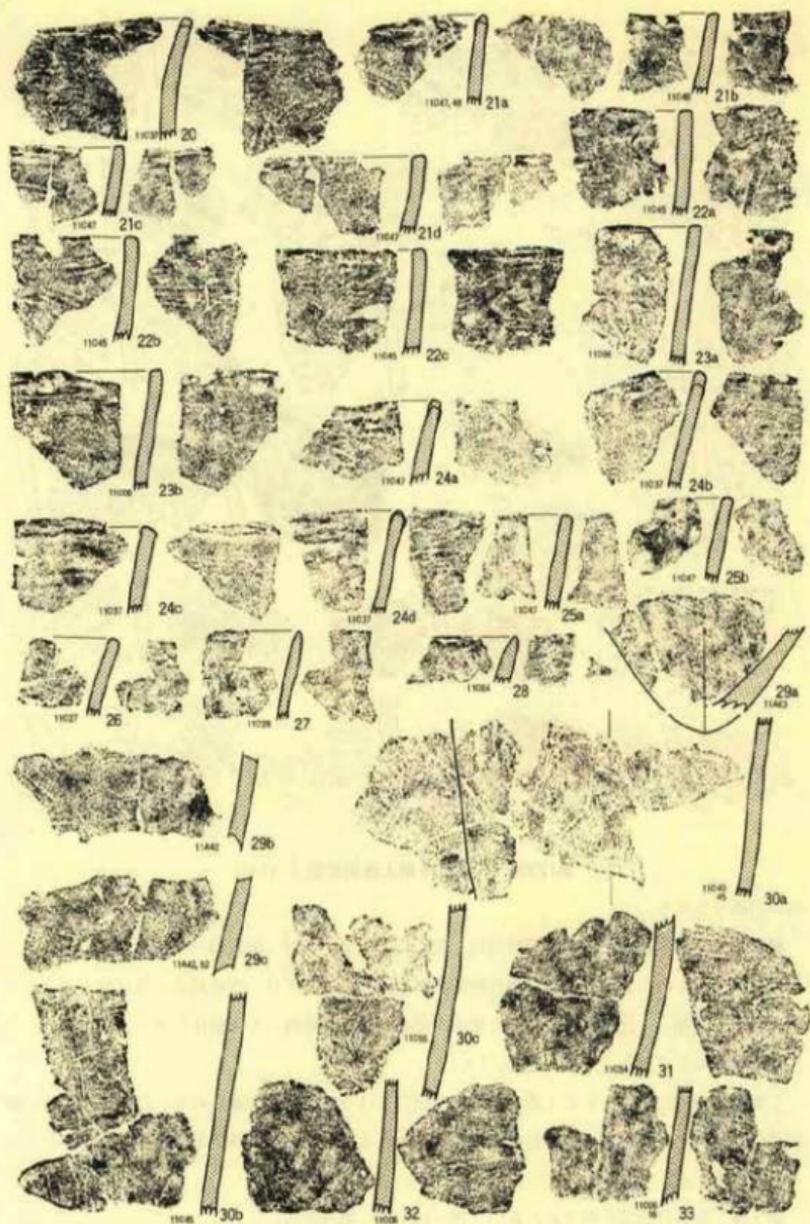
第4群土器 前期織機土器及び浮島式系統土器

第1類 黒浜式土器 (第124図1～7、図版58)

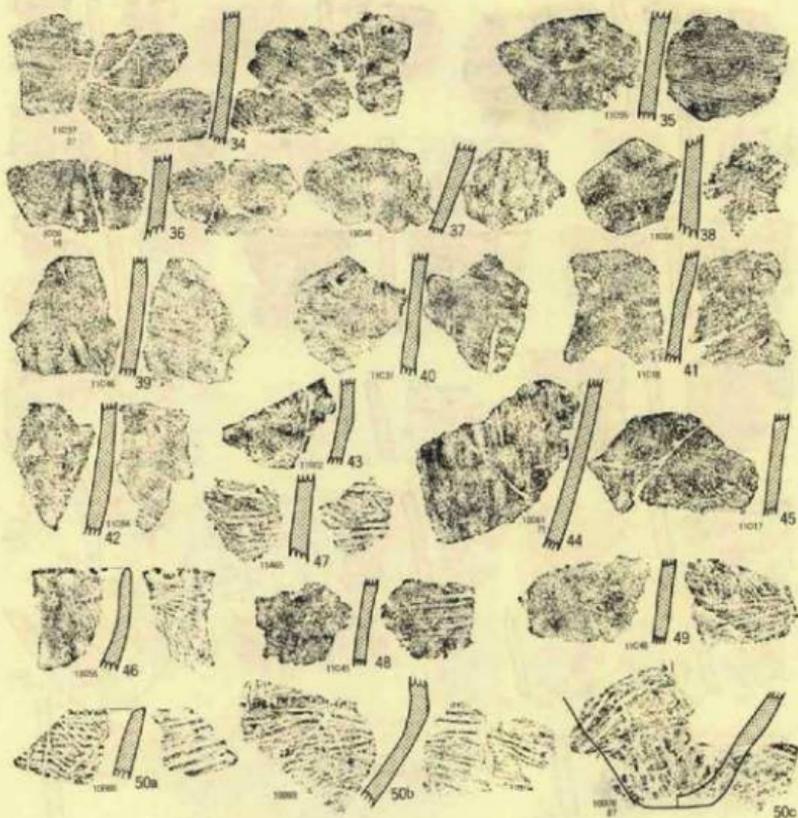
B地点ではきわめて少量である。舌状台地の先端部、11A、12Aグリッドにおいて散漫に出土している。1～6はいずれもRLの斜縄文が施されたもので、筋はやや大きめである。7はRの



第121図 B地点早期土器拓影図1 (1/3)



第122図 B地点早期土器拓影図2 (1/3)



第123図 B地点早期土器拓影図3 (1/3)

細い斜縄文である。

第2類 浮島・興津式土器 (第71図26, 第124～126図8～37, 図版34・58～60)

11Aグリッドの舌状台地先端部の比較的広い範囲、10B35グリッドの周辺、及び12A39グリッド周辺の斜面部と、比較的まとまった集中が認められる。掲載した30個体がすべてである。

第1種 地文に燃糸文をもつもの。(8)

1個体のみで比較的小形の土器である。全面にまばらな燃糸文が施される。口縁部には低い隆起帯の上下に半截竹管による平行線文が施文され、さらにその下には矢羽根状の沈線文がみられる。浮島I a式。

第3種 波状貝殻文の施されたもの(10～16・23, 第71図26)

10は口縁が外反し、波状貝殻文はやや雑である。11は口縁が内折した、推定口径13.5cmの小形

土器である。12は器面に凹凸があり、波状貝殻文は右傾している。いずれも浮島Ⅱ式。13は口端に指頭状の圧痕とその直下に短い条線帯が施されている。興津式。14は口縁部に半載竹管による条線帯、折り返し部に竹管による凹凸文がみられる。波状貝殻文は細く比較的整然と施文されている。興津式。16は片刃状の口縁断面をもち、条線帯と横に引きずった波状貝殻文が施される。浮島Ⅲ式。23は平行沈線文と波状貝殻文が施されたもの。第71図26は誤ってA地点に含めてしまったものである。口端に竹管の背によると思われるくぼみがあり、口縁部には半載竹管による条線帯と刺突列が施される。波状貝殻文は密で大形である。興津式。

第4種 磨消貝殻文、貝殻腹縁の連続圧痕文の施文されたもの。(17-22・24)

17-20は磨消貝殻文。いずれも比較的小形の土器のようである。磨消貝殻文は細く単純な帯状に施されており、幾何学的な区画をとらない。雑な印象をうける。21・22・24はフネガイ科の貝による連続腹縁圧痕の施されたもの。21は内皮をえぐった連続爪形文と、同一工具による短沈線がみられる。22も爪形文がみられる。24は平行沈線が密に施される。いずれも興津式。

第6種 凹凸文の施されたもの。(25-28)

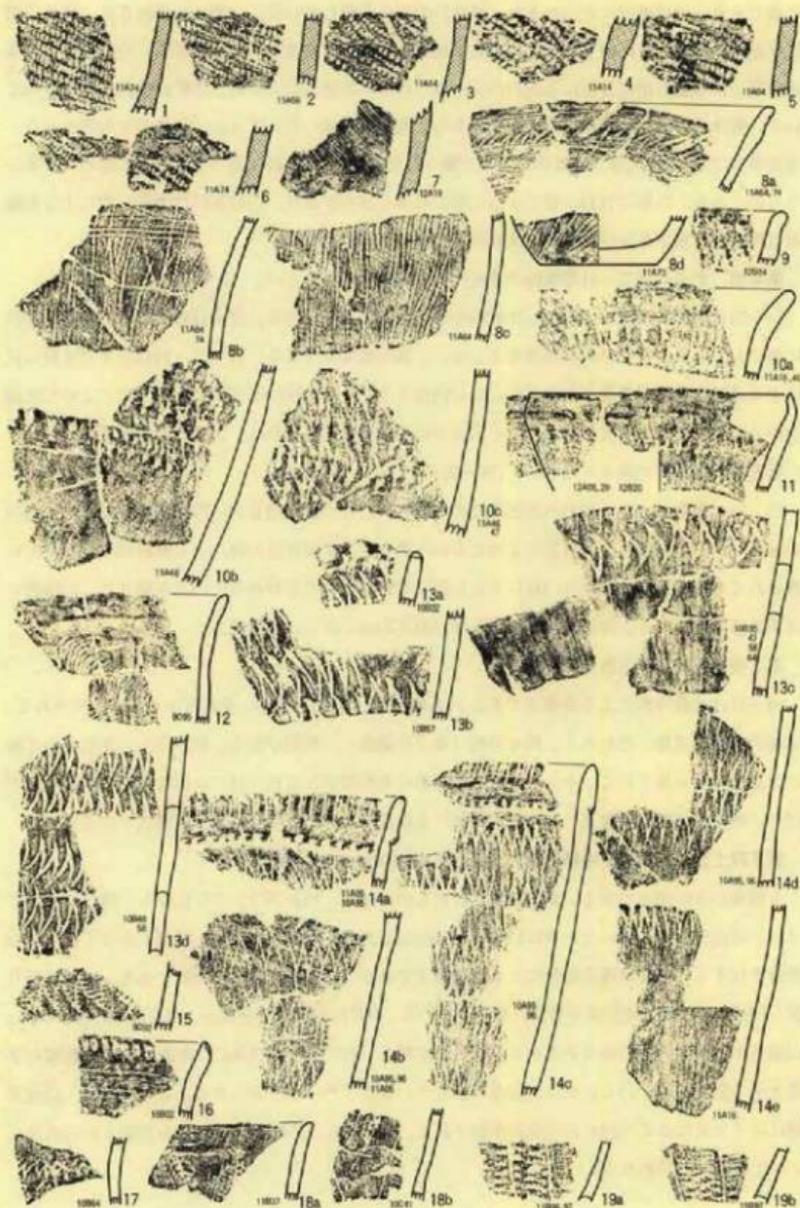
25・26は指頭によると思われる凹凸文のみ施されたもの。浮島Ⅱ式。27は口端が外反して刻みの施されたもの。凹凸文は竹管によったものと思われ、半載竹管内側による連続刺突文と交互に施されている。興津式。28は口縁折り返し部に竹管によると思われる凹凸文が施され、口縁部には条線帯がみられる。体部は無文。体部径は推定30cmである。興津式。

第7種 条線文の土器(29-37)

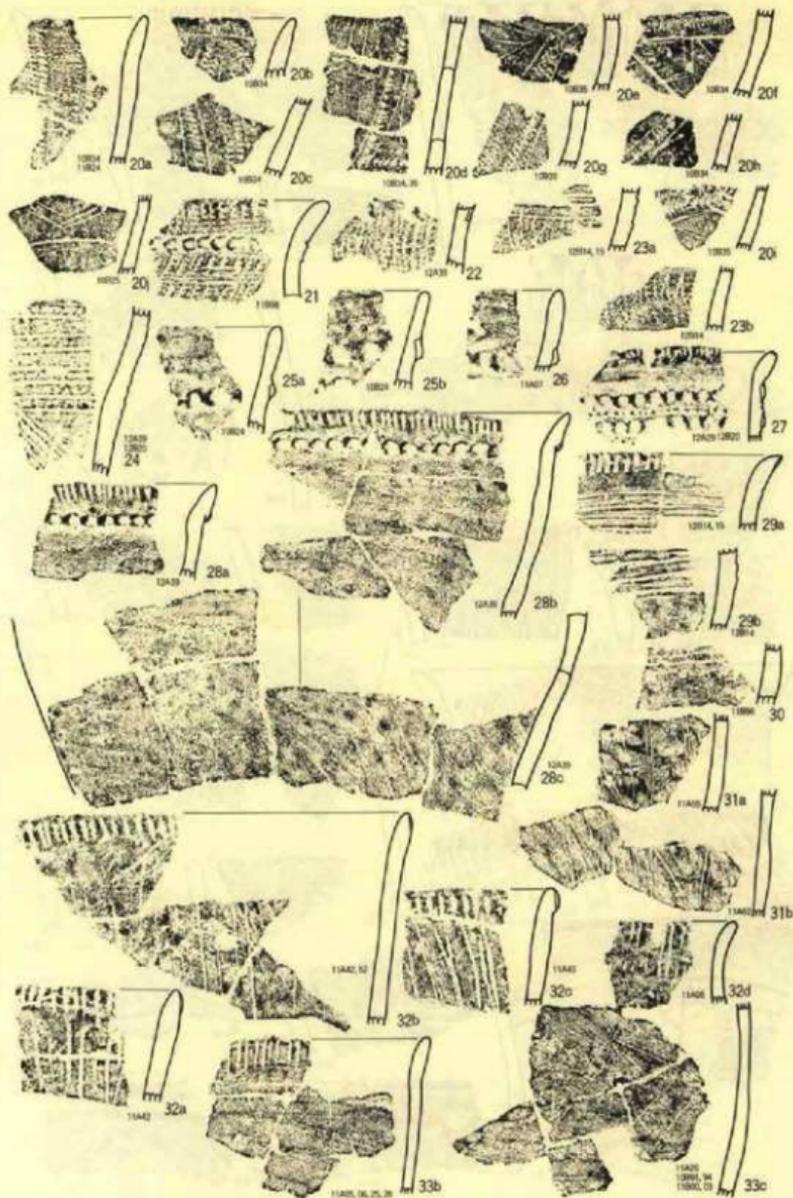
29-31は半載竹管による条線文である。32は折り返し口縁となり、条線帯がその上に付される。体部の条線文は篋と思われる。興津貝塚(第2次調査)に類例がある。33-35も一本引きの沈線による条線文が施されている。いずれも口縁部に条線帯がみられ、34には口端に指頭状の圧痕が付く。36・37は扇歯条線文。36には口縁部に条線帯がない。本種はすべて興津式である。

第5群土器 前期末～中期初頭の土器(第126図38-43、図版60)

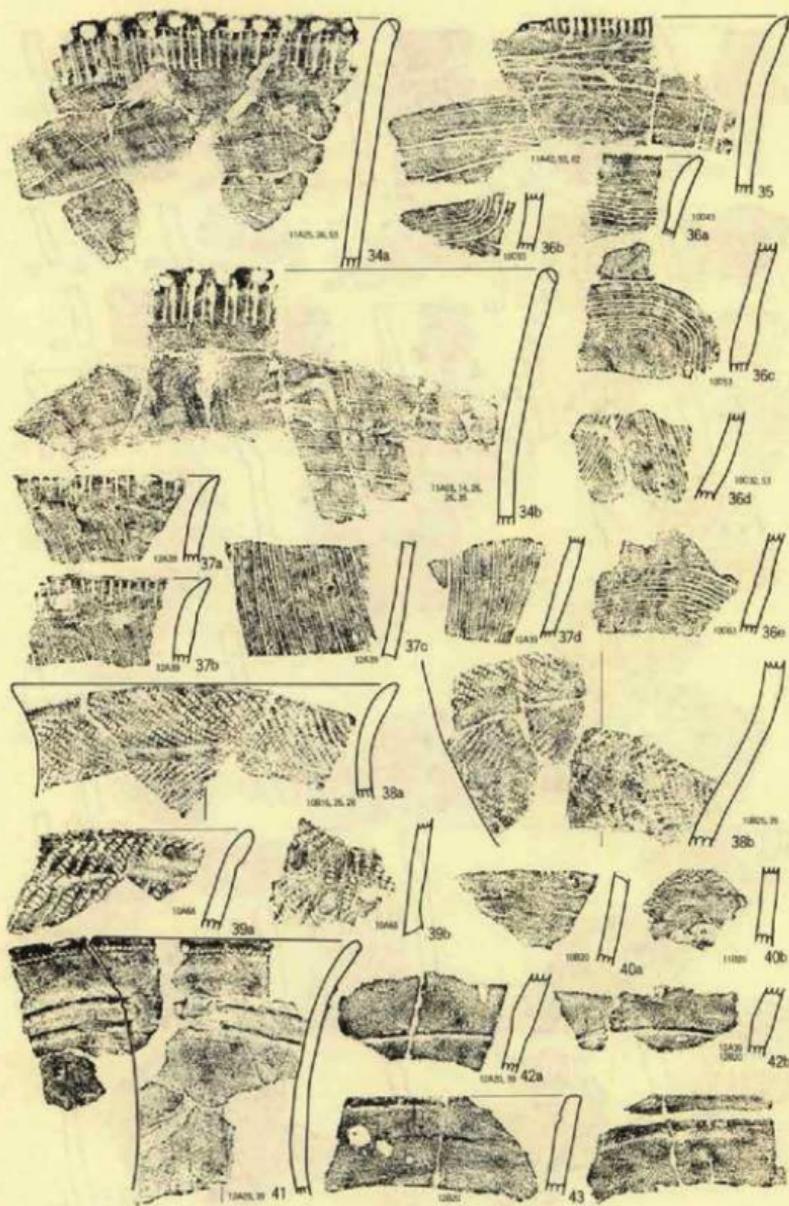
6個体のみの出土である。縄文の施されたものは10A、10Bグリッドで出土し、他は12A39グリッド周辺に集中していた。38は口縁推定径20cmであり、頸部がくびれ、体部がかかるくふくらむ器形を呈する。縄文は横位回転による羽状縄文である。39も縄文は横位回転である。口縁は折り返し口縁。40は細い綾格文が多段に施されている。41は口縁推定外径14cm、現存高13.5cmである。口端直下に細い円形竹管を下方から刺突した文様を一列に施し、頸部には断面三角の隆起線が2条水平に貼付されている。42は口辺部の破片で、表裏ともに段がみられる。43は無文で、口縁裏側には三叉文になると思われる沈刻が施される。五領ヶ台式の新しい部分から五領ヶ台式直後にかけたのものと思われる。



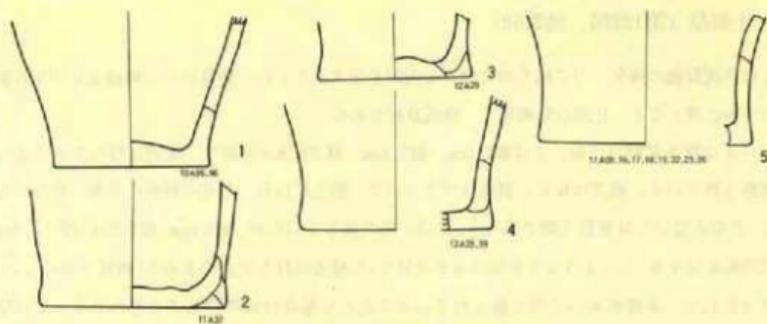
第124图 B地点前・中期土器拓影图1 (1/3)



第125図 B地点前・中期土器拓影図2 (1/3)



第126图 B地点前・中期土器拓影图3 (1/3)



第127図 B地点前・中期土器・底部実測図 (1/3)

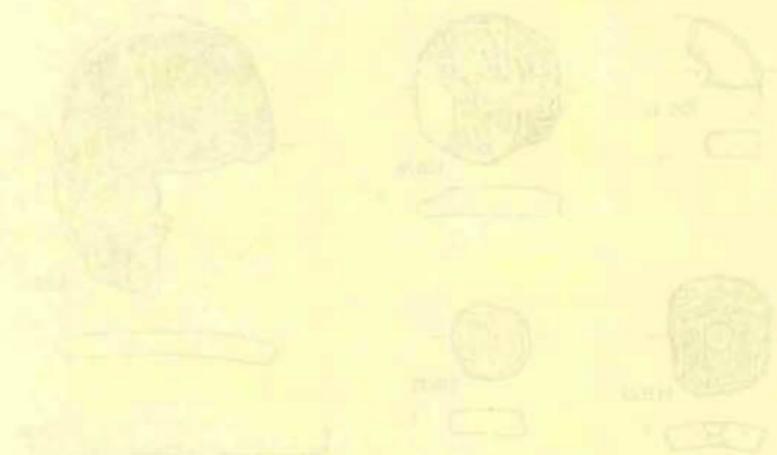
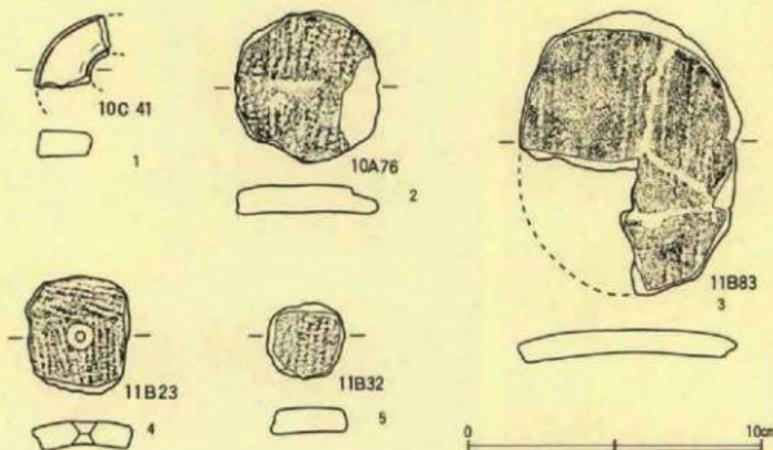


図127 前中期土器の底部実測図 (1/3)

2. 土製品 (第128図、図版62)

1は伏状耳飾の残欠。やや横方向に扁平な円形を呈するらしい。薄身だが、周縁より中央孔側がわずかに薄くなる。色調は暗褐色で、焼成良好である。

2～4は縄糸文期の円板。2は横5.0cm、縦5.1cm、厚さ0.9cmを測り、縁辺は打ち欠きによって調整されている。縄文はR L。裏面はザラついて、胎土に長石、石英の細砂を多量に含むことから、井草式ないしは夏島式期であろう。3は一部欠損しているが、縦9.6cm、横7.5cm、厚さ0.8cmの楕円形を呈する。このような大形品はあまり見ない。縁辺は打ち欠きによるが、磨耗が著るしい。縄文はR Lで、条間があいて浅く施されていることから稲荷台式期のもと思われる。4は横3.4cm、縦4.0cm、厚さ0.8cmを測り、隅丸方形様の形をとる。中央に穿孔がある。縁辺は打ち欠かれている。縄文はR L。井草Ⅰ式の頸部破片を利用している。5は横2.6cm、縦2.5cm、厚さ0.8cmの小形品である。縁辺は打ち欠かれている。縄文はR L。胎土に長石、石英の細砂を多く含み、裏面がザラついていることから井草式から夏島式期のものであろう。



第128図 B地点土製品実測図 (1/2)

3. 石器 (第129・130図、図版61・62)

B地点より出土した石器は合計37点である。内訳は有茎尖頭器3点、石鏃23点、スクレイパー3点、局部磨製石斧1点、礫器1点、スタンプ形石器1点、磨石、敲石5点、石皿1点である。出土状況は有茎尖頭器を含めて特別かわった出かたは示さない。A地点と同じく伴出土器からの石器の時期決定は困難である。

(1) 有茎尖頭器 (1～3)

いずれも側縁を細部加工して鋸歯状にしている。1は茎部が太く、側縁からなめらかに茎部に続く。3の茎部も1に近い。2は茎部がやや細く、側縁から段をもって茎部に続いている。

(2) 石鏃 (4～25)

4は大形の石鏃。茎部は直線状をなし、薄くなっているため、石篋の可能性もある。5～7は先端部をノッチ状または細かく調整して、より鋭利にした作り出しを持つもの。A地点Ⅰ類のように側縁が内側に湾曲しておらず、直線状ないしは外側にゆるく張り出す。8・9はいずれも先端部を欠くが、A地点Ⅰ類小と同様な形態を呈することから、先端部に5～7と同様の作り出しがあった可能性が高い。10～13はA地点Ⅲ類と同一形態をとるもの。10～12は基部がわずかに内側に湾曲する。13の基部は直線状である。14・15は先端から側縁にわたってゆるく外側に張り出すもので、A地点Ⅰ類小に似た形態を呈する。しかし、14には先端部の作り出しがない。16は全体が非常に細身のもの。先端は鋭い。17～19はA地点Ⅴ類と同一形態のもので、先端の角度がやや開き気味である。基部は明瞭にえぐれている。20～22はA地点Ⅵ類と同一形態のもの。20・21は薄身で丁寧な作りであるが、22はやや粗雑に作られている。23は有茎の石鏃で茎部が長い。24は茎部を欠く。両面とも整った調整剥離が施されている。25は局部磨製石鏃。粘板岩の薄片の縁辺を剥離調整し、その後には表裏を磨いている。

(3) スクレイパー (26・28)

26は親指状の形態を呈し、右側縁をスクレイパーエッジとしている。28は主要剥離面のバルブ部分を折りとった縦長剥片を利用している。両側縁を刃部とする。

(4) 不定形刃器 (27)

左側縁の下半から下方にかけて細かなリタッチが入る。また、左側縁の上端にはノッチ風に細かなリタッチがみられる。

(5) 局部磨製石斧 (29)

細長い礫の側縁から刃部にかけて剥離を入れて概形を整え、刃部はさらに磨いて作っている。刃部の磨きは表面顕著であるが、裏面はわずかに行った程度で片刃となる。先端には刃こぼれがみられ、裏面先端に使用痕が残っている。

(6) 鎌器 (30)

頸部を除く周縁に剥離を入れている。裏剣にも剥離が認められる。刃部にはわずかに使用痕が残る。

(7) スタンプ形石器 (32)

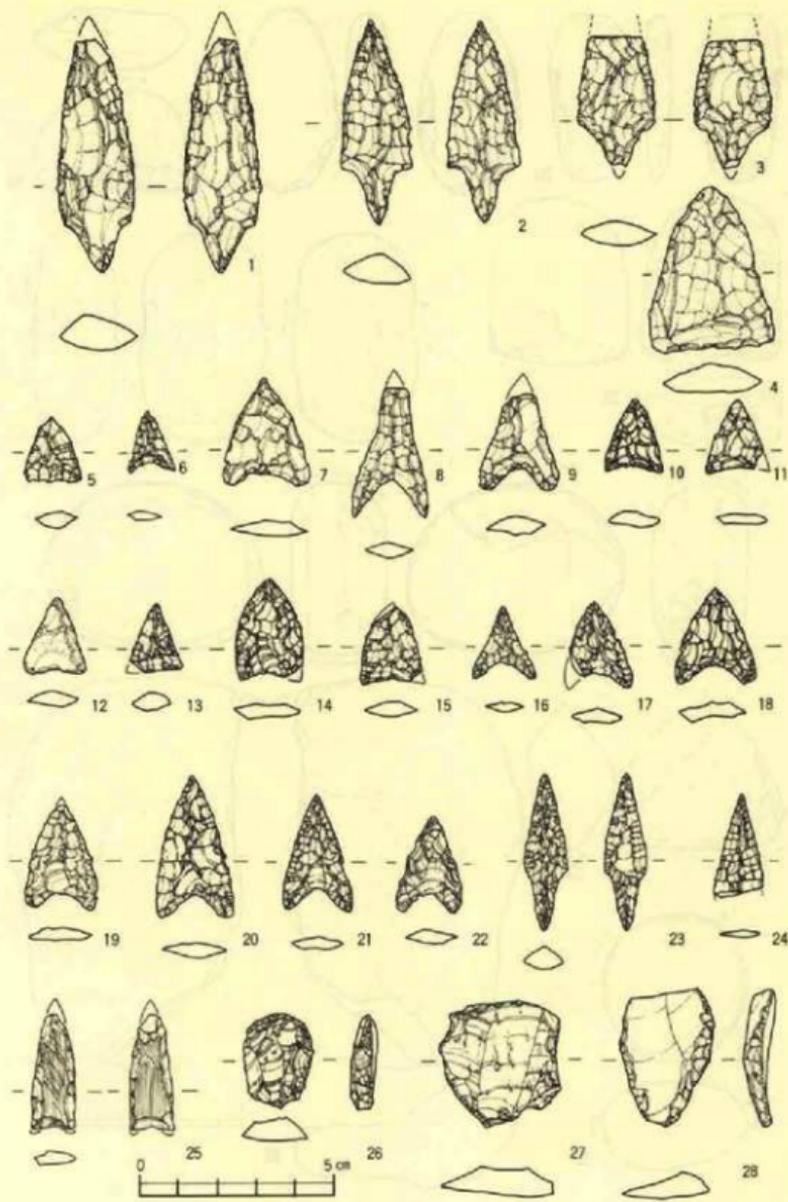
表面と底面に磨耗痕がある。底面は数回の剥離によって平坦に作られている。

(8) 磨石・敲石 (31・33~36)

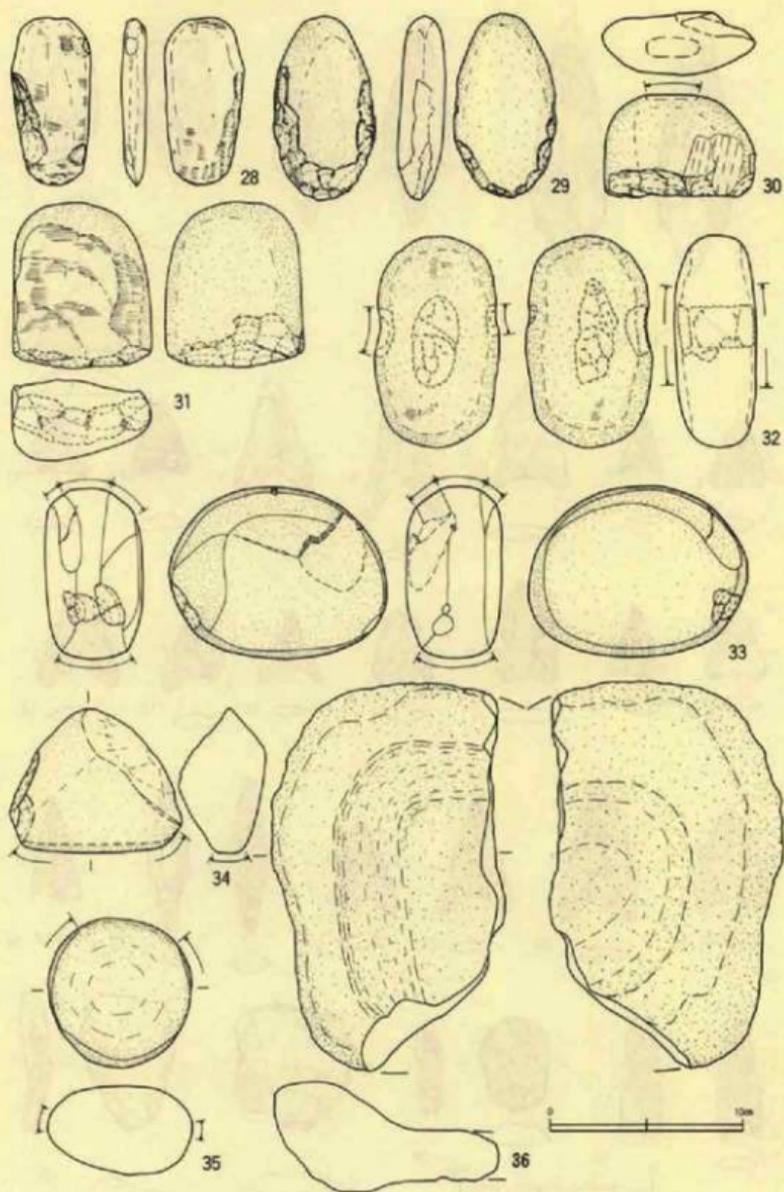
31の頂部には磨かれた痕が残る。下半は割れており、その縁辺に剥離が数回施されている。33は表表面の中央及び両側縁の中央に敲打痕がある。34は全周を磨石として使用している。35は下底面を、36は円縁周縁の大部分に磨痕が認められる。

(9) 石皿 (37)

半欠品である。風化が激しくもろい。裏面も石皿として使用されている。



第129図 B地点石器実測図1 (2/3)



第130図 B地点石器実測図2 (1/3)

第4表 B地点縄文時代石器計測表

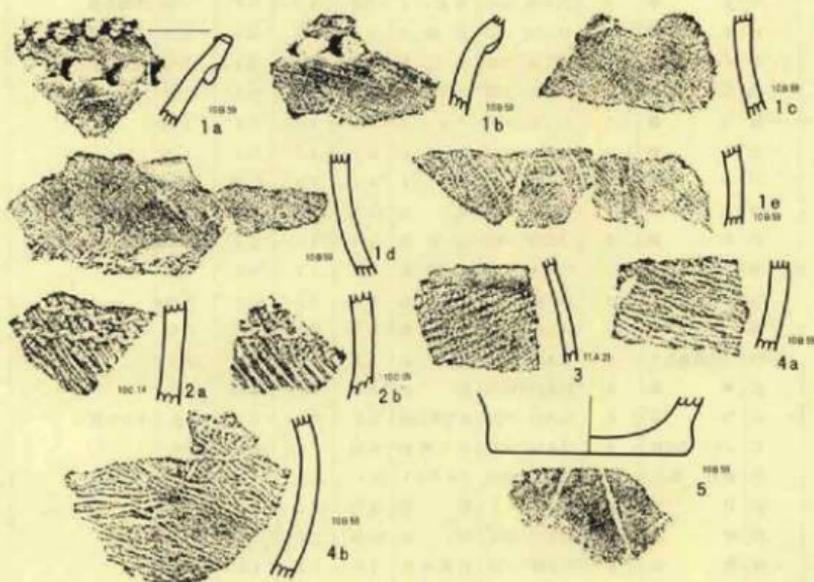
| 標記番号 | 名称 | 分類 | 出土地点 | 石質 | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重さ(g) | 備考 |
|--------|---------|----|------------|---------|--------|--------|--------|-------|---------|
| 129-1 | 有茎尖頭器 | 1 | 10B36 1002 | 安山岩 | (5.3) | 1.85 | 0.75 | 9.10 | 先端折損 |
| 2 | 有茎尖頭器 | 1 | 9C84 0004 | 安山岩 | (6.05) | 2.0 | 0.9 | 6.14 | 先端折損 |
| 3 | 有茎尖頭器 | 1 | 10C22 0002 | 安山岩 | (3.4) | 2.0 | 0.65 | 4.70 | 先端・基部折損 |
| 4 | 石 鏃 | 2 | 10B07 1002 | 安山岩 | 4.0 | 3.1 | 0.65 | 10.23 | |
| 5 | 石 鏃 | 2 | 10C64 0001 | 安山岩 | 1.65 | 1.4 | 0.4 | 0.85 | |
| 6 | 石 鏃 | 2 | 11A19 0045 | チャート | 1.5 | 1.15 | 0.25 | 0.29 | |
| 7 | 石 鏃 | 2 | 11A17 0011 | 安山岩 | 2.8 | 2.2 | 0.35 | 1.71 | |
| 8 | 石 鏃 | 2 | 10B37 0001 | 安山岩 | (3.4) | 2.0 | 0.4 | 2.02 | 先端折損 |
| 9 | 石 鏃 | 2 | 10A75 0006 | 安山岩 | (2.45) | 2.1 | 0.5 | 1.66 | 先端折損 |
| 10 | 石 鏃 | 2 | 11A28 0026 | 黒曜石 | 1.9 | 1.5 | 0.4 | 0.82 | |
| 11 | 石 鏃 | 2 | 11C18 0002 | チャート | 1.9 | (1.5) | 0.3 | 0.66 | 右側折損 |
| 12 | 石 鏃 | 2 | 11A17 0001 | 安山岩 | 1.95 | 1.5 | 0.45 | 1.23 | |
| 13 | 石 鏃 | 2 | 10A77 0002 | チャート | (1.75) | 1.3 | 0.5 | 0.85 | 左側折損 |
| 14 | 石 鏃 | 2 | 10C22 0004 | 黒曜石 | (2.55) | 1.75 | 0.4 | 1.72 | 右側折損 |
| 15 | 石 鏃 | 2 | 11A16 0001 | チャート | (2.0) | (1.6) | 0.4 | 1.13 | 先端・右側折損 |
| 16 | 石 鏃 | 2 | 10B56 0002 | 安山岩 | 1.85 | 1.6 | 0.25 | 0.39 | |
| 17 | 石 鏃 | 2 | 11A99 0005 | チャート | 2.2 | (1.55) | 0.4 | 1.05 | 左側折損 |
| 18 | 石 鏃 | 2 | 12A05 0002 | 黒曜石 | 2.4 | 2.1 | 0.5 | 1.36 | |
| 19 | 石 鏃 | 2 | 10C44 0006 | 安山岩 | (2.7) | 1.85 | 0.4 | 1.63 | 先端折損 |
| 20 | 石 鏃 | 2 | 10C61 0001 | チャート | 3.7 | 2.0 | 0.4 | 2.47 | |
| 21 | 石 鏃 | 2 | 10A75 0005 | チャート | 3.0 | 1.75 | 0.3 | 1.33 | |
| 22 | 石 鏃 | 2 | 11A09 0017 | 黒曜石 | 2.5 | 1.7 | 0.4 | 1.20 | |
| 23 | 石 鏃 | 2 | 11A84 0001 | チャート | 4.0 | 1.1 | 0.55 | 1.66 | |
| 24 | 石 鏃 | 2 | 10C23 0001 | 頁岩 | (2.65) | 1.25 | 0.15 | 0.52 | 下半折損 |
| 25 | 石 鏃 | 2 | 9C82 0002 | 粘板岩 | (3.0) | 1.1 | 0.3 | 1.17 | 先端・両側折損 |
| 26 | スクレイパー | 3 | 10B76 1002 | 黒曜石 | 2.4 | 1.7 | 0.6 | 3.00 | |
| 27 | スクレイパー | 4 | 11A06 0003 | 黒曜石 | 3.2 | 3.1 | 0.8 | 8.54 | |
| 28 | スクレイパー | 3 | 10A99 0002 | 頁岩 | 3.6 | 2.4 | 0.65 | 4.63 | |
| 130-29 | 局部磨製石斧 | 5 | 11A64 0043 | 流紋岩 | 8.8 | 4.1 | 1.25 | 72.5 | |
| 30 | 磨 器 | 6 | 11A43 0014 | 砂岩 | 9.7 | (5.35) | 2.45 | 158.0 | |
| 31 | 磨 石 | 8 | 11A53 0028 | 金雲母片岩 | (5.3) | 7.9 | 3.3 | 193.6 | 下半欠損 |
| 32 | スタンプ形石器 | 7 | 11A53 0037 | 石英斑岩 | (8.5) | 7.2 | 4.1 | 347.5 | |
| 33 | 敲石、磨石 | 8 | 11C37 0002 | ダイヤモンド | 10.9 | 6.5 | 4.1 | 442.0 | |
| 34 | 磨 石 | 8 | 10C55 | 砂岩 | 8.75 | 11.35 | 5.1 | 689.4 | |
| 35 | 磨 石 | 8 | 10A59 0011 | 砂岩 | (9.95) | 7.3 | 4.3 | 310.4 | |
| 36 | 磨 石 | 8 | 11A58 0024 | 石英斑岩 | 7.7 | 7.4 | 4.5 | 363.9 | |
| 37 | 石 皿 | 9 | 11B10 1002 | ホルンフェルス | 19.9 | (12.2) | 5.7 | — | 破片 |

第4節 弥生時代以降の遺構と遺物

1. 弥生時代の遺物

弥生式土器 (第131図1-5)

4ないし5個体出土したのみで、出土地点もまとまっていない。いずれも後期、いわゆる印旛・手賀沼系式の變形土器である。1は口端に纖維を絡げた軸棒を挿し、その直下の輪積み部分を棒状工具によってつぶしている。頸部は刷毛目のみ、体部はきわめて細いが燃りのゆるいLRの縄文が施される。縄文施文後、体部上端には結節縄文が1段施される(1d下端)。1eの右側のまばらな縄文は結節縄文施文時に付いたものであろう。2は拓影上半に2段の結節縄文が施されている。地文は附加条第1種の附加2条。軸縄RL、附加された縄は原体不明。3は頸部に横位の刷毛目、体部はLRの縄文。4は体部破片で燃りのきわめてゆるいRLの縄文が施されている。5は木葉痕ある底部で、1か4と同一個体になると思われる。



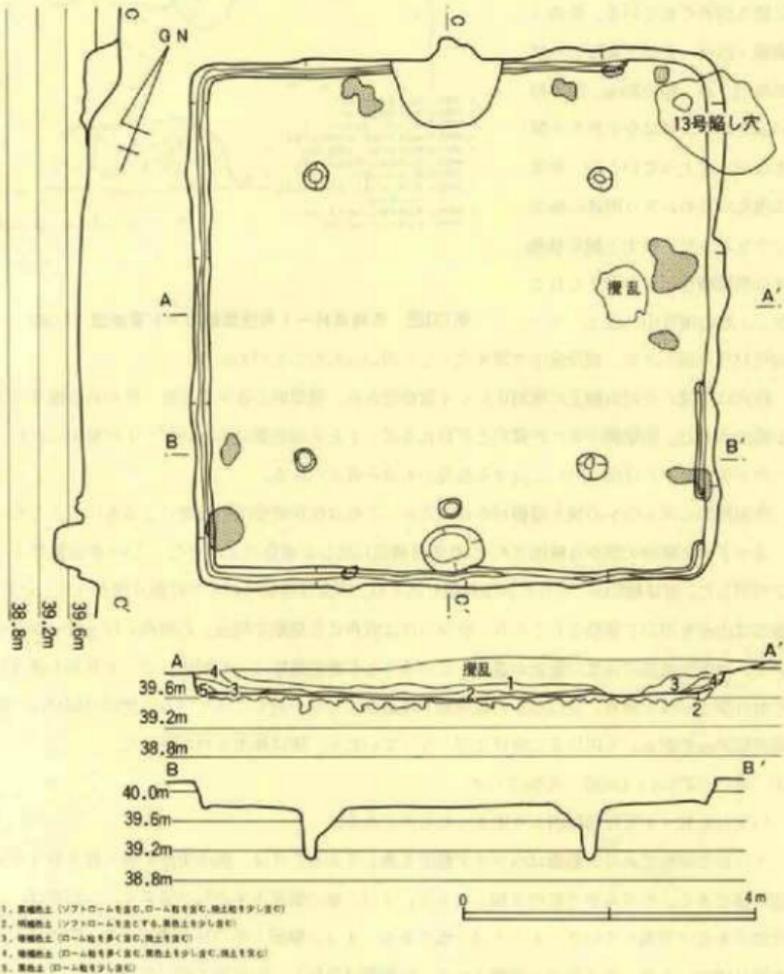
第131図 B地点弥生式土器拓影図 (1/2)

2. 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構

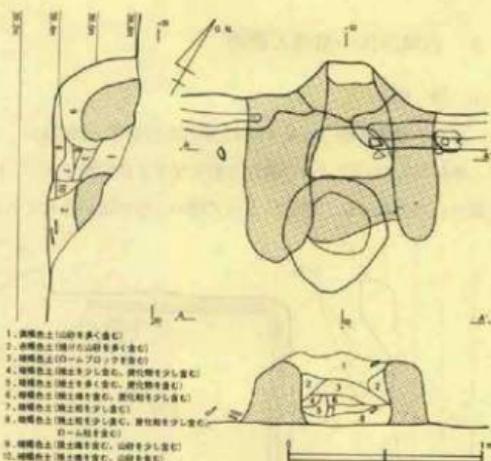
H-1号住居跡 (11Cイ003 第132-135図、図版13)

本跡は7.2m×7.1mの隅丸方形を呈する住居跡である。地山が北から南へ傾斜しており南壁の掘り込みが浅く又、攪乱によって壁の一部が破壊されており遺存はあまりよくなかった。



第132図 B地点H-1号住居跡実測図 (1/80)

掘り込みは浅いがしっかりしており深さ0.3~0.5mを測る。東壁と南壁の一部が攪乱されて明確な壁が検出出来なかった以外は壁の立上りも把握できた。床面は貼り床による構築で堅緻に踏み固められている。壁溝は南壁・西壁・北壁と東壁の一部で検出され、幅約20cm、深さ約10cmを測る。壁はやや外方へ開きながら立上っているが、東壁は攪乱のためあまり明確に検出できなかった。覆土下層の状態は自然堆積を示すと考えられるが、上層の攪乱中に焼土・灰・炭化材片が検出され、埋没途中で焚火穴として用いられたことがわかる。



第133図 B地点H-1号住居跡カマド実測図(1/30)

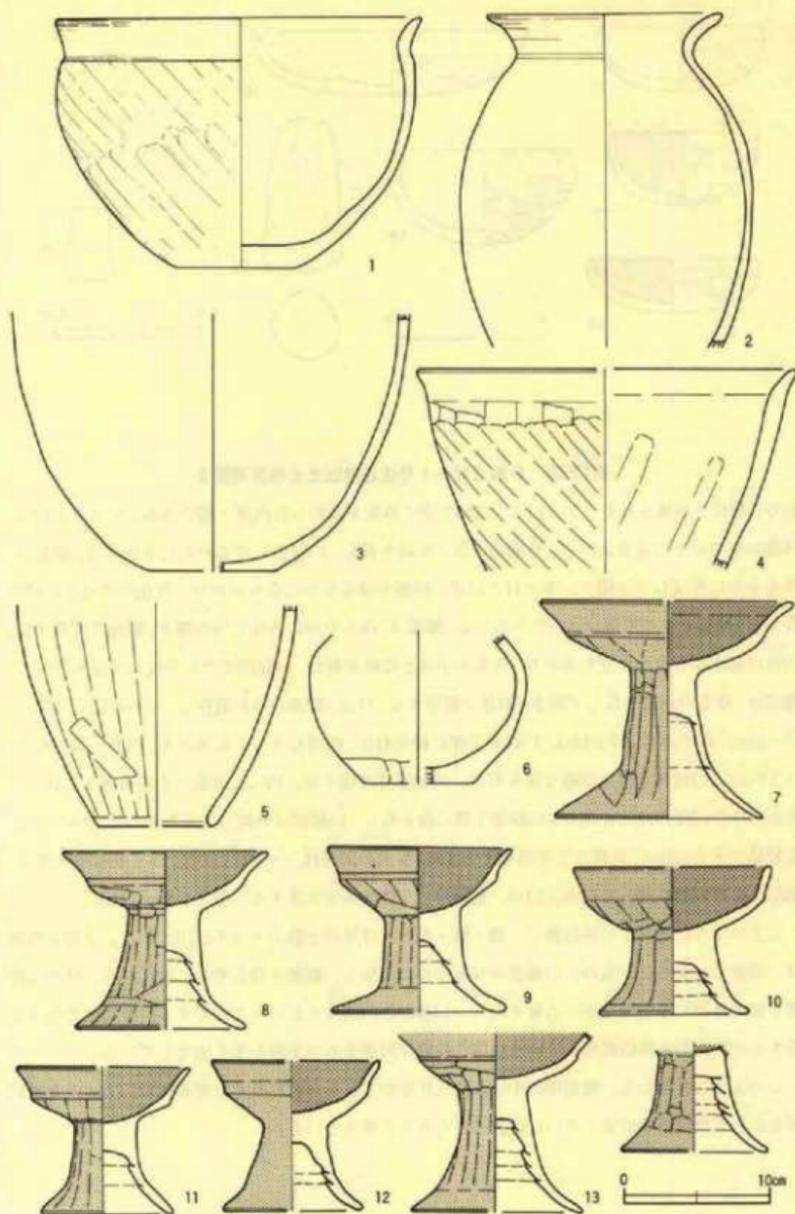
柱穴は主柱穴が対角線上に規則正しく4個検出され、廃棄時の抜き取り痕と思われる掘り込みが検出された。南壁側中央に貯蔵穴と思われるピットとその北側に小さいピットが検出された。この小さいピットは出入り口に関する施設のものと考えられる。

床面壁際に何ヶ所かの焼土堆積がみられたが、これは住居廃棄後の投棄によるものであろう。カマドは北壁中央部から検出された。軟弱な構造に比して遺存はよかったことが、断面観察よって判明した。壁は幅70cm、壁外に20cm程掘り込まれ、床面は皿状にわずかに掘り進められている。袖部は山砂を用いて構築されており、壁からほぼ直角に左側袖で85cm、右側袖で70cm張り出している。袖の先端部には焚口懸架が遺存していることが断面観察により判明した。天井部も遺存しており厚さ30cmを測る。焚口部から燃焼部・煙道と少しずつ細くなっている。焚口部幅45cm、煙道部幅20cmを測る。火床はよく焼けて固くなっていたが、灰は検出されなかった。

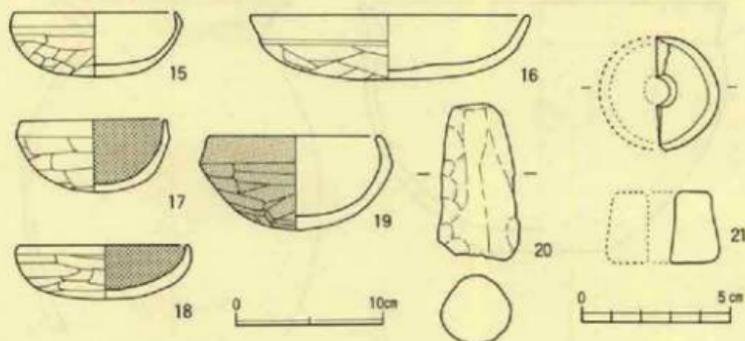
(2) 遺物(第134・135図、図版63・64)

いずれもH-1号住居跡内より出土したものである。

1は鉢で完形であり、器面はヘラナデ整形を施してある。2は、胴中央部に最大径を有する長胴の甕である。ヘラみがき整形を施してある。3は、甕で胴部下半の写が遺存する。器面は、二次焼成を受け荒廃している。4・5は、甕である。4は、胴部上半の写が遺存する。胴部は、ヘラ削りの後、ヘラナデ(斜位)が施される。口縁部は外反し、口唇部下部で肥厚する。5は、胴部下半の写が遺存する。胴部は、荒いヘラ削り(縦位)が施される。6は、塊で体部下端にヘラ



第134図 B地点H-1号住居跡出土土器実測図1 (1/4)



第135図 B地点H-1号住居跡出土土器実測図2

削り（横位）が施される。7-14は、高環で全て外面を赤彩した内黒土器である。7と8と13は、環部がゆるやかに立ちあがり、外面の中ほどに稜を有し、口縁部でゆるやかに外反する。脚部は、ゆるやかに外反しつつ開く。9と11と12は、環部がゆるやかに立ちあがり、外面の中ほどに稜を有し、口縁部でやや外反しつつ立ちあがる。脚部は、ゆるやかに外反しつつ開き、裾部で肥厚する。10は環部がゆるやかに立ちあがり、外面の中ほどに稜を有し、口縁部で少し外反して立ちあがる。脚部は、ゆるやかに外反して開き、裾部で肥厚する。14は、脚部のみが遺存し、やや外反して開く。15-19は、環である。17と18は、口縁部下部に稜を有し、内湾しつつ立ちあがる。内黒土器である。15と19は、口縁部下部に明確な稜を有し、口縁部は内傾する。19は、外面に赤彩を施す。16は、大形の環で口径19.1cmを測る。口縁部下部に稜を有し、口縁部は外傾して立ちあがる。20と21は、土製品である。20は、支脚で下半部を欠失する。器面の調整は、ヘラ削りの後、よく指などを施す。指頭圧痕が顕著に残っている。21は、紡錘車で全体の写を欠失する。厚さ2.5cmを測る。

以上のようにH-1号住居跡は、甕・甔・高環・環等の土器のセットが出土した。土器の特徴は、前述したように、高環の口縁部がゆるやかに外反し、裾部をゆるやかに開く点や、環の口縁部下部の外面に不明瞭ながらも稜を有し、口縁部が内湾するといった点である。また、外面を赤彩する点、内面を黒色処理している点等、特殊な用途をもつ土器が多く出土している。

このような特徴から、鬼高期の中頃と時代比定ができると思われる。実年代は、大体、6世紀後半から7世紀前半前葉くらいに位置づけられると考えている。

3. 歴史時代の遺物

羽口・鉄滓 (図版64)

A地点、B地点ともに出土したが、便宜上ここにまとめて報告しておく。A地点では鉄滓10点、羽口片2点、B地点では炉壁片1点、鉄滓4点である。鉄滓はいずれも製錬滓と思われる。

図版64-1は、A地点2 D52グリッド出土の羽口先端部の破片である。先端は溶融して黒色のガラス質となる。羽口の胎土は緻密でかたい。図版64-3は、A地点5 C13グリッド出土の流出滓である。表面は薄茶色を呈し、あめ状で滑らかである。破片は灰色で気泡がなく緻密。一部に炭がかんでいる。比較的重量感がある。図版64-2は、表面・破面とも暗灰色で、表面はあめ状である。気泡が多いが重量感がある。図版64-4は、11C37グリッド出土の製錬滓。黒色の面と黒褐色の面とがあり、いずれもザラついている。黒色の面はガラス質、黒褐色の面は銀色に光る巨大な結晶が多くみられる。比較的重量感がある。

これらのほかにはA地点では羽口先端の溶融した部分の破片、多孔質で炭をかんだ軽い鉄滓、破片面の白味があったほとんど造滓成分と考えられる鉄滓、一部に錆の付着した鉄滓等がある。また、B地点ではスサ(苜)を含まない炉壁内面部分の破片と多孔質で軽い鉄滓がある。いずれも小破片である。

これらの遺物は先に触れたように、B地点南側に入りこんだ小谷の南東向き斜面にある、横堀たたら遺跡と関連あるものと考えられる。

第5表 H-1号住居跡出土遺物(1)

| 器名 器形 | 遺存度 | 法量 cm | 成形 | 整形の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 出土層位 | 備考 |
|----------|-----|---------------------|-------------------------------|--|--|------|--------------------------------|
| 1 | 壺 | 完形 | 器高 8.5 口径 13.0 | 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラナデ 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り | 胎土 密 焼成 良好 色調 外面、暗褐色 内面 。 | | |
| 2 | 壺 | 底部欠損 | 器高 11.3 口径 8.0 | 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラミガキ 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り | 胎土 密、 焼成 良好 色調 外面 暗褐色 内面 。 | | |
| 3 | 壺 | 胴下半部の写 | 器高 — 口径 — 底径 8.1 | 輪積み 外面 縦方向ヘラ削り 内面 ヘラ削り | 胎土 密、砂粒、雲母 粒を含む 焼成 良好 色調 外面、赤褐色 内面 。 | | 二次焼成により内外面とも剥離が著しい |
| 4 | 甌 | 胴上半部の写 | 器高 — 口径 12.8 底径 — | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 胴部縦方向ヘラ削り 後斜位方向 ²⁾ 内面 口縁部横ナデ 胴部縦方向ヘラ削り | 胎土 やや密、砂粒 雲母粒を含む 焼成 良好 色調 外面暗褐色 一部煤付着 内面 淡褐色 一部煤付着 | | |
| 5 | 甌 | 胴下半部の写 | 器高 — 口径 — 底径 7.8 | 輪積み 外面 縦方向及び斜位 方向ヘラ削り 内面 縦方向ヘラ削り 孔部内面 横方向ヘラ削り | 胎土 やや密、砂粒 雲母粒を含む 焼成 良好 色調 内外面とも煤が 付着 | | 単孔式 |
| 6 | 埴 | 胴部の写 底部の写 | 器高 — 口径 — 底径 7.4 | 輪積み 外面 ヘラ削り 内面 ヘラ削り 後ヘ ラミガキ | 胎土 やや密、砂粒を 含む 焼成 良好 色調 外面、暗褐色 内面 暗褐色 | | 二次焼成により内外面とも剥離が認められる。 |
| 7 | 高 杯 | 杯部の写 裾部の一部欠 損 | 器高 14.7 口径 17.2 底径 14.1 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 杯部・脚部・縦 方向ヘラ削り 裾部、横ナデ 内面 口縁部横ナデ 杯部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部横ナデ | 胎土 密、砂粒、雲母 粒を含む 焼成 良好 色調 外面 赤彩 内面 杯部黒色 脚部 淡褐色 | | 外面赤彩、内黒土器 |
| 8 | 高 杯 | 口縁部の写 裾部の写 | 器高 12.0 口径 13.8 底径 10.5 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 杯部、脚部縦方 向ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 杯部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 横ナデ | 胎土 密、砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面 赤彩 内面 杯部黒色 脚部 淡褐色 | | 二次焼成により内外面とも剥離が認められる。外面赤彩、内黒土器 |

第5表 H-1号住居跡出土遺物2)

| 図録番号 | 器形 | 遺存度 | 法量 cm | 成形 | 整形の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 出土層位 | 備考 |
|------|-----|------------------|-------------------------------|-----------|--|---|------|-------------------------------------|
| 9 | 高 環 | 口縁部の写 裾部の写 | 器高 11.2 口径 12.4 底径 11.7 | 輪積み 外面 | 口縁部横ナデ 環部縦方向ヘラ 削り、脚部縦方 向ヘラ削り 裾部横ナデ 内面 口縁部横ナデ 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 横ナデ | 胎土 密、砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面赤彩 内面環部黒色 脚部淡褐色 | | 二次焼成により、外面に刺離が認められる。 外面赤彩、内黒土器 |
| 10 | 高 環 | 口縁部の写 裾部の一部欠損 | 器高 10.0 口径 13.2 底径 10.2 | 輪積み 外面 | 口縁部横ナデ 環部脚部縦方向 ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 | 胎土 密、砂粒雲母粒を含む 焼成 良好 色調 外面赤彩 一部 煤付着 内面環部黒色 脚部 淡褐色 | | 外面赤彩、内黒土器 |
| 11 | 高 環 | 口縁部の写 裾部の一部欠損 | 器高 10.0 口径 11.7 底径 8.1 | 輪積み 外面 | 口縁部横ナデ 環部脚部縦方向 ヘラ削り 裾部横ナデ 内面 口縁部横ナデ 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 ヘラミガキ | 胎土 密、砂粒雲母粒を含む 焼成 良好 色調 外面赤彩 内面環部黒色 脚部明褐色 | | 外面赤彩、内黒土器 |
| 12 | 高 環 | 環部の写 脚部の写 | 器高 10.2 口径 11.5 底径 9.6 | 輪積み 外面 | 口縁部横ナデ 環部・脚部縦方 向ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り後 横ナデ | 胎土 密、砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面 赤彩 内面 環部黒色 脚部淡褐色 | | 二次焼成により、内外面とも刺離が認められる。 外面赤彩、内黒土器 |
| 13 | 高 環 | 口縁部を欠損 裾部の写 | — — 底径 11.7 | 輪積み 外面 | 口縁部横ナデ 環部脚部縦方向 ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 横ナデ | 胎土 密、細砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面赤彩 内面環部黒色 脚部 | | 二次焼成により、外面に刺離が認められる。 |
| 14 | 高 環 | 脚部の写 裾部の写 | — — 底径 9.9 | 輪積み 外面 | 脚部縦方向ヘラ 削り 内面 環部ヘラミガキ 脚部ヘラ削り 裾部ヘラ削り後 横ナデ | 胎土 密、砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面赤彩 内面環部黒色 脚部淡褐色 | | 外面赤彩、内黒土器 |

第5表 H-1号住居跡出土遺物3)

| 図版番号 | 器形 | 遺存度 | 法量 cm | 成形 整形の特徴 | 胎土・焼成・色調 | 出土層位 | 備考 |
|------|-------|-----------------|---------------------------|--|---|------|------------------------------|
| 15 | 環 | 口縁部の写欠損 | 器高 4.5 口径 10.9 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り 内面 ヘラ磨き | 胎土 密、細砂粒を含む 焼成 良好 色調 外面 灰褐色 内面 * | | 内面の一部に割離が認められる。 |
| 16 | 環 | 全体の写 口縁部写欠損 | 器高 4.4 口径 19.1 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り | 胎土 密 焼成 良好 色調 外面 暗褐色 内面 * | | |
| 17 | 環 | 全体の写 | 器高 5.0 口径 9.8 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り後 ヘラ磨き | 胎土 密 焼成 良好 色調 外面 褐色 一部煤付着 内面 黒色 | | 内黒土器 |
| 18 | 環 | 全体の写 口縁部写欠損 | 器高 3.6 口径 11.5 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り後 ヘラ磨き | 胎土 密 焼成 良好 色調 外面 暗褐色 内面 | | 内黒土器 |
| 19 | 環 | 全体の写 口縁部の写欠損 | 器高 6.5 口径 11.4 | 輪積み 外面 口縁部横ナデ 体部ヘラ削り 内面 口縁部横ナデ 体部ヘラ磨き | 胎土 密 胎成 良好 色調 外面 赤彩 内面 淡褐色 | | 外面赤彩 二次焼成により、内外面とも割離が著しい。 |
| 20 | 土製支脚 | 下半部欠損 | 径 4.8 | 外面 ヘラ削り後ナデ | 胎土 やや密 砂粒を含む 灰(スヤ)を混入している。 色調 褐色 | | |
| 21 | 紡錘車土製 | 全体の写 | 厚さ 2.5 径 3.8 孔径 1.0 | | 色調 暗褐色 | | |

第5章 考 察

第1節 先土器時代

No. 7遺跡はA地点の台地とB地点の台地に分れており、A地点では7か所の石器群が検出されている。A地点の石器群では第3石器群と第5石器群の同時性及び石器製作跡としての問題と、第6石器群の石器の内容の問題が興味深い。B地点では5か所の炭化物集中地点が検出されている。特に第1炭化物集中地点では炭化材（ビャクシン属の一種で種は不明）に伴って2か所に焼土が検出された。

A地点の第3石器群は前述のとおり第5石器群と近接しており、石材の共通性等により同時性が認められる。第3石器群は石器・剥片類そのものの数量が6点と少なく大部分は石片、小礫片である。第5石器群の298点という石器・剥片類の多さと比較すると好対照である。このことはここで人間行動が、その行動に伴って残される可能性の少ないもの（いわゆる石器製作・使用の場でない）であることを暗示している。

一方第5石器群の特徴は、尖頭器状石器の存在にある。いわゆる木刃型彫器状石器（註1）といわれるもので、石器製作上の特徴は、両面加工の尖頭器の先端から中程にかけてグレイパーファシットを入れている。特に本遺跡の2点のものはこのグレイパーファシットを2条入れてあるのが共通する特徴である。またこの石器と削片の一部が接合している例がみられ、この石器群の集中の場所は石器製作の場および使用の場が近接してあったものと推定される。細かな砕片類（薄い砕片で尖頭器製作の時、生じるものと思われるもの）が非常に多いことも、ここが石器の製作の場であることを物語っている。

第3石器群と第5石器群の同時期でしかも異なった場の在り方は、むしろ生活の場としてのトータルな形で1つのあり方を示していると思われる。また、これらの石器群は本遺跡ではⅢ層下位よりⅣ層上位まで遺物の検出がみられたが、千葉県下の層位ではⅣ層下位（本遺跡では検出されていない）に相当するものと思われる。

A地点第6石器群の分布は縦長に広がる傾向があり、細かくみれば3箇所に分離可能な出土状況を示している。またそれらは接合関係により同時期に営まれたものと推測される。この石器群の特徴は、第1に大形の刃器状剥片が多いことである。第2にこれらの大形の刃器状剥片には使用もしくは加工痕（註2）と思われる剝離が多数みられる。第3にこれらの大形の刃器状剥片は分割されて使用されている例がみられる。第4に残核とこれらの大形剥片とは大きさにかなりの差があり、これらの大形剥片は別の場所で製作され、この場所へ持ち込まれた可能性がある。第5に石器（スクレイパー）を石核に転用するという例などもみられる。

これらの特徴から大形の刃器状剥片は比較的小きな石核（これらのものは別の場所で製作され持ち込まれた）とともにこの場所へ持ち込まれ、そのまま石器として使用されたり、あるいは分割されて石器として使用されている。また石器（スクレイパー）で持ち込んだもので比較的大きなものは石核に再転用されたりしている。この場所ではナイフ形石器は2点しか出土しておらず、その他の多くの石器類はスクレイパー的機能を持つ石器である。この場所はそれらの石器の機能が優先した場所であり、石器（道具として使用）は適度に補充する形（他の場所から持ち込んだり、その場所で石器から転用した石核から石器の製作を行なったと思われる。）で行なわれたものと思われる。この石器群はⅤ層下位を中心として検出されており、第7石器群よりは若干新しい時期の石器群である。内容的にも刃器状剥片の剥離技術を伴っており、石器製作の場と使用の場を多面的に内包する場と思われる。

A地点の第7石器群では炭化粒と石器が伴って検出された。炭化粒そのものの集中度はあまりなく、比較的調査区域全体へ広がった状態を示しており、石器の集中地点と有機的な関係は認めがたい。この石器群の石器剥片類の点数は少ないが、礫皮のある剥片が多くをしめ、石器製作工程の初期若しくは終了時（この場合には他の遺物もみられないことなどから前者の可能性がある。）に放置されたと考えられる。

B地点の第1炭化物集中地点のⅤ層-Ⅵ層にかけての焼土および炭化材の集中は、焼土の堆積状態と炭化材の出土状況から、このピャクシン属に属する材（種は不明）が焼けた時に生じたものと考えられる。調査区全体へ広がった状態からこの材をここへ搬入して燃したと考えより、自然に焼けてできたものと考えられる。この遺跡の同層位で検出されている炭化粒も比較的大きなものが多くこの集中地点の炭化物の在り方と似た傾向である。客観的に人為的であるという証拠は認められず、あくまでも自然成因のものと思われる。

最後にNo. 7遺跡の石器群の全体的な特徴としては、比較的新しい時期の石器群（第1石器群・第2石器群・第4石器群）は遺物の絶対量が少なく、その性格づけが困難である。それよりやや古い時期の石器群（第3石器群と第5石器群はⅣ層下位、第6石器群はⅤ層下位）は遺物の絶対量も多く、石器類も豊富であり、その性格は前述のとおりである。最も古い時期の石器群（第7石器群はⅤ層中位）は1か所検出されておりその性格は前述のとおりである。

炭化粒も集中地点が6か所検出され焼土の堆積を伴っているものもみられたが、積極的に人為的なものと認められる在り方を示しているとは思われない。

註1、鈴木道之助他、木町峠遺跡、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」、1974年房総考古資料刊行会

註2、使用痕と加工痕の内観での区別は非常に困難な場合がある。剥離した部分が規則的に見られる場合は加工痕としてあつかった。

参考文献

篠原正他、「東内野遺跡」第二次発掘調査概報1978年東内野遺跡調査団

田村隆他、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」、1982年千葉県文化財センター

第2節 縄文時代

1. 土器について

(1) 第1群 燃糸文系統土器

第1類 井草Ⅰ式土器

B地点において井草Ⅰ式と認められた口縁部破片は138点であった。第6表は文様別に集計した破片数であり、以下この表にそって本遺跡の井草Ⅰ式の特徴を他遺跡と比較しながら述べてみよう。

まず、第1種の押圧縄文の施されたものは合計28点、燃糸文と併用されたもの3点を加えて、全体の22%を占めている。これは印旛手賀沼水系の榎峠遺跡の36%、同高根北遺跡の27%、および西之城貝塚の33%よりやや少ないが、東京湾水系の石神遺跡8%よりはるかに多く、前者には近い数値と見られるだろう。(註1)

押圧縄文の手法は線状の長い圧痕となるものがほとんどであるが、燃紐の一部を縦位ないし斜位に短く押圧したものが2点(第103図1・19)あって、特異な手法と考えられる。また、第102図1の口頸部に施された縦位の押圧縄文は、最初押圧したのち横位回転し、続けて再び押圧するといった、半置半転の手法に共通する所があり、注意されよう。

つぎに、口端に施された押圧縄文は、ほとんどの場合、同一燃りの横回転による縄文と組み合わせられており、羽状の効果をあげている。意識的に行われたことが理解されよう。口頸部の押圧縄文は、回転縄文による地文の上に施される場合と、押圧縄文のみによって文様帯が構成されるものとの両方がある。どちらも単純な線状圧痕がほとんどであるが、口頸部の文様帯の上下または一方に線状圧痕を付け加えて、鋸歯状に燃紐を押圧したものが、合計3点検出されている。また、口頸部に押圧縄文が施された場合、体部の縦位走行の縄文ないし燃糸文が、口頸部にまで及び、口頸部の地文となってしまうものが2例(第104図30、第106図98)認められた。さらに線状の押圧縄文のみによって口頸部の文様帯が構成される場合、文様帯はきわめて狭くなることが多い(第103図1-3等)。こうした場合、その文様帯としての効果はきわめて薄くなってしまふ。型式学的にはより新しい傾向を示していると言えようか。

第2種の器面全体に回転縄文のみが施されるものは、138点中107点で、77.5%を占める。このうち、口頸部の縄文が横走するものは72点、斜行するもの32点で、横走するものが圧倒的に多く、石神の報告書において鈴木氏が指摘された、下総台地における口頸部横走縄文の優位性(註1)はここでも確認された。

第2種のうち、口端の縄文が3段にわたって施されたものは6点、2段に施されたもの50点、

1段のみ施されたもの41点、縄文の走行が縦位のもの7点であった。したがって、第2種のうち、口端の縄文は2段のもの48%、1段のもの39%となり、前者が約半数を占めることがわかる。「多摩ニュータウンⅡ」(註2)では、口端縄文は1段が大多数とされており、その数値とは大きく隔っている。どのような理由によるものであろうか。

口端および口頸部における縄文の燃りはRLが圧倒的に多く、LRはきわめてわずかである。なお、口端に文様を持たないものが3点検出された。いずれも口頸部に多少とも文様帯を有しており、井草Ⅰ式に属するのは明らかである。

第3種の燃糸文の施されたものは、3点検出された。このうち、2点は口端に回転縄文、口頸部に押圧縄文、体部に燃糸文の施されたいわゆるJY型で、石神報文によれば下総では未発見とされていたものである。他の1点は口端に押圧縄文と燃糸文が施され、以下縄文となっている。ただし、燃糸文は縦位に施されており、特異な例とすることができよう。

第2類 井草Ⅱ式土器

井草Ⅱ式は、B地点では合計183点の口縁部破片が出土した。このうち、押圧縄文を含めた縄文のみによって文様の構成された、いわゆるJ型は158点で、全体の89%を占め、いわゆるJY型は2%、いわゆるY型は9%であった。(第6表参照)石神遺跡ではJ型96%、Y型(JY・YJ型を含む)4%に比較して、J型がやや少ないことがわかる。J型のうち、口端に押圧縄文の施されたものは7点検出されている。また、口端の施文段数は、2段のものが14点、1段のものが137点で、本遺跡井草Ⅰ式と比較してみると、井草Ⅰ式では前述のように、2段のものの50点、1段のものの41点であり、口頸部文様帯の消失と口端の施文段数の量差の間に関連のあることが理解できよう。なお、石神遺跡では、口頸部に細い無文帯を有するものが、無文帯を持たないものよりやや多いことが指摘されているが、本遺跡の場合、最も一般的なJ型の口端に1段の縄文が施されているものでは、無文帯のないもの110点、あるもの27点で、圧倒的に無文帯のないものが多く、Y型の量差とともに、若干の時間差が石神遺跡と本遺跡B地点の間にあるのかもしれない。この点に関しては、第1種dとした類が注意される。これらは、口頸部に無文帯を持たないこととともに、口縁断面の肥厚外反の度合いが弱く、口端の縄文は1段という共通した特徴が指摘されるのである。なお縄文の燃りについては、やはりRLの使用が圧倒的に多い。

いわゆるJY型は4点であるが、口端に縄文と燃糸文が併用されている例もある。また、Y型は16点、YJ型は検出されなかった。燃糸文原体の使用傾向は、石神ではLが多いとされているが、本遺跡ではRのほうがやや多く認められた。

なお、突起の付された土器が1個体発見されている(第107図6)。突起の出現は一般に田戸下層式とされている(註3)から、この土器は縄文式土器の突起出現の問題に対して、きわめて重要な資料となるであろう。この突起は、おそらく1個と考えられるが、口端に付され瘤状を呈している。今のところ、縄文式最古であろう。(註4)

第6表 日地点弁軍 I・II式文種別集計表

| 弁 軍 I 式 | | | 138 | 弁 軍 II 式 | | | 183 |
|---|--|--------|----------------|----------|-----|----------------|-----|
| 第1種 押圧純文 | | | 28 | 第1種 純文 | | | 163 |
| 口端及び口頭押圧 | | | 8 | 口頭押圧 | | | 7 |
| (RL) · RL · LR + RL · LR · (RL) · (LR) + RL | | 1 | (RL) · RL + RL | | 6 | (RL) · RL + RL | 6 |
| (RL) · (RL) + (RL) · (RL) + RL | | 1 | (RL) + RL | | 1 | (RL) + RL | 1 |
| (RL) · RL · RL + (RL) · (RL) + RL | | 1 | | | 14 | | 14 |
| (RL) · RL + (RL) · (RL) + RL | | 1 | 口端2段階文 | | | | |
| (RL) · RL + (RL) · RL · RL + ? | | 1 | RL · RL + RL | | 11 | RL · RL + RL | 11 |
| (RL) · RL + (RL) · RL · RL + ? | | 1 | RL · LR + RL | | 1 | RL · LR + RL | 1 |
| (RL) · RL + (RL) · RL + ? | | 2 | RL · J + RL | | 1 | RL · J + RL | 1 |
| (R) · RL + RL · (R) · (R) + RL | | 1 | RL · RL? + RL | | 1 | RL · RL? + RL | 1 |
| 口端のみ押圧 | | | 12 | 口端1段階文 | | | 137 |
| (RL) · (RL) + RL + ? | | 1 | RL + RL | | 122 | RL + RL | 122 |
| (RL) · RL + RL · RL + ? | | 1 | RL? + RL | | 1 | RL? + RL | 1 |
| (RL) · RL + RL + RL + ? | | 3 | RL + ? | | 2 | RL + ? | 2 |
| (RL) · RL + RL + ? | | 6 | RL · LR + RL | | 1 | RL · LR + RL | 1 |
| (RL) + RL | | 1 | LR + LR | | 1 | LR + LR | 1 |
| 口端のみ押圧 | | | 8 | 口端2段階文 | | | |
| RL · RL + RL · (RL) + RL | | 1 | LR + ? | | 2 | LR + ? | 2 |
| RL · LR + (RL) · (RL) + RL | | 1 | R + RL | | 1 | R + RL | 1 |
| LR · RL + (LR) + ? | | 1 | R + R | | 3 | R + R | 3 |
| LR · LR + (LR) · (LR) + ? | | 1 | J + RL | | 1 | J + RL | 1 |
| LR · LR + LR · (LR) + ? | | 1 | J | | 3 | J | 3 |
| RL + (RL) · RL + ? | | 1 | 特 殊 | | | 5 | |
| RL + (L) · RL + ? | | 1 | O + RL | | 3 | O + RL | 3 |
| J + (RL) · (RL) · (RL) · RL + ? | | 1 | R + (R) · R | | 1 | R + (R) · R | 1 |
| J | | 1 | J + LR | | 1 | J + LR | 1 |
| 第2種 純 文 | | | 107 | 第2種 部承文 | | | 20 |
| 口頭禁止純文 | | | + | 口頭純文 | | | 4 |
| 口端3段階文 | | | 6 | RL + YL | | | 1 |
| RL · RL RL + RL | | +RL | (LR) · LR + YR | | 2 | (LR) · LR + YR | 2 |
| RL · RL RL + RL | | + ? | LR · YR + YR | | 1 | LR · YR + YR | 1 |
| 口端2段階文 | | | 35 | 口頭部承文 | | | 16 |
| RL · RL + RL | | +RL | YR · YR + YR | | 1 | YR · YR + YR | 1 |
| RL · RL + RL | | + ? | YR + YR | | 7 | YR + YR | 7 |
| RL · RL + J | | + ? | YL · YL + YL | | 1 | YL · YL + YL | 1 |
| RL · LR + RL | | + ? | YL + YL | | 4 | YL + YL | 4 |
| RL · LR + J | | + ? | YL + O | | 1 | YL + O | 1 |
| RL · J + RL | | + ? | ? + YL | | 1 | ? + YL | 1 |
| LR · LR + RL | | +RL | YR | | 1 | YR | 1 |
| 口端1段階文 | | | 26 | | | | |
| RL RL | | +RL | | | | | |
| RL RL | | + ? | | | | | |
| LR + RL | | +RL | | | | | |
| LR + RL | | + ? | | | | | |
| LR + LR | | + ? | | | | | |
| J + RL | | + ? | | | | | |
| 口頭禁止行 | | | 5 | | | | |
| RL · RL + RL | | +RL | | | | | |
| RL + RL | | +RL | | | | | |
| RL + RL | | + ? | | | | | |
| LR + J | | + ? | | | | | |
| J + RL | | + ? | | | | | |
| 口頭禁止行純文 | | | 32 | | | | |
| 口端2段階文 | | | 15 | | | | |
| RL · RL + RL | | +RL | | | | | |
| RL · RL + RL | | + ? | | | | | |
| RL · RL + LR · RL | | + ? | | | | | |
| LR · RL + LR | | + ? | | | | | |
| LR · LR + LR | | +RL | | | | | |
| LR · LR + LR | | +RL | | | | | |
| 口端1段階文 | | | 15 | | | | |
| RL + RL · RL | | +RL | | | | | |
| RL + RL | | +RL | | | | | |
| RL + RL | | + ? | | | | | |
| LR + LR | | +RL | | | | | |
| LR + LR | | + ? | | | | | |
| J + RL | | + ? | | | | | |
| ? + RL | | +RL | | | | | |
| 口頭禁止行 | | | 2 | | | | |
| RL + RL · RL | | + ? | | | | | |
| RL + RL | | +RL | | | | | |
| 口頭無文 | | | 3 | | | | |
| O + RL | | +RL | | | | | |
| O + LR | | +RL | | | | | |
| O + LR | | + ? | | | | | |
| 第2種 部承文 | | | R | 3 | | | |
| (RL) · YR | | + RL | | | | | |
| R · R | | + (R) | | | | | |
| LR | | + (LR) | | | | | |

※弁軍I式

口端+口頭+体部

弁軍II式

口端+体部

〔 〕は押圧, Oは無文

?は欠損及び不明

第3類 夏島式土器

夏島式土器は井草Ⅰ・Ⅱ式に比べて、量的にかなり少なくなり、A地点では29点、B地点では46点であった。したがって、縄文と燃糸文の比率は、必ずしも信用しうる数値となりえないが、一応参考を示せば次のようである。A地点では29点中縄文が13点、燃糸文が16点、B地点では46点中縄文が21点、燃糸文が25点である。すなわち、A・B両地点とも縄文より燃糸文がやや上回っている。鈴木氏によれば、下総台地では縄文施文が圧倒的に優位であるとされている(註1)が、本遺跡の対岸にある木の根No. 6遺跡では、縄文1に対して燃糸文2という比率が出ており、従来の概念に対して疑問を提出している。(註5) No. 6遺跡の夏島式も量的にはそれほど多いものではなく、その比率の信頼度にやや問題もあるが、本遺跡の例も加えれば、あながち無視できないことと思われる。

第4類 稲荷台式土器

量的にはごく少なく、縄文と燃糸文の比率は求められない。ただ、縄文施文の土器と燃糸施文の土器とでは、器内面の研磨に著しい差があることが判明した。縄文施文の土器の多くは滑沢を呈するまでに研磨されており、明らかに夏島式との差が認められた。一方、燃糸施文の土器には内面があれて、ザラついたものが多く、器面整形からの夏島式との判別が難しかった。したがって、燃糸の比較的密に施されたものは、夏島式の可能性も考えられるが、燃糸文がまばらに施されたものは、夏島式の燃糸文とは明らかに識別された。近年、稲荷台式は夏島式に含め一型式として認めないとする意見があるが、船橋市中野木新山遺跡(註6)や印旛郡白井町復山谷遺跡(註7)では、夏島式を混じえずに稲荷台式が出土しており、やはり、稲荷台式は一つの型式として存在することは、間違いないであろう。

(2) 第2群 沈線文系統土器

第1類 三戸式土器

三戸式土器はA地点から4個体発見されたのみであった。第47図1は口縁断面の特徴から三戸類(註8)に属するものである。北総方面では、この段階に属する土器は、印旛郡印西町鶴塚(註9)をはじめ零細な資料しかないが、空港内No. 67遺跡では大量に発見されており、発表が待たれる所である。第48図1及び2・3は西川が稲荷原類としたものである。特に1は小形土器ではあるが、全体の文様構成を知るうえで貴重なものである。なお、この土器に付された耳状突起は、特に注目すべきものであって、先述した井草Ⅱ式の突起とともに、縄文式の一つの特徴である突起の出現問題に対して重要な資料となろう。

第3類 田戸上層式土器

田戸上層式は、A地点において35個体が確認された。このうち、ほぼ全体の文様構成を復元しえたものを第136図に示した。ただし、同一個体の破片から全体の文様を復元したものや、部分

的に欠落しているため、一部推定復元しているものもあるが、ほぼ誤りないものと思われる。ここでは、主にこの模式図に基づいて当該時期の文様の構造及び、田戸下層式との関係について見ることにしよう。

第136図1～3・5・6の口辺部文様帯に共通する特徴は、文様帯内を大きく鋸歯状に区画している点にあるといえよう。ただ、1では細い三角形状の文様を対向させ、これを繰り返しているため、鋸歯状の区画は部分的に途切れているし、2では、鋸歯状の区画文の頂部が曲線化し、底部は瘤によって連結している。しかし、大きく文様帯を見た場合、鋸歯状の区画が意識されていると考えることができよう。つぎに、鋸歯状の区画によって文様帯の上下に三角形の空間が設けられるが、その中にはやはり三角形を基本とした文様が施されている。しかし、この三角形状の文様も多様で、1・2・5・6ではW字状、逆W字状となり、その中を弧線であらめたり、Wの屈曲部を曲線化している。また、3では三角形状の文様の中央が途切れて、弧線を対向させたような入組になっている。ここでは、3のような田戸上層式独特の文様を仮りに直曲線文と呼んでおこう。4の体部文様も同様である。しかし、これら三角形状の文様の基本型は、あくまでも三角形であって、文様の内部あるいは一部が曲線化しているにすぎないとみることができよう。なお、7は鋸歯状の区画がみられない。しかし、W字状の文様が横に流れているように見受けられ、上記のものと同類としておくことにする。

4・8～10は口辺部文様帯内に鋸歯状の区画の認められないものである。特に、8・9はS字状ないしは渦巻状の曲線文が描かれており、前述のものとは大きく異なっている。4の口辺部文様は、鋸歯状の区画文様ととれなくもないが、かなり曲線化している。口縁の波頂部下および波底部下の、文様の屈曲する部分は、鋸歯状の区画文が曲線化したものとみれば、むしろ体部文様のような、あるいは3の直曲線文のくずれたものとみるのが妥当であろう。

10は、4・8・9とはまた異質のものである。直線ないし波状の区画内に、貝殻腹線文を縦に充填したのみで、きわめて単純である。また、区画に用いられた沈線は、すでに述べたように細く鋭い工具によって施されたもので、本遺跡では唯一例であった。したがって、一応4・8・9とはまた別類として扱うべきと思われる。

最後に11であるが、本例は口辺部文様帯が不明である。しかし、体部文様帯の構成は興味深いものがあり、とりあげることにした。本例をよく見ると、3条1単位の沈線によって、菱形の文様を作っているが、菱形文様は一部途切れており、かぎの手状の連続文様となっている。さらに、かぎの手状の連続文様によってできた文様帯上下の三角形の空間は、もう一度1本の沈線によって画されている。田戸下層式の文様構成に近いが、明らかに異なっている。この点については後述する。

以上、第136図模式図にあげた土器をA、1～3・5～7、B、4・8・9、C、10、D、11と分類してみた。ここであらためてAとBを比較してみると、鋸歯状区画の有無のほか、A類

では直線的な文様が主体的で、曲線文は付随的に用いられ、B類では曲線文が卓越しているように見受けられる。この点、D類はA類に近いとみることができる。しかし、A類とB類はまったく別種のものではなく、5の体部文様は、S字状の曲線文に見ることもできるし、6の頸部文様は、B類の体部に施された雷文風の文様と明らかにつながりがある。また、2の三角形状の文様は、S字状に連続しているし、3の直曲線文と4のそれについては、前述したとおりである。したがって、A類とB類は、時間的に同時、ないしはきわめて近接したものとすることができる。

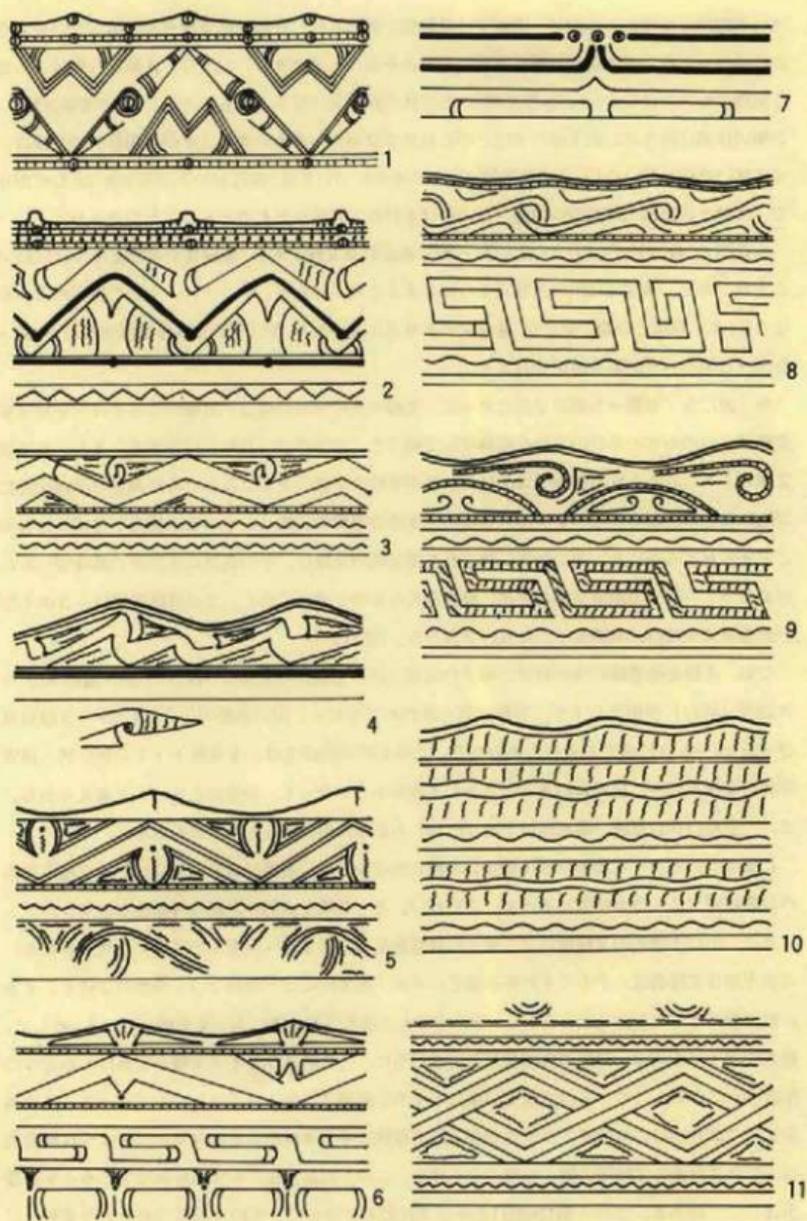
ところで、直前型式の田戸下層式は、一般に直線的な文様をもち、曲線文や渦巻文はない(註10)とされており、曲線文は田戸上層式からはじまると考えられる。そこで、こうした視点からみるならば、A・D類とB類の間には、曲線文のあり方の違いから、型式学的な前後関係すなわち、A・D類→B類という関係も想定されよう。

今、仮にA・D類→B類の予測にたつて、文様の変化をみた場合、B類のうち8のS字状連続文様は、11のかぎの手状の文様を曲線化して描くと、まさにびったりと付合する。また、S字状文様の上下に認められる弧線文は、11のかぎの手状の文様の上下にみられる三角形の区画沈線に対応するものとみることができる。さらに、9の渦巻状の文様は、8のS字状文が途切れたものと考えられようか。8・9の体部に施された雷文風の文様は、その成立にきわめて興味深いものがあるが、一応6の頸部文様が発達、整備されたものと考えておく。4の直曲線文は、3の小形の直曲線文が独自の発達を示したものであろう。(註11)

なお、A類を他遺跡に求めれば、城ノ台貝塚の田戸上層式の大部分(註12)、田戸遺跡 Fig. 11の23等(註13)が相当しよう。B類は例がきわめて少なく、田戸遺跡 Fig. 12の上から3段目及び Fig. 13がこれにあたるものと思われる。この2例の曲線文は、本遺跡1・2のW字状、逆W字状の文様が巧みに組み合わせ、各々の末端がからみ合って、渦巻状となったと考えられる。また、空港内No14遺跡、第22図の土器(註14)もB類に相当するものと思われる。

C類については、本遺跡では1個体しか得られなかった。福島常世式(註15)は、縦位方向の貝殻腹縁文の一つの特徴があって、やや近い。A・B類とは別の系統の可能性もあろう。

さて、田戸下層式の文様構成は、城ノ台貝塚発見の完形土器(図版Iの下段)に代表される。この土器は文様構成にややくずれをみせているが、基本的には三角形ないし菱形の文様を、2条の細沈線によって多段に組み合わせ、その中を太沈線及び細沈線によって充填している。そして、最も注意すべき点は、口縁の波頂部及び波底部下、三角形及び菱形の文様が交互にくるように配置されていることで、この区画文の集合する所に刺突文が施されている。したがって、この刺突文はやはり口縁の波頂部下及び波底部下に直線状に垂下されることになる。このような刺突列は、三戸式以来の文様帯の縦的分帯のなごりで、この土器が文様にくずれをみせているとする理由は、ここにある。これと第136図11とをまず比較してみると、多段に組み合わせられた菱形・三角形区画が、1段に簡略化され、刺突列がなくなり、文様が横に連続するように変化しているこ



第136图 田戸上層式文様模式图

とがわかる。本遺跡A類も同じく縦の分帯が取り払われて、横に鋸歯状に連続し、文様の重畳がなくなっている。このように見るならば、田戸下層式と上層式との区画文の変化は、一応説明できるであろう。

では、つぎにA類に認められる三角形の文様に組みこまれた弧線や屈曲部の曲線は、どのように考えるべきであろうか。田戸下層式には、区画内の充填文としてしばしば、短い弧線文が使われている。たとえば、城ノ台図版Ⅱ右4、伊豆・峠遺跡78・79(註16)、荏田第10遺跡第49図18(註17)等。これらの弧線文は、田戸下層式の多様な充填文の一つとして登場してきたものであるが、田戸上層式段階で区画文の変化とともに、区画文と融合したものと思われる。いま一つの可能性は、区画文自体の曲線化であるが、今のところ両型式をつなぐそうした中間的な区画文をもったものは見つかっていないようである。

このように、田戸下層式から上層式への変化は、おおよそ縦の分帯の消滅、区画文の簡略化と横への文様の連続化という、一連の変化の中で理解できるように思われる。

以上、田戸上層式の細分の可能性及び、田戸下層式からの変化について、簡単に述べてみたが、該期の資料はまだまだわずかずあり、その変遷過程の解明は、なお今後の重要課題である。

(3) 第3群 貝殻条痕系統土器

第1類 子母口式土器

A地点では合計400点、B地点では遺構出土のものを除き、268点が出土した。いずれも小破片を除く。A地点の内訳は、第1種文様あるもの7点、第2種無文185点、第3種擦痕あるもの146点、第4種片面条痕62点である。B地点は同じく14点、36点、213点、4点、及び尖底の小破片2点である。

第1種、有文土器はA地点では7点のみであった。内訳は、口端に絡条体圧痕のつくもの2点、同じく口端に貝殻背圧痕のつくもの1点、口縁部に多載竹管による刺突列のつくもの1点、沈線文の施されるもの2点、体部に貝殻腹縁圧痕のつくもの1点であり、少ない。なお、貝殻腹縁圧痕の土器は、胎土に多量の繊維を含み、子母口式でない可能性もある。多載竹管による刺突列は、1条施されたもので、大口坂貝塚(註18)のものと同く類似しており、子母口式と考えて間違いなであろう。

一方、B地点では有文土器が14点得られた。このうち、絡条体圧痕のつくものは、6点である。1点は口端及び低い隆起帯上につくもので、他はいずれも口端のみにつく。後者の口縁部の文様は、細沈線による何らかの意匠文、竹管による刺突列及び無文である。また、絡条体圧痕の認められないものは、体部破片を含めて8点である。このうち、竹管による刺突文のみ施されたものは2点、細沈線と刺突文の複合するもの2点、幅広の沈線文の施されたもの2点、口縁部無文で口端に貝殻腹縁圧痕の施されたもの1点、同じく口端のみに幅広の刺突のつくものが1点である。

以上のように、B地点の子母口式には、文様の要素として低隆起帯・絡条体疔痕・刺突文・細沈線文・沈線文・貝殻縁疔痕の6種があつて、多彩であるが、大部分が互いに別の文様要素と同一個体上で複合しており、一つの型式として理解できよう。

第2種から第4種と第1種の量的な比較を行ってみると、A地点とB地点とでは、有文土器と擦痕を有する第3種との比率は、それほど大差がない。ところが、有文土器と無文、有文土器と片面条痕の比率は、A地点とB地点とでは、著るしい差が認められた。すなわち、無文及び片面条痕が、A地点ではかなり多い。これは、A地点が、子母口式に前後する型式の土器が多く出土していて、子母口式との型式認定が困難であつたことに一つの原因があると思われ、A地点とB地点の子母口式との間の時間差が原因ではないように思われる。

第2類 野島式土器

A地点で4個体が出土した。個体数は少ないが、型式学的に重要な土器が得られた。野島式から鶴ヶ島台式への変遷は、関野氏によってかなり詳細に考察されている(註19)が、氏によれば、鶴ヶ島台式直前段階の土器は、いずれも沈線区画の系統のもののみで、細隆起線文によって区画文が施される系統の土器は、発見されていなかった。第57図1は、まさにこの細隆起線による区画文をもった、鶴ヶ島台式直前段階に位置するものであろう。口辺部文様帯と体部文様帯は、無文帯を介して完全に独立し、体部文様帯には弧線と直線の組み合わせた区画文が認められる。これらの特徴は、いずれも鶴ヶ島台式の特徴と言えるが、唯一区画文の要所に竹管刺突がなく、鶴ヶ島台式直前に位置することは、疑いえないであろう。第64図3も、同様の時期と考えられる。

第3類 鶴ヶ島台式土器

A地点で16個体が出土した。関野氏の細分案に従えば、古段階には、区画文の交錯部分の竹管刺突が不規則な第58図4、第64図4、第65図5が、中段階には、典型的な第58図5・6、第59図7等が、新段階には、なぞり手法に近い区画文をもった第65図9が各々該当しよう。第66図16も、あるいは新段階に相当するものかもしれない。

第5類 表裏条痕の土器

A地点より比較的多量に出土した。出土地点は野島・鶴ヶ島台式の分布とほとんど同じであった。野島式と鶴ヶ島台式は、前述したように、後者が4:1の割合で多く、また、第60図10は先に述べたように、鶴ヶ島台式の文様帯構成を模倣したものと考えられることから本類の大部分は、鶴ヶ島台式期に属するものと思われる。

ここでは、第1種として、口端に刻みのつくもの、第2種として、刻みのつかないものにと分類した。茨城県狭間貝塚(註20)では、口端に刻みのついたものは、表裏条痕の土器の写くらいとされている。口縁断面についてみれば、第1種・第2種とも内削ぎ状のもの、丸味をもつもの、口端付近が薄くなったもの、あるいは尖頭状になったものが多くみられ、狭間貝塚や空港内No. 14遺跡の鶴ヶ島台に伴うものと、共通するところが多い。条痕の走行については、口縁部破片で

は横方向及び縦方向を主とするものが目立っているが、そうでないものもあり、体部から底部にかけての破片では、後者の傾向がいろいろ多くみられた。

2. 遺構について

(1) 草創期後半の住居跡

井草Ⅰ式期と考えられるB地点J-1号住居跡はその特徴として、床面の中央が浅くくぼんで壁際が若干高い皿状を呈すること、中央よりやや南寄りの位置に床面より一段低く、覆土に炭化粒を多量に含み、底面がわずかに焼けている施設があること、の2点があげられる。

皿状にくぼんだ床面は、西之城貝塚の井草期の住居跡(註21)及び、飛ノ台貝塚の茅山期の住居跡(註22)とも共通しており、このことは撫糸文期から早期にかけての下総方面の一貫した一つの特徴であったと思われる。炭化粒を覆土に多量に含んだ掘り込みについては、西ノ城例とともに花輪台貝塚においても同種のもが確認されており(註23)、掘り込みの周囲にピットが多数設けられることも同じである。したがって、この浅い掘り込みは三者とも同一の性格を有する施設と認められる。小林達雄はこれを「従来認識して来たところの炉とは異なったものである」が、「住居内で火の使用がなされていたとする見方も可能である」と指摘した(註2)。ところが、本住居跡では、床面がごくわずかではあるが焼けていることが確認され、ここで火が使用されていたことが明らかとなった。先に例をあげた飛ノ台貝塚の住居跡では、周囲にピットは伴わないが、中央付近にやはり掘り込みがあって、1軒では床面が明らかに焼け、2軒は床面がまったく焼けていなかったと報告されている。このように撫糸文期から早期にかけての住居跡中央付近にある掘り込みは、各住居ごとに程度の違いこそあれ、火を使用するための施設であったとみてよいであろう。

(2) 炉穴・焼土跡等

A地点では11基、B地点では5基が発見された。一般に、炉穴は茅山期の長楕円形プランを呈し、一方に足場を、もう一方に炉部をもつ構造のものを言うが、本遺跡からはこれらのものとは異なった形状のものも含めて、説明の便宜上炉穴として扱っておいた。

ここで改めて、これら合計16基の炉穴、焼土跡等を形態や焼土のあり方によって分類しておく。

Ⅰ長楕円形のプランを有し、長軸の一方に炉部をもつもの。A地点1・6・7・8・11号。

Ⅱ楕円形・円形を呈し、中央付近の底面がわずかに焼け、焼土ブロックないし焼土粒がその上方に散っているもの。A地点3号・10号。B地点4号。

Ⅲ小形で円形を呈し、底面がよく焼け、覆土に焼土が充満しているもの。A地点4号。B地点2号。

Ⅳはほぼ円形を呈し、底面は凹凸があって、焼土が底面より明らかに浮いているもの。A地点2・5・9号。B地点1・3・5号。

Ⅰは茅山期の典型的な炉穴。ただし、1号・8号は炉部が足場より一段高い位置にあり、注意を要する。伴出遺物は6号のみで認められ、焼土を中心に鶴ヶ島台式及び表裏条痕の土器が出土した。こうした焼土上出土のあり方は飛ノ台パターンと呼ばれるものである(註22)。7号では検出面より上から半完形の表裏条痕の土器の一部が発見された。他の遺構からは伴出遺物はなく、構築時期を明らかにしえない。ただ、6・7号を含めて、1号・8号は茅山系の土器の集中範囲に位置することは指摘できる。11号は1号・6～8号とは位置的に離れ、また周辺のグリッドからも特定時期の遺物の集中がないため、時期不明である。

ⅡはⅠの炉穴に近いものであるが足場はない。広義の炉穴としておこう。いずれも伴出遺物はない。各遺構の周辺から出土した遺物は、A地点3号は沈線文系統・条痕系統及び前期後半から中期初頭にかけて、A地点10号は燃糸文系統・沈線文系統のもの、B地点4号は燃糸文系統のものが各々出土している。

Ⅲは一般に焼土跡と呼ばれているものに属する。B地点2号は一見したところ、焼土が浮いたように見えるが、断面には明らかに皿状の堅く焼けた面がうかがえ、Ⅲに含めた。いずれも伴出遺物はなく、時期を確定しえない。A地点4号の周辺からは、沈線文系統及び条痕系統の土器が、B地点2号の周辺からは、燃糸文系統及び前期後半の土器が出土している。

Ⅳは木の根No. 6遺跡では土壌に分類され、土壌の機能が終了した段階で焼土が投棄されたものではないか、とされている。(註5)しかし、本来土壌とするにはⅣに属する大部分の遺構の底面に凹凸があり、やや難があるように思われる。断面より見れば、焼土の周辺には焼土粒や炭化粒が散っており、その濃淡に各遺構で差がある。Ⅰ～Ⅲは掘り込んでから境内の土をさらった後に火をたいたと考えられるが、Ⅳはおおまかに掘ったのみで、境内を完全にさらわずに火をたいたか、あるいは火をたいた後、調理されたものとともに掘り返され、その後埋められたか、いずれではないかと考えておきたい。なお、A地点9号は底面のごく一部ではあるが焼けており、Ⅲに分類すべきかもしれないが、断面では黄褐色土が焼土と表面との間にはっきり介在しており、ここに含めた。各遺構の伴出遺物は、A地点5号が焼土中より野島式の小片2点、A地点9号が覆土上より燃糸文系統の土器片が、B地点3号が覆土中より、同5号が壁に密着して燃糸文系統の土器小片が出土している。A地点2号の周辺グリッドからは沈線文系統・条痕系統及び前期後半から中期初頭にかけての土器が、B地点1号の周辺からは燃糸文系統及び前期後半の土器が出土している。したがって、Ⅳに分類されたもののうち、A地点5号は野島期、A地点9号・B地点3号・5号は燃糸文期におおよそ時期比定されるものと思われる。つまり、Ⅳは一般の炉穴のように一定の時間幅でおさえられる遺構ではないようであるが、この点については、さらに類例が増加するまで結論を保留しておく。名称については「特殊な焼土跡」とでも仮に呼んでおこう。

(3) 陥し穴

陥し穴はA地点において16基、B地点で13基の合計29基が発見された。陥し穴の形態からその分布状況を見ると、A地点とB地点ではかなり様相が異なっていることがわかるが、形態分類において注意しなければならないことがある。すでに宮が指摺したように開口部の形態は原形をとどめていない(註5)ということのほか、後述するように、墳底付近の形状、特に袋状の断面を示すものの一部には、廃棄後の自然崩落の結果によってそのような形状となったものもあるという点である。したがって、これらの点に留意して、原形をある程度推測した上で形態の分類を行うことにする。

ア 分類

I-A類

開口部が楕円形ないし長楕円形で、墳底が長方形を呈するもの。墳底はほぼ平坦で、深さは0.75mから1.05mを測る。A地点の1号・3号・7号・10号・11号・13号・14号が相当する。B地点では検出されていない。Ⅲ層部分で急に広がって楕円形となるものが多く、Ⅳ～Ⅴ層以下で長方形をなしており、本来は開口部も長方形であったと思われる。

I-B類

開口部で長楕円形を呈し、墳底が長方形で、棒を立てたと思われる小ピットを有するもの。墳底はほぼ平坦で、深さ0.65mから1.00mを測る。B地点2号・4号・10号が相当する。I-A類と同様、開口部は本来長方形であったと推測される。

II-A類

開口部で楕円形を呈し、大きさが1m程度以下の小形のもので、墳底が正方形に近い形状のもの。深さ1m程度で断面は下半がほぼ直口、上半が開く。B地点5号・7号が相当する。これも本来は直口で開口部プランは正方形であった可能性がある。

II-B類

形態はII-A類に近い。墳底は長方形を呈するが、大形で深さも3mに達するもの。B地点8号が相当する。

III-A類

開口部が墳底と同じく楕円形を呈するもの。B地点6号がこれに相当するが、6号には墳底に小ピットが認められる。

III-B類

開口部、墳底ともに楕円形を呈するが、深さ3mに達する深いもので、断面は下部にゆくにしたがって次第にすぼまるもの。B地点9号がこれに相当する。

III-C類

開口部、墳底とも楕円形を呈するが、断面が開口部から中ほどまで次第にすぼまり、下半が袋

状に拡がるもの。深さは2.20m程度、B地点11号・13号がこれに相当する。ただし、留意すべき点として、2基とも袋状に拡がり始める部分が武蔵野ローム層付近に達してからのことであり、立川ローム層の上半では、すばまる状態を呈することである。当地域のローム層は標準土層のⅣ・Ⅴ層ではかたくしまっているが、Ⅳ層から次第に柔らかくなり、武蔵野ロームはかなり容易に移植でけずることができる。そこで、このような形状は地山が柔らかかったために作動的になされたものとする考え方もできる。しかし、その一方陥し穴の覆土の堆積状態を見ると、袋状に拡がった部分には武蔵野ローム層相当のブロックが大量に堆積していることもあることがわかった。したがって、廃棄後柔らかい、すなわち崩落しやすい武蔵野ロームの部分で自然に崩落がすすみ、上半のかたい立川ロームの部分と比較的原形を保ったとする考えも成立しうる。ただ、ここでは武蔵野ローム部分が袋状をなす形態のものが4例と少なく、いずれとも断定することが出来ない。今後は、陥し穴覆土中におけるローム崩落土が、本来どの自然層に相当するものか詳細な観察を行えば、この問題は容易に解決するであろう。陥し穴の形態に関する問題提起としておく。

Ⅳ類

開口部が長楕円形ないし楕円形を呈し、墳底が非常に狭くなるもの。縦断面は直口ないしは袋状になる。袋状を呈するものは確認面から墳底にむかって、次第に拡がるものが大部分で、最も原形を保っているものと考えられる。フラスコ状と表現した方がより適切であろう。墳底のプランは直線状のものもあるが、弓なりに曲ることも一つの特徴である。A地点2号・4号・5号・8号・9号・12号・15号・16号、B地点1号・12号がこれに相当する。なお、A地点5号はハードローム面における確認プランであり、覆土における黒色土の発達が目撃できなかったために、本来の確認面であるソフトローム面では検出できなかったものと判断し、これに含めた。また、B地点12号には墳底中央に小ピットが確認されている。

Ⅴ類

Ⅲ-C類とⅣ類の折衷形態というべきもので、開口部が長楕円形ないし楕円形、墳底が長楕円形を呈する。縦断面は袋状に拡がり、墳底部分は平坦ではなく、湾曲がある。A地点6号、B地点3号が相当する。袋状に拡がる部分は標準土層Ⅳ層からであり、Ⅲ-C類と同様、原形については疑問が残る。

以上の分類の結果、内訳は次のとおりである。Ⅰ-A類A地点7基、B地点0、Ⅰ-B類A地点0、B地点3基、Ⅱ-A類A地点0、B地点2基、Ⅱ-B類A地点0、B地点1基、Ⅲ-A類A地点0、B地点1基、Ⅲ-B類A地点0、B地点1基、Ⅲ-C類A地点0、B地点2基、Ⅳ類A地点8基、B地点2基、Ⅴ類A地点1基、B地点1基。したがって形態の上からはA地点とB地点では、かなり様相が異なっていることが指摘されよう。

イ 分布

A地点16基の陥し穴の分布について見ると、1号～3号と4号～16号の二群に分けられるので

ろう。このうち平坦面に位置するものは12基、傾斜面及び傾斜面に近い所に位置するものは4基である。そして、後者は明らかに谷へおりてくる動物を待つために作られたものであろう。また、前者については、I-A類の7号・10号・11号・13号・14号が興味深い配置をとっていることに気づく。この5基が分布する所は、地形的に見て調査範囲の中で最も高い位置にあり、ほぼ41.5mの等高線内に入り、東から押し出してくる微高地の先端にあることである。これはある種の動物の行動類型に合わせた配置と見ることができるのではないだろうか。

B地点については、A地点に比べて多種類の形態があって、同一形態の陥し穴の意図的な配置は考えられない。ただ、全体として舌状に張り出した台地の付根付近に分布し、台地の先端に広い空白地帯を設けていることが指摘されよう。

3. 遺跡の性格について

(1) 包含層の構造

A地点及びB地点は今まで見てきたように、多数の土器型式にわたる多量の遺物が出土した。しかし、両地点で発見された遺構、すなわち、住居跡2軒、炉穴・焼土跡等16基、陥し穴29基、土壇17基のうち、時期がほぼ確定できたものはごくわずかである。A地点では、燃糸文期の特殊な焼土跡1基、茅山期の炉穴4基、及び特殊な焼土跡1基であり、B地点では井草式期の住居跡1軒、燃糸文期の特殊な焼土跡2基、子母口式期の住居跡1軒であるにすぎない。したがって、A・B両地点とも、遺跡の性格としてはいわゆる遺物包含地の範ちゅうに含まれよう。

しかし、単に遺物包含地といっても、第3・4章で述べたようにA地点とB地点とでは遺物の出土状況がまったく異なることを指摘することができた。すなわち、A地点では草創期後半から晩期にかけて多数の型式の土器が出土しているが、各型式ごとにその分布が比較的狭い範囲にまとまっており、それが時期によって異なっていた。また、各型式ごとの土器の個体数は決して多くなく、個体ごとに比較的まとまって出土し、同一個体・半完形品となるものが多く認められた。したがって遺跡全体として遺物の量が多くとも、単一時期に限ってみれば、その包含地自体はかなり小範囲に限定されてしまうのである。このことは、A地点が縄文時代の各時期を通じて断続的なかなり短期間の居住しか行われなかったことを示しているものと考えられる。

一方、B地点では子母口、浮島期は遺物の集中地点が1か所ないし数か所認められてA地点とほぼ同様の状況を呈しているが、燃糸文土器、とりわけ井草Ⅰ式から井草Ⅱ式にかけては、多量の土器が出土し、その分布はB地点の台地上のほぼ全面に及んでいることがわかった。そして、該期の土器で非常に離れたものが接合あるいは同一の個体として認識された例がかなりある。その理由については、一般的には自然的な営力と人為的な営力との二者が考えられようが、A地点の各期の遺物のまとまりからみて、自然的な営力がB地点のみ強かったとは考えられない。何らかの人為的な力が加えられたとみるべきだろう。ただし、それは当時の意図的な行為ではなく、

無意識的な行動の結果であろう。つまり、B地点の台地上の全体において、井草・夏島式期の人々が連続的にしろ半連続的にしろ活発に行動していたため、廃棄遺物が荒されたものと思われるのである。このように考えるならば、B地点は井草式から夏島式にかけて、A地点とはやや異なった性格が与えられよう。

(2) 遺跡の性格

A地点は先に見たように各時期を通して断続的なかなり短期間の居住しか考えられないことから、一時的なキャンプサイトとするのが最も妥当であろう。

一方同じ空港予定地内No. 14遺跡(註14)においては、縄ヶ島台期の土器が大量に発見された。そして、これに伴う遺構の数は一次・二次調査を通じて住居跡3軒をはじめとしてきわめてわずかしか発見されなかった。このようなあり方は、正しく本遺跡B地点の井草・夏島期とはほぼ同様のものである。No. 14遺跡は石器製作とからめてベースキャンプと位置づけられており、B地点も同じようにベースキャンプと考えておきたい。このことは井草・夏島式土器の特異な出土状況からも説明しうるであろう。ただし、稲荷台式以降燃永文土器の出土はきわめて少なくなり、早期前半に至ってはほとんど出土遺物がみられなくなる。このことはB地点が井草・夏島式期のベースキャンプから一時的なキャンプサイトとしてしか機能を果さなくなり、ついには放棄されたことを示していると考えられよう。その理由についてはB地点及びごく近隣の自然環境が、盛んな狩猟採集活動によって破壊されたことによるものではなからうか。

- 註1. 鈴木道之助、東寺山石神遺跡の燃永文系土器について「東寺山石神遺跡」1977年、千葉県文化財センター
- 註2. 小林達雄他、多摩ニュータウンNo. 52遺跡の発掘調査「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ」1966年、多摩ニュータウン遺跡調査会
- 註3. 山内清男、縄文式土器・総論「日本原始美術1」1964年、講談社
- 註4. なお、波状口縁の出現に関しては、我孫子市布佐余間戸遺跡で草創期前半と考えられる土器の中に、波状に推定復元されたものがある。しかし、筆者の実見した所では、問題の口縁部破片のうち、波状口縁の頂部に相当するものはなかった。上面瓶が隅丸形状の平縁の土器とみれないであろうか。高野博光他、「布佐・余間戸遺跡」1981年、我孫子市教育委員会
- 註5. 宮 重行、池田大助他、No. 6遺跡「木の根」1981年、千葉県文化財センター
- 註6. 今橋浩一他、「中野木新山遺跡」1977年、船橋市教育委員会
- 註7. 田村 隆他、「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ」1982年、千葉県文化財センター
- 註8. 西川博孝、三戸式土器の研究「古代探叢」1980年、早稲田大学出版部
- 註9. 廣野光行、鶴塚遺跡出土の縄文式土器「古代58号」1974年、早稲田大学考古学会
- 註10. 西村正南・金子浩昌他、千葉県西之域貝塚「石器時代2」1955年
- 註11. 直曲線文のきわめて発達した好例は、青森の千歳式である。
杉山 武他、「千歳遺跡03発掘調査報告書」1976年、青森県教育委員会
- 註12. 吉田 格、千葉県城ノ台貝塚「石器時代1」1955年石器時代文化研究会
- 註13. 赤星直忠、横須賀市田戸先史時代遺跡調査「史前学雑誌7-6」1935年、史前学会

- 註14. 野口行雄、「新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅲ No. 14遺跡」1983年、千葉県文化財センター
- 註15. 桑山龍彦、会津盆地の早期縄文文化「日本考古学年報1」1951年、日本考古学協会
- 註16. 吉田 格・横山悦枝、伊豆・峠遺跡—縄文早期の出土遺物—「考古学ノート6」1976年、武蔵野文化協会考古学部会
- 註17. 伊藤 郭他、荏田第10遺跡「港北ニュータウン地域内文化財調査報告書」1972年、横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 註18. 山内清男、「日本先史土器図譜12 子母口式（再版・合冊）」1967年、先史考古学会
- 註19. 岡野哲夫、鶴ヶ島台式土器細分への覚書「古代探叢」1980年、早稲田大学出版部
- 註20. 西村正衛、茨城県南米町狭間貝塚（第1次調査）「学術研究22」1973年、早稲田大学教育会
- 註21. 西村正衛、千葉県香取郡西ノ城遺跡（第2次発掘、概報）「古代45、46」1965年、早稲田大学考古学会
- 註22. 金子浩昌・西川博孝他、「飛ノ台貝塚発掘調査概報」1978年、飛ノ台貝塚発掘調査団
- 註23. 甲野 勇・吉田 格、「縄文式文化編年図集1 花輪台式文化」1949年、武蔵野博物館

結 語

No. 7遺跡は、山武郡芝山町香山新田字横堀地先に所在する遺跡である。昭和53年度に本調査を実施し、ここにその結果を公表するに至った。それを取りまとめ、結語とした。

なお、先土器時代及び縄文時代については、それぞれの担当者がその問題点をまとめ、若干の考察を加えたので、詳細は省略したい。

発掘調査

本調査の発掘調査は、昭和52年度に143,000㎡を対象として試掘調査を行い、その結果に基づき、そのうち約45,000㎡を本調査範囲として、昭和53年4月20日から翌54年3月31日までの約1カ年を要して実施した。

調査担当者は、班長、杉山晋作、調査研究員、宮 重行、三浦和信、石倉亮治、加藤正信、藤崎芳樹、萩野谷悟、西川博孝であったが、調査の都合上若干の変動もあった。

発掘調査は地形上からA・Bの2地点に分けて実施した。

調査対象面積は約45,000㎡であり、縄文時代遺物包含層30,198㎡(A地点17,247㎡、B地点2,951㎡)及び先土器時代遺物包含層3,030㎡(A地点2,280㎡、B地点750㎡)並びに古墳時代の住居跡を調査した。

遺跡

No. 7遺跡は、『木の根』において既報のNo. 6遺跡とは栗山川の支流である高谷川の支谷をもって対峙する位置にあり、No. 5、No. 14遺跡等を含んだ広い意味の三里塚地域に所在している。ここは太平洋にむかう栗山川水系と利根川水系の分水界にあたり、太平洋沿岸・利根川流域等の地域とは遺跡の内容等において異なり、特異な様相を呈する地域である。

当文化財センターでは、過去、計画的・継続的に三里塚地域の調査を行っているが、No. 7遺跡の調査もその一環として実施したものであり、本報告書は分水系に所在する遺跡のあり方に関わる資料を追加したと言えよう。

遺構・遺物

本遺跡では、先土器時代から歴史時代に至る遺構・遺物が出土している。

古墳時代では、住居跡が1軒検出された。出土物から古墳時代(鬼高期)に属するものである。

以下、出土した遺構・遺物を羅列的に記し、取りまとめとしたい。なお、先土器時代及び縄文時代については詳細な分析がなされているので、第5章を参照されたい。

先土器時代

遺構 石器群 12か所(A地点7か所・B地点5か所)

遺物 A地点 (第1石器群)スクレイパー1点、剥片5点 (第2石器群)ナイフ形石器2点、尖頭器1点、石核2点、スクレイパー1点 (第3石器群)剥片6点、砕片5点 (第4石器群)

結 語

スクレイパー 4点、剥片 7点、石核 1点 (第5石器群) 彫器 2点、尖頭器 4点、スクレイパー 1点、ナイフ形石器 1点、剥片 34点 (第6石器群) ナイフ形石器 2点、スクレイパー 3点、剥片 50点、砕片 36点 (第7石器群) ナイフ形石器 1点、砕片 2点、剥片 15点 石核 1点(ブロック外)

B地点 ナイフ形石器 1点、石核 1点、尖頭器 1点、剥片 1点、

縄文時代

遺構 住居跡 1軒(井草Ⅰ式期)、炉穴・焼土等16基(A地点11基、B地点5基)

陥し穴29基(A地点16基、B地点13基)

遺物 土器(早期 井草・夏島・稲荷台・三戸・田戸上層・田戸下層・子母口・野島・鶴ヶ島式 前期 黒浜・植房・浮島式 中期 加曾利E式 後期 称名寺・加曾利B・安行Ⅰ式 晚期 姥山Ⅱ・Ⅲ式) 片状耳飾、土製円版、石鏡 4点、石錐 1点、スクレイパー 5点、不定刃器 2点、磨製石斧 1点、礫器 1点、磨石 2点、敲石 4点、敲石併用の磨石 6点、石皿 1点

弥生時代

遺構 なし

遺物 土器(後期 印旛手賀系)

古墳時代

遺構 住居跡 1軒(鬼高期)

遺物 甕、環、高環等

歴史時代

遺物 鉄滓 4点

まとめ

No. 7遺跡の調査報告書は調査終了後4年も経て、ここにやっと公表することができた。No. 7遺跡が所在する三里塚地域は、太平洋と利根川との分水界に当たり、出土遺物も先土器・縄文時代が中心となるが、本遺跡では弥生式土器及び土師器も出土した。弥生式土器は三里塚地域ではNo. 61遺跡から出土しているし、No. 62遺跡でも若干出土している。また、土師器については、No. 2遺跡・No. 62遺跡・No. 63遺跡等でわずかではあるが出土している。これらは総合的に比較検討する必要があるだろう。今後の刊行の予定している報告書に期したい。

言うまでもなく、三里塚地域は分水界に当たり、先土器時代、縄文時代が数多く出土している。本遺跡においてもそれを追認することとなった。これら資料について、大いに御活用願いたい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係各機関及び、調査補助員の方々に厚くお礼申しあげる次第である。

圖 版



A地点全景(航空写真)南から



A・B地点全景(航空写真)南西から



A地点遠景(北東から)



B地点遠景(北東から)



11B00土層セクション(B地点)



第1炭化物集中地点(A地点)



①



②



③



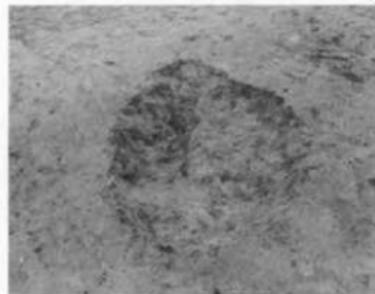
④



⑤



⑥



⑦



⑧

1. 1号炉穴 2. 2号炉穴 3. 3号炉穴 4. 5号炉穴
5. 6号炉穴 6. 7号炉穴 7. 8号炉穴 8. 9号炉穴



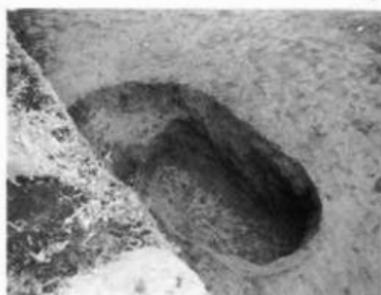
①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

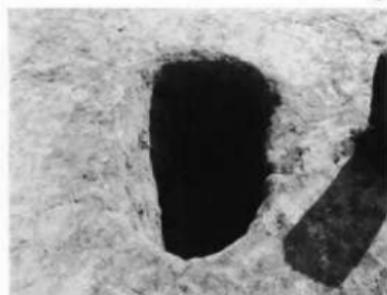
1. 10号炉穴 2. 11号炉穴 3. 2号陥し穴 4. 3号陥し穴
5. 4号陥し穴 6. 5号陥し穴 7. 6号陥し穴 8. 7号陥し穴



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

1. 8号陥し穴 2. 9号陥し穴 3. 10号陥し穴 4. 11号陥し穴
5. 12号陥し穴 6. 13号陥し穴 7. 14号陥し穴 8. 15号陥し穴



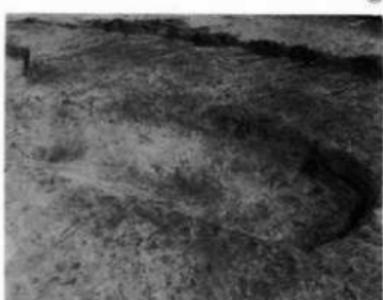
①



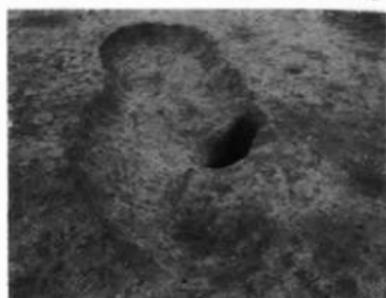
②



③



④



⑤



⑥

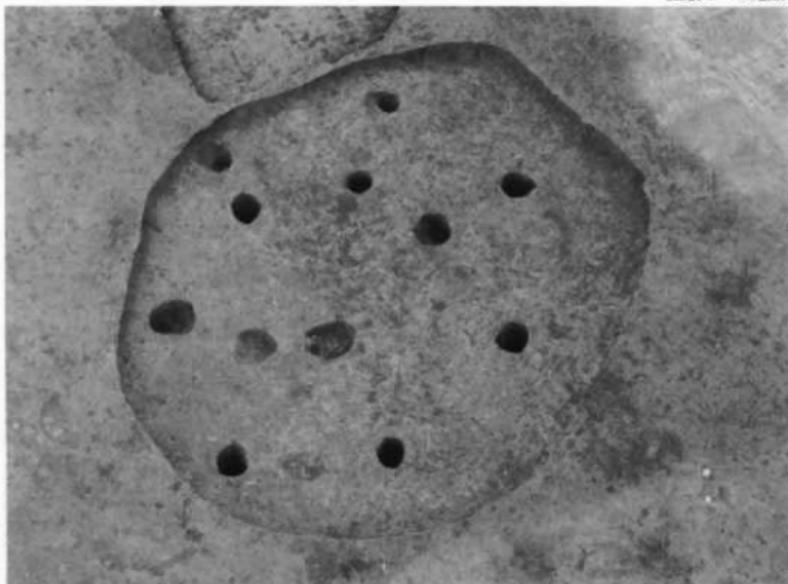


⑦



⑧

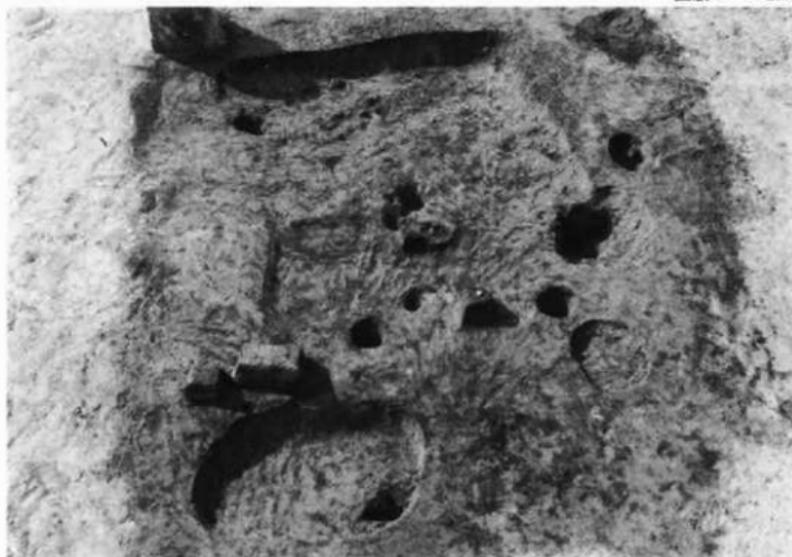
1. 16号陥し穴 2. 1号土壤 3. 2号土壤 4. 3号土壤
5. 8号土壤 6. 9号土壤 7. 10号土壤 8. 11号土壤



J-1号 住居跡全景(北西から)



J-1号 住居跡出土遺物



J-2号 住居跡全景 (南東から)



J-2号 住居跡セクション



J-2号 住居跡出土遺物



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦

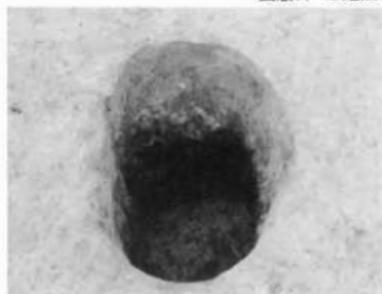


⑧

1. 1・2号炉穴 2. 3号炉穴 3. 4号炉穴 4. 5号炉穴
5. 1号陥し穴 6. 2号陥し穴 7. 8. 3号陥し穴



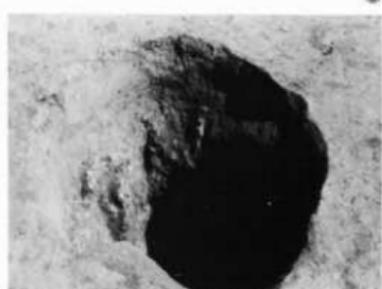
①



②



③



④



⑤



⑥

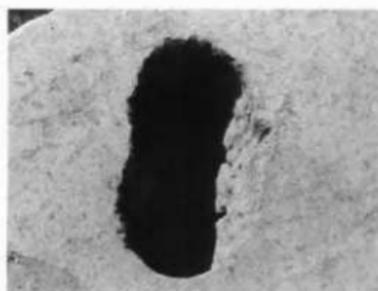


⑦

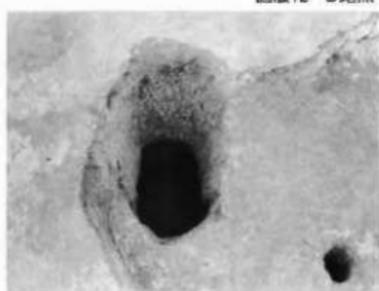


⑧

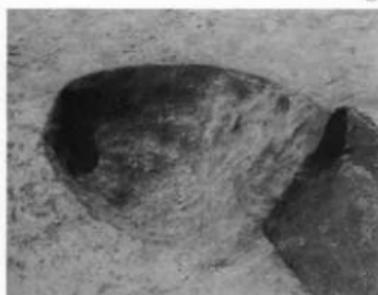
1. 4号陥し穴 2. 5号陥し穴
3. 6号陥し穴 4. 7号陥し穴 5. 8号陥し穴 6. 9号陥し穴 7. 10号陥し穴 8. 11号陥し穴



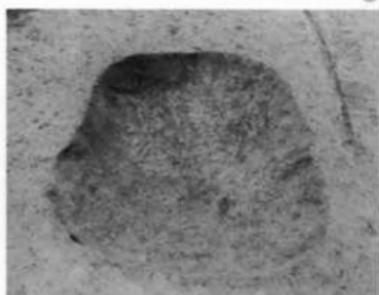
①



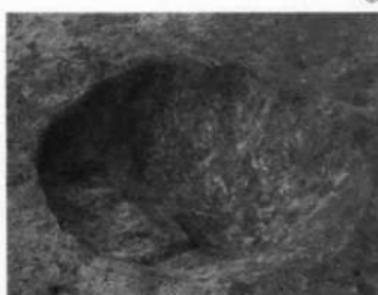
②



③



④



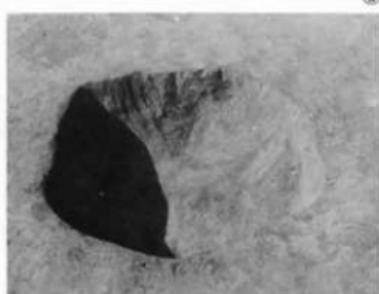
⑤



⑥



⑦



⑧

1. 12号陥し穴 2. 13号陥し穴 3. 1号土壌
5. 3号土壌 6. 4号土壌 7. 5号土壌

4. 2号土壌
8. 6号土壌



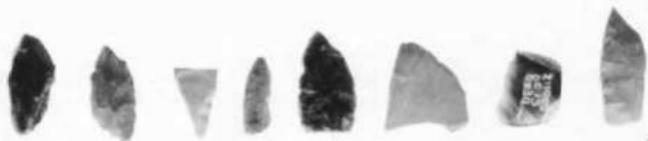
H-1号 住居跡全景(南東から)



H-1号 住居跡カマド



A地点出土先土器時代石器(第11, 13, 14図)



第11図

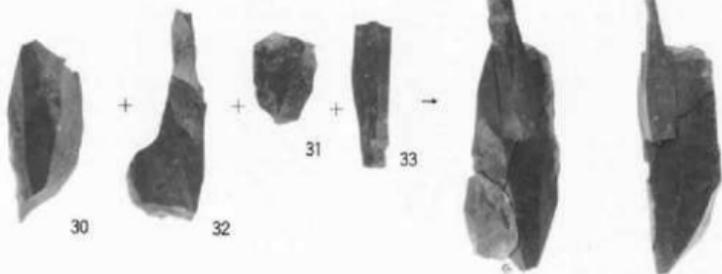
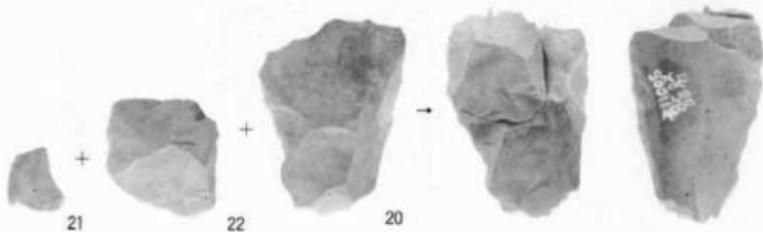


第19図

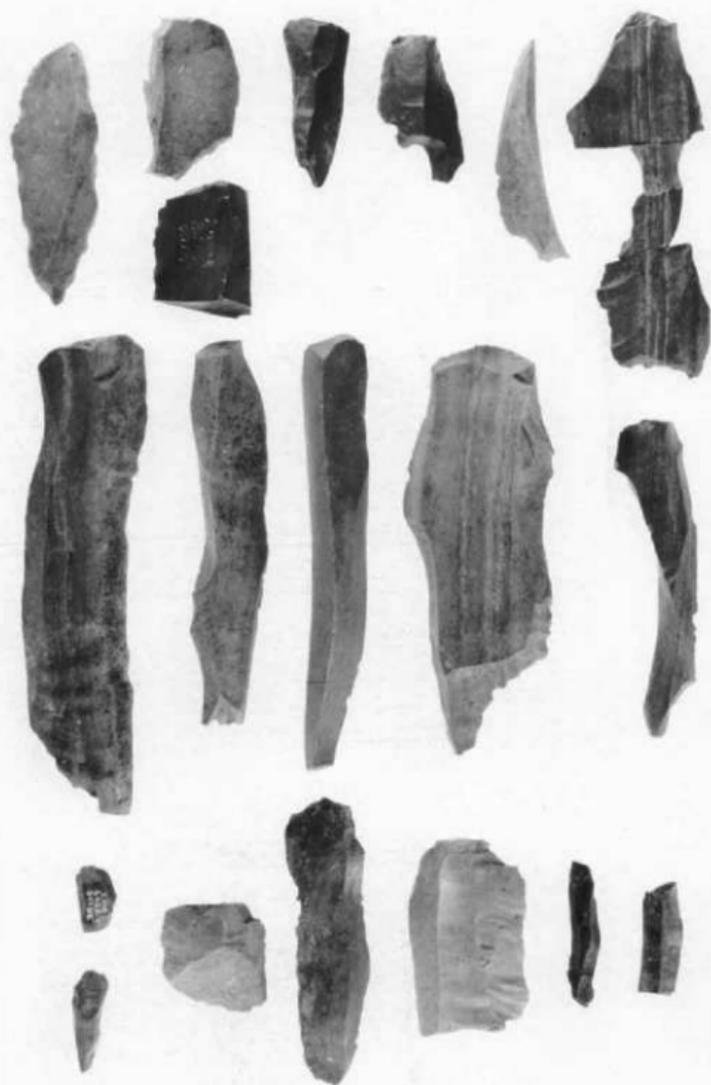
④



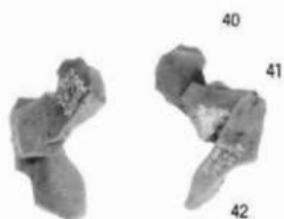
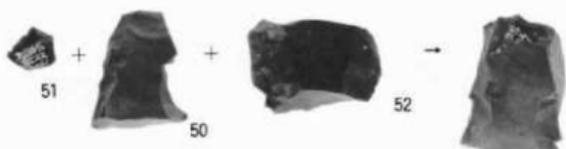
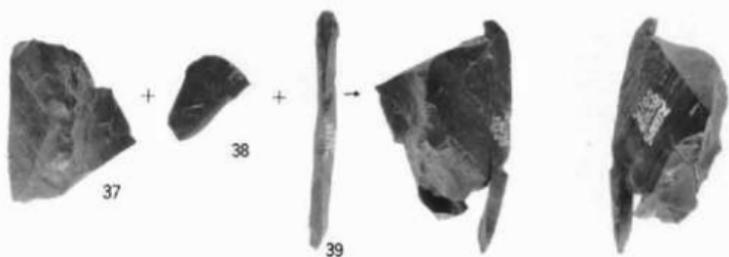
第25図



A地点出土先土器時代石器(第11, 19, 25, 26図)



A地点出土先土器時代石器(第22~24図)



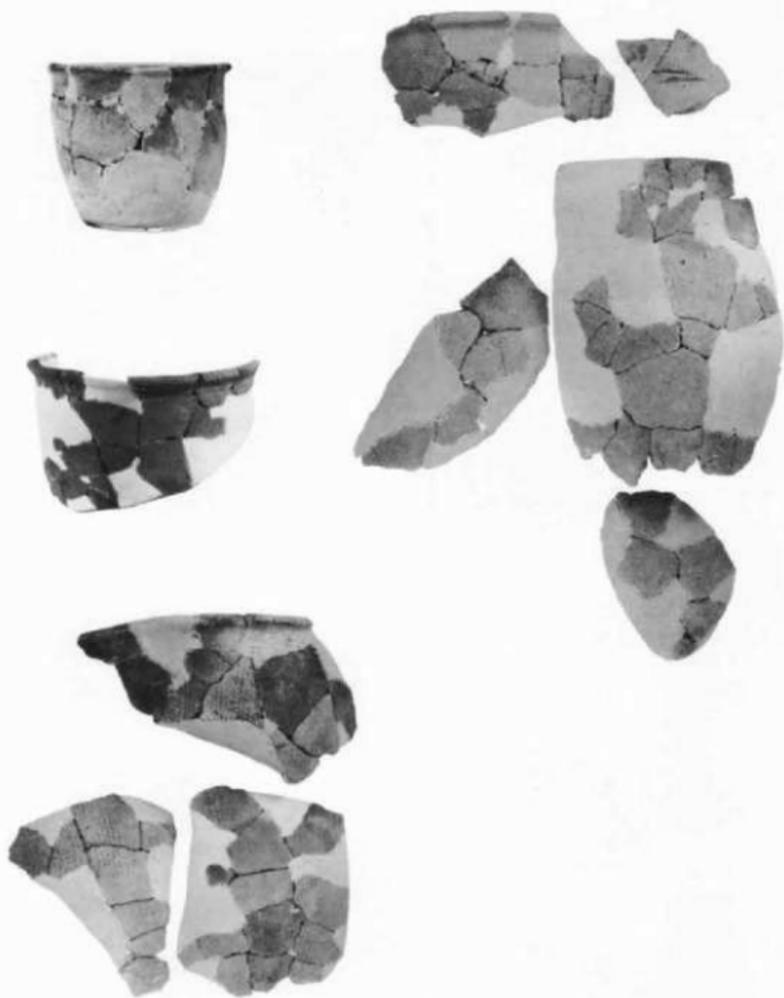
A地点出土先土器時代石器(第27, 28図)



A地点出土先土器時代石器(第30圖)



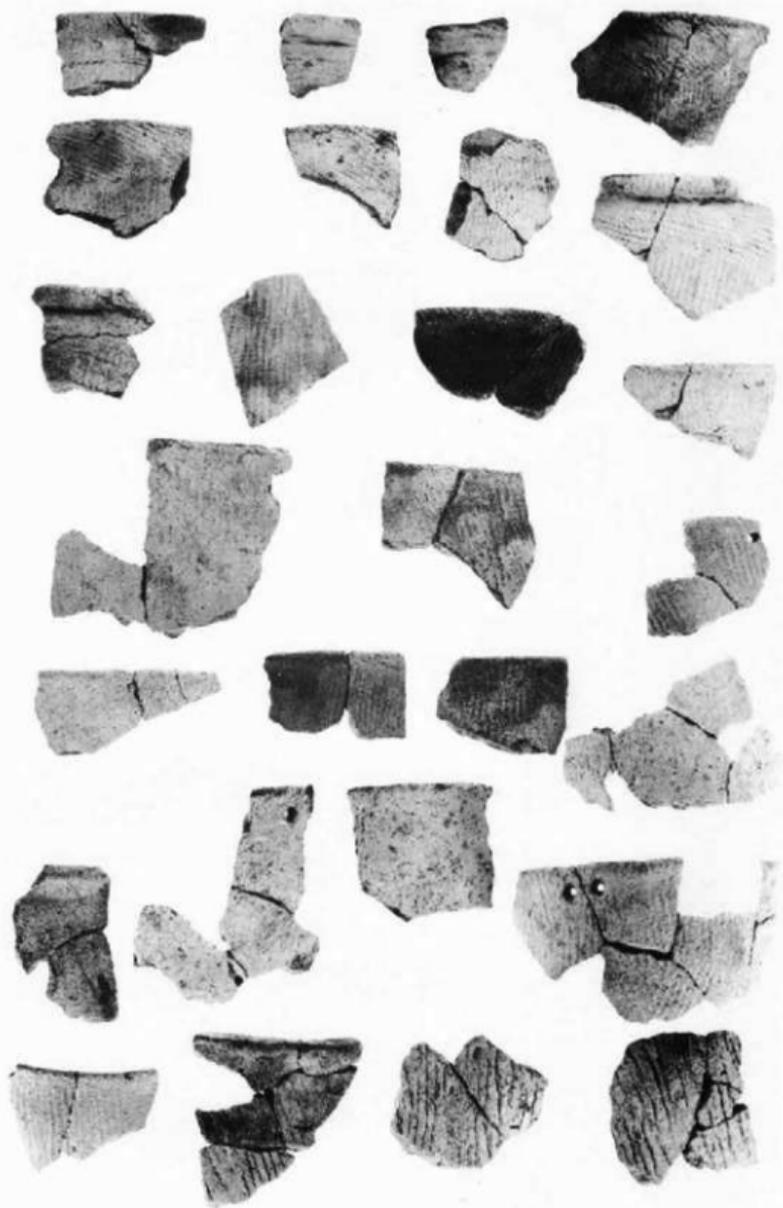
B地点出土先土器時代石器(第33圖)



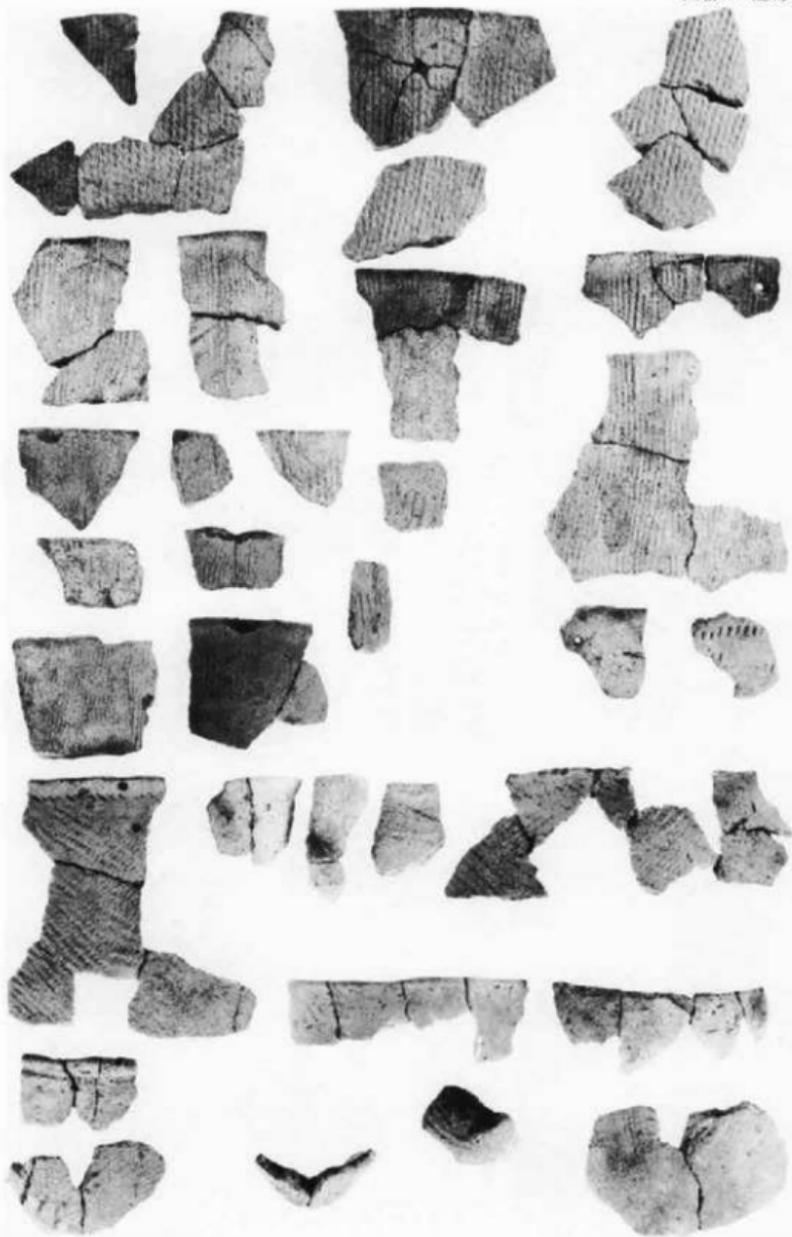
A地点出土土器(第43回)



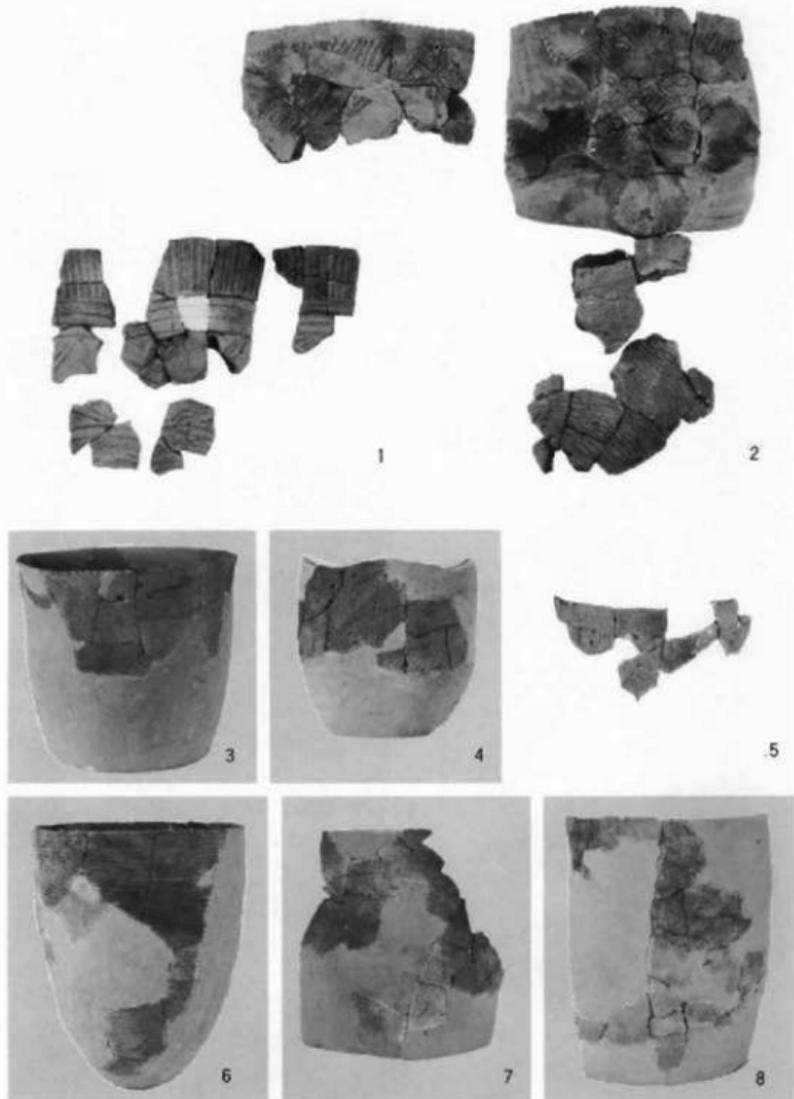
A地点出土土器(第44回)



A地点出土土器(第45图)



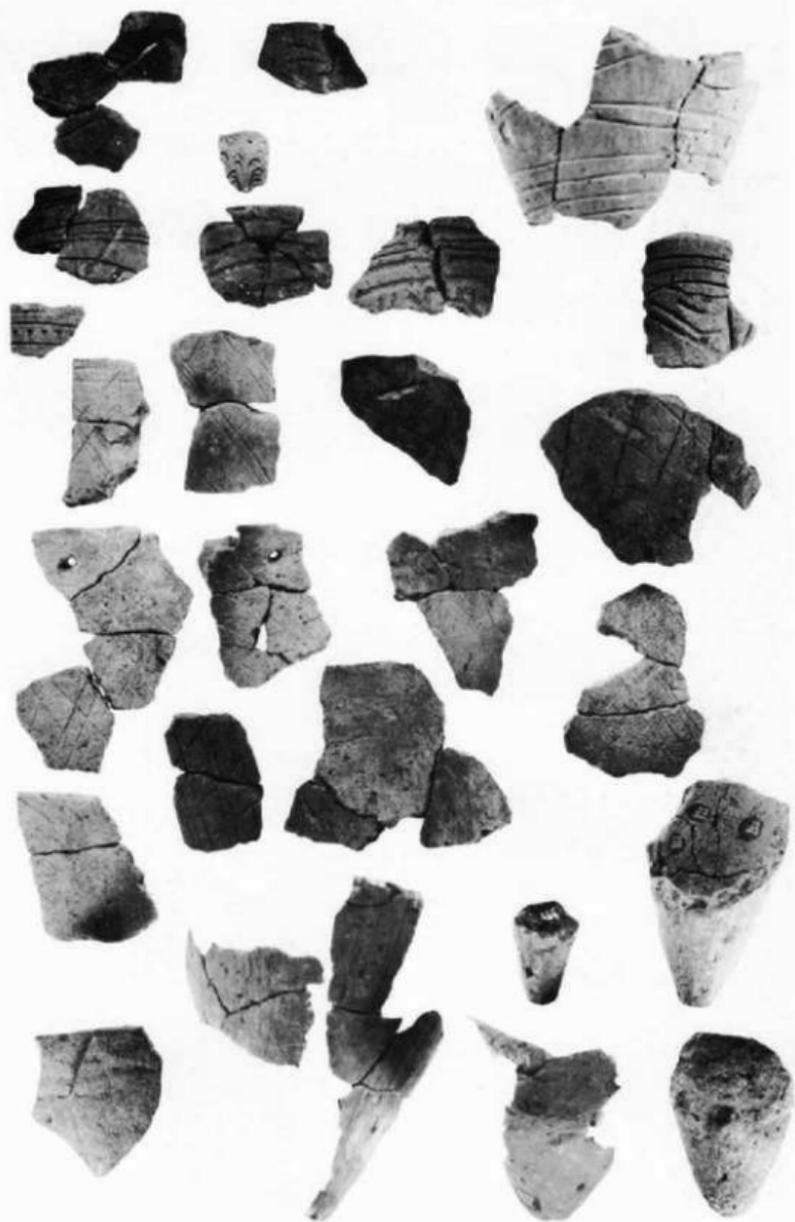
A地点出土土器(第46图)



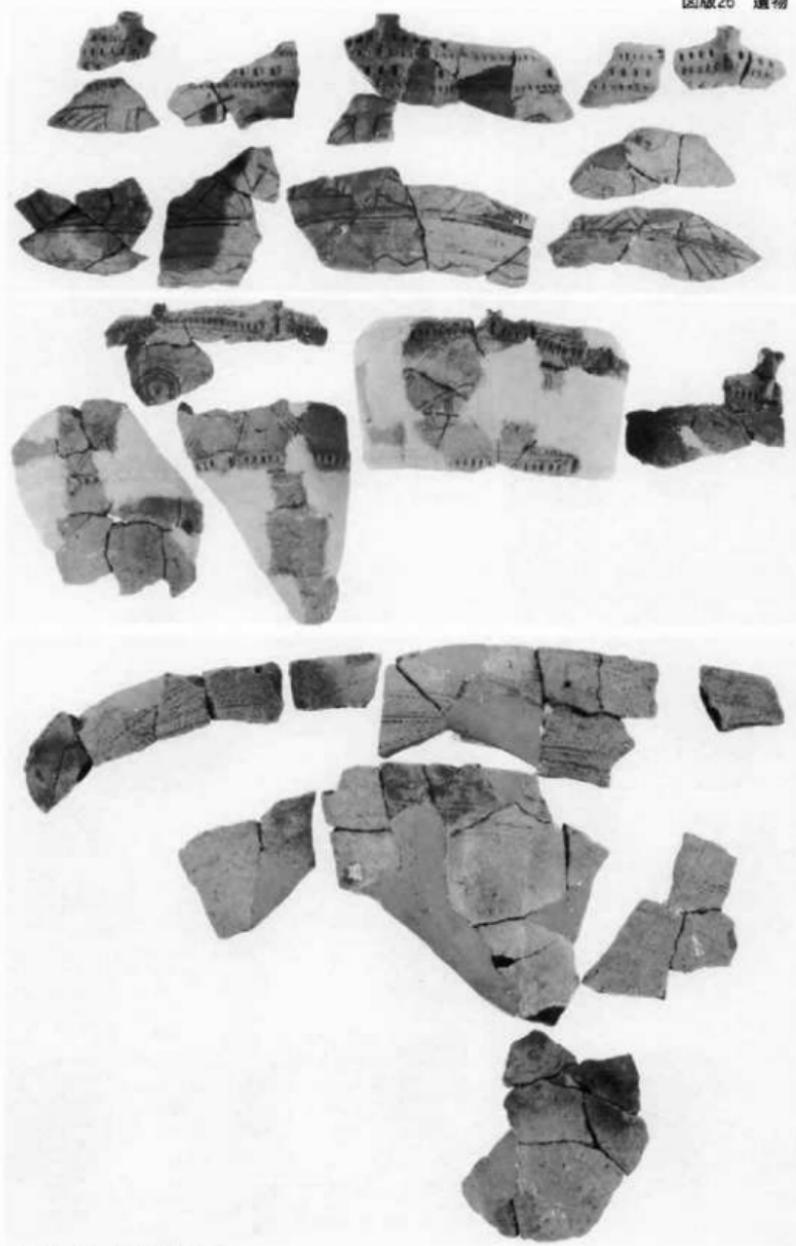
A地点出土土器(1,2:第47图,3:第57图,4,5:第58图,6~8:第60图)



A地点出土土器(第48回)



A地点出土土器(第49图)



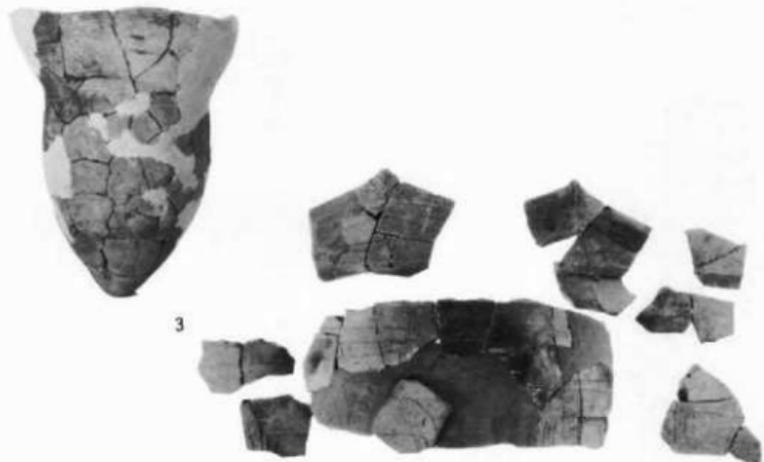
A地点出土土器(第50, 51图)



1

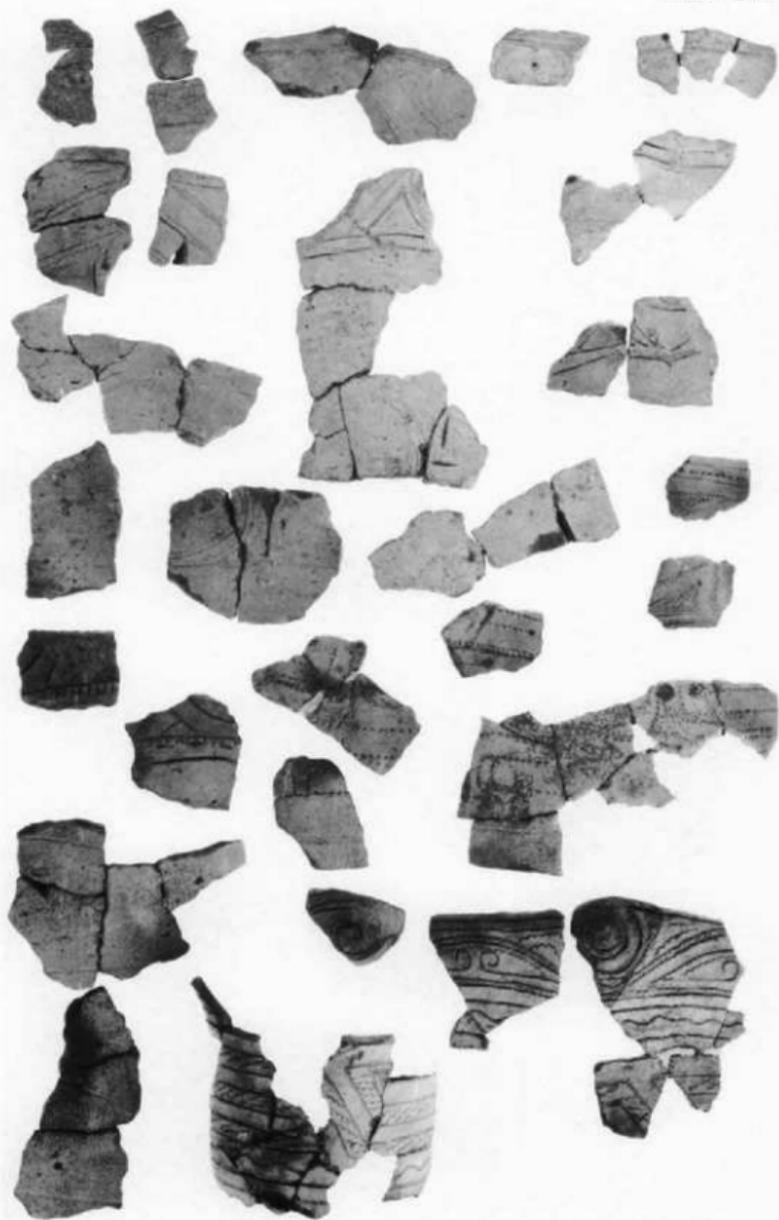


2



3

4



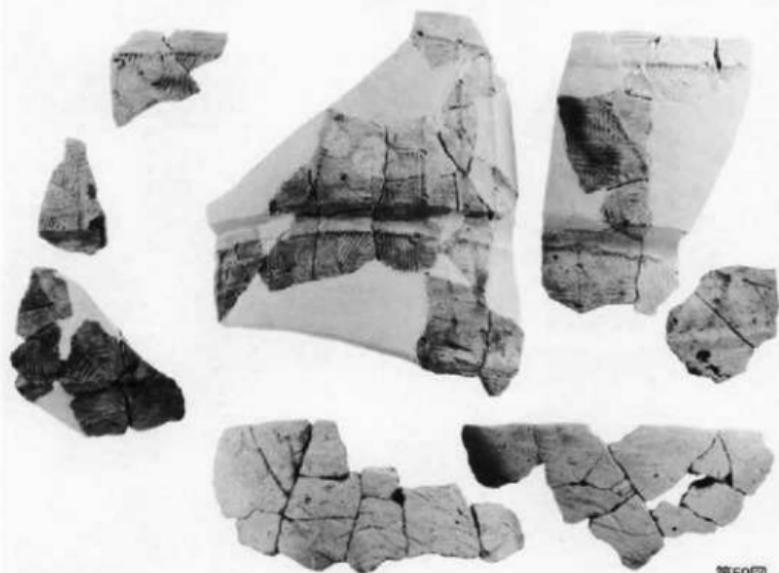
A地点出土土器(第54图)



A地点出土土器(第55图)



第57图

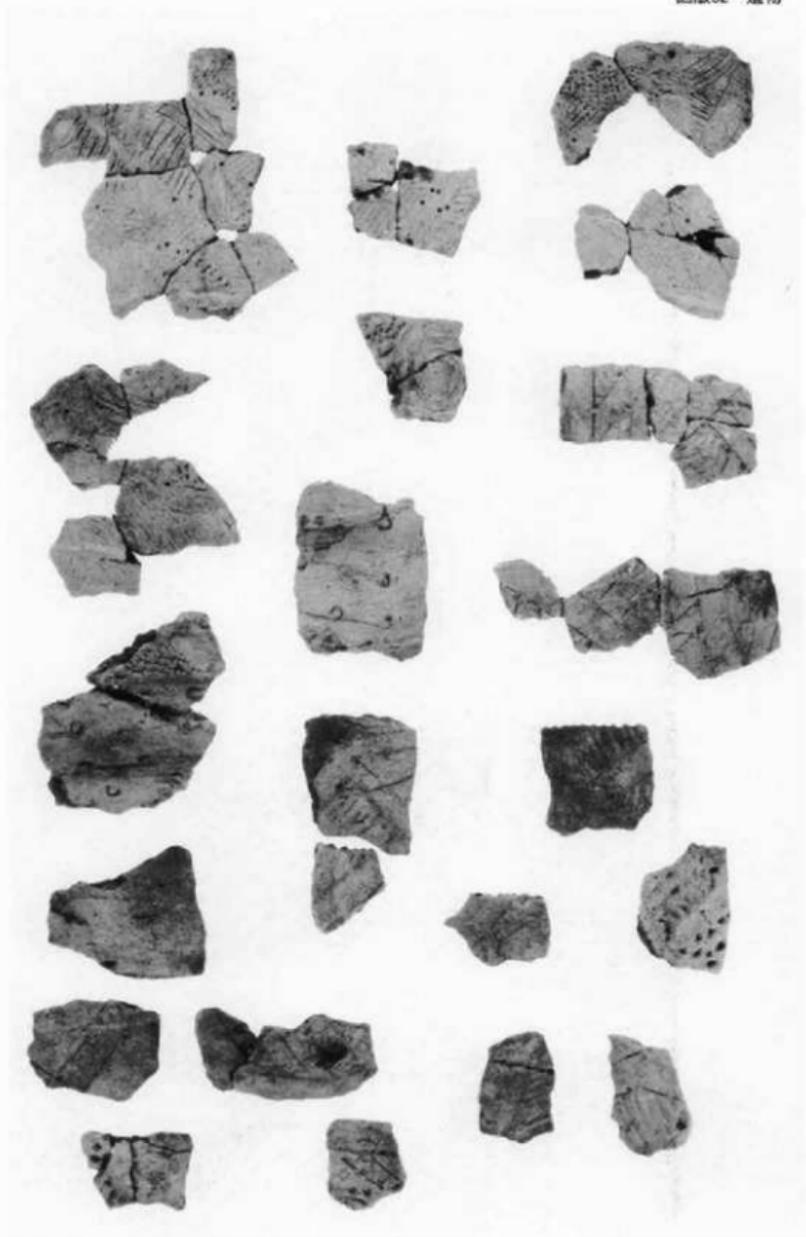


第59图

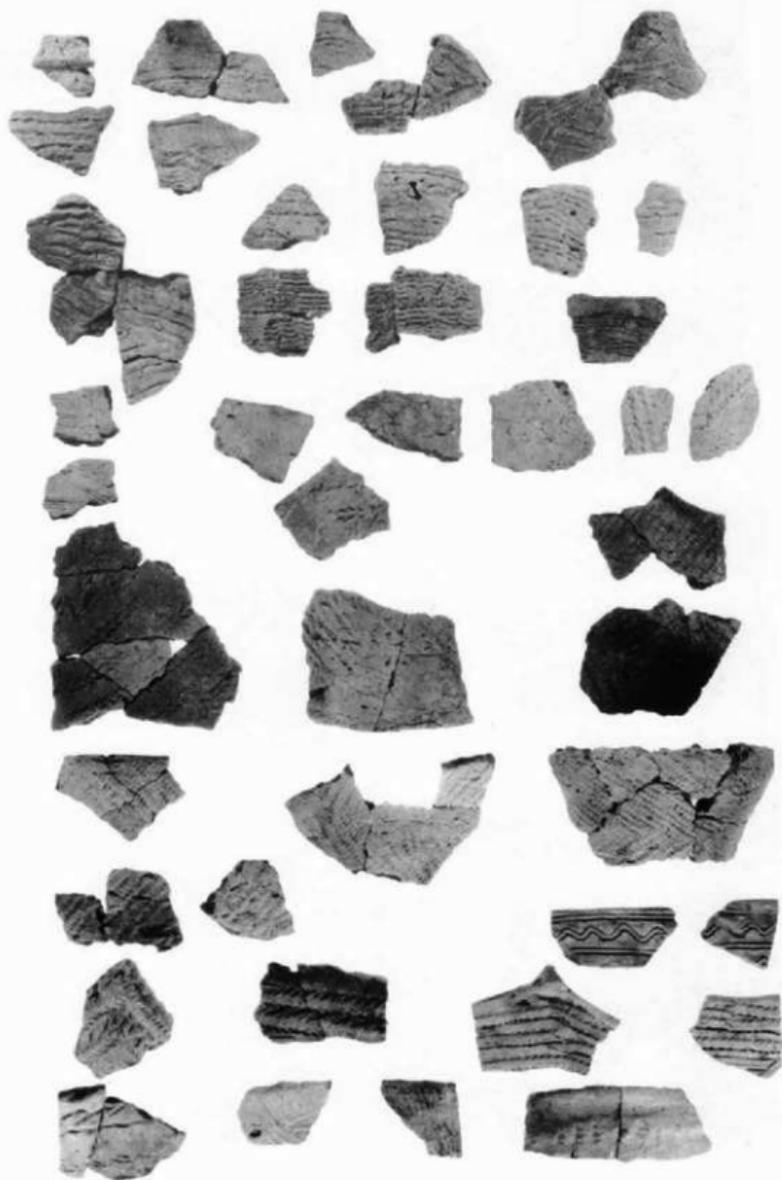
A地点出土土器(第57图, 第59图)



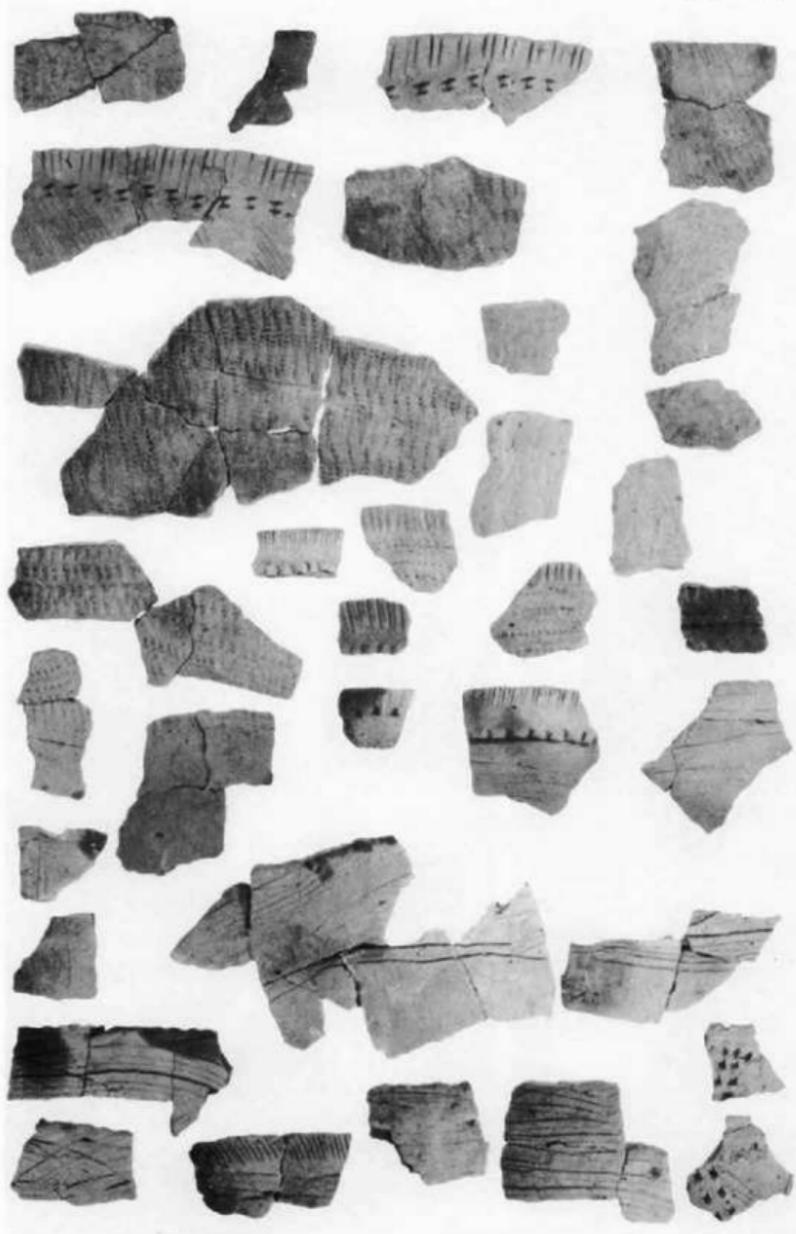
A地点出土土器(第64图)



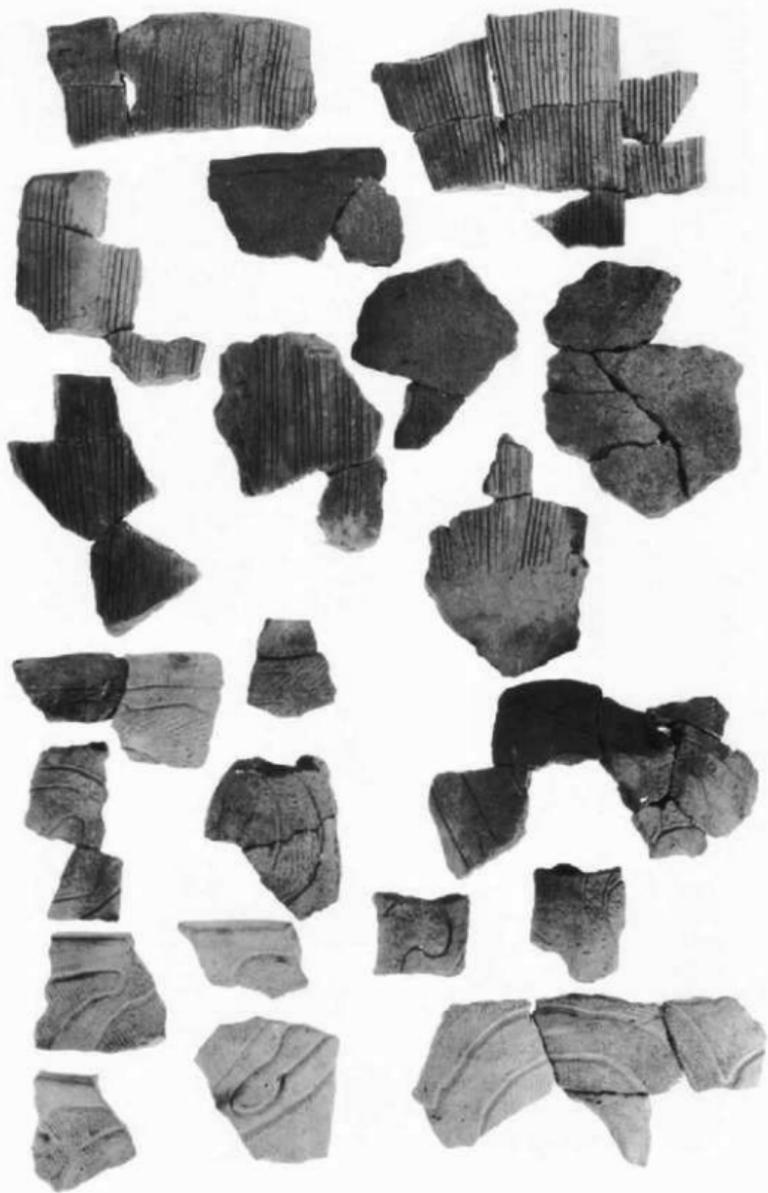
A地点出土土器(第65回)



A地点出土土器(第70图)



A地点出土土器(第71回)



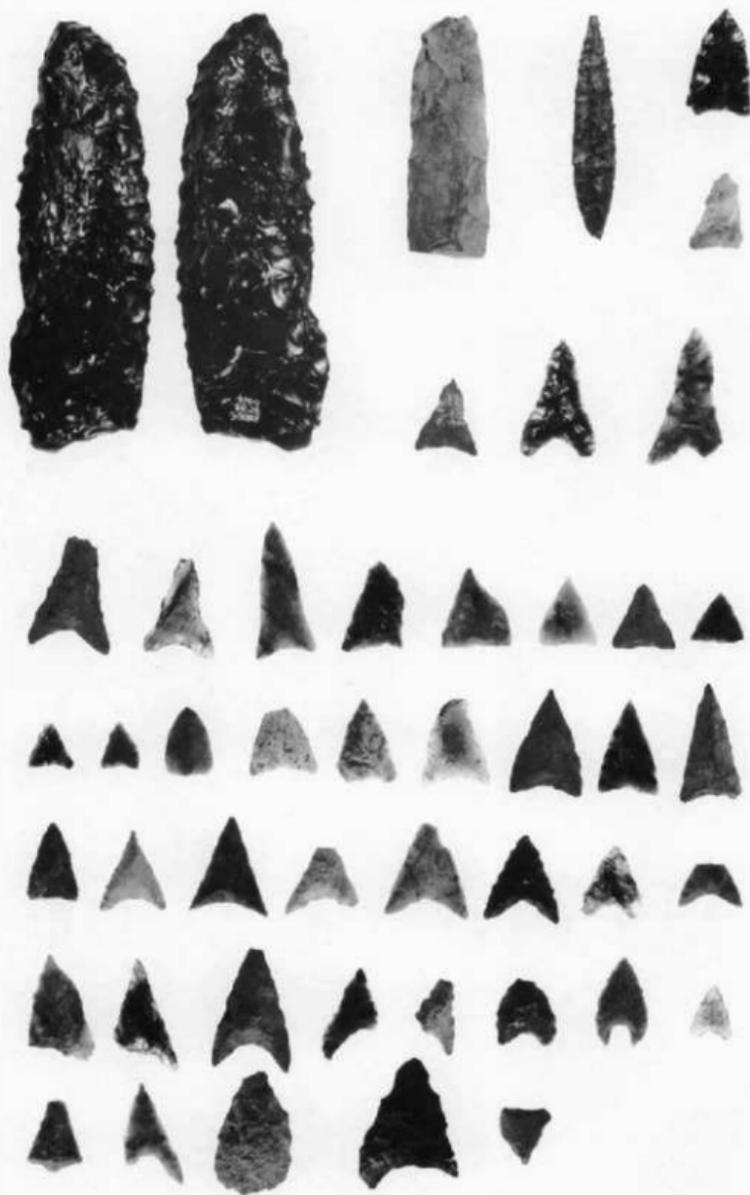
A地点出土土器(第77图)



A地点出土土器(第78图)



A地点出土土器(第79图)



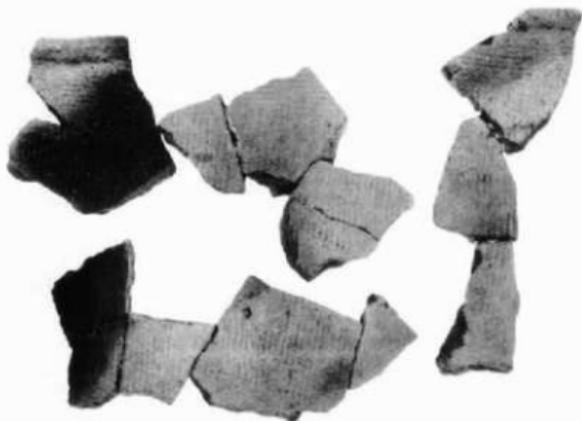
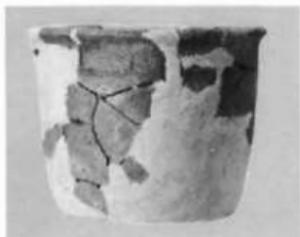
A地点出土石器(第83回)



A地点出土石器(第84, 85图)



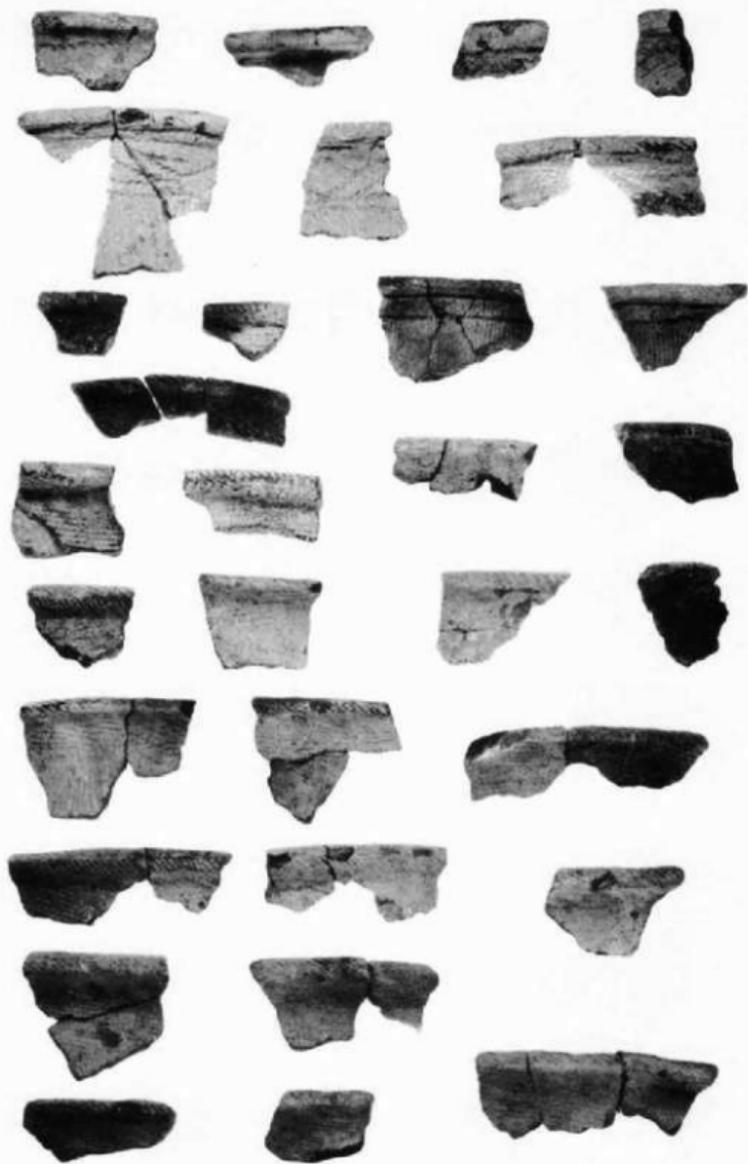
A地点出土石器(第86図),土製品(第82図)



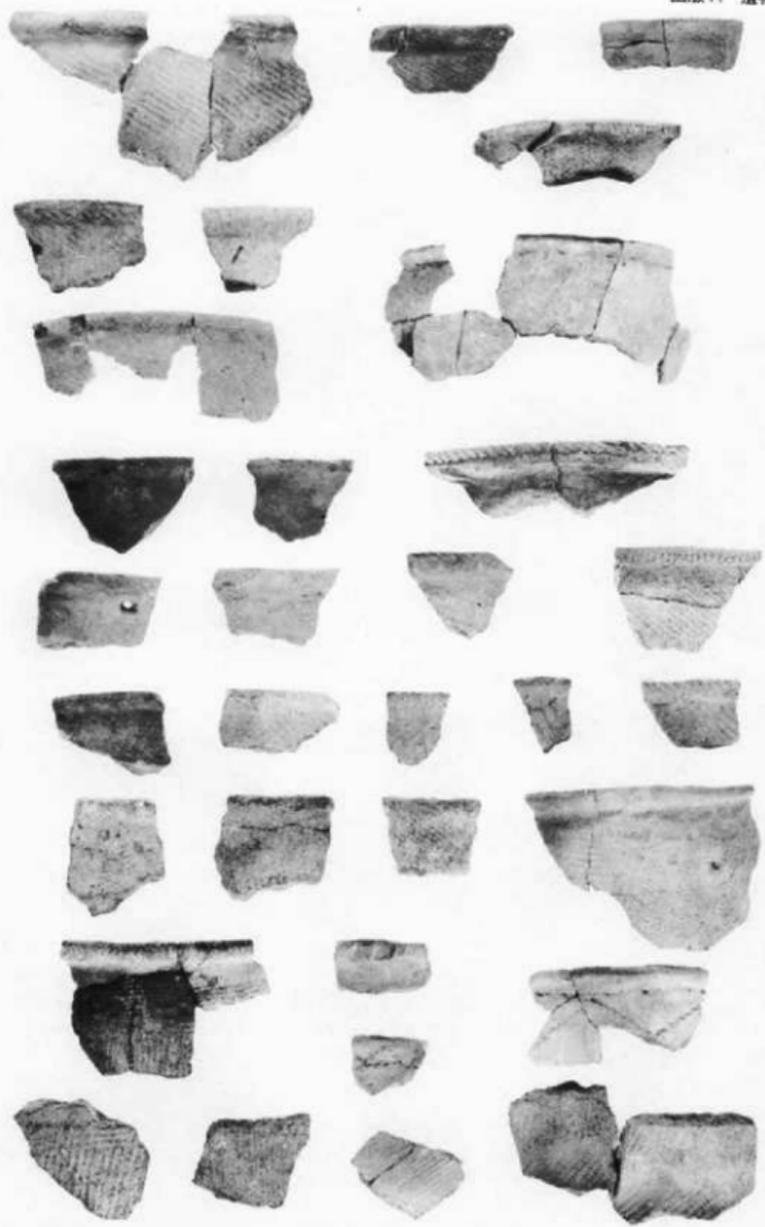
B地点出土土器(第102图)



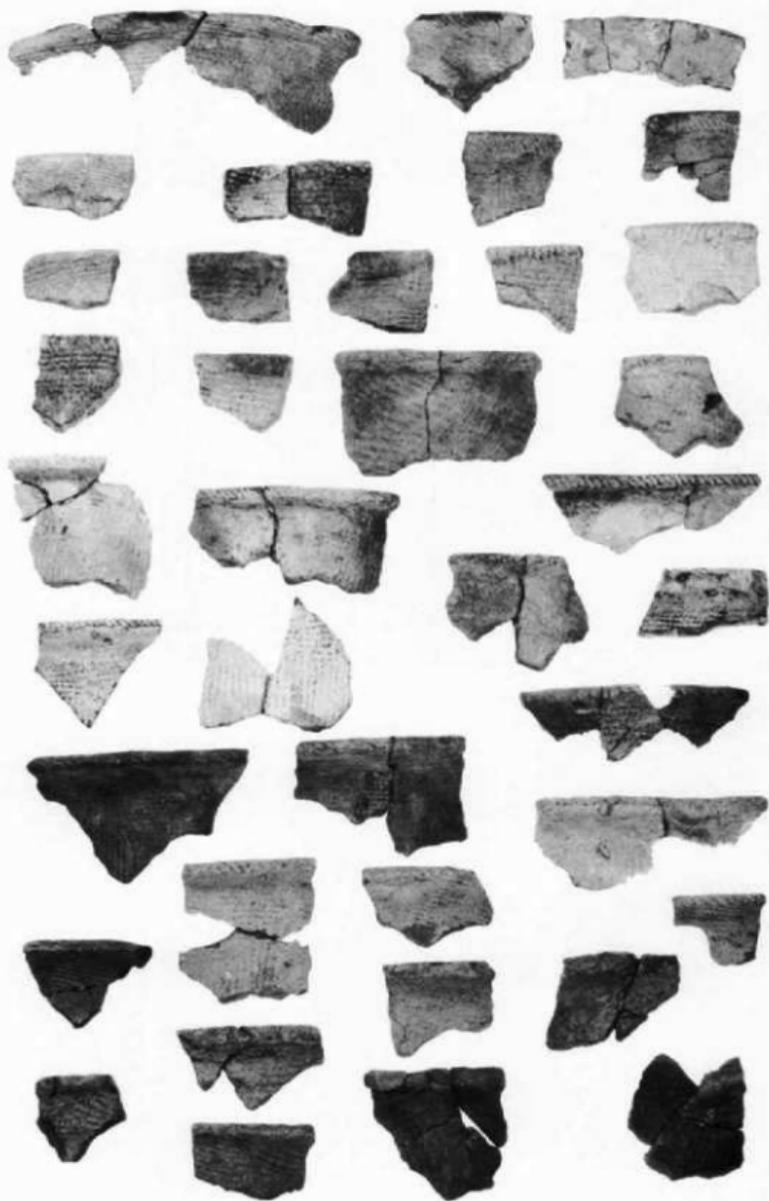
B地点出土土器(第103图)



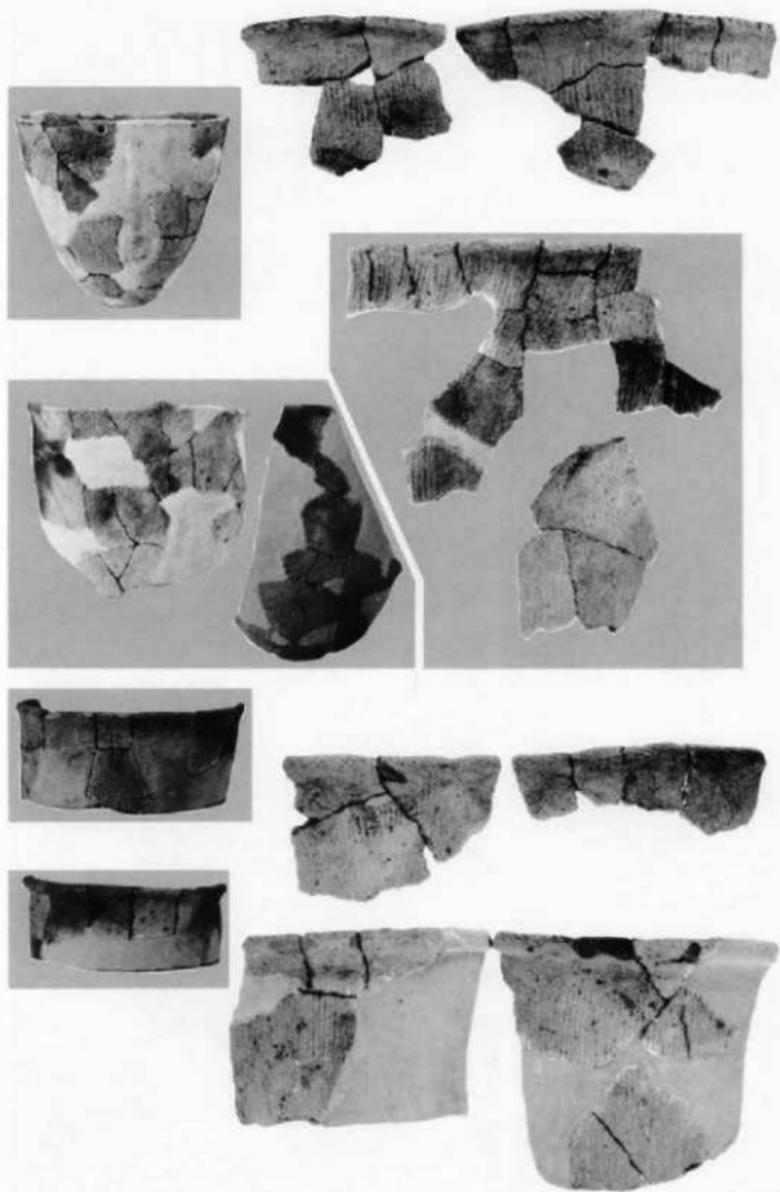
B地点出土土器(第104图)



B地点出土土器(第105组)



B地点出土土器(第106图)



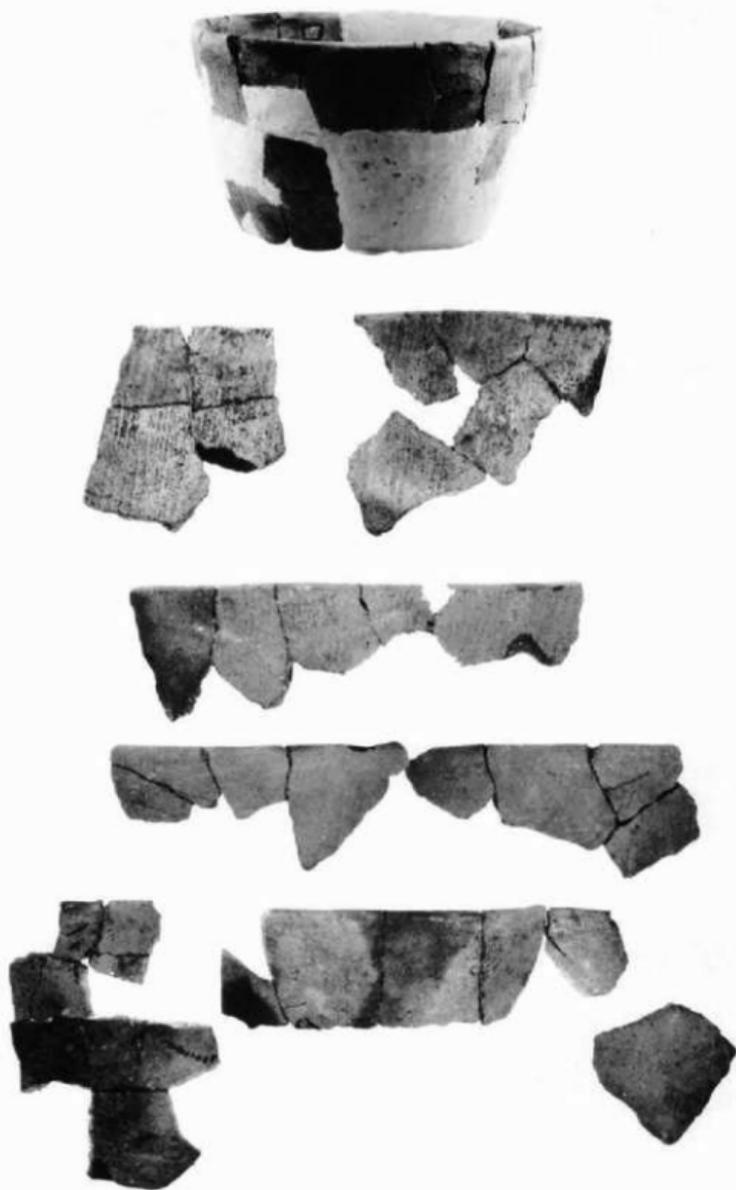
B地点出土土器(第107图)



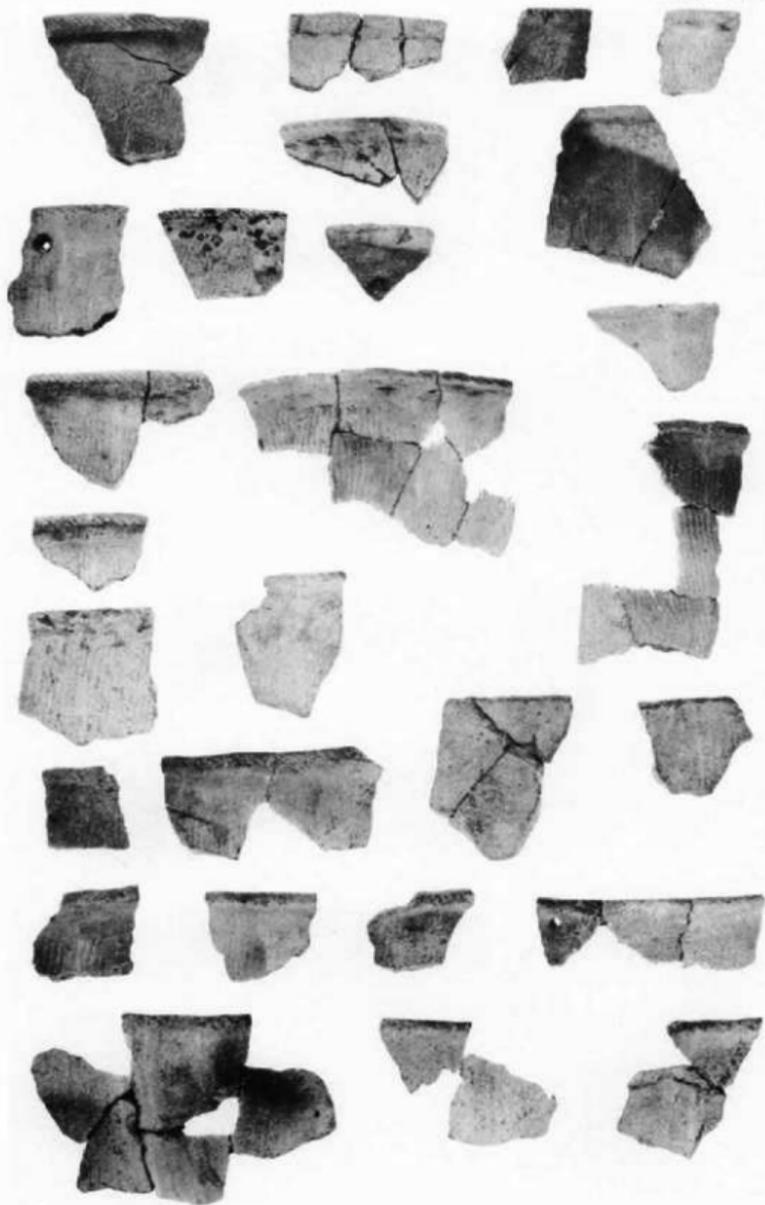
B地点出土土器(第108图)



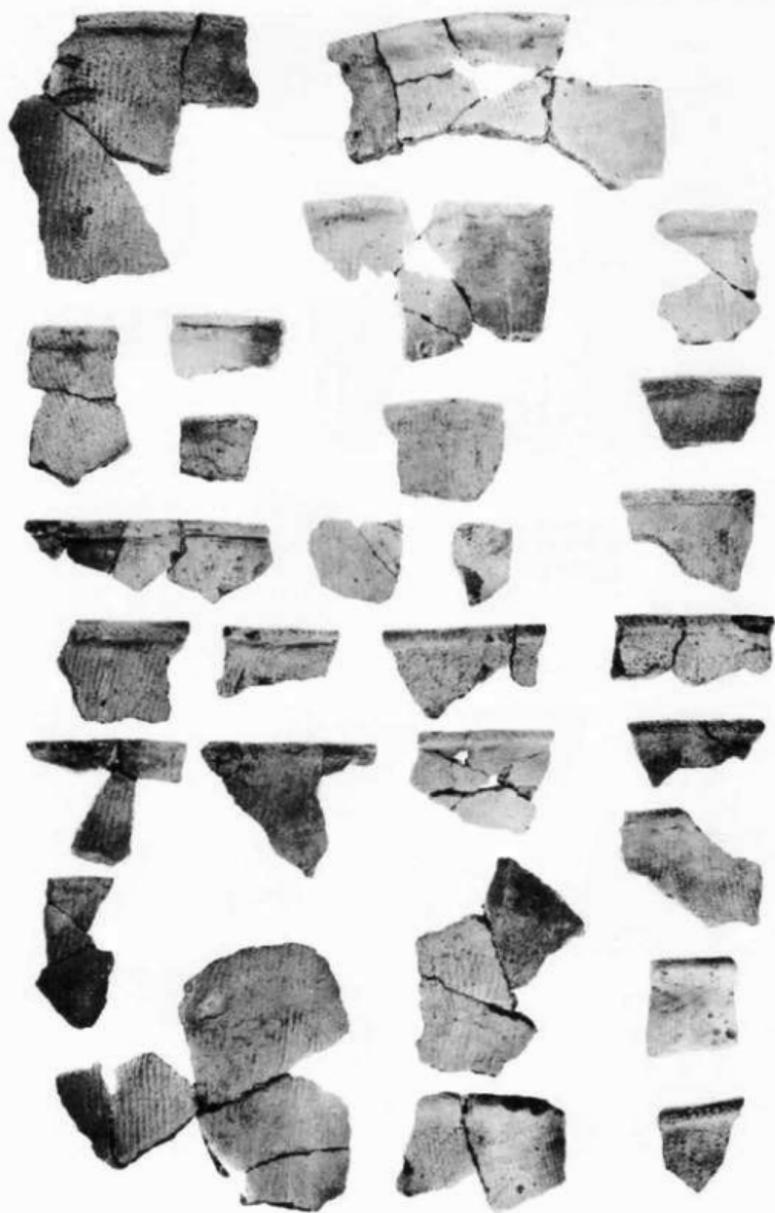
B地点出土土器(第109图)



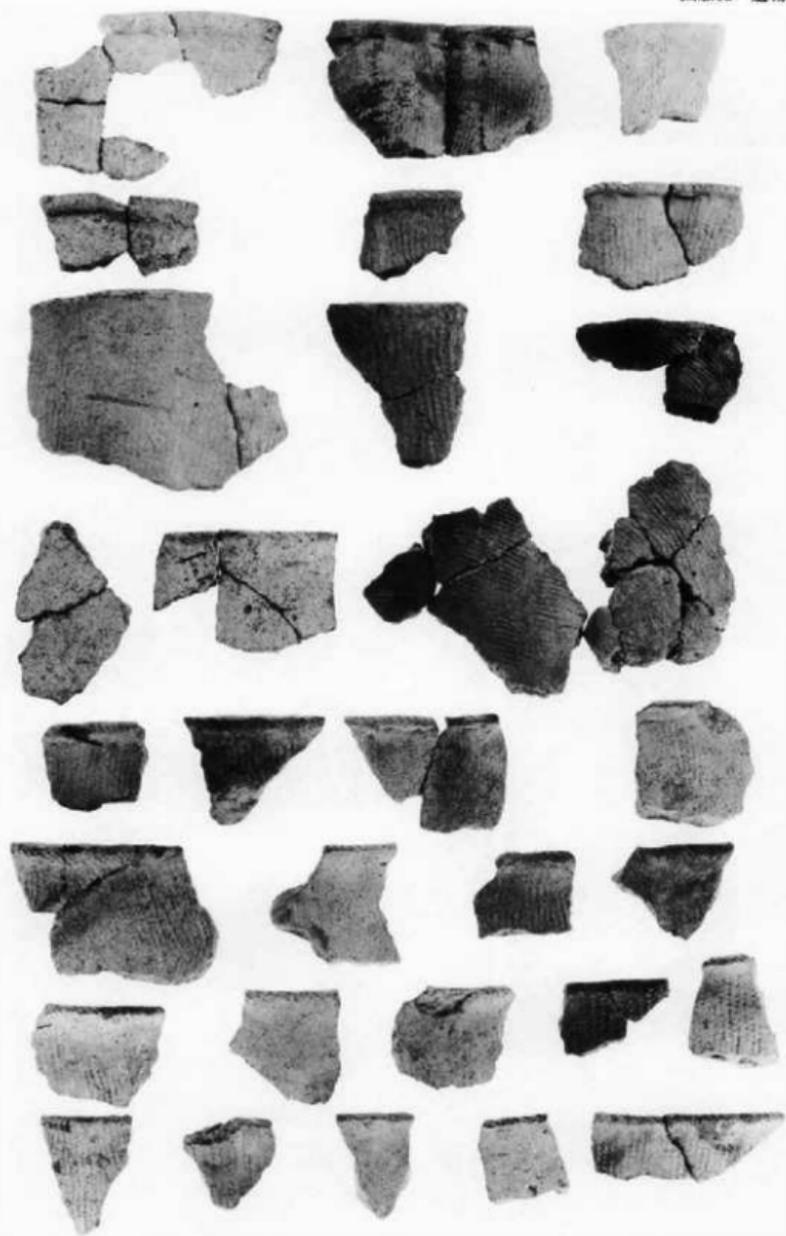
B地点出土土器(第110图)



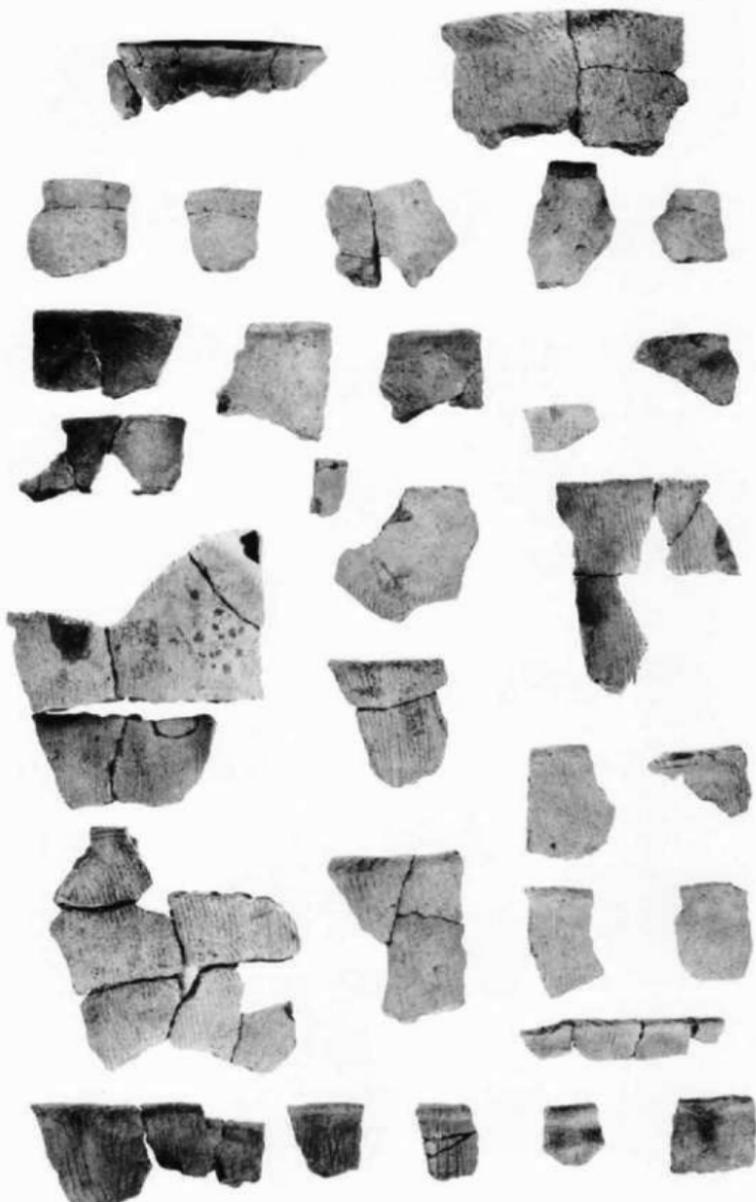
B地点出土土器(第111图)



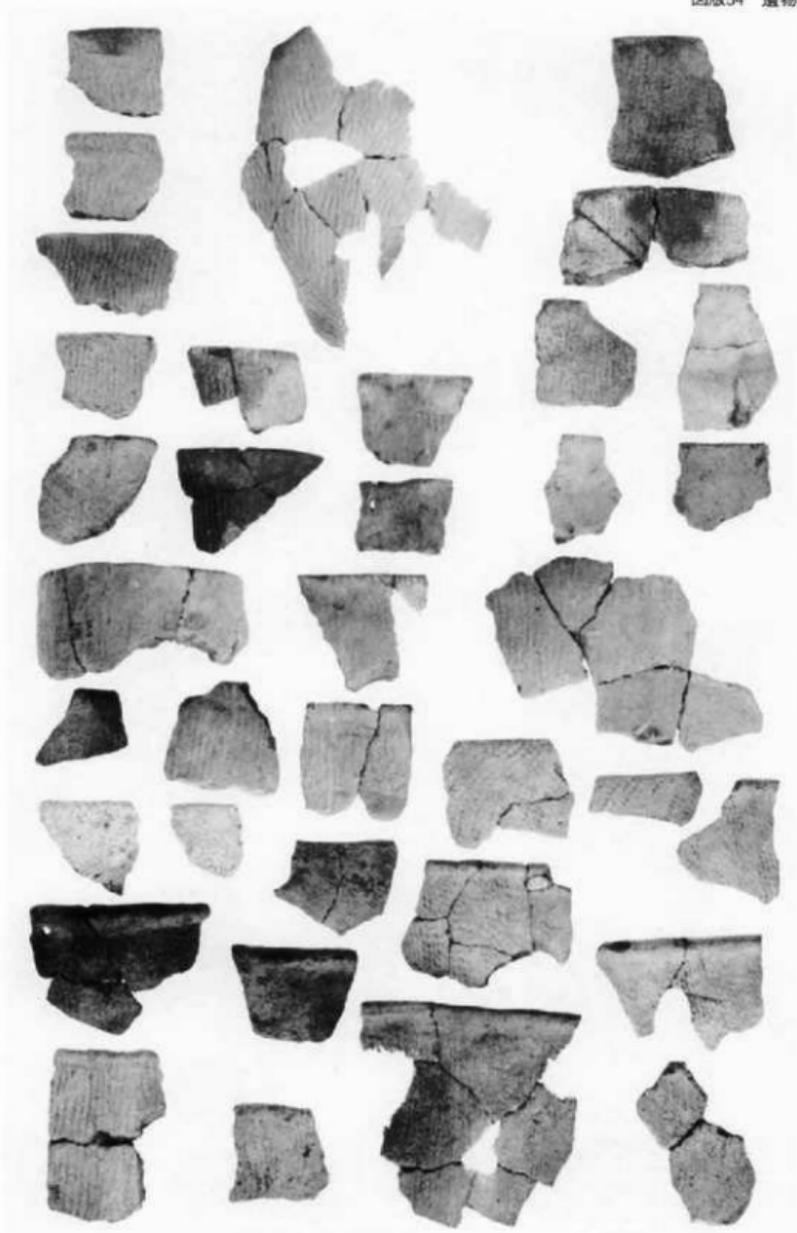
B地点出土土器(第112回)



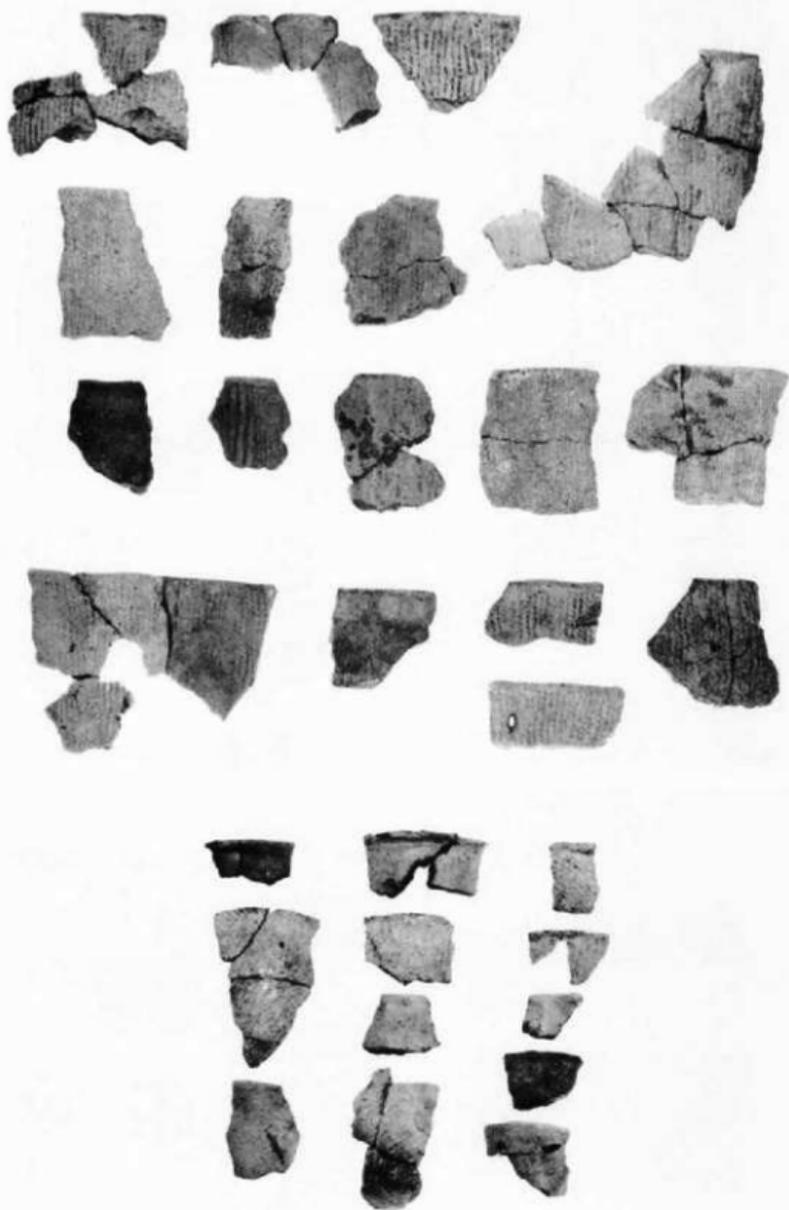
B地点出土土器(第113图)



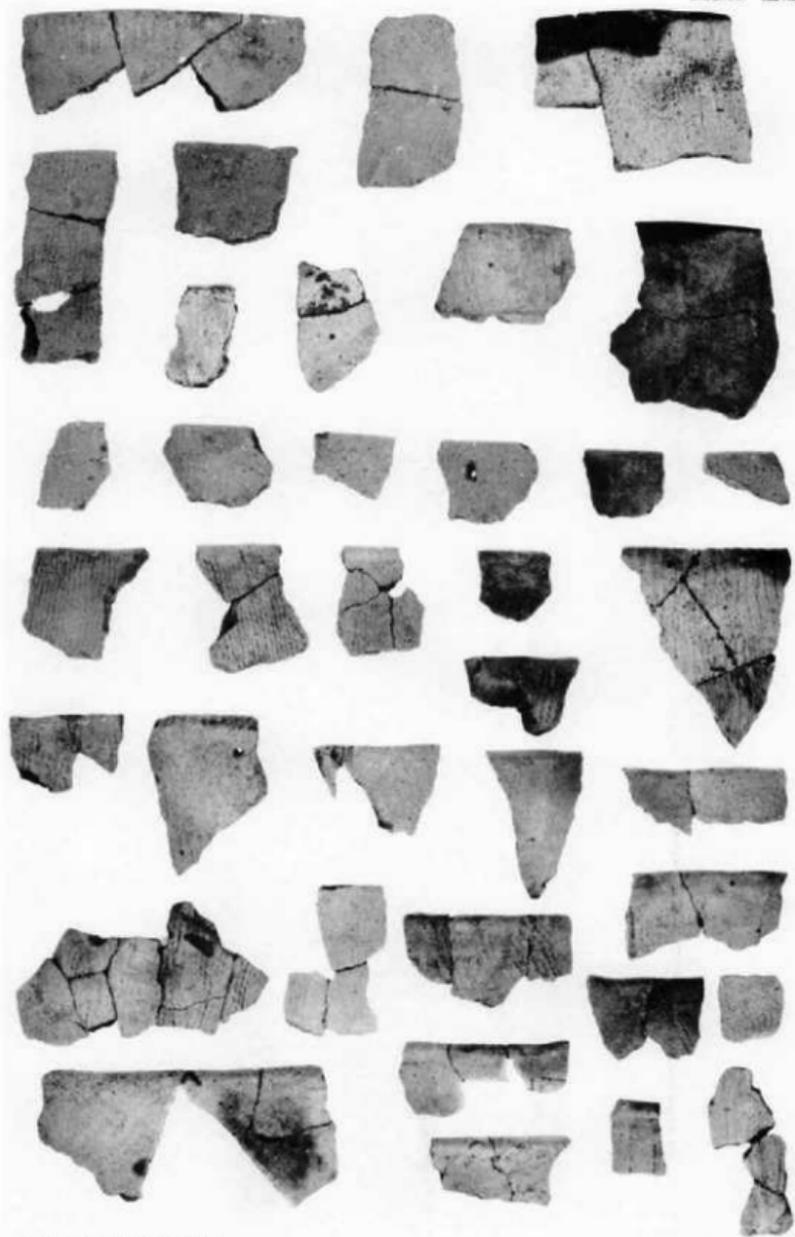
B地点出土土器(第114图)



B地点出土土器(第115图)



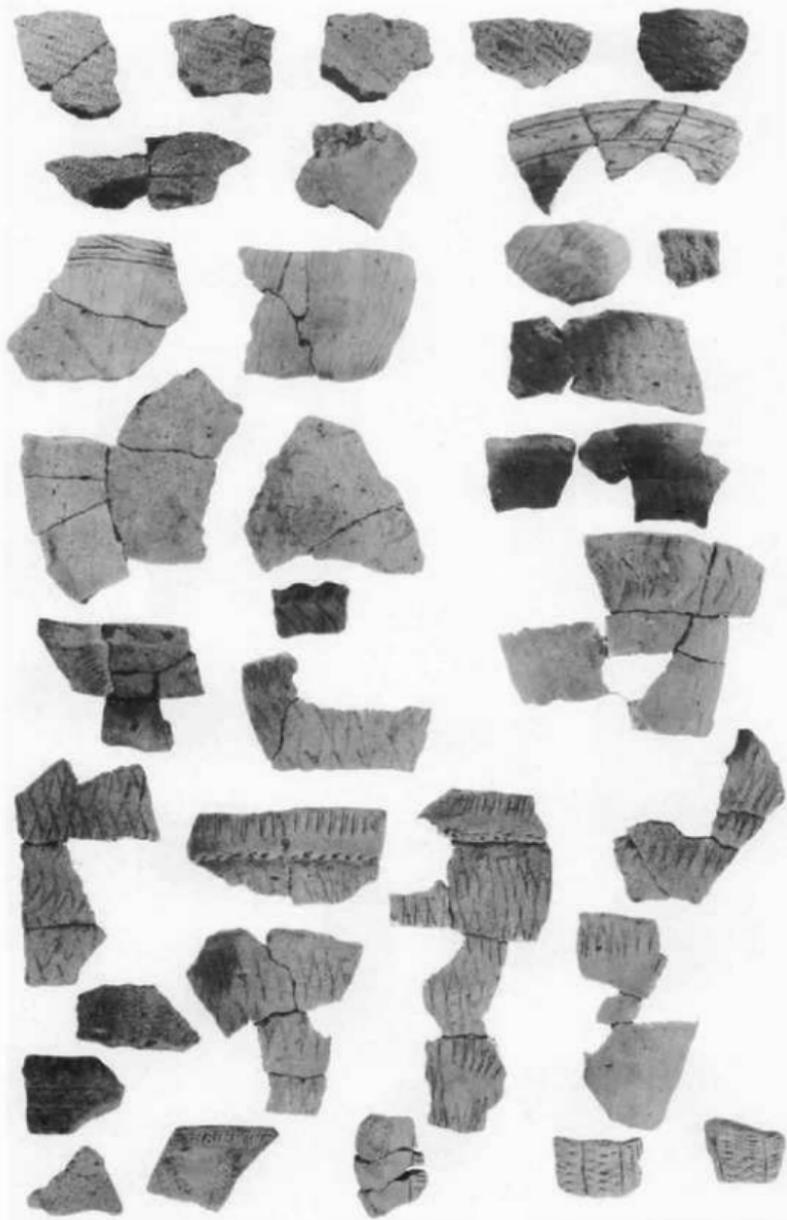
B地点出土土器(第116, 119图)



B地点出土土器(第117图)



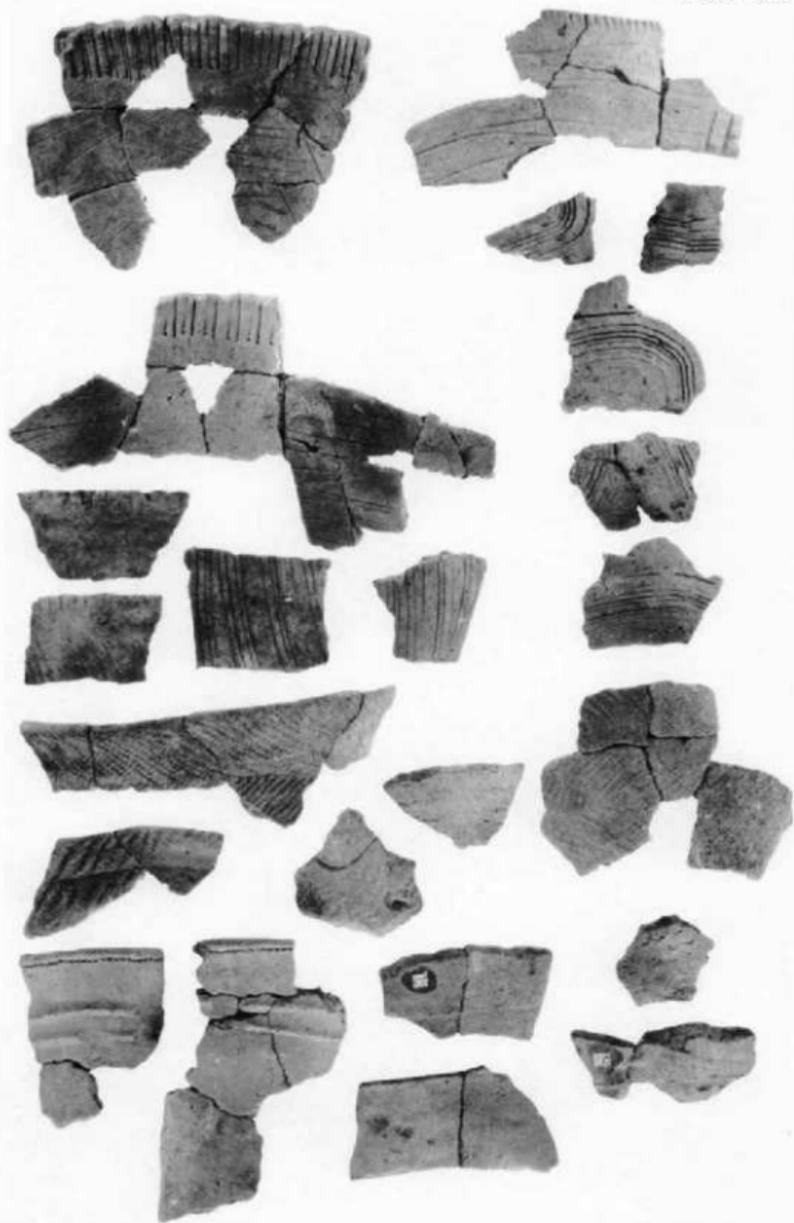
B地点出土土器(第121图)



B地点出土土器 (第124团)



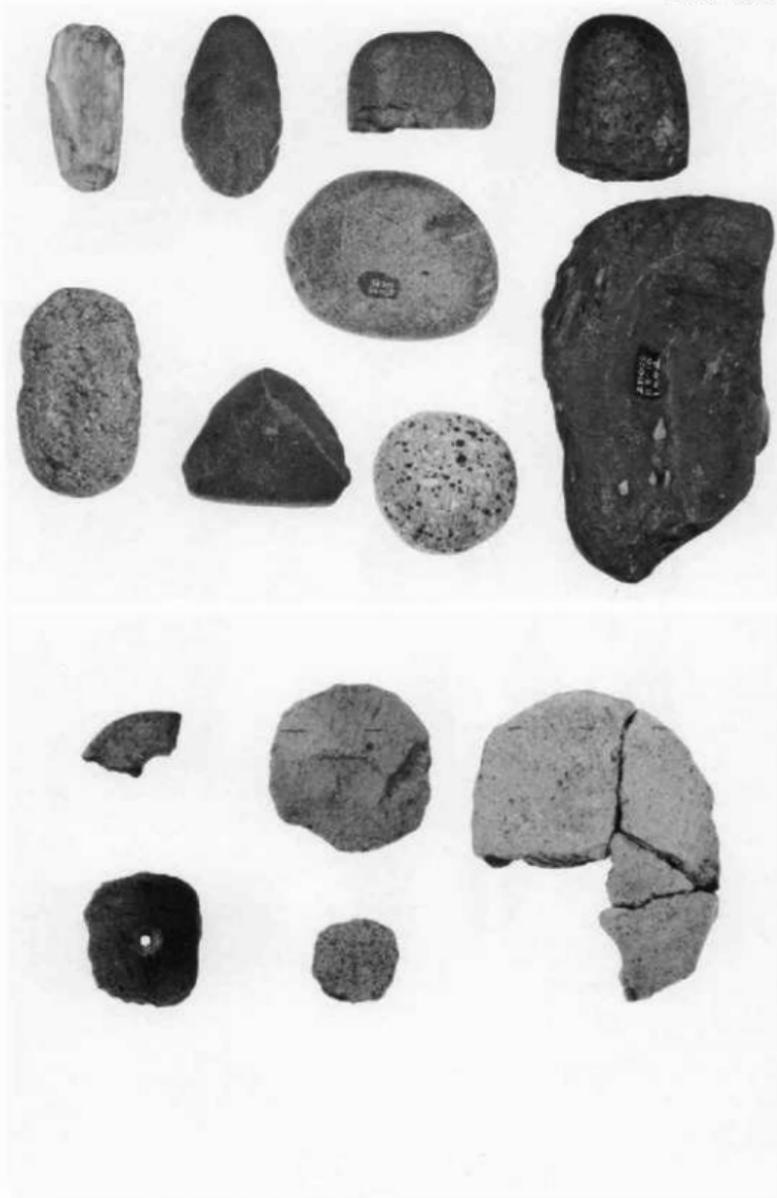
B地点出土土器(第125图)



B地点出土土器(第126回)



B地点出土石器(第129回)



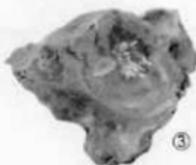
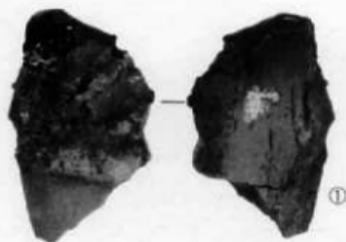
B地点出土石器(第130図)、土製品(第128図)



H-1号 住居跡出土遺物(第134回)



H-1号 住居跡出土遺物(第135図)



A・B地点出土鉄滓

昭和59年2月20日 印刷

昭和59年2月29日 発行

新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ

— No. 7 遺 跡 —

発行 新東京国際空港公団
東京都中央区日本橋本町2丁目4番地
財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市安鼻1-3-13

印刷 株式会社 多田印刷
千葉市古市場町474-225号
